明治三十九年十月十五日発行
毎月一回五日発行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可



女學世界 定期增刊

女智恵袋 第六巻 第拾四號 目次

漫言……一六二

談叢……一六九

口繪

寫眞版


THE GEM
ゼム
衛生家必携
懐中良薬

燈火可親



日髙島助筆

第一高等學校教授 文學士 畔柳都太郎校閱 松本信夫譯述

新刊

標註 ツワイストールド・テールス

全壹册

四六判美装 定價六拾錢 郵稅金拾錢

ナサニエル・ホウソーンの短話作家としての技倆は、古今獨歩と稱せられ、數種ある其が短話集中、ツワイストールド・テールスを以て其の白眉となすことは、既に世論の一致する所、實に、此書は、ホウソーンが最も短話に力を用ゐたる壯年時代の作にして、

多種多様の短話を含み、奇想天外より落ち、筆力風雲を捲く、而して、譯者の遒麗なる椽筆は、此雄大なる文致を傳へ、且つ、忠實に逐字譯を行ひて一字一句も苟もせず、

されば、原書が彼のアーピングのスケッチブックなどと等しく英米讀書界の最も珍重する所たると共に、譯者が我國一般讀書家は勿論、英語學生にとりて特にこよなき好著たることは、絮說を俟たずして明かならん、請ふ電覽の榮を賜へ。

泰西名著翻譯叢書

原著者 譯述者	書名	冊數	定價 郵稅
アーピング 淺野馮虛	スケッチブック	二	金壹圓 金拾四錢
アッケンス 淺野馮虛	クリスマスカロル	一	金四拾錢 金六錢
ゴールドスミス 淺野馮虛	ウイカーオヴウエークヒルド	一	金五拾五錢 金拾錢
ホウソーン 松本信夫	ツワイストールドテールス	一	金六拾錢 金拾錢
エマーソン 大谷正信	偉人論	一	金五拾五錢 金拾錢
エマーソン 大谷正信	自然論 學者論 自持論 報償論	一	印刷中
ヂヨンソン 芝野六助	羅世剌斯傳	一	金四拾錢 金六錢
アストン 芝野六助	日本文學史	一	近刊

發行所 東京市京橋區銀座一丁目 大阪市東區北久太郎町四 大日本圖書株式會社

女、甲の二

滋養新劑グリコナール錠

▲本劑は佐伯矩氏が北里博士指導の下に貴重なる滋養劑グリコゲーン製法研究中發見創製せるものにして多くの醫學者より其効顯卓絶なることを公認せられたる最新滋養劑なり

肺病其他衰弱せる病者は本劑の服用に由て速に其體力を恢復し元氣亢進す

本劑説明書は御申込次第無代郵送す

消化新劑タカヂアスターゼ

▲本劑は工學博士高峰讓吉氏が發見せし有名なる胃腸新藥なり

▲本劑の効力に就て我醫學大家が發表せし實驗報告集は御申越に從ひ無代郵送す

▲本劑は粉末錠劑各大小容器入として發賣各地藥舖にあり類似品あり必ず高峰博士のタカヂアスターゼと御指定を乞ふ

▲發賣元

東京市南茅場町二番地

三共商店藥品部

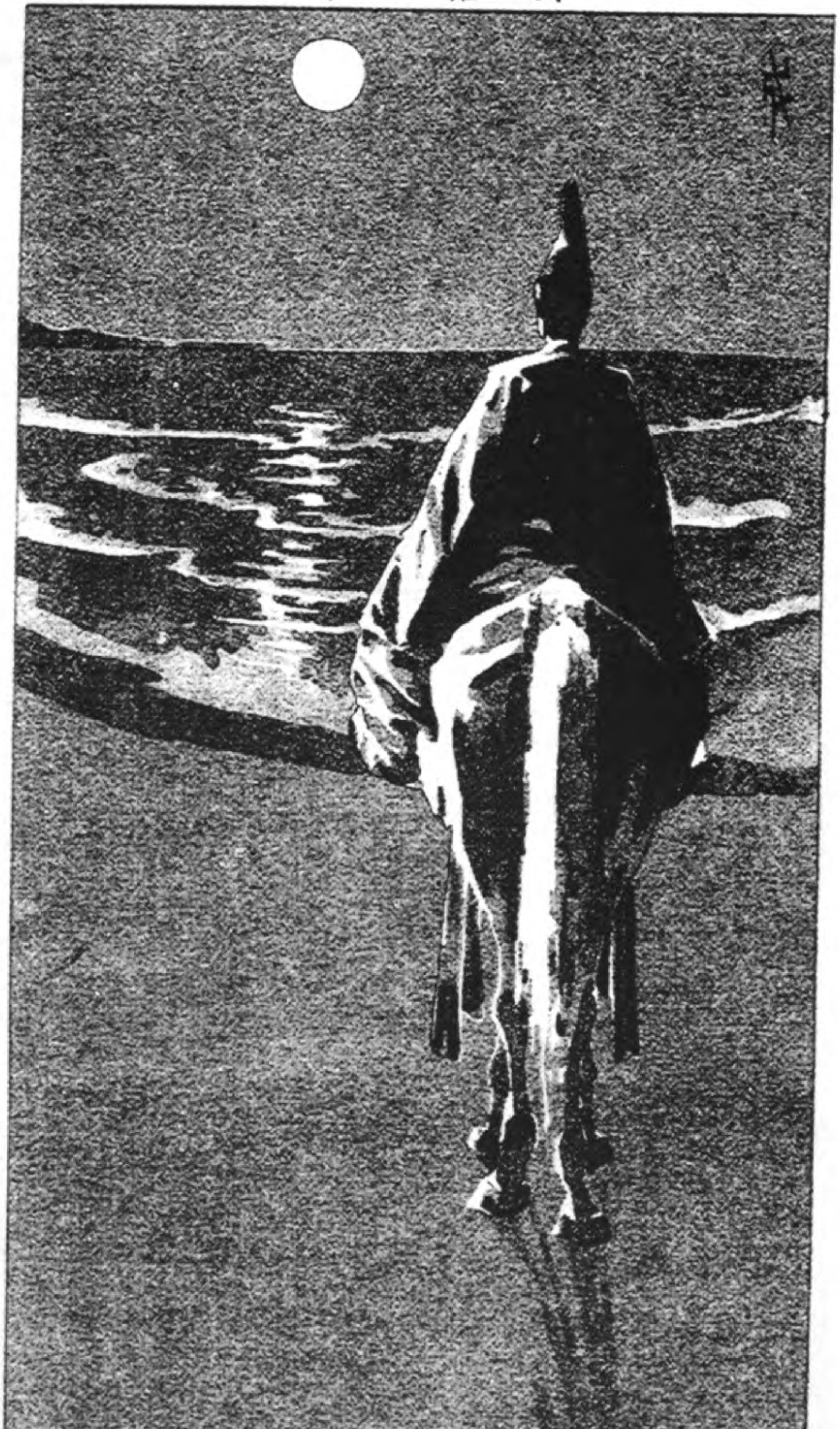
(甲の四)

小春



川面義雄筆

須磨の月



一條成美筆

向島長命寺門前（芭蕉雪見ノ舊跡）



三宅克己筆

女(乙の二)

謹告

弊店一手販賣の山葉風琴及鈴木ヴァイオリンは本年十月一日より定價を下記の通り改定し一層品質を精選し博く御需用に應じ可申此段謹告候也



山葉風琴改正定價表

號	定價
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二六、〇〇
第参號	二五、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	二七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾参號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷用オルガン壹號	二一〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇

鈴木ヴァイオリン改正定價表

品	定價
號外A品	二、〇〇
同B品	三、〇〇
同C品	四、〇〇
壹號品	五、〇〇
貳號品	六、〇〇
参號品	七、〇〇
四號品	八、〇〇
五號品	一〇、〇〇
六號品	一三、〇〇
七號品	一五、〇〇
八號品	一八、〇〇
九號品	二三、〇〇
拾號品	二六、〇〇
拾壹號品	三〇、〇〇
拾貳號品	三五、〇〇
拾参號品	四〇、〇〇
特製壹號品	五〇、〇〇
同貳號品	六〇、〇〇
同参號品	七〇、〇〇
同四號品	八〇、〇〇
同五號品	一〇〇、〇〇
同六號品	一三〇、〇〇

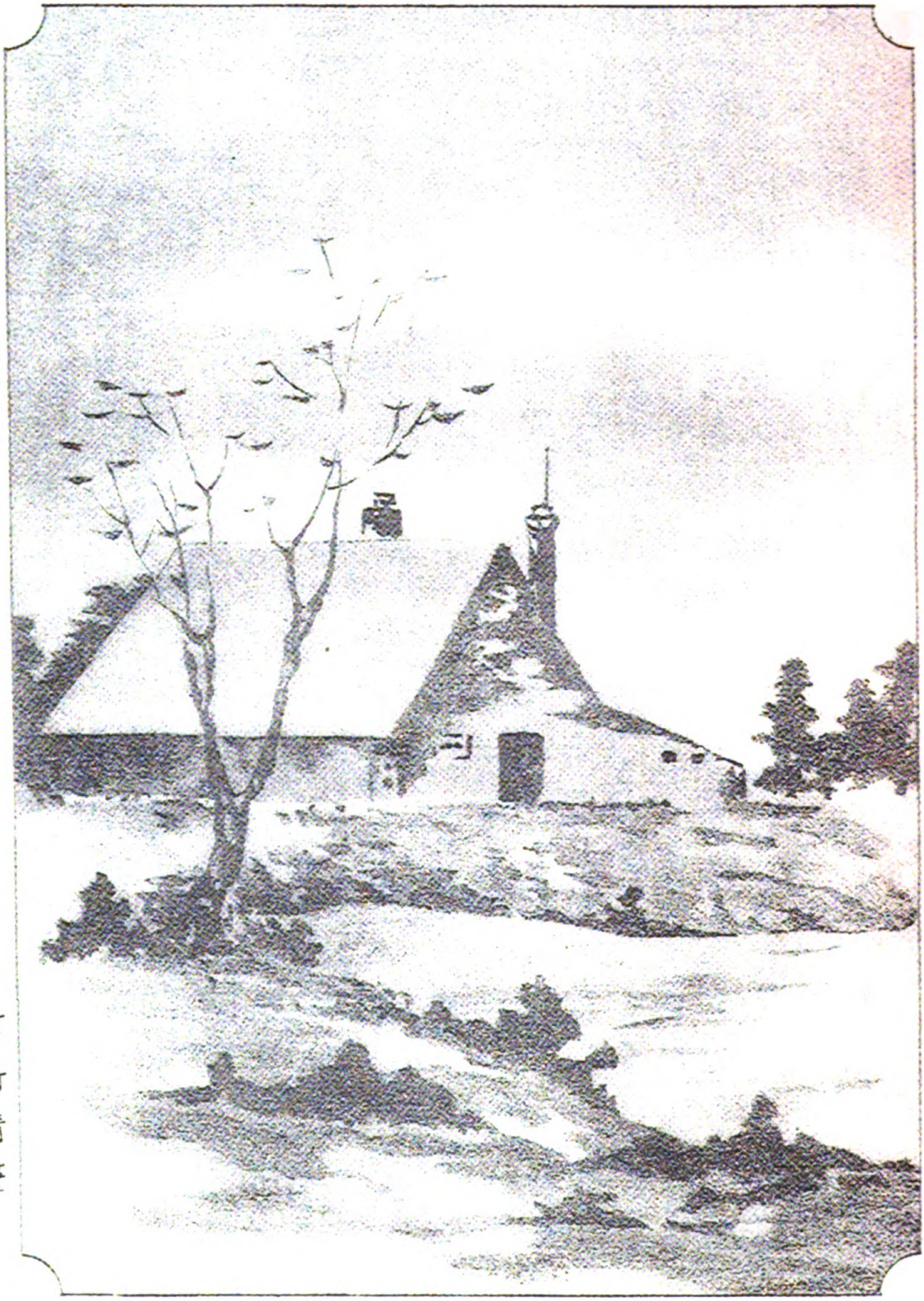
弓	定價
號外品	〇、七〇
壹號品	一、〇〇
貳號品	一、五〇
参號品	二、〇〇
四號品	二、五〇
五號品	三、〇〇
六號品	三、五〇
七號品	六、〇〇
八號品	八、〇〇
九號品	一〇、〇〇

箱	定價
壹號品	一、五〇
貳號品	二、〇〇
参號品	二、五〇
四號品	三、〇〇
五號品	三、五〇
六號品	四、五〇
七號品	七、〇〇
八號品	八、〇〇

東京市京橋區竹川町十三番地　合資會社　**共益商社樂器店**　電話新橋五二九　電信略語〔キヨ〕

女(乙の四)

郊村



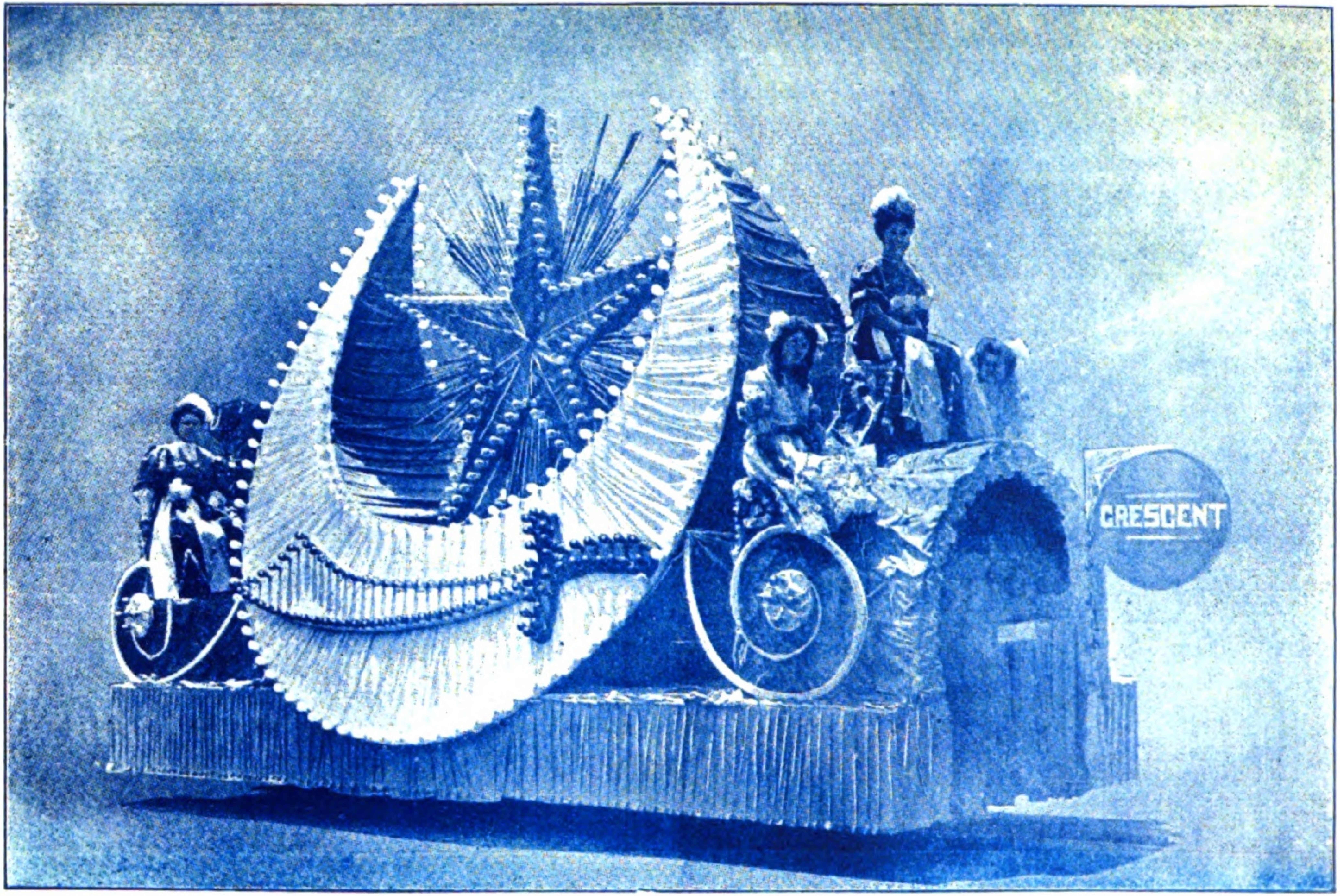
河崎清筆

初雁



宮川安信筆

西洋祭りの飾物



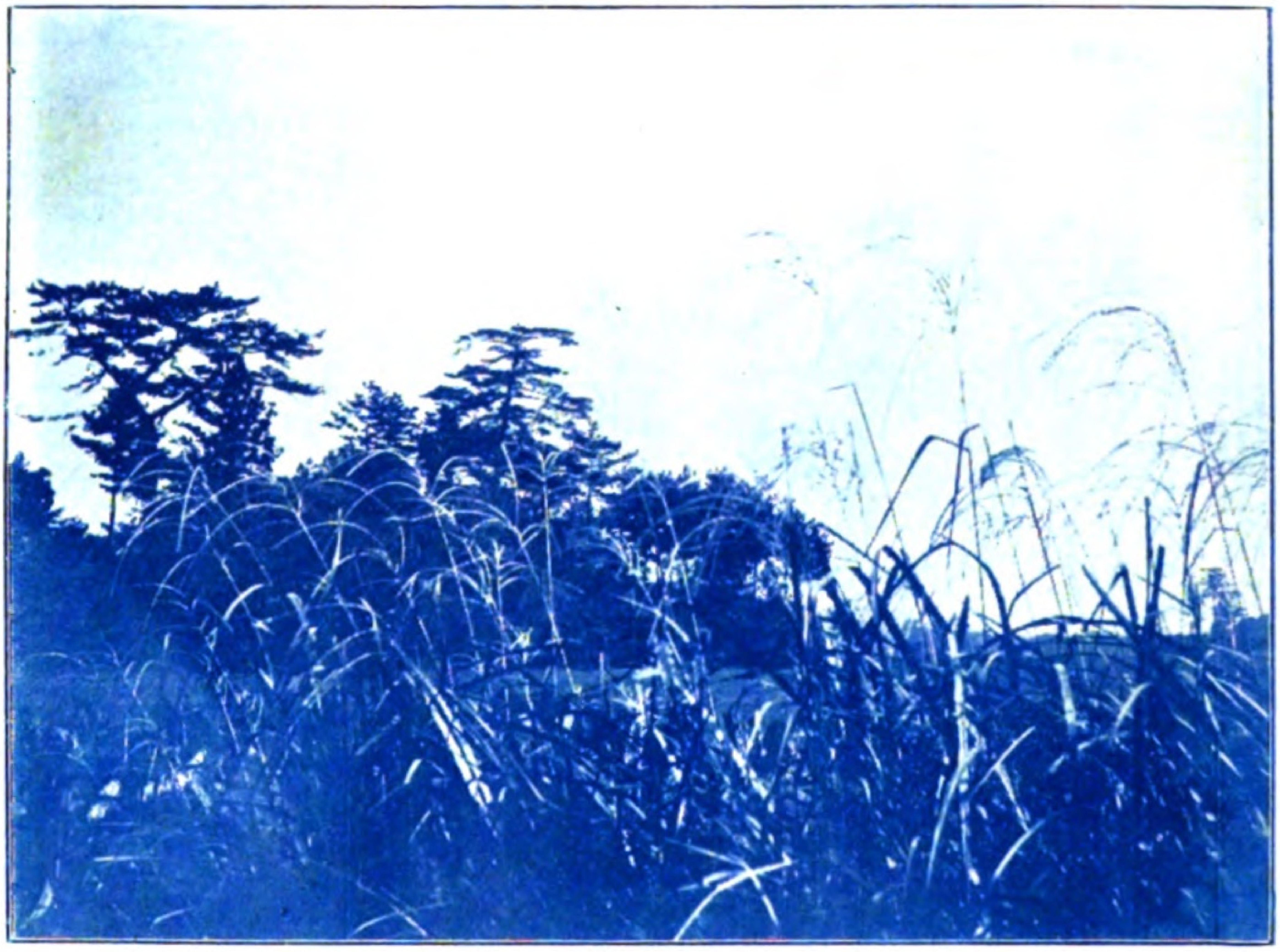


勝伊代子（故海舟翁の令孫）



中牟田貞子（中牟田海軍中將令孃）

秋郊





泰西美人





(女 丙の一)

博文館

(丙の二)

博文館出版當用懐中日記の實用正確たるや多年世人の認容する所今茲に喋々を要せず而して今回發行の四十年度日記より更に一層の特點を添えて日記の眞價を倍せり即ち**陰曆の記入**是なり以前印刷局に發行せられし頃は陰曆も記入ありしが事民業に屬して以來絶て之を記入せず是れ陰曆の必要を知れども陰曆計算の至難なるに由つて余儀なく之を略す弊館久しく之を遺憾とし研究の結果其精確を得て今回より記入を實行せり是れ他の日記になくして弊館日記のみにあるの一大特點にあらずや請ふ續々御愛購あらんことを。

明治四十年
當用日記

四種

◉卷頭 皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷とし掲ぐ

大形 菊判 **上製**（舶來洋紙總クロース金字入） ▲正價金五拾錢 郵税拾四錢

中形 四六判 **特製**（舶來洋紙脊皮美製金文字入） ▲正價金五拾錢 郵税拾貳錢

中形 四六判 **上製**（舶來洋紙總クロース金字入） ▲正價金三拾五錢 郵税拾錢

小形 菊判半截 **上製**（舶來洋紙總クロース金字入） ▲正價金三拾錢 郵税八錢

◉紙數 大判中形共五百四拾餘頁 小形五百三拾餘頁

▶賣捌所は全國各地の書籍雑誌店

▶取次望みの方は御申込次第

日記類

明治四十年 懐中日記

三種

新形（船來洋紙頗美本總クロース 金文字入細長形携帯至便）
▲正價金貳拾錢　郵稅貳錢

上製（船來洋紙頗美本總クロース 金文字入紙數三百餘頁）
▲正價金拾八錢　郵稅貳錢

並製（船來洋紙總クロース表紙 金文字入紙數三百餘頁）
▲正價金拾貳錢　郵稅貳錢

右三種共卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は脊面に他の二種は腹部に鉛筆挾みを設く

博文館日記の特色

用紙　何れも海外製紙會社へ特に注文漉製せし特別上等紙を用ゆ

印刷　日記印刷の爲新鑄せし活字を以て注意印刷す頗る鮮明なり

製本　弊館が特に英國より輸入せし新機械を以て堅牢美麗に製本す

趣向　（當用日記）日々欄には舊曆對照過去同月日の重要歷史、日露戰役重要紀念、七曜、干支等を錄し天氣、寒暖、發信欄の外往訪及起床時就蓐時の記入欄を新設す尚各月の初めには、其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新作し、毎日の記入欄には細罫を附し秩序ある記錄たらしむるに適せり。附錄としては紙數十二頁の補遺金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、露伴先生旅行の心得、某醫學士の衛生心得及び最新重要統計及日常必須の諸規則を網羅せり。

體裁　（懐中日記）毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案内、陰曆氣節等を掲げ日々欄に過去同月日の歷史、七曜、干支、天氣、寒暖、起床、就蓐時欄等當用日記の如く卷末には日記補遺錄日常有用の事項諸稅則及最新重要の統計表等百頁を附す。

及紙類文具店等到る所にあり◀
精々御便利に御相談可仕候◀

（丙の三）

醸造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

天下一品
最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に在之候

森次太郎君著

歐米書生旅行

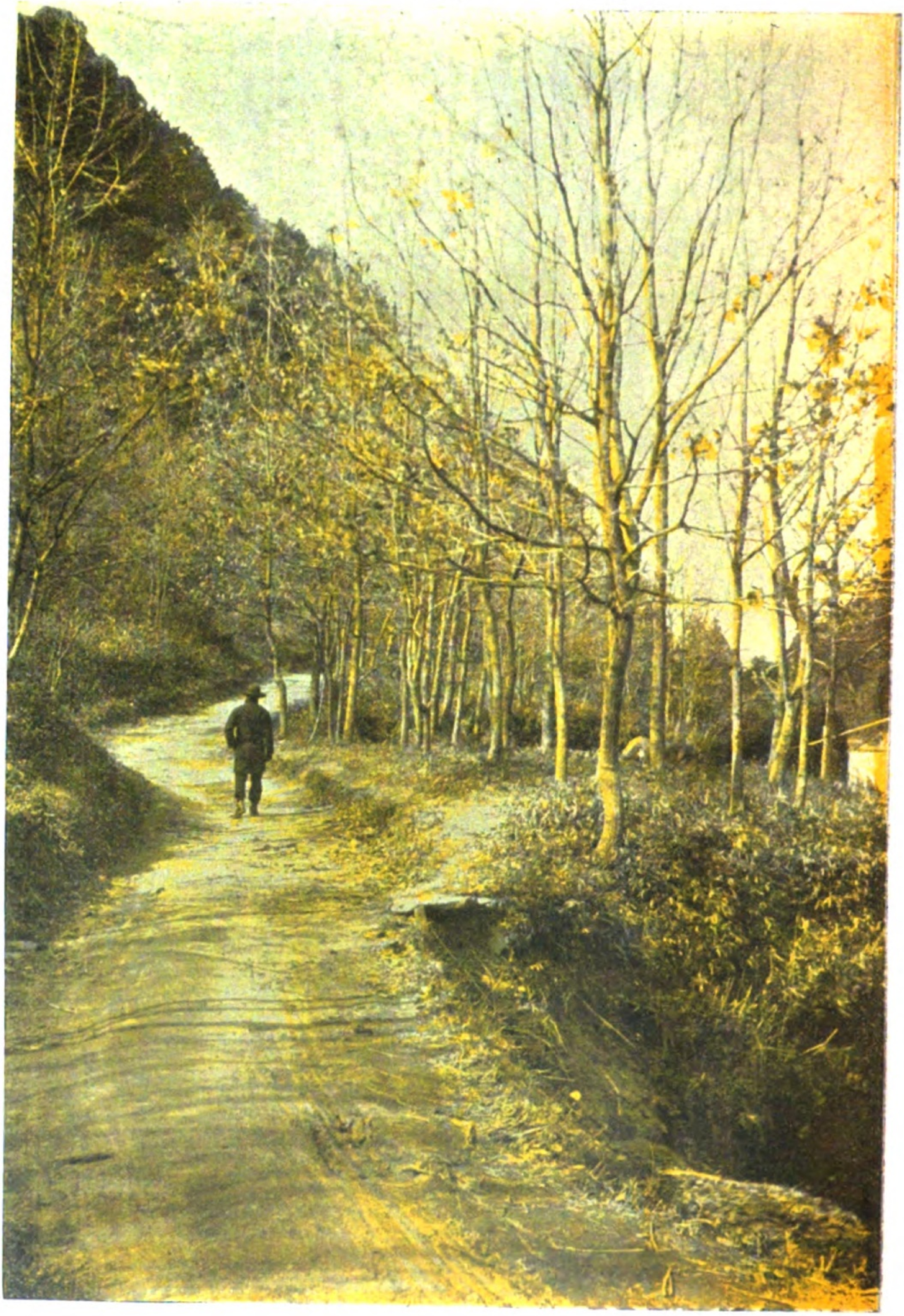
正價三拾五錢郵稅六錢

全一册洋裝三六判紙數三百三十頁

本書は著者が留學中、學業の餘暇を以つて歐米各地の名勝舊蹟を歴訪し此れを著したるものなり、書中輯むる所、自然の大景壯觀あり英雄豪傑、詩人文士の遺跡あり、宮殿あり古城あり、大學校あり、古寺院あり、古戰場あり、文章の平明輕快なる趣味の津々たる、數多の旅行記中一異彩を放つものあり、加ふるに本館特得の銅版寫眞數葉を以てせり、青年學生は之を讀んで海外壯遊の志を起すべく、老人婦女子は之を繙かば座して歐米を巡遊するの感あらん。

東京本町 博文館

冬木立

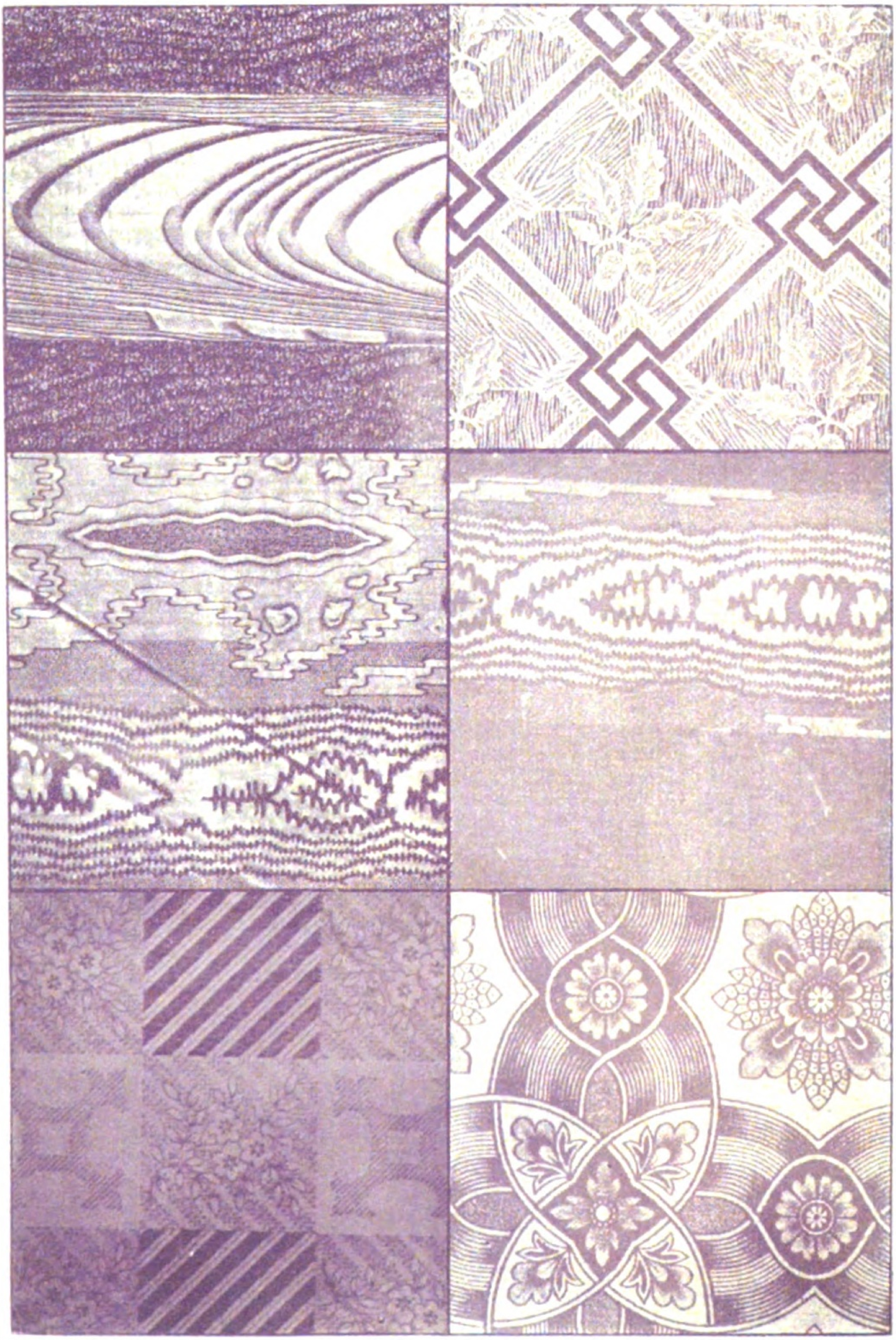


肉躰美





染形模様



捨山の秋



(観月堂より川中島を望む)

倫敦の新装



長崎產婆學校卒業生



通俗作文全書

全部二十四冊洋裝四六判
並製紙數各三百頁
正價一冊參拾五錢
郵稅一冊六錢宛

（丁の四）

記事論說或は紀行叙事等の雄篇大作より、尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般の藝術の駸々進歩するに反し作文の技のみ獨り退歩の觀あるは詢に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目は左に列記す。

第一編 **文章組立法** 大和田建樹君著 （既刊）

第二編 **書簡文作法** 田山花袋君著 （近刊）

第三編 **美文作法** ◉續刊

第四編 ◉商業作文法

- ◉書簡文範
- ◉女子消息文範
- ◉中等學生文範
- ◉論說記事文範
- ◉祝賀弔祭文範
- ◉言文一致文範
- ◉紀行文範
- ◉英和商業作文
- ◉雅俗はがき文範
- ◉支那時文軌範

- ◉英文作法
- ◉才媛文集
- ◉寫生文範
- ◉日記文範
- ◉古今名家文話
- ◉明治時代文範
- ◉古今名家尺牘文
- ◉古今文人逸話
- ◉古今名句集
- ◉作文熟語類集

東京 博文館 本町

楠田病院長
楠田謙藏君校閲
產科婦人專門醫
稻生鑑次郎君纂著

實習產婆學 上巻

通常產

洋裝大判美本紙數三百餘頁
正價金七拾錢 郵税拾錢

本書は[illegible]の專門醫にして、多年產婆養成の經驗ある著者が、其平素講述の稿本を基礎とし、之に佛國ペナール、アプラン兩氏の著書を始め、多くの佛獨兩國の學者の著述を參考として記述したるものにして、其說從來我國に行はるゝ產婆書に比して異彩を放てるもの多く挿圖甚だ多くして、文章將た初學者をして了解し易からしめんとを務めたれば產婆生徒の講習用としても、開業產婆の參考用としても、實に間然する所なき良書なり。

西田敬止君著

育兒と衞生

正價廿五錢郵税六錢

隱岐敬次郎君譯

女子衞生學

正價三拾錢郵税四錢

醫學博士 濱田玄達先生校閲
醫學士 伊庭秀榮君著

復習問答 簡明產婆學



婦人の職業中最も其任に適するものを產婆學とす方今斯學に關する新書少きにあらずと雖も多くは其書長篇に亘り其文硬澁に傾き以て平易通俗に解を與へたるものなし伊庭氏茲に見る所あり**產婆學研究生**の爲め其講餘の**復習本**たらしめん事を期し最も**平易**なる**問答體**を以て**斯學**の要**義**を說述せり而して斯學の**泰斗濱田玄達先生**の**懇篤**なる**校閲**を受くるを以て本書の**精確**を證するに足るべし請ふ續々愛讀を賜はらんことを。

全一冊四六判
紙數約二百頁
十月下旬發行

東京本町 博文館

（丁の七）

第三回新學期開始

◉會員大募集＝目下入會の最好機なり

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小説を毎號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に説いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。

▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

（丁の八）

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易説明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覧にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲規則書▼

端書にて申込あれば直に郵送す可し

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四百番）

大日本淑女學會





女學世界定期增刊
第六卷第拾四號
女智惠袋
(十月十五日發行)

讀書の時

興味ある書を讀むは恰も蛋卵をオムレツにして喰ふがごとし如何に讀書は爲になればとて乾燥なる理屈を變化なき方式もて薦めんか、人は唯、黄茅の野白葦の澤を見ると等しく何等の印象を與ふる事なくして了る、是れ豈人に嫌厭をすゝむるものにあらずや。

心理晴雨計

峨眉山月

▲度量――彼れの度量の大なるは、彼れに猛氣あるが故なり、彼れは如何なる事を成しても己れの手に逐げざるものなしと信ずる程に剛猛なり、彼れは人を見ること木偶のごとく、如何なるものも彼れの眼前に來らば只木偶となりて映ずるのみ、彼れの胸中に清濁なし、彼れの眼中に是非なし、彼れの意中には唯大小あるのみ。

▲狹量――彼れの局量なるは、眞摯にして正直なるが故なり、彼れの腦髓は透明にして恰も水晶のごとし、故に其の心中には一點の埃をも浮べず、一滴の汚をも染むるを許さざるなり。

▲冷酷――彼れの冷酷なるは主として自己の能力を信ずるの度厚きが故なり、彼れは八面六臂の力を蓄ふるの精力あり、而かも悉く打算的なり、故に彼れは何人を見ても己れ以上に待遇を與ふるを欲せざるなり。

▲傲慢――彼れの傲慢なるは彼れの健康の致す處ろなり、彼れの身體は恰も鐵のごとし、其の腕力はよく鼎を扛ぐるに足れり、彼れの胃は駝鳥の胃袋よりも強し故に如何なる粗食にも甘んずる事を得、されば彼れの心中貧を恐れざるのみならず、又病を知らざるが故に此の世に屈托なし、彼れの人に對して常に傲慢の態度を取るは、職として其の健康に頼む處あればなり。

▲智慮――彼れの智慮は專ら其の責任を重んずるより來る、彼れが人事に對して常に圓滿の態度を取り、些細の事に衝突せず、よく謀り、よく親しみ、よく調和し、よく人事に盡す所以のものは主として彼れが責任の重きを自覺したるが故なり、彼れは責任を以て人間處世の第一法となし、是を以て自己の宗教となし、これを以て自己の安身立命となすが故なり。

▲臆病══彼れの怯懦あるは其の智餘りあるが故なり、彼れの腦髓は玲瓏にして何物をも透徹せざるなく故に彼は或る諺──浮世は失敗を繰り返すものに過ぎずとの俚諺を信じて何事にも手出しせざるなり。

▲温情══彼れの暖かき心は一に其母の賜物なり、彼の母は博愛にして慈深き女なりき、彼れの母は人の爲めに盡すを知りて己れは一生貧に甘んじたりき、彼の母は十を取るべき場合に六を取りて猶感謝したり、彼れの母は人に恩を施して而かも其の恩なりし事を自覺せざりし程に好人物なりき。

▲性急══彼れの性急なるは心身の不調和より來れり、彼の身體は極めて羸弱なるに拘らず、其の意志は極めて強烈なり、この意志を行ふにこの羸體を以てす、性急を免れざる所以なり、彼れの腦は鋭敏なれども薄弱のものなり、彼れは敏捷なれど耐ゆる能はず、彼れの胃は絶へず不滿を訴へり、彼れは現在の物を見て直ちに未來を杞憂す。

▲果斷══彼れの果斷なるは其の誠實なると自信あるより來れり、彼れは如何なる場合に於ても誠實なり、明暗に於て行を二つにせず、心中に不誠を抱かず、故に事に臨んで少しも恐るゝ處ろなく、斷じて行ふて躊躇することなし。

▲巧言══彼れの巧言なるは、其の舌根の圓滑なるより來る、彼れは敢て務めて言を飾らんとするにあらず、唯其天分の自然よりして發するのみ、言辭巧みなるは彼れの自然のみ、これを見て一概に彼を嘘つきといふは未だ彼れの本能を知らざるものなり。

▲義俠══彼れの義俠なるは其の情に厚きにあり、彼れは己れを推して常に人を察するなり、彼れの義俠心あるは恰も人が自己の窮厄を見て安如たる能はざるが如くに感ずるが故なり。

評論

着道樂の祟り

瀟湘佳人

嘗て米國に於て、同國の貴婦人社會がいたくも衣服の傲奢を競ふの惡風あるを「恥づ可き富の濫費」と題して、大に慷慨された人があつた樣に記臆して居ります、如何樣、彼れ位物質的文明の盛んな國にあつてすらも、夜會服に幾萬圓費したの、外套の衿皮にばかり幾千圓かけたと云ふ樣な事は、決して富の誇る可き勢力では無いとして退けられてあるので御座います。

然るに、其れ等よりは數等、富の程度も低く生活の狀態も劣る我が國にあつて、片側八百圓の晝夜帶が何やら樣の御新婚の日常帶だの、何がなして凝つた意匠をとて、僅か方一寸の中に鶴を百羽とやら織り込まして、其の製造費用總計額が、實に二千圓と云ふ帶をわざわざ西陣へ註文した、何やら樣の令夫人等があると云ふに至つては、豈驚かざるを得ないではありませんか、其れは元より、有り餘る黄白の捨て場所に困つて居らつしやる方々には一夕青樓で、旦那樣が、御信心の筋へ奉納し玉ふ賽錢にも足らぬ額では御座いませうが、少額と云つても二千圓、先づ差し當り巡査ならば十一年間食はず飲まずに忠實に勤務した俸給の總額である、勞働者ならば、一日の日給平均約五十錢宛と見積つても、丁度四千人の職工が一日朝から晩まで汗水流して勞働して、而して漸つと得た處の賃銀の總計額に相當する譯です、何樣、之れ位貴い勿體無い程有り難い價値のあるおみ帶ですから、其のおみ帶をお締めになつた時は、美しい夫人が一層美しう氣高く艶麗にげにや四邊輝くばかりにおなり遊ばすは知れてゐる事況して貧に窶れ餓ゑに泣く四千の職工の亡者共が輕羅ともならずに、美人の細腰に纏ひ着いて居られる果報さ、誠に以て古人も羨む可き有り難き仕合せと云はねばなりません、況して、昨夜、優しい旦那樣に泣いて

口說いて無理に强請つて拵へて貰つた桃山式とやらん江戸褄の裾模樣、明朝、早くも其の褄先きが質屋の庫の方へ向いて居る等の機敏さ、誠に有爲轉變の理には洩れぬ有りがたき仕合せと云はねばなりません、何處の無粹か、往昔

　樂しみは夕顏棚の下涼み
　男は襦袢、女は二布して

等と歌つた詩人がありました、當節柄、金を相手の宿屋とか商店とかは無論の事、病院であらうが敎會であらうが、知人を訪問する時ですらも衣服の善惡に依つて大に其の待遇が變らうと云ふ時世、早い話しが電車の中でさへもなけなしの、箱の底敲いて一張羅を衒示かしますと、第一幾ら込んで居ても下げ皮には滅多に振ら下がる必要は無いと相場の決まつてる世の中、何ぼ何でも女と生れてゝらや二布で其れで、樂しみは夕顏棚の下にと澄まして滿足して居られる人は幾人御座いませうか。

だから正直、洗ひ着して居ても寒さの凌げぬとか暑さの防げぬとか云ふ法はありませぬが之れではよしや借り着しても大に綺羅を飾る必要はある譯です、

心の持ち樣に依つては、洗ひ代の木綿の浴衣を着て居つても、女の容儀に缺けると云ふ筈はなけれど、之れではよしや、姫御前の身の嗜みも無う、暑いと云つては絽友禪の袖口艶めかしう羞恥かしき軟肌寬いでの醜體をも美しと見て、私共は羨ましがる譯であります北邙の雲、鳥部の烟、二布して居つた女やてゝら着て居た男のみが、荼毘、一片の空に歸して夢は冷たき土饅頭に殘ると云ふ事はないですけれど、之れではよしや、借金で首も廻らず身動きも出來ず、米屋の拂ひや八百屋の借りを後廻しにしても、生きてる程には紳士の體面、淑女の品位を保つ爲めに、洋服も着け金泥の帶も卷きつけねばならぬ譯でせう。

這麼具合に、滔々として世は唯奢侈に流れ淫靡に赴いて參りますのは、決して賀す可き時代の趨勢で無いと云ふ事は勿論ですが、之れは抑も誰れの罪でせうか、璧を抱いて小人始めて罪ありとしたら、罪無き私

共を教唆し煽動して壁を抱かせ、又は抱かせ樣と務める眞の直接の罪人は誰れで御座いませうか。

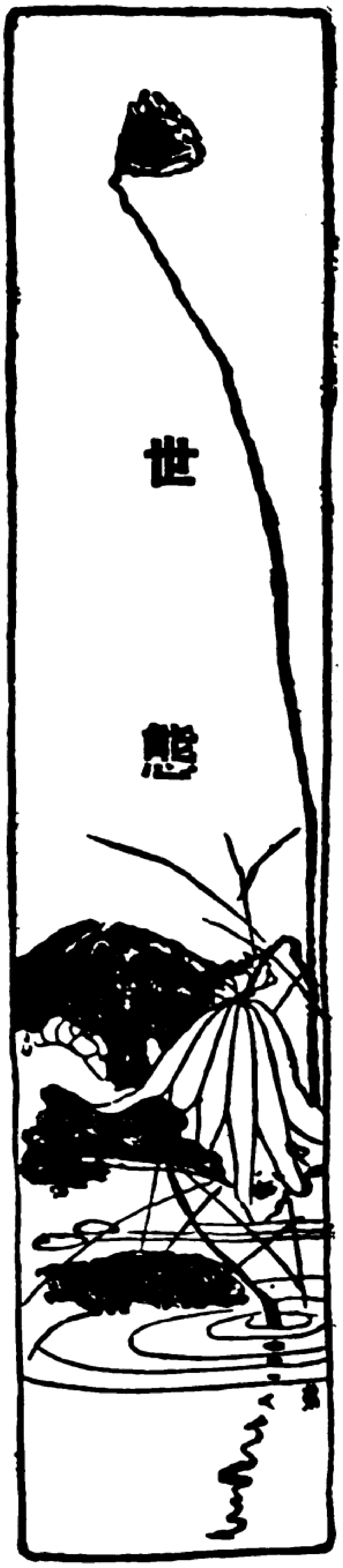
　元祿模樣の華麗、桃山風の濃艶、緋と紫に百花爛漫として色を競ふ處、人知るまじき苞苴の黄白に代へても愛妻の爲め愛孃の爲め、默しがたき懇願を容れて遣り度きは、人間自然の情で御座いますまいか、斯くしてあるが上にも小夜衣、慾には限りが御座いませんから、右より左に廻り兼ねたる火の車が、やがて家庭の平和を破壞し攪亂する惡魔の手となるのではありますまいか、嘗て、私の鄕里に這麼ことがありました。

　何でも可なりに暮して居つた家で御座いましたが、其の家の主婦と云ふは人並勝れて美しい眉つき口元、其れが却つて其の身の不幸なりしか私は知りませぬけれど、田舍にも似げ無き紅絹裏の八つ口や、勝色絹の薄ぶきの二つ袷等が餘程人目を引いたと見えて、兎に角隣人の眉を顰めさせる樣な事が度々あつた程の着道樂だと云ふ事ですけれど、人間の慾には限りが御座いませんですもの、恁うして其の僅かな財產で、限りの無い分に過ぎた慾望が滿足に充たされませう、誰れやらが不用の物を買ふ事を好む人は、やがて必要の品を賣る人だと申しましたが、實に其の通りで終には寒くなるけれど着る着物も無いと云ふ哀れな始末、親類も度々の事であるから構ひつけなかつたからして借りらるゝ丈は借り、賣られる丈は賣つて、一夕風暴れし淋しい晚秋の頃、終に一家を擧げて四人、毒を仰いで倒れたと云ふ事であります。

　今も殘る、崩れかゝりし片庇の月影、況して月無き頃は雨夜の闇を、淡き小さき四つの影がちら〳〵する等と、人の噂を聞いた時の物凄さよりも、主婦が二十七の細輪の銀杏返しに淡紅色甲斐絹は絆纏裏の、ありし俤を偲びまするど、一層慄然と致すのであります、噫、去りとては、褌襠なるかな、二布なるかな、再び此處に、

　　樂しみは夕顔棚の下涼み
　　　男はてゝら女は二布して

と記して、筆を擱く事に致しませう。



四面皆敵

妾の逆境生涯

逆境の裡に光明を見出したる一婦人の實際談

▲多事の身の上

何か私に逆境に處した場合に、慰安を發見する方法を話せと云ふですが、其れは私も今日迄、隨分多難の生活を經ては來ましたが、偖て格別之と云ふて、逆境に處して慰籍を發見する方法などと、取り出して御話し致す程の纏つた意見もありませんが、折角の御厚意を無にするも、本意でありませんから、私の今日迄經來りた概略を參考までに御話し致しませう。

誠に人間の一生程判らぬものはありません、私は今年で卅六歳の婆さんですが、顧みて青春の血胸に躍つた二十年の昔を考へますれば、宛で夢のやうです、私の生國は信州ですが生家は地方では可なりの財産家でありましたから、物心づくまで何不足なく生ひ立つて來たものでした、で私は十八歳の春地方の師範學校に送られ、其處で慈愛深き師の君の下で、學びの途にいそしむと云ふ極めて幸福の身の上でした、其れに今一つ私の身を幸福ならしめた事と云ふは、能く云ふ筒井筒振分髮の昔よりと云ふ關係の、許嫁の良人がありまして東京のある學校に勉強して居りました、で私は未來の樂しい家庭を想像しては、夜々の夢は百花咲き匂ひエデンの樂土に飛ぶ程で御座いました。

▲儚き夢

併し其樂しい希望は誠に儚き南柯の一夢で御座いました、と申すは世間に能くあることですが、私が丁度學校を卒業した年は、許嫁の良人が死んだのです、其時の私の悲嘆は御話し致さずともですが、併し愛を失つた場合の女性の胸中の苦悶は又た格別で、到底男子方には想像が出來ぬと思ひます、何故かと云ふに夫れは申すまでもなく、愛は男子にありては全身の半分を形成する者ですが、女子の身に取りては全體ですもの其上斯う云ふ場合には男子方は慰籍を功名の戰場に求むると云ふことがありますが、女子にはさう云ふ事がありませんもの、たしかアーヴエングの言葉でした、女性の愛を失つた場合には、丁度空飛ぶ鳥が矢をうけたやうに、兩の翼をすぼめて、其場を押へながら飛ぶが、到頭力が盡きて死んでしまうと、實際之に違ゐないのです、女性が其ハートに受けた傷と云ふ者は、一生涯其痕跡が消えません、併し創痍は全然癒らなくとも、其悲みは日を經るに從ひ漸次薄らぐものでありますが、私は何うしても二度と人の妻と云ふ者にはなるまいと決心しました。

▲第二の打擊

許嫁の良人の死後六個月許り經ちて、此癒りかけた私の傷を刺戟した第二の打擊が起りました、其時迄兩親兄弟も私に秘して置たのですが、夫れは良人の死んだのは普通の死でなくて、何でも惡所通ひの果てに金に窮し遊女と情死したと云ふ事實です、之を聞いた私の胸の傷は更に幾層倍の痛みを加へましたらう、振分髮の時代から互に深く信じ合ひ、愛し合つた――新しい言葉で言ひませうなら相互の靈と靈とが相交通して渾然と融和して一身同體となりて居る人――が此仕末ですから腹立しいやら口惜しいやら、胸も心も張り裂ける程でした、信じ切つて居た人ですら斯の通りであるから、一圖に男子と云ふ者は皆惡魔であると深くも思ひ込み、愈よ酷く結婚を忌避するやうになり、益す獨身生活の信念を固くしました。

▲四面皆な敵

で私は師範學校を出た曉は、東京に上りて更に學びの途に深く分け入る積りでありましたが、心の痛みに堪え兼て、一先づ生家に立ち返りて、爲すこともなく極めて不愉快に暮らして居りましたが、兩親殊に母親は私の行末を案じては五月蠅い程婚嫁を勸めましたが私は如何にも意地惡く頑固に其れを刎ねつけ通して來ました、此時分には私の精神が非常にひねくれて居たことは後で判りました、さうかうして居る中に兄は嫁を取り妹は



他に嫁し孰れも子供が出來る、其子供を見ては家內中ヤンヤと云つて可愛がつて居ましたが、私には子供などは少しも可愛ゆくありませんでした、斯う云ふ根性ですから自然に嫂などには辛く當る、其處で家族からは益す厄病神のやうに嫌はれる、近隣の人々からは行かず後家とか老婆とか人間でないやうにけなされる、其處で私の精神は益すひねくれまして見る者聞く者悉皆癪の材料で惡魔か仇敵のやうに思はれるのです、果ては天を怨み

人を怨み、我と我が髮の毛を搔き挘つては煩悶する、何處を見廻はしても一點の光明も發見する事が出來ませんでした、夫れで死なうと決心したことも二度や三度ではありませんでした、若し此時何等かの希望の光明がありませんでしたならば、私は今日迄生き延びて斯う御話しすることなどは出來ませんでしたらう、其光明ですか、夫れは此話の神髓ですが、此黑闇々たる私の前途に兎に角一道の光明を射込んだのは全く福音女の聖職に一身を委ねて居る老女ですが、私は其老女の身の上話しを聞かされて酷く感心したのでした老女の身の上話しですが、夫れは非常に長くて詳しく話せば、迚も一日や二日では話し切れませんよ。

▲一點の光明

事實は小說よりも奇だと云ひますが、其老女の話は宛で小說ですよ、老女は旗本の歷々の生れで、同じ格式の矢張り旗本の家へ嫁したのですが、丁度維新の變亂で實家の父も良人も、共に彰義隊に屬して孰れも行衞知れずとなる、お負けに扶持や家財は悉皆奪り上げられて了ふ、夫れで老女は產れた許りの乳呑兒と碌に足腰の利かぬ姑を抱いて、彼處此處と漂流した揚句に漸く靜岡へ落ち着き、女の細腕で一家三人の糊口を五年間も支へたのですが、其間の艱難苦勞と云ふ者は、此處で一々御話しは迚も出來ません、其中に時勢は變りて、行衞知れずであつた良人は戾りて來て陸軍に召し出されだん〳〵出世する、やれ善かつたと思ふ間もなく、又もや西南戰爭で良人は田原坂で討死をする、惡い時は惡い事が續くもので、良人の死ぬと同時に杖とも柱とも賴み切つて居た、一人限りの伜は流行病で死んだと云ふのです、世の中のあらゆる艱難困苦を、悉く嘗め盡して、辛抱に辛抱した最後の結局が斯の通りですから、老女は悉皆氣落ちがしてしまつて、其儘病氣となつたのです、幸か不幸か病氣は程なく癒つたが、宛で喪神した人のやうで仕事も何も手につかなかつたが、或日人から聖書を讀めと勸められて讀んで見ると、闇黑の裡に何處からか、一點希望の光明が射し込むやうな氣持がする、每日熱心に讀んで居ると、

其光明が益々大きくなる、果ては此聖書が唯一の慰籍となつて、片時も傍を離されなくなり、到頭熱心の基督教信者となりて毎日神の福音を宣傳する傍ら、某耶蘇教主義の育兒院の舍監に聘せられて、今では多くの孤兒の母となつて居ります、が父を失ひ子を失つても毎日天父の廣大なる愛に浴し、多くの子供等に實の母のやうに慕はれて居るから心は何時でも春風に吹かれて居るやうで、今では極めて幸福の月日を最も愉快に送つて居ると云ふのです、老女の話しはざつと斯うですが、老女は倘ほ頻りに私の身の上に同情しては、聖書を讀めと勸めました、其處が勸めらるゝまゝに聖書を讀むでもなくつい見て居ますと、幽谷に迷つた者が何處かに人の跫音を聞くやうな心持ちがして、此聖書によりて兎に角一點の光明を認め、此世界は必ずしも鬼ばかりでないと云ふことが分りまして氣を持ち直すことが出來ました。

▲奮闘的精神

聖書で慰籍を得ました私は新に勇氣を恢復しましたから、今度は親や兄に厄介をかけずに何處までも獨立自活の道を得やうと決心し、東京の某英語學校に這入りました、併し脛嚙りと云はれるが辛さに郵便局の雇となりたり、某呉服店の店員となりたり、時には下女奉公までして苦學しました、其間には辛いこと悲しいこと、迚も口では盡されない程でしたが、老女の身の上と引き較べたり、又は之は神樣が私を試驗するのだと自ら僅に慰めて居りました、併し知らぬ他人の中が恁那に苦勞しましても、夫れでも家に爲すこともなく親や兄から厄介物がられ煩悶の虜となつて希望の光明もなく暮らして居つた時と較べるとずつと幸福でした成る程苦勞はしましたが、前途に光明を望んで働いて居りますから、少しも煩悶などの起る隙はありませんでした、之を見ましても人間は働らくに限ります、一生懸命に働いてさい居れば、煩悶などの起ることはありません、假令如何に煩悶があつても夫れに打ち勝てます、働いてさい居れば慰籍は自然に其處から出て來ます、だから私はさう思ひます、煩悶の虜となつて淺

間山や華嚴の瀧などに這入る人は、たゞくよ〳〵思つて遊んで居るから、煩悶が其處へ乘け込むのだと、古人の句に『憂き事の尚ほ此上に積れかし限りある身の力ためさん』と云ふがありますが、斯う云ふ精神であれば、煩悶の方で降服します、今日流行の言葉で申しませうならば、奮鬪的精神とでも云ひますか、私の氣を持ち直す事の出來たのは、全く聖書と老女の賜ですが、併し多少慰藉を感ずるやうになつたのは、此奮鬪的生活の賜でした、何でも人間の一生と云ふ者は惡い事が一つ起ると引き續き惡いことばかり續く者ですが、斯や云う時にはじつと辛抱して自分の爲すべき事を、專心に勉强して居るに限ります。

▲獨身生活の寂寞

斯様に苦學しまして三年目に漸く英語學校を卒業しました、而して或る高等女學校の教員に聘せられました、無邪氣のあどけなき花のやうな少女等に袂に縋がられ、母のやうに慕はれては、前の苦勞も何もすつかり忘れてしまつて、茲に始めて人生の小康を感じました、斯う云ふ次第で先づ衣食住に差支なく稍や幸福と云ふ身になりましたが、併し其中には隨分心外の事もありました、夫れは何であるかと云ふに、同じ學校に奉職して居る男教員と妙な關係があるなどと、濡衣を着せられて獨りで泣いたこともありましたが、雲は何時までも月に仇して居りません、此方に毅然たる精神さへあれば、雲は何時しか散じて了います、マア斯んなやうな譯で教鞭を取りながら二三年送りましたが、夜半人靜まつた折に自分の經て來た經歷を考へますと種々の事が胸に浮んで感慨に堪へられませんが、又一大勁敵と戰つて夫れに打ち勝ち、勝利の榮冠を得たやうな心持がして、頗る愉快でもあります、多くの少女等には母のやうに親しまれ、衣食住其他にも少しも不足はありません人目からは頗る幸福のやうに見えませう、否や私自身も決して幸福を感じない譯ではありませんが、併し心の奧の奧には何だか斯う春風駘蕩の野に立ちながら、何處からか秋風が吹いて來るやうな氣持ちがして、淋しくて〳〵堪へられません、人が子供

など連れて來るのを見ますと美しくて堪りません、私は前には兄や妹の子供を憎みましたが、今では子供が可愛ゆくて堪りません、世の中に家庭の趣味を知らぬ人ほど不幸の者はないとつくづく考へます、之につけても私は思ひます、今の女學生などの中には能く獨身生活を理想として居る者があるが、之は大不了簡であると、夫れで私は此年になつて今更ら嫁入りも出來ませんから、兄か妹の子を一人貰ひ受けて其子を立派に敎育して社會有用の人物にしやうと、思つて居ます、

▲形染の法

木綿に小紋、更紗形を置く法は昔しより工風されたるものなるが、それをするにはまづ布を華氏の百度以上の熱湯に入れ煮立てゝ百十二度に至らしめ、三十分ほど過ぎて桶に移して冷まし水にて洗ひ乾かし、木綿ならば疊みてよく木槌にて擣つべし、さて形付板（長さ一丈八尺、幅二尺位）に糊付けて呀漉紙に好みの模様を彫抜きたるを押當て木篦にて糊（糯を磨り蠣灰を加へ製せしもの）を塗り印蝋せしめ、綴粉（煎り糠に油を交ぜたるもの）を掛け、乾かして豆液（大豆を擂り石灰を加へしもの）を刷き二三日燥かして布の耳に籭子數本を張立て籭子ごとに布を折り疊み一束に持ちて水桶につけ、引揚げて水分を去り後藍瓶其他色料に浸入せしめ、両手に籭子を取り一々布を開き染色の度を見て又瓶に入るゝこと再三にして更に本中に下し五時間ほど過ぎて草箒にて糊を拂ひ又水にて洗ふこと二回にして乾かすなり。

夫れが私の唯一の今後の慰籍です。

▲後車の戒め

私の經歷はざつと斯うですが、宛で浪風荒き生存競爭塲裡に立ちて、男子の方とパンの競爭を遣つて來たやうなものですが、斯う云ふことは決して女子の天職ではあるまいと思ひます女子の天職は矢張り賢母良妻たるにあると思ひます。夫れは困難と戰ふ奮鬪的精神は、因より何人にも必要に違ひありませんが其精神は賢母良妻としての天職を全うする塲合に必要なのであつて、男子とパンの競爭

をする爲めに奮鬪的精神を振ひ起すなどと云ふ事は決して天帝の意に合したものではあるまいと思ひます、只今の女學生達の中には、能く日本の家族制度が氣に入らぬとか、云ふて、獨身生活を夢想して居る者が澤山ありますが、よく〳〵の場合を除くの外早く良縁を求めて家庭の樂みを享けられんことを心から希望して居ります、で夫れが其人の爲めばかりでなく又國家社會の爲めです、私の覆轍は後車の好い戒です。

（秋霜生筆記）

貧世帶經營談

主人公は二十一歳の花嫁

婦人記者

滔々たる天下の人、家計を嘆ずる際に當つて、最も奇特なる且つ最も嶄新なる勤儉貯蓄の奬勵說も耳にたこの入る程聞いて、其効能は百も二百も合點して居ますが、收入が少くつて子供が多いんですもの思ふやうに參りません。中流の豐かな生計なら規則も立つし、儉約の方法も巧く講じられるし、自然の境遇が良妻にして了ふやうなものですと云ふのは低い程度の生計を取扱ふ細君がよく持出す極り文句ですが、けれどこんな事を口實に出來ない一つの實例がこゝにあります。それは某官省に通はるゝ測量師の細君ですが、結婚の當時より周密の工夫を凝らして規律を設け、尙此規律を實行して健全な家庭を作り、貯蓄の額大に上つて今は借家住居の境遇を脫して、家屋敷を求めんとしつゝある位になられた腕前です。此妻君は夙に產婆學を修めて一二年間實地を遣られたのですが、餘り妙齡で營業も不利益である所から二十一歳で今の良人に嫁し既に四歳と二歳の二女子を擧げて本年二十六歳になられます。尙感ずべき事は先妻の一女兒（本年十一歳）と老姑あるに係らず、良人の方正謹直を見込んで嫁をしたのですが、一つはこの細君の親御といふのが建築請負業と云ふ大層華な商賣で

家庭が自から贅澤浮華に流るゝのを慨歎し、蝶よ花よと愛でられ聟養子をとまで定められたのを謝絶して、此質素堅固な家庭を司るべく決心したのであります。

斯くて濁りに染まぬ蓮の花、白玉のやうな清い愛情を義子に注いで多年の惡習慣を善化し、先妻の不行屆より神經質に傾いた良人を慰籍して家庭の趣味を樂ましめ、勤儉自から奉じて貯蓄を重んじ、獨立の基礎を立つる等百方遺憾なからしめたので在ます、記者は折に觸れて語られし此細君の經濟法を取集めて左に記しました。

▲結婚當時の心勞

私の參りたては、先妻が經濟に無頓着で、肝心の貯蓄を考ふべき良人の出張中に濫費ばかり致して居つた爲に、如何程良人が質素勤勉でも燒石に水と云ふ工合で薩張貯蓄も出來ぬのみか、うつかりすれば、借財も出來る位でした。姑も極堅い人で先妻の不身持を歎かれて居た處ではあり、且萬事不規律に育てられた爲に智育も體育も人並でない六歳の孫娘があるので、大に私に信頼し、財政教育兩つながらの恢復を委托されました。私も一旦決心して參つたからには、何卒して姑や良人の心を安せしめるやうに致したいと存じましたが實際に當ると一寸豫想通りに參り兼ねる困難があつたのは、義子の改善を計る事でした。姑は先妻離緣の後、此娘を手一つで育て、只管不憫と云ふ老人の姑息の愛から、望むまゝに食物を與へて居つたのを、繼母となつた私が之を節制すれば必らず姑の惡感情を招きますと云つて其儘で置けば六歳になつても下の粗忽を致したり、腦が惡くつて人の言ふことが分らぬやうな情けない身體を直す事が出來ませんから、一旦は憎まれても鋭意決行に如かずと考へまして、姑にも此旨意を述べ三食は分量を定め、間食も一二回位少量に與へる事に致し始めました。其代り玩具を買つて遣るとか、自分の華美な衣類を直して着せるとかして子供と姑に私の嚴酷を怨まれない樣に致して居りました。最初は少しく物議もありましたが、追々子供の身體が丈夫になる所から、次第に私の遣り方に贊同されたのです

▲結婚當時の財政

結婚當時は良人の月給貳拾五圓で、夫婦に姑と養子の四人暮しでありました。其頃は良人の義兄所有の貸長屋を差配する爲に、差配手數料として、小さな家を無代で借りて居つたのと、姑の米代を兄から送りましたのとで一ヶ月十七圓で(主人の小遣共)充分に暮せ、八圓づゝ貯金に廻したのです、其頃は左程の困難もありませんで、姑の食物を良人同樣に供さねばならぬ位の事でした。產婆の業は捨てるのも惜しいと存じて、入口に小さな看板を下げて置きましたが、貧乏人の多い土地で偶に招かれても無報酬同然の處ばかり、其内私も姙娠の身となりましたので全く中止して了いました。

▲内職

二番目の女兒を擧げた際は子守を置く必要を生じました、普通の家ならば其必要は決して無いのですが、差配と申す役は隨分人出入りが繁く、且收金其他の用事で借家人を度々見廻らねばならず、勤務の、良人の代を私が致すのに、二人の幼兒と未だ役に立たぬ養子とを抱へては如何しても責任が忽せになりますから據ろなく下女を雇ひました。サア下女を雇ふと今迄通りの節儉も出來兼ると云ふ工合ですから、此收支を償ふ爲めに賃仕事を始めました。素より拙い腕の上に落着いて縫ふ事が出來ぬので絹物は一切斷り、木綿物ばかりを受合ひ、世間並より廉にして居りました。左樣ですチエ、一日一晩で漸と綿入が一枚出來る位でしたらう。

▲良人の疾病と轉地

良人は元來胃弱の上に心臟も壯健でない方でしたが朝鮮へ測量に出張中勤勉の性質ですから、寒い氣候を冒して人一倍働いたのが身體に障つて遂に肺尖加答兒となつたので、神經質の良人は大に煩悶して尙更病勢が募ると云ふ風でした。私は百方慰めて快復を祈つて居ましたが、紅塵の衢では迚も養生が出來ぬ所から、池上の附近へ轉居いたし、良人は快い時に汽車で役所へ通ふたのです。夫れからは今迄拂はぬ家賃八圓と式

車代、滋養食費等に攻められて生活が非常に困難でありました。無論下女は廢し老姑は實兄が引取り、廣い庭地へ野菜を植ゑて僅かでも食物の足前にする事に致し、種々苦心しましたけれども、毎月超過のみで貯蓄の内を足し前に使ふのでした。併し清い空氣と、新らしい魚類と畑を耕す運動とが自然療法になつたと見え藥は左程用ゐないで追々回復期に向つた處、此地の水の質が惡く、折々腸胃を害なひますので、今度は海岸の方へ引移りました、此頃は良人の病氣も最早全快致しまして、元の經濟法を實行し得らるゝ様になりました。

蕈の檢査

食用蕈

（一）食用に害なき蕈なるものは椎茸、松茸、初茸、木茸、シメヂ茸、岩茸の類なり
（二）大氣の流通よき乾燥地に生ずるもの
（三）通常白色又は褐色のもの
（四）緻密にして脆し
（五）切片を大地に曬すも變色せず
（六）壓すれば水樣の液あり
（七）香氣爽快なり
（八）味良にして舌を刺戟せず

有毒蕈

（一）食用に害あるものは蠅取茸、アシカベ、タマヒラ茸、ツラィ茸、虚無僧茸、ヰヌカツギ等あり
（二）深林陰濕地に生ずる者
（三）鮮明にして光輝を有す
（四）柔軟にして多量の液あり
（五）切片を大氣に曬す時は褐色綠色、青色に變ず
（六）壓すれば乳樣の液あり
（七）惡臭あり
（八）不味にして辛、澁、酸苦、鹹、

以上通じて尤も簡便なる試驗法は銀錢を投じて黑く染るものは有毒なり。

▲豫算の決定

家計簿は緻密に付ける方でしたが、唯從來の小遣帳式で雜多に付け込み、月末に拔出して各費目の決算を致したので、是れでは煩しくもあり、又儉約の仕方に迷ふ場合もありますので、費目を分けて豫算をキチンと決定しましたのは今より三年前であります。其以前とても無論豫算を立てる事は立てましたけれども、費目別の豫算に定めてから、大層取計らひが容

易で、而して明瞭に倹約が出來、愉快になつたと思ひます。費目は細いほど宜けれど繁雑になりますから、七つに分けました、豫算は物の相場に依つて聊か狂ひもありませうが、先づ大抵左の通りで動かないやうです。

主人月給三十五圓、夫婦と十一、四、二歳の女兒。

十五圓四十錢飲食費。　一圓六拾錢交際費。
三圓五拾錢　小遣。　八拾錢　衣服費。
七拾錢　修養費。　拾圓五拾錢　特別費。
壹圓　臨時費。　壹圓五拾錢　家具費及び消耗費。

合計參拾五圓

此内譯は飲食費の部に米代五圓五拾錢、(但しふかしパン代七拾錢を加へて)。副食物、菓子、六圓五拾錢醤油、砂糖、鰹魚節、味噌等九拾錢、主人辨當代壹圓。炭及びコークス壹圓五拾錢。合計拾五圓四拾錢でたつぷりの見積りです。交際費は來客の饗應、訪問の土產郵劵等で、吉凶の贈物は臨時費に含めます。交際費は良人が酒を飲まぬのと、田舍住居で來客が少いから割合少くて足ります。小遣費は良人のが三圓、子供のが五拾錢。衣服費は糸綿、石鹼、ふのり、「カラ」、「カフス」等の洗濯代、下駄等。但し纏つた衣服費は別途から出ますので後に御話し申しませう。修養費は新聞、雜誌、五拾五錢、小供月謝(村立小學尋常科月謝拾參錢)及び學具等。特別費は家賃七圓、電車代貳圓。所得稅、及び役所の積立金等です。臨時費は吉凶の禮費、餞別、醫藥費等。家具費及び消耗費は湯錢、石油、荒物、洗面石鹼等。大體右の如く定めました。

▲貯金と衣服

良人は一ヶ年間に三箇月づゝ二回出張測量を命ぜられますので、少し息を付くので御座います。先づ旅費の他に出張手當として壹圓貳拾錢の日當を給され月給は平常通り貰へますから、留守中の暮しの方と手當の殘金とで一寸餘裕が出來ると云ふ次第です。併し御主人が濫費家で日當の全部を出張中に費はるゝとか平常かゝりの多い家で月給だけでは不足を生じ、借り越しが出來て居る爲にこれを返財に用ゐる方は、少し

も實にならぬやうですが、私共では幸ひに主人も貯蓄に趣味を持つて、私の豫算法に贊成して呉れますので出張の際雙方に餘金が少々出來、之れを貯蓄する事に定めてあります。先づ三箇月分即ち百八圓程の手當の内を、實費一日八拾錢と積り歸宅の土産等まで概算して參拾圓を宅へ殘して行き、私は留守宅の經費を一箇月貳拾參圓と豫算して拾貳圓づゝを餘し、合せて貯金に廻すのであります。夫れから年末賞與が參拾圓程これを過半は貯金に廻し殘りを良人の洋服、靴等の新調に費ひます。但し子供や私の衣服は別に交際上の必要もありませんから、



滅多に拵へません。且つ私は嫁します時一通りは持つて參つたので、華美過ぎる晴衣は娘のに直し段々下の子に下ろす樣に致して居り、小切れなぞは出來るだけ算段してコマ〳〵買は決して致しません。夫から年末の買物とか餅代とかは、平生たつぷりに積つてある各費目の中から少しづゝ殘して置きますと、此位は支拂へるので御座います。唯だ盆暮の遣ひ物の際は交際費に少々足しまへ致します。

▲豫算實行の工夫

折角豫算を立てゝも少し油斷をすれば直ぐに崩れて

了ひますし、餘り窮屈にしても良人の感情を害しますから一寸遣繰が必要の場合も御座います。良人の道樂と申せば、煙草と茶、釣り位の處で小費參圓の內貳圓は煙草代に要り、殘り壹圓を刈込と釣り行の雜費に當てますが、偶には子供に菓子など買つて來るのが好きな方ですし、第一電車代貳圓が少し辛いので、品川までは大抵徒歩しますが、豫算より多く乘つた時はこれも自辨するのです。それですから休日に釣つて參つた魚は御菜代を拂ふつもりとして良人から買ふ事に致し又私や子供の副食費を手加減して、良人の好きな茶菓子料を補ふやうに工夫するのですが、良人は乳を呑ます身體は粗食してはならぬと親切に申すので、魚類の安直の時は共に食べ、高い時は良人の分だけ調へて、歸宅前に野菜と香の物で食べて了ひ、良人には魚を食べた積りにする場合も御座います。食物は高い物斗りが滋養になるとも限りませんから、安直で滋養ある品を注意して用ゐて居ります。毎月末月給を受取つた際には、小裂を縫して袋へ入れ分け各費目を記し置き、餘つた月は其儘入れ置いて翌月の不足を補ふので、一例を擧げれば、醤油一樽買つた月は食費が超過するが翌月も翌々月も剩餘があつて相償ふと云ふ工合です。日々の副食物代は相塲によつて一定致し難いから一日幾何とは定めませんが、大體の飲食費の見積りの中を融通致して居ります。子供に與ふる菓子代は僅かですから飲食費から出ますので、小費は玩具とか村祭の小費位。殘餘あれば貯蓄して春秋に家內中舟遊びでもする娯樂費に當てます。家具費の餘計掛つた月、例へば釣瓶でも新調した際は、一週三度の入湯を二度に減じ、宅で身體でも拭ひて間に合せるとか、紙屑や古新聞を賣つた貯蓄を用ゆるとか、種々に算段するので、先達ても此貯蓄で鐵鍋を一つ求めました。家具は私が參つてから可なり新調したので御座います。

▲規律の効能

右のやうな方法を設けましてから、家政を執るのに如何樣に樂になつたか知れません。規律がないと思ひがけぬ買物に驀いて躊躇したり。餘分な金があると費

ひ込んだりする弊がある様です。私共では留守勝ではあり、田舎住ひで來客もたんと有りませんから、今度家賃四圓の家へ轉居しましたので、前の家賃より三圓少くなりましたけれども、直に豫算額を改正しましたから、此三圓づゝは整然と貯金に廻はされると云ふ風で、如何しても定つた月給取り吾々の身分では斯様した方が宜いと考へます、而して規律を立てると不自由不足の念も起らず、分に安んじ愉快に暮らされるので御座います。

細君の主義は大略斯の通りで一から十まで行屆きますが、唯消極一點張りかと申すに决して左樣ではありません。此細君は子供の下駄の花緒をすげ代へるにも片々づゝ用ゐて一本は取つて置くと云ふ程に儉約をされる代りに、晴着は人に負けぬ小奇麗なのを着せて居ります。良人に匿して香の物の御茶漬をすゝる代りに時々鳥肉、鷄卵を食膳に上ぼせ、手輕の西洋菓子を製して共に樂しみ食べて居ります。滅多に實家へ氣保養にも往かぬけれども、良人の親戚知己の吉凶、盆正月の義理は規帳面で、且つ相當の贈物をして居ります。尙感ずべきは讀書と筆記に趣味深き事で家事多端の傍ら、夜間は大抵新聞雜誌の閲覽に餘念ないのであります。而して衞生、育兒、料理法の新



奇を見出す毎に、必らず筆記して置いて適用され、前に修めた産婆學を忘れるのを憂ひ、通信講義録に依つて復習しつゝある等は注意周到、實に良妻の資格を十二分に備へて居ると感ずるので御座います。

世帯の要訣

成功せる老婦人の實話

富は信用を増し、人格を高め、尊敬を博し、禮節を作り衣食を厚くし、快樂を廣ふするの原資にして何人も是に向つて要求の念を抱かざるものはない、而るに世人がこれを得んと欲するに就て十二分の研究を盡し十二分の用意を盡しながら、遂にこれを得ずして終るのは歎すべきの至りにあらずや、思ふに世間の人は富を得るに就て百の智識はありながら唯一ツの實行をせぬからであらう。然らはその實行はむづかしきやといふに決してむづかしからず、何人にも出來、又何人にも備はりたる資格である。昔し西洋に一富翁あり、或人より貨殖の方法を問はれし時即座に答へて曰ふ。金を溜むる事、少しも難事にあらず、まづこの通りなりとて、傍らの新聞紙を六つ折にして之れを截り。それに金千圓と記して三十六枚作り、さて鄭重に揃へ。恭々しく其人の前にさし出して曰ふ。見らるゝ通り御身は今三萬六千圓の資產家となられたり、これを鄭重にして金庫の中に貯へ置き玉ふべし、倘し猶これにて不足とあらば、此の通り幾枚も作りて十萬圓、二十萬圓と心の儘に書き印して貯へ玉ふべし、さすれば御身は其れ丈の資產家となり玉ひしなりと言ひたり。聞く人未だ其意を了解せず、紙屑を截ちて財產とは抑も何の意ぞ、斯る物幾百萬圓ありとても使ふ事も出來ねば、更に難有からずと言へば富翁は此處ぞと、面を改めて言ふ樣、抑も御身が金錢を以て遣ふものと做せしは誤りなり、凡そ金錢を溜むるほどの者に使ふといふ觀念は微塵もなきものなり、我れ幾萬の資產あるも更らに遣ふ必要なければこの紙屑も同樣なり、御身若し金を得

んと欲せば金錢を此の紙屑と一つに見て更らにこれに對して一分の情をも動かすべからずとありければ其人大に悟る處ろありしといふ。此の如く富を作るは金を金として過せざるにあり、金を木石と見做すにあり、金に情實を加へざるにあり

辛酸を嘗めて世帯を經營せし老婦人の曰く。

貯蓄は人々の克己心、忍耐力、いづれも百折不撓の精神でなければ容易に實行が出來ないものでありま



す、よしや自分一人は實行する氣でも毀譽褒貶の囂ましい世間の中に居て之れをするのは餘程の堅忍でなければならず、或は見る物、聞くもの食ふもの衣るもの悉く己れの慾望を誘ふ料となッて居る今の世の風習の中に居ては、豫てよい事とは知りながらもみす〳〵その習慣の奴隷となッて仕舞ふのが多いの

でありますから、これには堅い方法を立て、暫らくはこの方法の犠牲になる心得でなければ貯蓄は出來ませぬ、そして貯蓄は一個人でするよりも家庭でする方が効力が多いものです一體家庭といふものは人間生活の根本ですから大小に拘らず、日々の經費といふものが中々少くありません、ゆゑにその經費の中から工風して金を剩すといふ事は家の爲めにも國の爲めにも大なる利益ですから、家の主婦たる人は是に十分の注意を加へなければなりません。

又人に依ては貯蓄を大層輕蔑して人間は現在が肝腎だ永久は即ち現在の連續であるから現在を犧牲に供して永久を圖るのは愚であるといふ樣な方もありますが、斯樣な御方に貯蓄の御話をして賛成を得るまでには中々容易でないが中には隨分解ッた御方で心掛は十分に有りながらも、事情の爲めや、習慣上でこれを實行して行く事の出來ない方が多いやうです。譬へば月々五六十圓の收入のある家は今の中流社會の家計ですが、その內で月々幾何かの貯蓄をされる方は、十人に一人ともない。その方々に向ッて何故貯蓄をなされぬかと聞けば、いづれも活計が一杯でとても貯蓄の餘裕でないといふことです。一體貯蓄といふものは活計の餘裕をするものではなくて活計を切詰てするのが本當の貯蓄です、そして又如何なる活計にも餘裕といふものは決してあるわけのものではないそのない餘裕から絞り出してするのが眞の貯蓄です。それに就て或る奥樣の處ろへ親類の方が參られて、いろ〳〵活計向の事に就て御尋ねになッて失禮ながら貴婦の御家ではもう餘程御金が出來たでせうそろ〳〵地所でも御求めになッたらばと言はれると奥樣の答に、どう致して私共の活計で、貯蓄などの出來るものですか。いつも月々一杯で暮して居ますどうかすると引足らない月もありますとの事でしたから親戚の方は大きに驚ろいて、でも貴婦の家では月々二百圓も這入るではありませんか、それで御金が出來んとはどうしたのでせう。私共では貴婦方の半分の收入もない位ですが、それで家族

も相應に多い方ながら、どうにか遣つて行きますあなたがた一體どうしてそう掛るのでせうと尋ねるとその答に御覧の通りそんなに贅澤は致しませんが、毎月の物入はきまつてそれ丈けかゝるのですから、どうも仕様がありません、まづ有の儘を計算して御目にかけませう第一旦那の小費、車屋に拂ふ金、下女書生も居ます、小兒も二人、老人にも相應の待遇をいたさなければなりません。彼是してその方に三四十圓は屹度かゝります。それから日々の雜用、どうしても七十圓は缺



けません又四季折り〳〵の衣裳これとても唯世間。並にする丈けで少しも餘計な奢りに費ふのではありません、偶には氣保養もしなければならず交際上、體面上これも世間並み、ですから詮方なし醫者を迎へる事もあり器物の新調もすれば寄附にも出し、義務貯金にも出し家賃に月々三十圓さア御覧なさい殘る處ろはないぢやありませんかと一々聞いて見れば一々御尤で今日の生活の程度では無理もない譯で、これが今の世の世間並かと思へば一言もなく〳〵、成程と感心して引取りました。

併しこんな事では決して家の富む譯には參りません百圓取つても二百圓取つても殘る處ろは無い筈ですけれどもそれは丸で考への無い經濟の仕方で。今日立派な活計をして居るとは言ふものゝ其日暮しの貧人と少しも違いはないのです。流行衣裳を着て手車に乘つて揚々と交際社會に出入される歴々も車夫や土方と同じ事では仕樣のない話ではありませんか。

私の考へますのに一體今日如何なる家庭にも世間並といふ言葉がつきますがこれが甚だよろしくないです世間並といふ事はつまり獨立心のない、見識のない事を現はしたもので善い事であらうが惡い事であらうがすべて世間の趣に從ふといふわけで少しも自分に見識を立てない俗人の事です。これも體裁上、あれも附合上これも、衛生上、あれも體面上と區々たる世間說に雷同するやうな事では貯金はおろか一家一分の經營をして行くは出來ません。手短かく申せば、旦那の交際費は幾何かゝります、奥樣の髪結錢がいくら掛ります。又臺所で砂糖や、鰹魚節は月月どの位要ります、又下婢はどういふ風に御使ひになりますか。又客はどういふ風にして賄ひます。八百屋や魚屋の買方はどんな按排か、それから體裁とか體面とか仰やる車夫の抱へ料、夏冬の衣裳、下駄や傘や、奥の間で用ゆる茶や菓子はどの位な品で月月これが何程かゝりますか、寢卷の汚れた時にはどうして仕替になるか、或は敷物や毛布の類は新調の節に何程かゝるか、それから又他家から到來物のあッた節に何樣いふ風に處分をされるか、又他家へ遣ひ物をされる時には何樣あんばいに買求めるか。家族何人の頭の上から足の爪先までを一々調べてその人々の身の上に月々どの位な金がかゝるかといふ事を十分考へて見ると成程入費は大したものです。けれどもその色々な入費を一々吟味して見て其の內から絞れるものを絞ッて見れば二百圓の入費の中で三十圓や五十圓を絞り出すのは何の譯もない事ですがあれも據なしこれも據なしと一々理窟をつければ際限もなく金は消へます。ですから貯蓄をしやう

といふには決して生活費の餘裕を當にしてはいけません餘裕のない處を切詰てその中から絞り出したのでなければ眞の貯蓄ではありません畢竟人間が情實に動いては金の殘る筈はないのであります云々。

眞に然り誠に其の通りなり、老婦人の言、鑿々として時弊に中る世間に雷同し、浮華なる浮世の人心に媚を呈し糸瓜のごとき義理に同情し、煙のごとき體面に同情し、流行物の犠牲となり、交際上の喰物となり、屋賃に御勤めし、臺所に御勤めし、呉服屋の上顧客になり、小間物屋のお客になッて居た日には月々何千圓の收入ありても、一生獨立の生活をして行く事は出來ざるなり、これ何故ぞ畢竟家政を取る人の心の薄弱なるが故なり、斷然と思ひ切り。猛く忍び、金を見ること紙屑のごとく、彼の頑翁一流の妙工風を學ぶにあらざれば、內政の整はざる事百年河清を待つがごときものならんか、

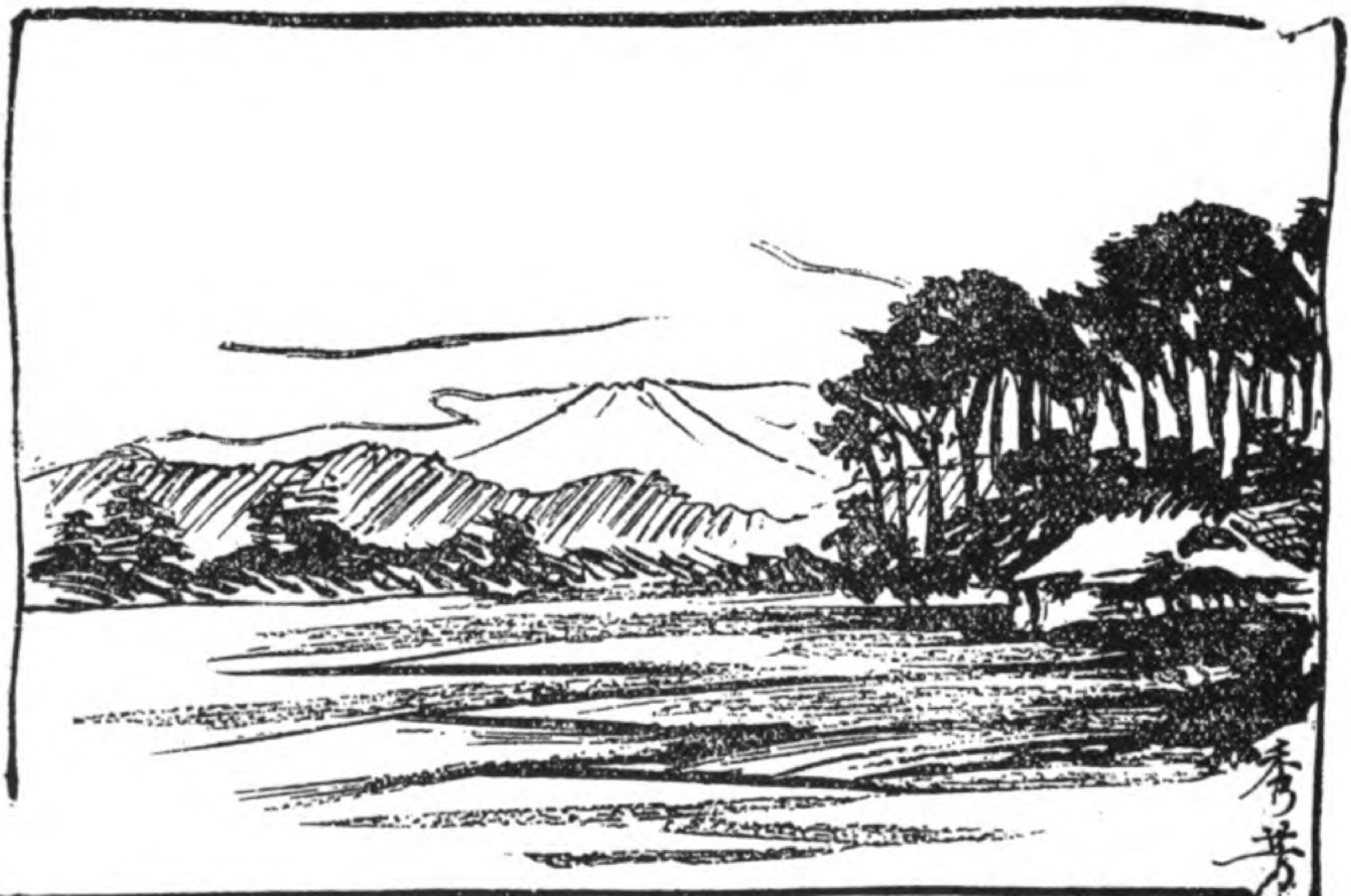


昔し一富翁あり、儉嗇自から持し心の堅と鐵石の如し、妻女屢々迫て翁に家を新築せんとを求めて止ず翁即一計を案じ、一日妻女を坐邊に招きて言樣、今日汝等の奬に隨つて新宅を經營せんと欲す、一切の費用約三萬兩、まづその設計を見よとて疊の上に一枚の紙を置き其上に圖を描き、建坪一千坪、本宅は二階造り、離坐敷、茶坐敷この材木は何々とて一々明細に記し、其上に小判を積重ねて、それこれが、表坐敷の普請料、

これが奥坐敷の材木代これが土藏の人足賃と三萬兩の金を目の前に積んで置き、此の通り汝等は結構な家作を持つたのであると言ふかと思へば、それ火事だ〳〵と早く消さないと燒けて仕舞ふ、身代は滅茶〳〵になるぞといつて繪圖面を卷いて仕舞つたといふ事がある何とこれは妙工風ではあるまいか、人間苟しくも獨立生活を爲さんと欲せば須らくこの鐵石心腸なかるべからず、又これと同じ樣なる工風を食物の上に施して隣人を驚かしたる富翁あり、晩餐の卓上には琥珀の盃、七寶の碗皿など善盡し、美盡して飾り立て、その中に肱ゆきはかりの銀貨金貨を堆高く盛り、これは鯉の洗ひなり、これは鯛の羹なり、これは鰻の蒲燒なりと、不斷の山吹色をうち眺めては樂しみて食したりとなん情に動くが人間の常にて其の常情を忍ぶ能はざるが爲めに人は一生己れの奴隷となりて畢るのみ。金を木石同樣に見做してこそ金も其所に根ざすなれ金を見て情を動かす間は人は到底金に緣なき人とこそいふべけれ世帶に經驗ある一老婦人は貯蓄の精神を語つて曰ふ。

まづ一週間に二度結ふ髮を月に三度とすれば一回が五錢づゝとしても四十五錢が十五錢で濟みませう、官營の卷煙草日に二袋つゝ飮むのを刻み煙草にすれば月に百匁で濟みませう、四圓入る處は六十錢で濟みます。奥樣が髮で三十錢旦那が煙草で三圓四十錢、毎月消へて行く品物の中からこれ丈の金が偶然に湧いて來るわけです。何の僅かな髮結錢、僅かな煙草錢、月につもつて五圓にも足りないそんな吝な經濟が何にならふかと輕蔑さるゝ方もあらうが是の經濟は獨り髮結錢と煙草代とに止つては居ません。一つの心掛は萬事に行渡つて。ア、本統に考へ見れば日々消へて行く煙草錢にしても、これ丈の金の絞れて見れは、贅澤な酒を呑むのも馬鹿な話しと氣がつき一本飮む處ろは一合にし、無暗に體裁ばつて往復ともに呼び上げて乘つた車も以後は辻車にして、片道だけは歩くとすれば、此の方面で月々十圓の失費が三圓で濟むやうになる、それからそれと經濟の糸は家の隅から隅まで筋を引いて小供にメリンスの着物

を拵へて遣るのも無益の費へと考へ、夏冬二度の新調裝服も年に一度とし、時によつては去年の物で間に合せるといふ工風がつけば最早大丈夫、家の經濟も五圓や三圓の端金でなく、ずつと進んで月に何十圓といふ差いが生じて來るのでせう。これを銀行に積み十年に積つて見れば何千圓といふ一大資本になつて屋敷も買へれば家も建られる。こういふ譯で經濟の始めは極々僅かな湯錢、煙草代から段々と積つて參るので、始め少しの習慣を破り、少々の不自由を忍んだばかりで百圓の生活は五六十圓で立派に立てゝ行か



れるものですから、世帶をお持になる方にはどうか皆樣の毎日の活計の中から絞り出して。少しづゝでも貯蓄をするやうに御心掛になるのが第一です。これ必らずしも收入の多少には限らないのです、世間で往々聞く事ですが、私の家では今三十圓しか收入がないから、とても貯蓄は出來ない五十圓も取れたら十圓位な貯金はして見やうなどゝ思つて居る方が多い。けれども三十圓で貯金が出來ない人は五十圓でもそれが出來やう筈はありません、百圓取るやうになつても同樣です、矢張三十圓ならば三十圓、現在取る處を儉しくして貯へて行くのでなくて

はいけません、何となれば經濟は分量でなくて働ですもの又是まで收入一杯に費いつけた方が今日から急に貯蓄をしやうといふ時には何か物足らぬやうな氣がしてならぬものですがそれはほんの一時皮切丈け一ヶ月辛抱すればあとは習慣で樂に參ります、そしてこれまでの冗費が却つて馬鹿らしく見えそうするともう經濟の眼が確かになつてどんな事にでも無益に金を遣ふといふ患がなくなつて是まで浮の空で何に入つたか譯のわからない所に消へ失せた金の後ろ姿が歴々と分つて來るやうになるものですから、欺されたと思つてまあ一と月丈やつて御覽なさい。

火の要愼

△ランプは尤注意して取扱ひ其置場より外には決して置かざる樣すべし。

△火は能々注意すべし、世の中に火災の起るは多くは勝手元の不注意に出づるもの多し、夜分は寢所に入るに先ちて家内の隅々を見廻りて後、床に入るべし。

△炬燵に火を入るゝには能く氣を付けて、上げ板の隙間などより火屑を落さぬ樣心懸くべし。

△ランプの掃除は毎日怠らずなすべし、若し掃除せざるときは火の照り方宜しからざるのみならず塵埃つもりて、壺の中へ火を導く危險あるものなり。

△飯の餘りしときは梅干を入れ置くべし、暑中と雖も、割合に保つものなり。

△鹽は成るべくつるし置くを可よしとす必らず濡れたる手を入るべからず。味噌及び醤油を出したるときは口を閉し置くべし之を怠るときは必ず黴を生じて其味を惡しくすべし。

△手桶の類は二三日目には必ず洗ひて日に乾すべし、常に水を浸し置くときは朽ち易きものなり又雑巾を用ひた後は必ず洗ひ置くべし拭布も又同じ。雨傘は用ひたる後よく日に乾し置くべし。

倫敦で見た事ども

最近英國より歸朝せられし一婦人は語つて曰く最初驚きましたのは倫敦の下女が自分の務めてゐる家の坊ちやんや孃さんを呼び捨に致します事でジョーヂとかメレーとか言ひますこれは一は兒童の虛榮心を防ぐといふ事と今一は年長者を尊敬する風を養成する譯でせう、と申した所ろで今の日本の下女では年長者の所爲が出來ませんから駄目ですけれども倫敦の下女は相當の教育もありまして、主婦が世話を燒かずとも萬事萬般任せられた事だけは引受けて致します、尤も給料なども日本とは違ッて一ヶ月二十圓以上も取りまして晩の十時までは刻限、よしやお客があッて忙がしからうが、時刻が來ればさつさと寢て仕舞ひます、其の上働いたら相當の增金を取るのです、といふ樣な次第ですから全く小兒に虛榮心を持たせない風習であります。

又英國では一室內に寢臺も洗面器も玩具もありまして兒童には自分の用事を始末する習慣をつける利益もあります、併し日本で急に之を習はふとした所ろで迚も十分な事は出來ますまいが、最初一部分を取つて寢臺に寢かせ、食事は卓子に倚らせて身體を丈夫にしたいと思ひますそれから英國の母親は中々嚴しくて決して兒童だからとて容赦はしません、紳士と淑女といふ事は幼い時から吹き込んで置きますから妾の居ました家の男の子なんか不思議なほど溫和でした尤も頑是ない子供をあまり嚴しく育てるのも如何とは思ひますが、そうかと言つて一般の日本の母親のやうに甘やかしでなければ唯無茶苦茶といふ風でも困りませうと思ひます、

古の名所

須磨の浦（海邊眺望）

攝津名所圖繪に云、須磨の里は兵庫の津より西一里半にあり、上古は山陽道の驛路なりし事延喜式に出でたるが今は農家のみにして海濱なれば、漁家もなしとあり源氏物語須磨の巻に云、彼の須磨はむかしこそ人の住家なども



ありけれ今はいと里はなれ心すごくて海士の家だにまれになど聞き給へど人しげくひたくけたらん住居はいと本意なかるべし、さりとて都を遠ざからんも故郷おぼつかなかるべき人悪くぞおぼしみたり萬の事、きしかた、行末思ひつくせ給ふにかなしきこといとさまざまなり

とありて如何にも當中物寂びたる權想はれたり。

わくらはに訪ふ人あらば須磨の浦に　もしほたれつゝわぶとこたへよ　在原行平朝臣

ちからなう入かゝる日や須磨の秋　咏蕉

ほろ〱と鳴そふ須磨の蚊遣哉　[illegible]木



名所圖繪に云

此地の名產磯馴味噌は麥にて製したる味噌なり延宝此 里の名物とす又潮を汲んで粥を煮るを潮雑水とて此里の農家には今も食しけるなり、風月庵のぬし須磨に閑居のおり狂歌を詠る

侘ぬれば身にしむばかり味かりき　須磨の麥味噌潮雑水

須磨のあまの塩やく煙風をいたみ　思はぬ方に棚引にけり　讀人知らず

すまのあまの浦こぐ舟のかぢをたち　よるべなき身ぞ悲しかりける　小野小町

すまの浦のなぎたる朝はめもはるに　霞にまがふあまの釣舟　藤原孝

須磨の浦には流石に名所とて古詠多し

白波はたてと衣にかさならす　明石も須磨もおのが浦々　人丸

家政の栞

◎拭巾の淸潔法

拭巾を淸潔にするにはバケツに一杯程の水に苛性曹達五厘ばかりを加へた水で煮立てゝ暫らくすると火より下ろし、其湯の中でゆすぎ洗ひをなし更に水にてよく晒らして乾かすなり、勿論乾かすのは毎日の事なれども曹達にて煮るのは一週間に一度位にてよし凡て食器は淸潔にせざるべからざる事いふまでもなけれど其食器を拭ふ拭巾の汚れたるほど不潔にして衞生上有害なるはなし、西洋の拭巾は皆純白なり、日本の拭巾は臺所に注意する家のものにてもやゝもすれば鼠色に染りたるが多し、習慣とは言ひながらこんなものにてよくも食器が拭はれしものと思はる、一週に一度是非曹達湯にてゆすがれたし。

◎靴の保存法

靴に限らず總て皮類は濕氣に遭ふて黴やすく、隨つて持ち難きものなれば取扱に注意すべし、靴は塵を拂ひて少くも一日位には必らず薄溶にしたる靴墨を付けて磨き一週間に二度位は更に其上に筆もて肝油を少しづゝ塗るをよしとす、靴に墨を濃くして用ふる時は如何なるよき皮も次第に硬くなりて破れ易くなるものなり、尙普通の靴墨の外に種々の類もあれど薄くして度々塗るをよしとす、靴の序に靴足袋の洗ひ方を申さばアンモニヤを七八滴落としたる微温湯にて洗ひゆすぎて餘り絞らずに乾かすをよしとす、靴下もあまり汚れざる中に度々洗ふをよしとす。

◎庖丁の保存法

一度の不注意から終生拭ふべからざる汚點を止むるは人の品行にある事なるが、刄物を腐蝕せしむるは恰も玉に瑕を儲くるが如し、物を切りて使ひ放しになし忘れて戸棚の隅などに置かば銹、刄物に蝕ひ入りて研ぎても容易に其痕は磨かずば命は短かきものなり、されば庖丁を取扱ふには必らず使ひ仕舞に氣をつけ、若し鹽氣のものを切りたる時などは大根か馬鈴薯の切り

はしにて磨き砂をつけてよく〱洗ひ、水にて十分にゆすぎ初めに濡れ布巾にて拭き、次に乾きたる布巾にて拭き粉炭火にて兩面をかざして乾かし置けば殆んど生命知らずといふほどに持つものなり、斯くせばや、面倒と思ふ人もあるべけれど、始めより斯くせねばならぬ物と思へば少しも面倒にはあらず、殊に入梅時には尤も錆易きものなれば、火にかけて充分煎りたる米糠の中にさし置くをよしとす。

◎桶類保存法

炊間使ひし手桶は夕方洗ひて乾かし置くを宜とす又天氣の日には洗ひて日光に乾かすをよしとす、必らず夜を越して水を貯め置くべからず、第一桶腐りて惡臭を放ち、衛生上に害あると、第二桶重くなりて使ふに不便なる事、さてこれを洗ふにはかるかやだわしに磨き砂をつけてよく洗ひ外面よりは内側に日を向けて乾かすべし、又飯桶ならば右砂にて洗ひあげたる上拭巾にてふき内側を日に向けて日光に乾かすべし、大概飯櫃は二個備へて毎日交代に使ひ夕飯の後必らず洗ひて火鉢杯にて乾かすをよしとす、飯を入れたるまゝ翌は に持越すは不可なり又湯沸し、醤油つぎの如き每日使ふ器物は時々洗ひて垢を落し置く事必要なり、時々使ふ湯わかしは湯をこぼした時に必らず空の儘蓋を取りて弱火にかけて蒸氣の盛んに起ちかけし時おろし、殘らず水氣の蒸發して乾いた時に蓋も同樣に乾かして仕舞ひ置くべし、お客のある時丈け一寸使ふといふ樣なる湯沸しを湯をあけしまゝ仕舞ひ置く時は中に惡臭を生ずるものなり、又酒、醤油の壜、などは時々洗ひ内部の底を拭きて後使ふべし。

◎香煎の製法

香煎はお茶の代りになるものにて白湯に投じて飲むに香ばしき粉なり、俗に馬尿と賤しみ、澁くして口を緊るがごとき番茶をすゝむるより何程か上品にして且つ經濟なるものなりその製法は、

炒りたる米一合、炒りたる茴香八匁、肉桂一匁、胡椒一匁、橘皮七匁、鳩麥八匁、山椒五匁を合せて磨りて製するなり、橘皮、山椒は白皮を去り谷細末にして入るゝなり。

古の名所　箕面生

（紅葉）

攝津名所圖繪に云、

箕面山瀧安寺吉祥院は攝津豐島郡箕面山にあり、天台宗修驗道聖護院に屬すと流石にこゝは紅葉の名所なれば歌人の玉詠少からず夫木集に、

雨しのぐみのおの里の柴垣に
　巣立はじむる鶯の聲　西行法師

箕面山影つくる峯の庵は
　松のひときも手枕のもと　鴨長明

又千載集に仁和寺法親王が箕面寺にこもりて
出はべる曉のおもしろく侍ければとて

木の間より有明の月のおくらずば
　ひとりや山の峯を出まし

などあり名所圖繪に本社大辨財天女は役行者の作にして長一尺五寸許り、日本四所辨財天の第一なり、近州竹生島、相州江の島、安藝嚴島と合せていふとあり、又、

箕面瀧は本社より十八町奥にあり、巖頭より飛瀉して石面を走り落ること凡そ十六丈絹簾より泡を吹飛すこと珠を散らすがごとく、霧を吹くこと雲のごとし、日光これを照して瓔珞目を奪ふ天下賞して瀧の第二とす瀧の上に碧潭ありこれを瀧穴といふ、村民旱天に涸ふ時こゝに詣れば忽ち膏雨下るなりとぞ云々。

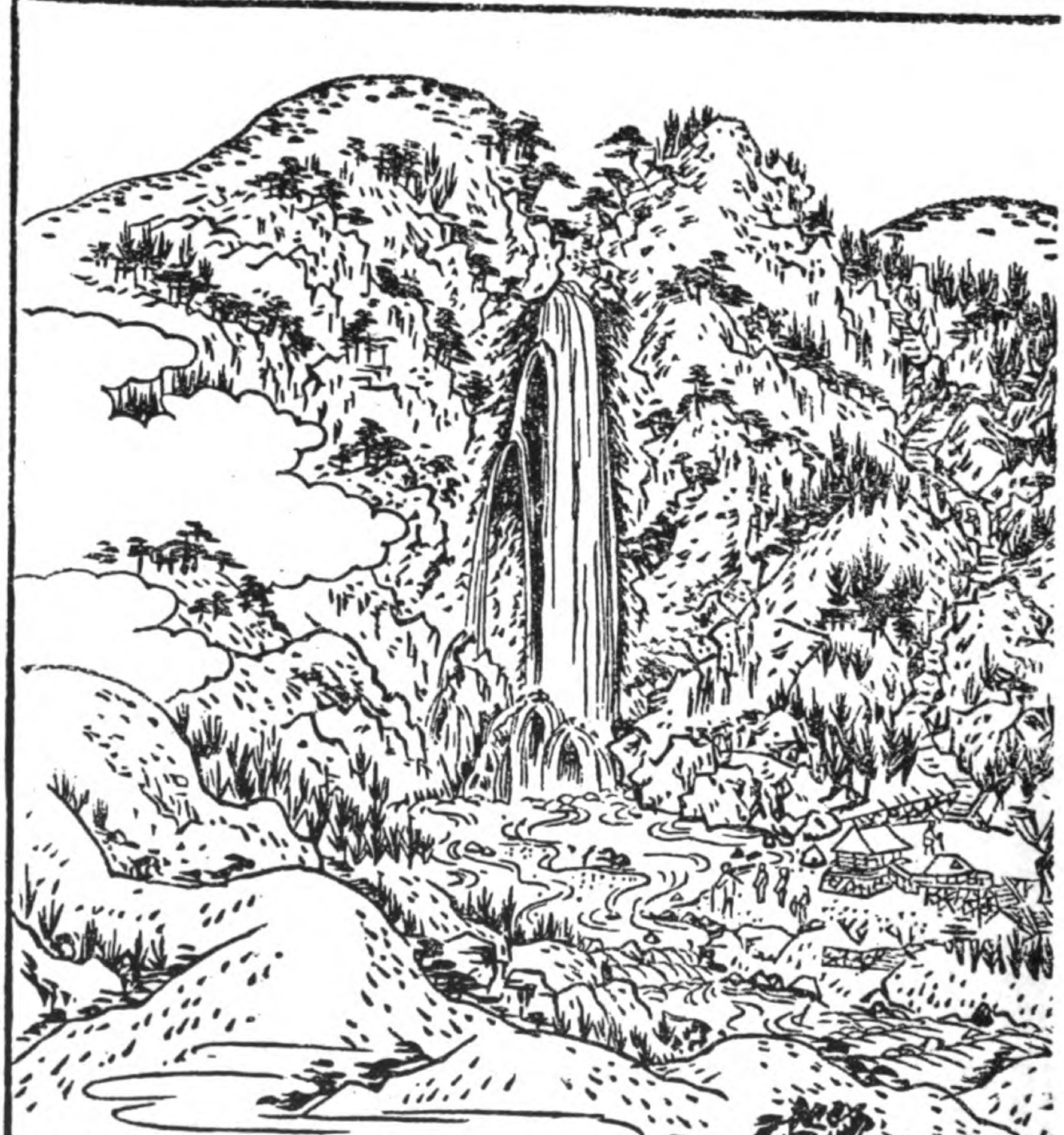


夫木集に、

忘れては雨かとぞ思ふ瀧の音に
　みのおの山の名をやからまし
　　津守國助

それ此一山は丹楓多くして秋の末は三千の樹々錦繡の如く瀧の流は紅を灑ぐ趣

夫は錦着て家に歸り山脩の心を染めぬ、紅の色うるはしく風のかけたる柵は蜀錦を布がごとし、立田川の秋の色、高雄の山の夕日かげ通天橋もこゝに疊みて京師・浪花の騒人霜葉を踏で競ひ來る、長月より時雨する頃の賑ひ雄降もこゝにありとぞ思はれける、抑も此山は役の優婆塞の開基にして、白雉年中の創建なり、東西の山峯峩



峩として兩部の曼荼羅を表し、南北の翠巒峨々として不二の尊躰を顯はす、瀑水の長流傾の田園を潤す云々とあり。

廣足

峰つゞき深くも
匂ふ紅葉かな
花はたえまも
ありけるもの
な

家政の栞

▲香水の製法

一瓶二十圓もする舶來の上等品を浴るほど撒きちらして交際社會に花を咲かす贅澤者流には勿論無用の沙汰なれどさてなくてはならぬ婦人の嗜み、少しづゝ購ふても積もれば中々に廉からぬは香水なり、よつて一寸其の製法の大略を述べん。

上等ラベンドル油四匁、丁子油十五匁、麝香丁幾十五匁、菖蒲根チンキ五匁、橙花水三十五匁、アルコール(五十度)三百七十五匁

右六品を混和して紙漉にして壜に入れるなり又香油の製法は亞麻仁油一升を鍋に入れこれに丁幾八匁、大茴香十二匁、白芷五十七匁、辛夷四匁、片腦二匁半、良姜五匁を投入し四時間ほど沸煮し漉て器にうつし、凡そ一週間を經て吉野紙にて再び漉し更に麝香、龍腦を混和するなり。

▲實母散の種あかし

產前產後の要劑血の道一切の妙藥として俗間に用ひらるゝ實母散といふもの今日の醫學上より見て果して實効あるやは甚だ疑はしといへども人間の身體には習慣の力といふものありて存外に侮りがたく又賣藥も信仰に依つては効能ありといふ說も度外に置き難きは恰も支那人に人參の効驗の著るしきがごとし、依て物の序に聊かその婦人血の道に効能ありといふ實母散の調劑法を說かんとす。

▲製法

丁子、木香	各三十匁	肉桂	二十五匁
檳榔子	二十三匁	甘草	六匁
白朮	二十三匁	川芎	六十匁
黄連	十七匁	河骨	二十六匁
黄芩	二十匁	當歸	六十匁

右十一味を和劑して三百六十匁を百包とする割合なり。右いづれも漢方醫の用ひたる草根木皮にして賣藥店にあり。

▲含み藥の調劑法

蟲歯の爲めに口中の臭き人、又は齒牙の腐蝕して敗壞したる人々の爲めによき含み藥の調合を記すべし。

製法

新製の鹽酸加爾基一匁を徐かに乳鉢にて擂りつゝ蒸溜水一升五合に溶解せしめ、是れにアルコール三十度の物を八オンス加へ靜かに置きて後ち栓のある壜に貯へ置くべし。

若し是れに芳香油を加へんと欲せば少量を加ふるもよし、されど加へざる方をよしとす、是れ其藥自然にアチーテル樣の質を醸し芳香にして新鮮なる林檎のごとき氣味を生ずるに至ればなり。

若しアチーテル樣の氣を生ぜしめんとならば鹽酸カルキを解る時唯少しの水を和して前量のアルコールを調じ時に振り動かして數週の間密閉せし壜に貯へ置き剩したる水を合して漉し貯ふなり。

右用法は

刷毛を用ひて豫め齒牙を磨き此水を含みて齒牙の空隙をよく嗽ぎ漱ふこと日々數回なるをよしとす、此水は第一齒牙を皓白くし與牙又は擬齒より發する惡臭を即時に除くものなり又その含劑は齒牙の空隙に滲入して其の敗壞を驅除するが故に又防腐劑ともなるものなり。

▲牛皮糖の製法

糯白米二百匁、砂糖三百匁、晒水飴百匁の割合にてまづ米粉に水一升ほど加へ鍋に入れ炭火にかけて徐かにかき廻しながら煮詰むるなり、別に水一升五合ほどを備へ、煮詰むる度每に五勺位づゝ加へ、半日ほど練り、砂糖を入れ復た練りて堅くなりたる時、更に水飴を入れ練り上げるなり、さてその練上げたる牛皮を葛粉をふりて板に取り延ばして堅むるなり。

▲金玉糖の製法

砂糖五斤、寒天三本とす、まづ鍋に水一升程入て寒天を煮くづし、砂糖を灰ぬきにして加へ文火にて徐々に煮つめ、水嚢にかけて箱に漉し込むなり。

古の名所　鸚鵡石、（朝熊山の附近）

伊勢參宮名所圖繪に云、

鸚鵡石は志州答志郡にあり一名和合山といふ街道より三町、高さ十七間横七十間、物の音に答ふること石の物をいふがごとし。其聲を聞く處ありこれを聞石と云聲を發する所是をかけ石といふとあり。

うぐひすや内外にわかるあふむ石　　合歡堂

此石の淋しさ問はん秋の聲　　今井

附近に朝熊嶽の名所あり

名所圖繪に、朝熊嶽は内宮より五十町、宇田峠より廿町茶屋多し二十餘町下れば朝熊村なり此所は一山の最も高頂にして伊勢志摩の境なり。

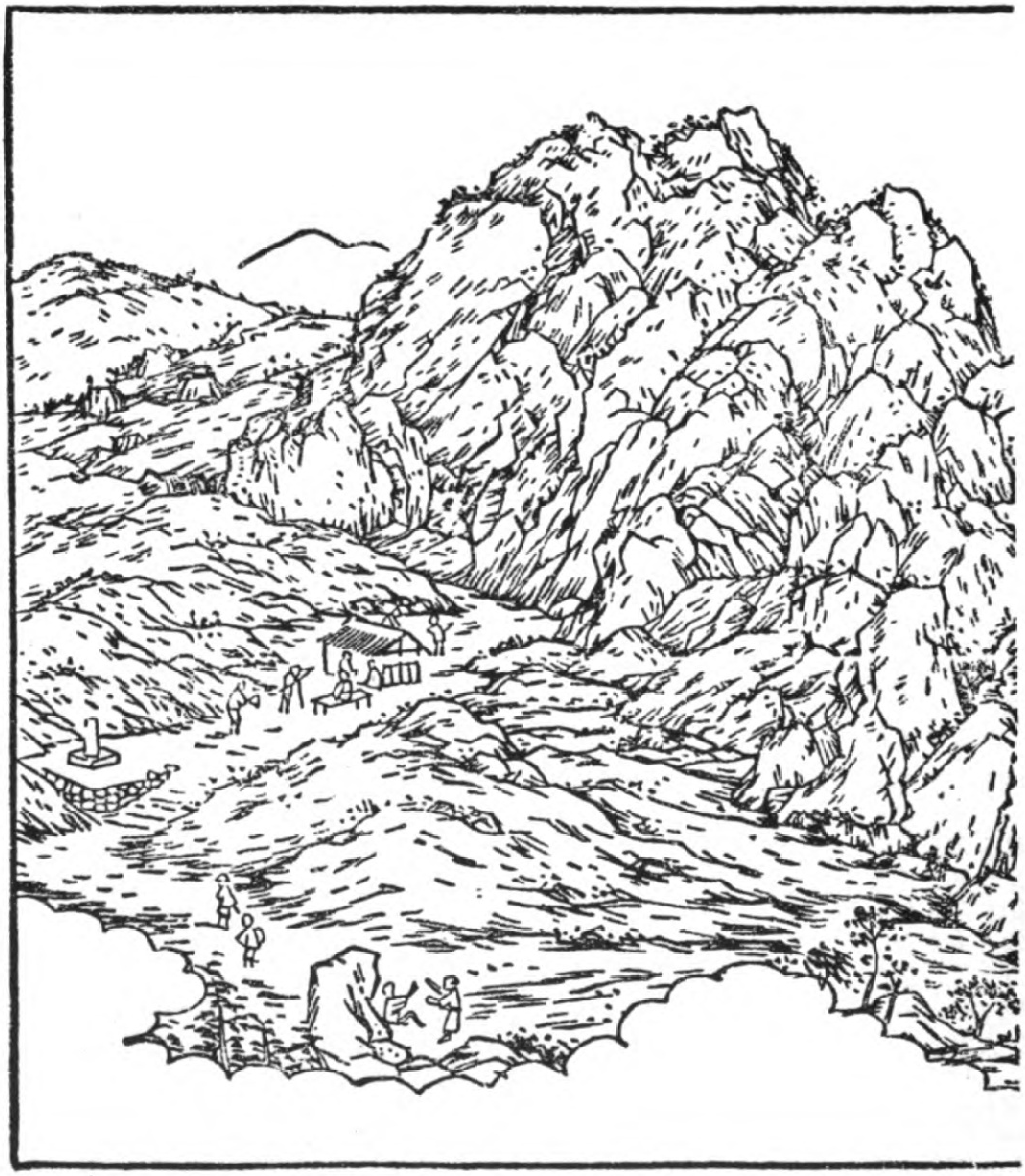


金剛證寺は伊勢の地なり朝熊山の號は麓の朝熊村より及びたる名なり、此一山西南は神路山につゞき、東北は大海にのぞみ、東にあたりて富士の高根・艮にあたり、甲斐の白根、信濃の御嶽に又美濃尾張の遠峰の上より加賀の白山など見えて類なき佳境なり云々。

附近名勝に呑海庵あり名所圖繪にいふ、

天長建立ありて禪宗なり地藏堂前富士見臺あり、勝景の一奇觀なり松杉欝蒼と生茂り望下に松下江村の釣舟、飛島、游島などの漁舟海女のしわざとり〳〵に見え渡り尾張三河兩島なども手に取ばかりにして渡海わづかに七里、伊勢の海は北へさし入て庭中の泉石のごとし、關東又南海への廻船これより順

風に帆あげて
洲島をはなれ
蒼海そことも
なくおのがる
まく／＼なり、
又或時は名も
しらぬ山しい
とあざやかに
見えはべる嶽
色心も言も
及ばれず
跡たれてい
く代經ぬら
ん朝熊や
み山をて
らす秋の
月かげ
荒木田
延季



貫之
見る人もなく
て散りぬる
奥山の
紅葉は夜の
錦なりけり

賴武
時雨ゆく磯山
かげの下紅葉
いくしほま
でと
るしてそむ
らん

寫眞の撮し方

望月女

△寫し方の上手と下手は無論寫眞屋の技倆にあるですが映りの良いと惡いのとは御當人の熟不熟れにもよるのです、まづ一年に一度しか御撮しにならぬ方だと兎角改まつて眼が据ッたり、口が結ばり過ぎたり、一と口にいふとあまり澄し込むといふ様な風で、撮影の結果がよくありません。寫眞はいつも平氣な心持で撮ッて頂くのがよろしいです。

△時間‖寫眞を撮るのに適當な時間と申して別に定ッては居ませんが、まづ午前八時頃から午後一時頃までの間が一番よいのです、午後からかけて日暮となり、殊に夕日の光線になると、光が强過ぎてどうもいけません。又世間では雨降や曇ッた日には寫眞はいかぬと思つて居る方もあるやうですが、これは差支ないばかりでなく寧ろ赫々とした天氣よりは却ッて撮る方には都合がよいのです、勿論大雨や暗黒な空合では仕方がありません。

△半身と全身‖半身がよいか全身がよいかといふにこれは版にもよる事で、手札形などは何様しても半身でなくてはなりません、何故といふに全身だと顔の輪廓が少くなる、隨つて細い美しい處が解らぬ、爲めに二重目縁の瞼などでも其儘には寫れぬことが多いです最も半身は全身に比して手數が非常に懸る爲め外國などでは撮影料が高いといふ事です。

△衣服‖御召物は黑か茶に限ります、まづ御小供衆なれば黑天鵞絨、御婦人ならば黑縮緬の三枚襲などが一番でせう。中には華美なものが可からうと色々なものを召して入らッしやる方もあるが、寫眞は肉眼で見るのと大變に異ッて、下手にヒカつくものは唯パッと白く寫つる計りで至ッて不向です、要するに質素な色か光らないのかゞ第一です。

△姿勢‖姿勢は寫眞を撮る上に於て大關係のあるものですから、寫眞屋の方では餘程その工合に注意をして居ます、例へば丸顔の方は少し俯向き加減にすると

瓜實顏に見えて愛嬌がつき又長い顏は多少仰向にするとその長味のある所が目立たぬやうになり、幅の廣い顏は横向の方が細く見え、之と反對に又細面の顏は正面から寫した方が良く見えるものです。まづこれは撮影の大體の法則ですが、御客樣によつて特別の注文がありますから一樣には行きません。

齒の攝生

齒は云ふまでもなく人の命には大切な道具であり又た相貌の上から云つても反齒や齲齒其他不潔な齒は餘り見て好いものではない、又た病氣の中でも齒の痛みほど不快なものはないが、何れも其の多くは不攝生から起るのであるから幼時から注意せねばならぬ。

△反齒　は頤と齒の大小の不平均と子供の時分の不注意と此の二つから起る次第で、總て小兒の二番目の齒即ち永久齒の生える時は殊に注意して乳齒を拔く必要がある。

△齲齒　は酸味と砂糖類を食ふ爲めが一つ、其次に不潔から起るが齲齒の下齒に少なくて上齒に多い譯は、下齒は常に唾液で以て洗はれてる爲である。

△亂杭齒　は赤兒の時分乳齒の生る時機に齒莖に凹凸が出來其の間に酸味のものが附着して齒を害するとが一つ、次は矢張り乳齒の生え變る時機に母の不注意なとから出る、八重齒の出來るのも矢張其道理である。

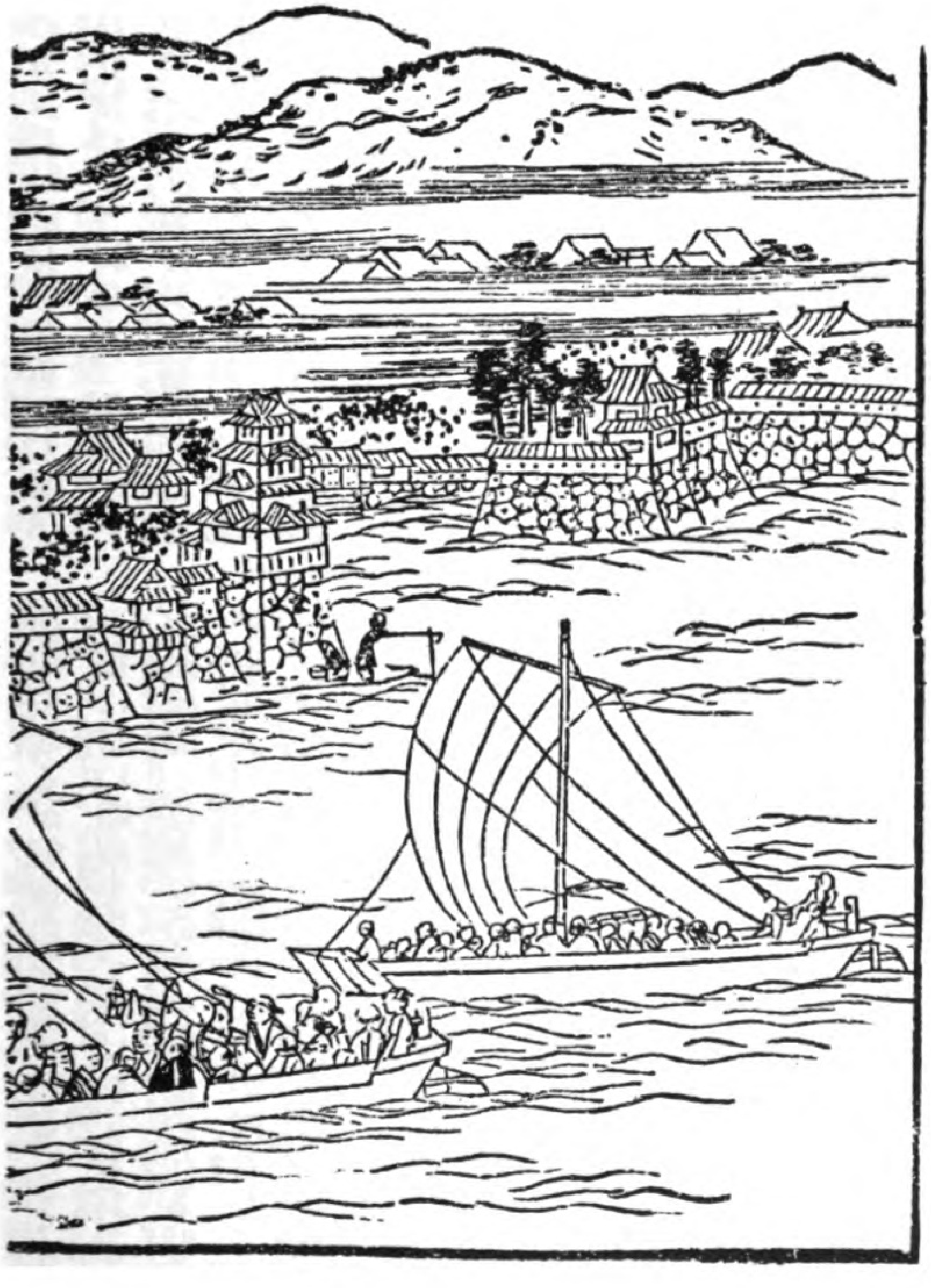
△齒を掃く事、齒を磨く事は面倒なので、大概の人は一度しか掃かぬ一體ならば食事毎にして欲しいものだが、どうせ一日に一回しか掃かぬとならば寧そ朝よりは寢る時掃く方が効能がある、朝一度磨いてから寢る迄に色んな物を何度食ふか知れぬ、夫れを其儘寢ると朝までの長い時間唾液の交代がない爲め酸味の附着した儘で居る隨つて齲齒なども多く夜間に製される譯であるから、不精な人は寢る時に一度磨くやうにするが一番良い。

△齒楊子　は餘り硬くないのを消毒して使つた後は日あたりの良い處に置かぬと黴菌が取れぬ其の消毒の藥にも種々あるが先づ輕便なのは硼酸水であらう夫れに楊子は上向きよりも下向きに置く方が良い。

古の名所　膳所城　粟津原の古戦場

伊勢參宮名所圖繪に云

むかしより日吉山王祭の御供を供する處を以て膳所といふとあり、膳所の城元は東坂本に在り、信長公明智光秀に是を守らせ太閤の御代に至り大津に移し京極高次是を守るとあり附近に粟津原の古戦場あり、源平のむかし木曾義仲の戦死したる處なり太平記に、



今井の四郎兼光はいくさ敗るゝに及んで敗卒五十騎を率ひて、義仲にめぐりあひ範頼が先鋒一隊の四郎を追ひくづす、然れども義仲討たれぬと聞てその敵石田次郎に向ふて曰これ見給へ、東國とのばら日本一の剛の者自害する手本よとて刀の鋒を口に含んで、馬より逆さまに飛をちつらぬかつて失せにけり。

附近に義仲寺の名蹟あり參宮名所圖繪に云ふいにしへ此馬場の濱にしるしの塚ありしを天文二年ある人粟津の木曾塚を尋れ一宇を建て義仲寺とし石山寺の末寺とす中頃廢して

今草庵となる、義仲討死の地は此邊なるべし。

○義仲將軍は清和源氏の後胤なり、始め平氏盛んに起れる時北陸に蟄居して時運を待つて高倉院の宣旨を蒙るに及で勃興す砺波、俱利伽羅の二戰をはじめ所々の戰に利あり直に京師に入て平族を西海に追却けて、其勢破竹のごとし其功によつて征夷大將軍に補せられたり、惜しい哉上洛の後驕奢日々に長じ公卿を闕



官し庶民を殘害す剰さへ法王の御所を燒討す源頼朝鎌倉にありて義仲の横逆を聞て範頼義經等を將として攻登らしむ、義仲是を宇治勢多に迎へ戰ひけれども終に利なくして粟津が原において流矢にあたり自害して卒すとあり俳諧師芭蕉を葬るの處又こゝなり。

最新の髪風

新橋女髪結　戸根愛女

髪を結ふのは却々六ケ敷う御座います。之れが昔である文金は恁んなもの丸髷は恁んなものと、其の結方さへ知つて居れば、誰彼となく同じ格好に結つて居て、其れで通つて居ましたが、今では世間の眼がずつと高くなりましたから、同じ丸髷でも一々其の身分や人柄を見てキチンと之れに適當るやうに結はなければなりませぬし、其れに顔の長短、頭の格好、お髪の工合なども人々區々でありますから、之を按排好く結ひ上げるには、人毎に一々手を變へねばならぬやうな譯で、髪を結ふのも隨分複雜つたもので御座います、ですから此頃の髪は恁う云ふ風に結ふと私が言つて見た處で、其れが必ずしも皆様に適當るとは申されませぬが、其の大體の格好を言つて見ると、

▲前髪

前髪は何の髷でも一體に大きい方で、前を廣く奥を狹く取つてふつくり前へ突き出して置きます、此の風は華族女學校が流行元とか申しますが、流石に上品な取り方で御座います、前の巾は普通二寸位でありませうが其れも生際の工合に依つて之れよりも廣くもするし狹くもします。又前髪を大きく取れば華美に見え、小さく取れば質素に見えると云ふ加減もあるから、年齢の如何に依つても大小色々に變へなければなりませぬ。

▲鬢

鬢は却々六ケ敷なりました、以前は下鬢にして前髪と鬢との分け目を陽に見える位にしたやうな可笑しな風が流行りましたが、今は何の髷でも鬢の毛筋がすうツと水平に通る迄に鬢尻を梳き上げ、成るべく巾を廣く見せて、而うして前髪に映らう様にふつくりと付けるのです、で細面の人は此の鬢を少しく餘計に脹らませ、丸顔の人は少しく詰める氣味にして巾を廣く致しますと、顔の形は大變に好く見えるかと思ひます。

▲髱

髱は餘り詰めては不可ませぬ、矢張り幾分か出てゐる方が今日の流行であります、此の出し加減なども人柄に依つて色々變りませうが、出し加減よりも出し工合が大切です、大概の人は髱を細くして後へすらッと出して置きますが、私の遣方は、髱脇へ毛筋棒を入れて髱尻を掻き出し、前から見ても少しく髱の見える位に廣くしして襟足へふわりと懸けて置くのです、之れは私の秘傳と言つたやうなもので、他の人は餘り遣りませぬが、頸部を細口に美しく見せるには之れに限るやうです。

▲髷

それから髷ですが、先づ文金ならば根を高くして、ずつと上の方に結ひます。此の髷は自分では餘程上に結つた積りでも、妙に下つたやうに出來るから、其の加減をして成るたけ上の方に結へば、出來上つて見ると恰度好い格好になつて居ります。桃割れ、唐人髷なども無論上の方で御座います、丸髷は前髪の先と髱尻との中央位に、後髷を立てゝ、ふつくりした形に結ふので、根は成る丈後へ出張らぬやうに致します、髷を此の位の處に結ふと、髷と前髪との間が少しく廣過ぎるかのやうに見えるが、結つて居る時は此の間抜けた位が好いので、其處へ櫛を斜に挿せば寸分動かぬ形が出來ます、其れを大抵の人は髪を結ふ間に好い格好にして置く故、櫛を立てなければ挿せぬやうな窮屈なものになるのです。銀杏返しとなりますと中央よりも少しく上の方に結ひますが、年増ならば矢張り下つた方が好さゝうです、髷の位置は大凡極んなものですが、若し丸顔の人ならば普通よりも少しく上り氣味に結ふが好いかと存じます。

今日の髪風は大凡極んなもので、此の上人毎に色々手加減があるのですが、奥様や嬢様が御結ひになるのは、意氣に失せんよりは、些と野暮であつて而かも上品なのが最も御似合なさらうかと思ひます。

▲十一月の花ごよみ

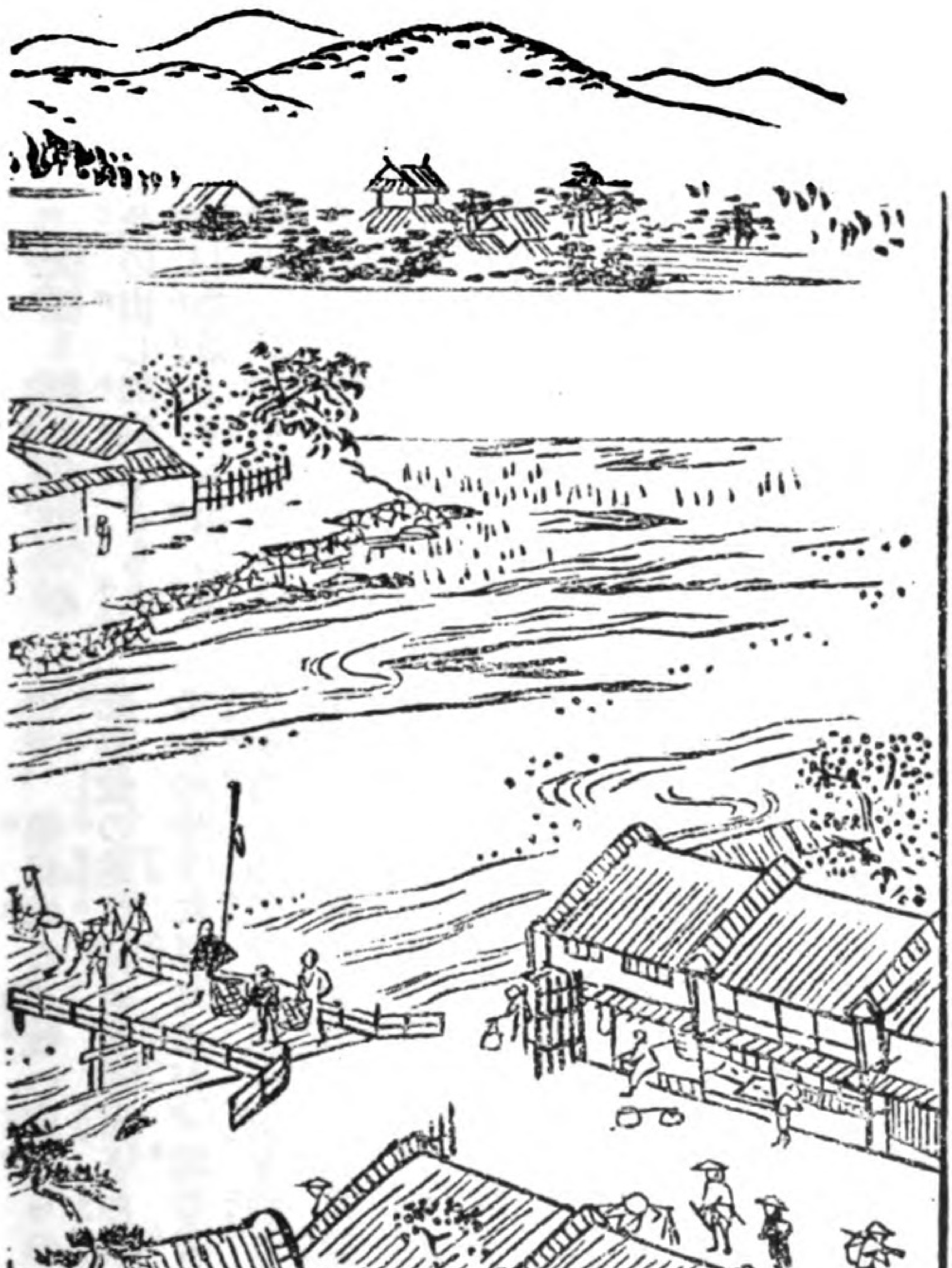
紅葉　上野　瀧の川　海晏寺　眞間　目黒　平河天神
　　　淺草田圃　深川八幡　日暮里
　　　四谷天王　品川天王

酉の市（初酉八日二の酉二十日）　新宿　千住　花又村

古の名所　松坂大橋（阿漕浦の古事）

伊勢參宮名所圖繪に云、

松坂驛は津より五里、天正の頃蒲生氏郷の城下なりしが後太田絲部の居住となり、繁榮の地にして富人多く、大橋ありてこれを西莊の橋といふ、松坂古名は四五百の森なり、參宮道中の一名驛にしてむかしは市中人數の往來繼るがごとく橋上の眺望風色佳しとあり。



附近名所に阿漕浦あり、名所圖繪に云、

阿古木浦は今津の城下岩田橋より巽にありといへども、所在詳かならず

あこぎ物語といふに、

平氏の族右馬允良光が孫繼光といひける者、伊勢の掾となりてやゝ任國かりけるにやこの浦に人を出して網を曳せたり、御贄の折も妨げるほどに禰宜宮司に訴へけり、繼光これを聞いて一族の平氏百二十騎集めていよいよ贄の海人を妨げける、禰宜も仕方なくて國司に申

けれぱ守きき付軍をそろへて盛光を攻む、盛光打負てとられにけり云々、

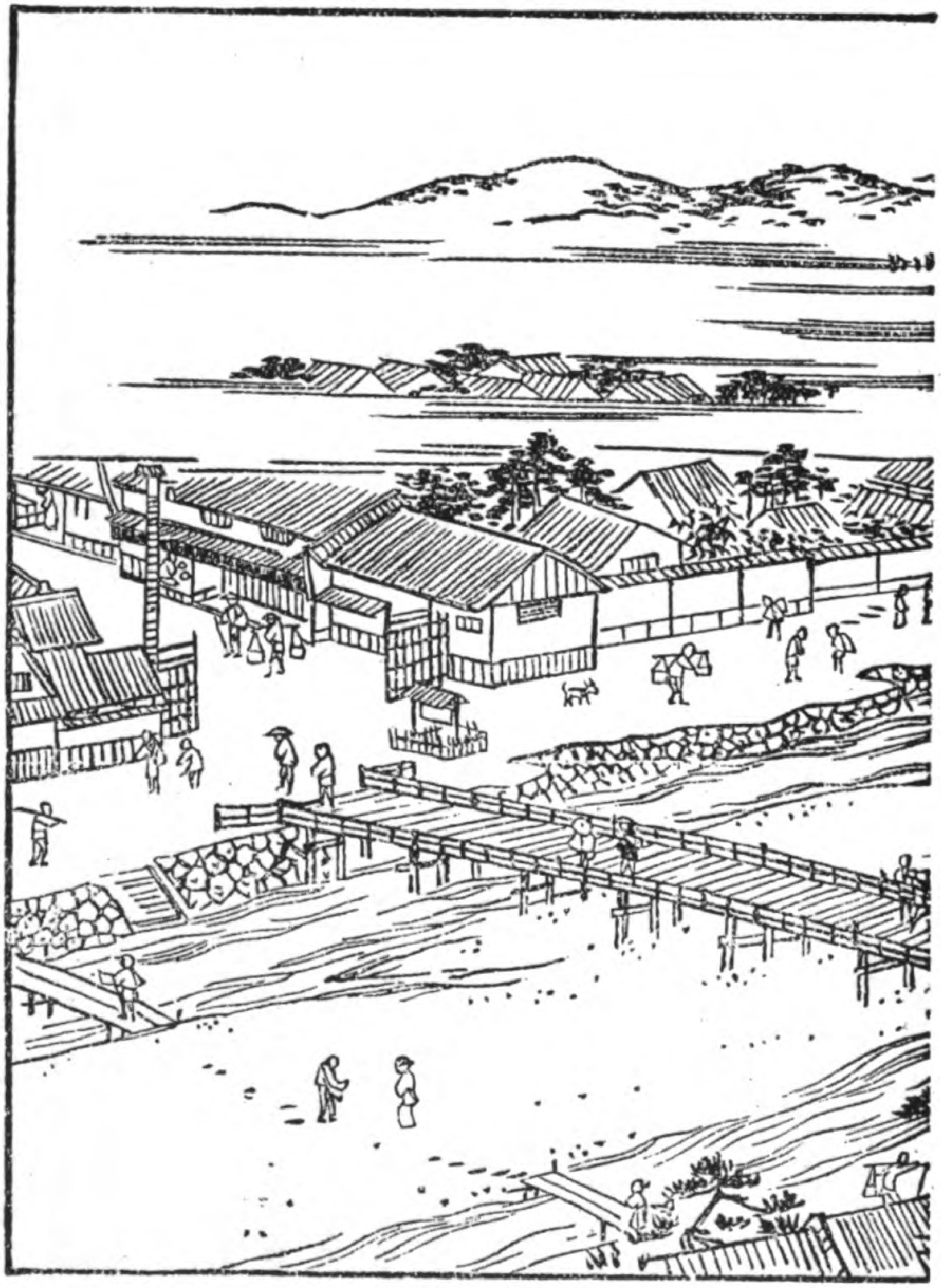
とあり。

按ずるに阿漕ヶ浦は神宮に捧げ奉る御贄を捕る處にして殺生禁斷の濱なりしを盛光伊勢の棟となりて暴威を振ひ網曳かせて漁したるものと見ゆ、後世この事を仕組みて狂言につくり平治といへる者母の病を治せんとの孝心より殺生禁斷の場所なるを知りつゝ、密かに網を入れて魚を漁したる事一度ならず二度三度に及びて遂にあらはれて極刑に及びたりといふ樣に作りたるなり、

そこで、

あふことを阿漕の浦に曳く網のたび重ならば人知りぬべし、

の歌となりて俗間のいましめとなりしならん歟



女學生の自炊生活

秋の蟲の音しげき早稻田の片ほとりに、四季の眺め床しき植木屋の一室を借受けて自炊生活をなしつゝある女學生がその一ヶ月に要する費用に就て語ッていふ。

一ヶ月の費用と申しても十圓で濟む月もあれば二十圓でも足らぬ月もありますから一樣には申されません、先づ十五圓から十七圓位が普通でせう、尤も月謝や食費などは何れの學校に居ましても太した相違はないのですが、大學の方では裝飾品や交際費等は一番嵩むのでムいます、ドウも年々皆樣が贅澤（と申しては語弊があるか知れませんが）、兎角華奕な風を競ふといふ傾きがありますから、自然木綿服で滿足して居た私共まで、絹物でなければ羞かしいやうになり、メレンスの帶が縮珍となり、綿カシミヤで濟んだ袴が舶來物でなければ氣が濟まぬといふ樣に、同窓や周圍の刺擊からして、不知々々贅澤になるのです。又交際の如きも、親の脛を嚙つて居る修學時代の身であり乍らも知合の方に訪問された時に、眞逆番茶一杯で追歸すといふ譯にも參りません、又三度に一度はお交際の爲め歌劇などに出なければならぬ場合もムいますので、自然豫定外の冗費は免れません。

△支出日記の内譯═最初一ヶ月十二三圓で上つた學資が十五圓となり十七圓となりして漸々に增加するものですから、鄕里では甚那に澤山かゝる筈がないと小言を申して參りますが、自分では相當に儉約をして居る積りでも外部から見たら、或は其儉約が不儉約になつてゐるかも知れません。それも行方一つで月々三十圓近くも取寄せて居る方もあれば僅か十二圓位で結構勉强してゐる方もあるのです。

△一日　二圓五十錢（室代）五十錢（點茶の月謝）十錢（魚と野菜代）△二日　二十七錢（郵券）六錢、醬油二合）六錢（漬物）△三日　一圓二十錢（米屋仕拂一ヶ月分）十三錢（魚と野菜）二錢五厘（湯錢）△四日　三錢（佃煮）五錢（味噌）八錢（石油五合）△五日　二十錢（來客菓子）十錢（果物）十五錢（野菜と魚）△六日　八錢（靴のヘラ）四十八錢（炭一俵）二錢五厘（湯錢）七錢（魚野菜）△七日　十二錢（紙と筆）十六錢（白足袋　三錢（漬物）△八日　十錢（菓子）二十一錢（來客蕎麥代）五錢、魚）△九日　十五錢（花瓶）二十六錢（雜誌代）十二錢　野菜と魚）△十日　七錢（醬油と鹽）三錢（ランプホヤ）二錢五厘（湯錢）六錢（野菜）十錢（來客煎餅）△十一日　四錢、果物）八錢（時計直し代）十二錢、髮洗代）七錢（野菜魚）△十二日　三錢（焚付）三錢（味噌）十五錢（菓子）十錢（豚肉）四錢（野菜）△十三日　五錢（漬物と佃煮）二錢五厘（湯錢）七錢五厘（郵券）二十八錢（リボンとピン）△十四日　二十六錢（來客料理費）五錢

一ケ月の學費

（草花）八錢（林檎）△十五日　十五錢（味淋と酒）八錢（野菜魚）五錢（卵二個）十錢（お茶）△十六日　三十二錢（靴下）十錢（菓子）二錢五厘（湯錢）四錢（油揚）△十七日　十八錢（白粉と石鹼）十五錢（來客牛肉）五錢（野菜）△十八日　十三錢（インキと手帖）六錢（醬油二合）五錢（漬物）△十九日　十錢（菓子）二錢五厘（湯錢）十二錢（野菜と魚）八錢（石油五合）△二十日　三錢（味噌）十錢（豚肉）五錢（干物）△廿一日　二十八錢（友人と寄席行）二十六錢（雜誌二冊）七錢（野菜と干物）△廿二日　十錢（菓子）二錢五厘（湯錢）八錢（魚類）二錢（鹽）△廿三日　五錢（挿花）十二錢（野菜と魚）十錢五厘（郵券）二十四錢（來客雜費）△廿四日　十錢（澤庵と昆布卷）八錢（野菜）二錢五厘（湯錢）十二錢（椿油）△廿五日　二十錢（新聞代）十錢（豚肉）△廿六日　六十二錢（足駄一足これは三月に一足位）三十錢（進物菓子）九錢（野菜と魚）△廿七日　廿五錢（繪葉書五枚これは國への土產）十錢（菓子）△廿八日　二錢五厘（湯錢）六錢（半紙二帖）十一錢（魚と野菜）△廿九日　十五錢（牛肉）十三錢（味噌と味淋）八錢（湯呑み）四錢（野菜）△三十日　四十二錢（來客雜費）十八錢（筆）三十七錢（帶止め代）五十五錢（學校用具）四十九錢（八月中電車代）計金十六圓六十二錢五厘

斯う計算した處を常の月に比較して見ますと此月は來客などが多かつたものですから、確に二圓以上餘計に費つて居ります、此外に三學期間に納むべき二十七圓五十錢の授業料を月割にして、一切で十七圓平均あれば澤山で厶すから右の支出日記は少々駄費が出てをります。勿論自炊は何の爲にやるか、儉約の爲ではないか、自炊して月に十六圓もかゝるなど馬鹿氣た事と思召そうが、實は近日故鄕の從妹が參る筈で行々はそれと一緒にするつもりなのでそうすれば一人前十二三圓位で濟す考で居ります云云とは記者が自炊の割合に費用多きを難じたるに答へし言辭なりき、妾などは先づ普通の部と思つて居りましたが、此頃本鄕邊に矢張り自炊をして居る友達の實費を聞いて少々愧入りますと共に是非今少し儉約しなければならぬと感じました、其方は私共と同じ樣な生活をして居りますが一ケ月平均十二圓五十錢あれば餘る位だそうです、其內譯は室代が二圓、月謝が二圓、食費一切で四圓八十錢、筆墨紙料五十錢、化粧品三十錢、郵券其代の小使錢二圓三十錢、靴下と足袋が三十五錢、都合十二圓廿五錢。成程これで充分な譯ですから、今月からは餘程氣を注けて居ります。尤も普通の下宿屋生活ではいかに儉約しても十五圓以下で上らぬさうですが、學校によつて寄宿舍に這入れば食費が五圓と其他一切の物が五圓と十圓あれば澤山です、ですから學資の多寡で學問の成績に相違がない限りは可成寄宿舍生活の方が得策かと存じます。

庭作りの心得

築山は家にありて風景よき山水の地に遊ぶの樂を得、また體裁甚だよく下等の家にては其庭に築山を設くる時は其家何となく上品になりて見ゆるものなり、今一層其興味を添へんとせば泉水を山脚に穿ち、噴水器にて水を山顚に導き天に向ツて噴上し再び泉地に注がしむるがごとき或は湖岸山脚に奇巖怪石を配置し或は山腹に暗洞を設け其周邊に蘚苔を栽ゆるがごとき、大に新趣を添ふるものなり、而して岩石に附着すべき諸種の草木を植ゑたる後ち一ヶ年を經れば古色蒼然として掬するに堪へたるものあるに至れり。



斯くて土工全く竣工するに至れば滿望悉く奇を呈し以て大に人目を娛ばしめ昔日費やせし所ろの金錢思慮、勞力の報酬を收むることを得べし尙これに滿足せざれば丹頂鶴、白鳥、鷺其他の遊禽を遊集せしめなば完全を望み得べし而して繁茂せる垂柳を湖邊に匂はしむるも亦惡しからず、更に湖心に小島を設け架するに橋を以てし草亭を置き以て庭園逍遙の途次休憩に供すれば其趣き佳絶なるべし或は山頂山腹に蘇國生の蘇を植栽して空氣の流通をよくし、其他岩間石罅に植栽すべきもこれ等は其道に通ぜる老練の花師に就て

其指圖を受くるをよしとす。

圖は京都、南禪寺の庭園にして尤も閑雅幽寂なるしつらひなりといふ。

南禪寺

此の寺は京都粟田口の北南禪寺町に在り、もとは龜山法皇の旋居なりしが正應の始め宮中に怪異の事多かりし時、東福寺の僧無關和尙禱つて之を除きたるその功により、宮殿を割いて佛寺を建立して瑞龍山太平興國南禪々寺と號し之に賜へり、是即ち南禪寺の草創なり、爾來年を經る六百年其間應仁の兵火に炎上して痛く荒廢に委し今纔かに幾分を餘すに過ぎず境域六萬餘坪、老松深く、幾多の子院を閉し老樹石磴を蔽ふて晝猶暗く冷氣膚に迫らんとするの靈境なり。



猿橋

猿はしの驛にいたりて、彼のなたゝる橋を見るに岸には、いと大きなる岩そばだち、水の深さはいく千尋とも知らず、色は藍のごとくして、うづまき流れ、はしの長さは十一丈と云ふにすべて桂はなく岸よりきしに桁をさし出だしつゝ、こなたかなたくみあはせて板うちわたし、らんかん、いと高くかまへたり、水きはまで、ふかさ三十三尋ありとぞ、しばし立止りて、見下ろしたるに、目くるめく心地すれば、とくすぎぬ、此處を猿橋といふは、いにしへ、ましら集ひて、しもとを組合せつゝ、かなたの岸にうち渡して、そが上を安らかに行かひせしにならひて、かけしよりの名なりと云へど四方、犬目などつゞきたれば、例のしひごとなる可し。(賀茂季鷹)

隱し所の衛生

家には是非隱し所が必要である、併しその隱し所から紛々たる臭氣の漏れて來て室内に充ち渡るに至つては只に殺風景であるのみならず、第一衛生上に大害がある、されば便所の位置、構造、并びにその手入に就ては格別の注意がなくてはならぬ、由來日本人は流し元といひ下水と言ひ又この不潔物の所置などに就ては兎角研究が疎漏で且つ注意甚だ屆かない樣である。中には勿論不便、不衛生は十分承知して居ても借屋では仕方がないと輕々に見過して居られる方もあるやうだが、苟くも自分の住所として一年でも二年でも住ふといふ限りは此の邊の考を土臺として手入をするなり、構造を作り直すなりして住ふだけの勇氣がなくてはならぬわけでせう。

然らばまづ其の構造は大体、どの樣にしたらばよいかといふのに、

第一座敷に離隔する事——便所は成可く住所に離した方がよいが、夜中の不便で仕方がないとすれば、なるべく食堂や廚手元及び正座敷に離れた所に作るやうありたい、日本の風習として正座敷に近く設くるのは極めて愚なる事で、暖かい時節になれば自然に座敷を開け放つ、すると便所の臭氣は必らず襲來するといふ事になる。

第二樹木を多く植ゆる事——便所の周圍にはなる丈多く樹を植へるのがよろしい、樹は落葉樹の葉茂り勢よきを良しとする、大抵な臭氣はこの葉が吸收して仕舞ふ、落葉樹は夏日に繁り、冬日に枯れるが臭氣は専ら夏を甚しとするからである。

第三戸と窓——便所の戸を二重にする事、戸を二重にして戸外に向ふ戸面には成るべく大きな窓を設け、不斷は其窓を開け放ちて置くがよろしい。

第四掃除——便所は絶へず掃除して成るべく腐敗の暇のない樣にする事そしてなるべくは水を注ぐがよろしい、便所の内には不斷大きな陶器に鹽水を盛つて置くがよろしい。

第五臭氣止——時々木炭、線香、石灰、昇汞水、石炭酸などを注ぎ臭氣を消さねばならぬ、木炭の粉はアンモニヤ瓦斯

隱し所の衛生

を吸收する力があるから尤もよい、其他の藥品は瓦斯と抱合して臭氣を止め、又は腐敗して生ずる黴生物や、排泄物中に混在する病菌を撲殺する効力を持つたもので、又石炭酸の其の臭氣の力で瓦斯の臭氣を壓するのである。

第六芳香物――藥品を以て臭氣を止め、腐敗を防ぐと同時に香氣ある龍腦、麝香の如き藥品を以て製造した芳香物を備へ置く事。

第七なるべくは西洋風の便所に改造する事。

第一と第七は日本現今の生活狀態并びに習慣上より急に改造する事か出來ぬとすればせめて第二より第六までの方法を實行したらばよかろうと思ひます。

序に日本の風習でよろしくないのは小兒を庭先に向けて放尿せしむる習慣である、これは實に野蠻な風習であるのみならず衛生上の大禁物である、冬期はまだしも夏季になれば放尿中の尿素はアンモニア瓦斯の變じて家の周圍から惡臭を放つ樣になる。

尙序に從來小兒の便器に虎子を使ふ事であるが、これは陶器に代へた方がよろしい、植木質で造つたものは一寸洗つた位で中々汚物は去るものでない、陶器ならば其時に水で流せばよい。充分とならば曹達水で洗へばよし。

洗濯物を入るゝには蓋のある大な籠がよし、何かしても一つの入物を用意してハンケチ、足袋褌袢等換へる度に汚れしものはすべて其中に入れ、定めの洗濯日に一緒にして洗ふ事、洗濯籠の置場所は、湯殿が最も適當ですが湯殿のなき家は洗面所がよいと思ひます。

洗濯した手巾、足袋、手拭、靴下、襦袢などは各ゝ箱や嚢のやうなるものにそれ〴〵區別して入置くがよし、殊に多人數の家には混雜し易きものなれば手拭、靴下の如きはなるべく銘々の名前を縫ひ付けて置くがよろしい。

ピン、鋏又は小刀、爪切鋏などの雜物を入るゝ處ろはなるべく一定して置くがよい、至急の時に物搜しするやうでは時間の不經濟となるのみならず物が混雜して抽出の整頓がつきません。

下女の心得

他人に使はるゝ奉公人の身は、すべてに心すべき事多し、むかし寛政二年、大阪京橋通八軒家兩替商米屋某の召使歌といへる十四歳になれる少女に、其の祖母夏より送りし書簡あり、こは孫娘に過失なかれかしと願ふ老婆心より下女奉公の心得を細かに說きたるものにて、獨り下人の訓誡として適切なるのみならず、一般の處生法として見ても大いに價ひある金言なり。

一御主人樣方の事は親よりも大事に候まゝ、少しも疎末の心なく奉公を大切に勤め可申事。

一御主人樣方の事は申すに及ばず、御傍輩衆の事猶更ら何事によらず、とんと陰言申間敷事。

一何程腹の立つ事ありとも堪忍して、少しも不承なる顏は致す間敷事。

一女は女らしきが善く候儘、常々心掛け立居擧動しとやかに、疊のへり敷居など蹈まぬ樣に心掛け、荒々しき物言ひ高笑ひなど無用の事。

一男たる人々に馴れ〳〵敷物言ひ致す間敷候、是又若き女の愼みの第一に候事。

一諸事遠慮致し、隨分出過ぬやう、利根がましく問はずがたり抔して多く物いふ間敷事。

一火の用心第一に候儘、蠟燭の燈しさし、紙燭等疎末にならぬ樣に心を付け可申事。

一おいと樣と遊び候とても、何かに心を付け御けが無き樣に、猶又おあがり物など、隨分〳〵氣をつけ可申事。

一朝は早く起き可申候、人樣に起され候樣なることにては相濟み申さず候事。

一行儀惡く候ては、御奉公つとまり不申候儘、萬事氣を付て御無禮なき樣に心掛け可申事。

一人樣よりは我は足らぬ者と心得可申事。

一仕事を致し候節、針など疎末に致し申間敷事。

一知らぬ事や不調法ある事は、ありの儘に申上て、少しもまけおしみ致す間敷事。

一何事にても御尋ね申上て致可申候、利根がましく我知り顏にて仕損じ申間敷事。

一御申付なされ候事は勿論、何事によらず、隨分〳〵丁寧に致し可申事。

一皆々樣の御氣に叶ひ候樣に、隨分と氣輕尻輕に、おとなしく致し申さるべく候、くれぐれも人樣の御事は善惡共にとんと申さぬ事にて候、兎角人樣に憎まれ候ては、中々御奉公は勤まり不申候、委敷事は筆に盡くし難く候故とゞめ參らせ候、凡そ右の通り少しにても違ひ候へば、其身の爲め惡しく候儘、深く思ひ厚く愼しみて御奉公を大切に御勤め可被成候、ふだん懷に御入置きなされ、每夜〳〵ねまに候て、一ぺん宛御よみ可被成候、何を御申なされ候哉、夫程の事は私も知て居る抔と言ふ樣にては、情なき心にて候、兎角諸事おとなしく御勤めの程、賴み參らせ候。めでたくかしく。

時雨月十七日　　　はゝより

おうたどのまゐる



腕のある妻と徳のある妻

元祿女史

此文卒讀して說の可否文の突梯なるを議する勿れ苟しくも此文の旨趣を議せんとならは、再三熟誦して更に深く想を現社會の裏面に注がん事を要す。(編者)

今は昔、女のすらしき日記と云ふ物を物して、一時洛陽の紙價を高からしめた、其の名を聞いてだに床しき優しき。

新體詩人

があつた、そして又此處に妙な男ありけり、詩人と云ふか文士と云ふか知らねど、唯戀とか神秘とか煩悶とか憧憬とか妙に奇しき筆端、時には神籠るかとばかりニイチエ丸氣觸れの自稱天才詩人があつた、處が此の天才君兎角新體詩人と感情が疏通し無いので、寄ると障るとやれ氣障つてるのハイカつてるの、吝だの狡猾いのと頻りと罵倒されるのが常であつた、其れが又怎うした機會か、近頃其の新體詩人の話が出ると、天才君頗る面目無げに面打ち赤らめては、やあ、僕も實は始めの中は新體詩人を毛嫌ひして居つたけれど、彼れで能く交際つて見ると、存外卻々話せる男だよと。

はて扨て如何な事、如何に水性の天才詩人だと云つ

て之れは又餘りの變り方、之れは又餘りの不思議さと、後で能く〳〵聞いて見ると、讀めた、慥しかに讀めたと云ふのは、去る折の會見に天才大好物の天麩羅を澤山新體詩人に奢つて貰つたとやら。

末世の凡俗、德を以て人の師表に立たり等と云ふ事は抑も迂遠な話しなので、世の人望名譽、甚だしきは神聖なる可き文界の毀譽褒貶迄、天麩羅で左右出來るから可笑しい、何も世の中は天麩羅の事〳〵天麩羅の事に限ると思ひました、之れを是れ改めて、

天麩羅政略

と云ふ、

唐虞三代の德化、頒白をして道路に負戴せしめず國治まり民其の堵に安んじて太平を謳歌したと申しますけれど、是れ大聖にあらざれば迚も出來ぬ事で、既に今より三千載の往昔に在つてすら、所謂王道は迂遠なりとして梁の惠王は退けたと云ふ事を聞て居ります、左大臣頼長は、鎭西八郎の策を捨てゝ正々堂々の陣を構へた迄は宜かつたけれど、却て敵に機先を制せられて敗北の恥辱を餘儀なくさせられた、中ノ大兄ノ皇子は云はゞ體の善い闇討で逆臣を誅しなされた、楠正成は奇兵を以て敵を苦しめた、黃叔度は琴を鼓して巨萬の群賊を走らしたと云ふ、

私共の人生は將に大に健鬪すべき戰場で御座ます、此の生存競爭の激しい戰場に憖ひ整々の陣を張つて德を以て道を以て正義を以て、世を率ゐ人を導き自分の主義の勝利を得やう等と云ふ事は、晴天に霹靂を望む様なもので、却つて徒らに己れの立場を危ふくするのみだと思ひます。

人間最終の目的

が、極端なる嚴肅派の様に、絶對的に肉體の慾望を制抑して、圓滿崇高な純德に到達させ様とするのならばいざ知らず、パウルゼンの所謂善も惡も總べて結果から割り出して、勿論自己の品性をも餘り傷けず、他人にも迷惑はかけなかつたら、强ち天麩羅政略決して惡く無からうと思ふ。

云ふ迄も無く最後の勝利者は德にありませうなれ

ど、併しながら昔から德高き人必ずしも人生の幸福を享受すると云ふ譯には行かなかつた事を記臆せねばなりませぬ、釋迦もクリストも 怕(?)次ドばにして不遇にして倒れた。孔子も孟子も亦世に入れられないで知己を百年の後に待つた、元より遐厥人等は、潔く天命に安んじて逆境に處して従容迫らなかつたでありませうけれど、生きてる甲斐には血も通ふ神にも佛にも聖にも非ざる私共に、斯くあれとは實際無理な注文で、よしや、首陽に蕨を噛つて居つたと致しましても、方寸の浪立ち騒がす、心から天命を樂しんでは居られなかつたであらうと存じますのであります、下世話にも、



人を見て法を説け

と申しますのは、能く此の間の消息を發いたもので御座いませう、匕遂こ〻こ、寃のある妻と德のある妻とが家庭の平和を保つ上に、何れが成功するであらうかと云ふ問題は釋然として氷解さるゝ筈と存じます。

いつぞや私は、一寸用が御座いまして、或る人の處へ訪問致した事がありました。

主人と云ふは何でも五十恰好、額の狭い疳ばつた見るから神經質らしい御方、折りふし何の疳に障つてか、煙草盆を蹴るやら湯呑を投るやら、座敷中もう落花狼藉、さあまあ何卒と女中に案内はされたものゝ、有繋の私も之れ

には面喰つて仕舞ひました。
ホヽヽと突然に若々しい笑ひ聲
能く入らつしやいましてと、小さな丸髷の四十五六閑雅に會釋して、眞にね、もう、手前共には飛むだ亂暴兒が居りますんで、斯う終始中玩弄物の始末をさせられるんですよと、氣も無く云ひて拔けて、手早く其處ら取り片附けられた。

　で、私も先刻から此の爲體には辟易して居るのであるから、一層又其の中に出直さうと思つて其の旨申し入れると、何あに些つとも構ふもんですか、宜いんですよ、放棄つてお置きなさいましと、騒がず立ち上がつて、ねえ阿方、眞當に戯談じやありませんよ、御客樣じやありませんか、と、するく\と椽側傳ひ、うつそりと衝つ立つて居る良人に追ひ縋る樣にして、笑ひながら、

　何を見てらつしやるの！と妙な詰問、何でも見てるんだいと主人は相變らずの佛頂面、細君拔からず、厭ですよ阿方、朝顔を見てらつしやるんでせう、だから厭だつて云ふんじやありませんか、其麽朝顔を見るより私の顔を御覽なさいなとやつた。

　之れには私も思はず失笑しました、

　宜べ、多年の老功、其の圖に當つて、意氣地も無く少禿の老爺樣、見ん事細君の手玉に乘せられて仕舞つて、面目無げに、

　やあ大きに失敬致しましたッ、

　這麽の等は、德のある妻としての成功ではなく、寧ろ慥かに、

腕のある妻

としての成功であらうと存じます、

　成程這麽塲合に、良人が怒れば妻も口喧しく怒鳴り出すと云ふよりは、其れは唯恐れ入つて小さくなつて何事も御無理御尤もで恐縮つて居つた方が、或は良人の機嫌の回復方も早く、從順なる妻として、德にも悖らないで御座いませうけれど、兎に角怒ると云ふも悲しむと云ふも心の苦痛であるのに、其の苦痛を救はうともせず、事の成行に任して人力を盡しもせずに天命

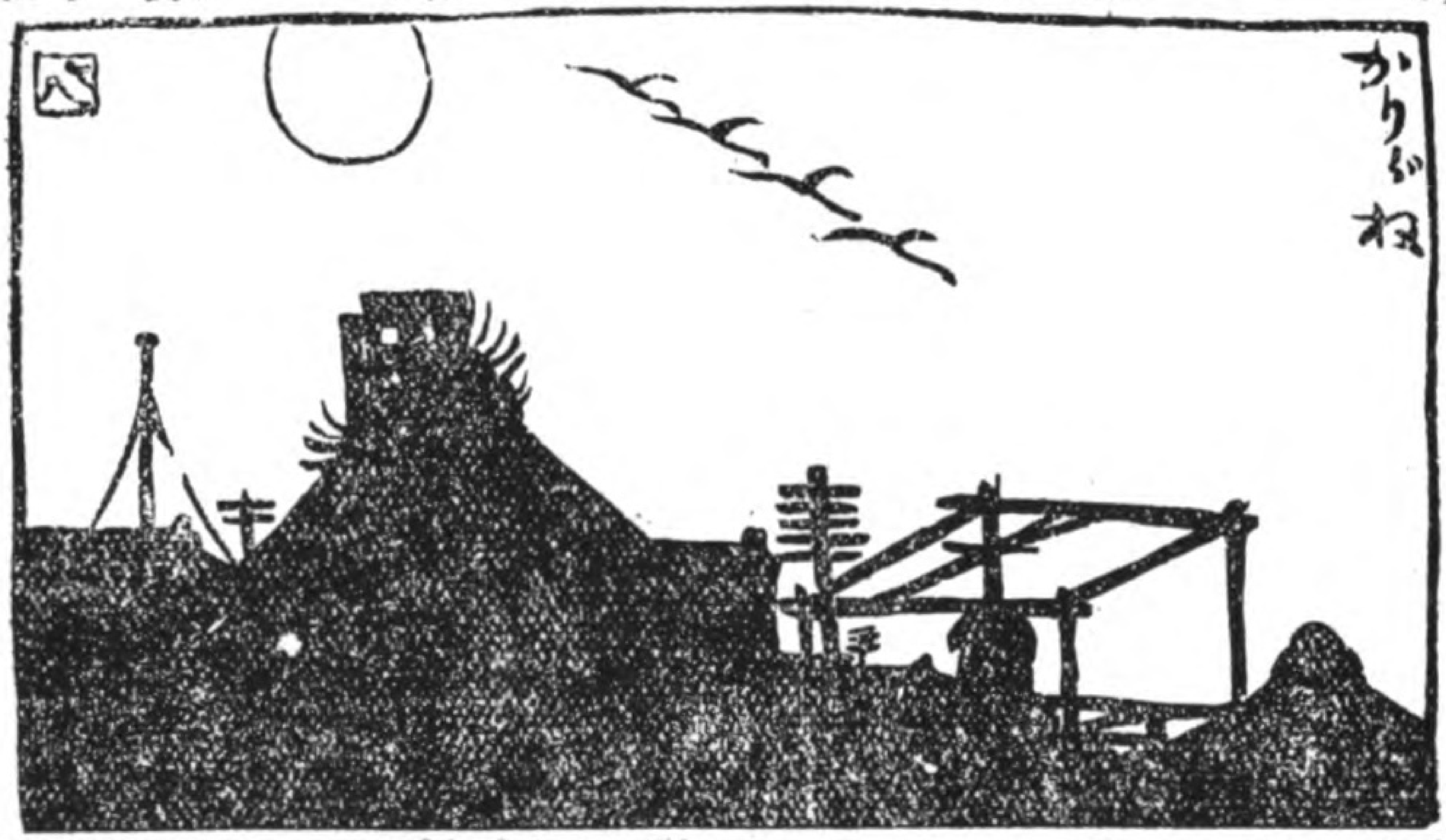
を待つ等は、良人に對する愛情の頗る冷淡に失しは致しますまいか。

由來我が國には、

妙な倫理觀

があつて、他人の爲に自分を犧牲に供すると云ふ事を、最高な善事と心得てるらしい、だから昔から云ふに忍びぬ殘酷な所謂身替り等と云ふ事を、最愛な妻や最愛な兒に強いて自分では一かど天晴な大善事でもなした樣な心で居るのである、其れは成程善事には相違ありませんので、餘程の意思の強い人でなければ到底成し遂げ得ぬ大善事には相違御座いません。

併しながら、女房喜べ息子は御役に立つたぞよと云ふ口の側から、すまじきものは宮仕へ等と、何だか其



麽矛盾した述懷を聞くよりは、一層人をも殺さず、勿論自分の身をも毀さずに仁を爲すの、より大なる度量と遠謀と手腕とを希望致します、否私は斯かる人をこそ眞に大に尊敬すべきだと思ふのであります。

孟母の三遷等は、此處の呼吸に於て一頭地拔いた甘い遣り方と云はねばなりません、機を切斷つて愛兒を訓誡めた程の意思の堅固な人でしたもの、誠の德を以て導いたら、何の市井の中だらうが寺院の側だらうが愛兒の教育の出來ないと云ふ事は無かつたで御座いませうけれど、自らも多く勞せず、愛兒にも大に勞せしめず、外界の誘惑に打ち克たしむるの努力を提げて、徐ろに内に教育の大手腕を振はれた等は、有繋に迂遠

なる可き方針の活用を實際に誤まらなかつた明が偉いと云はねばならぬ。

要するに腕と云ふも德と云ふも、かりに、人生が何時も〳〵平坦で、家庭が何時も〳〵平和で、良人が、品性の正しい人格の高い溫厚の君子でありましたら、妻の手腕を俟つ等と云ふ樣な事は殆んど無いのであります、必竟德は日頃の養生で腕は病時の醫藥である、されば、健全なる社會や家庭にも勿論德を必要としますが、社會や家庭を健全にしやうとするには猶一層德を必要とします、けれども病める不健全な者に養生位ゐでは既におそいので怎うしても腕を必要とする所以である、即ち澆季の今日猶未だ天狄羅政略を必要とする所以であります。

が併し腕は藥である、藥である以上は健康者に强いて用ゆ可きものでも無ければ、設令病者たりとも、量を過ごすと云ふ事は大に謹しまねばならぬ事であります。

煩悶脱却の良方便

鬼笑子

今日の世に當つて一身一家を立てんとするもの、何は扨て置きまづ心膽を練る事が第一の必要なり。心膽を練るといへば何か武者修行でもするやうに聞こへ、又禪學でもするやうに思はれて一寸殺風景に聞こへるけれど、よく考へて見れば一家の主婦たる者には禪學以上、武者修行以上の心の鍛錬がなくては一日も務まるものではない、何となれば今日生存競爭の世に當つて苟しくも一家を保つといふ事は恰も戰國の武將が一城を支へ、一宗の祖師が山門を開いたと同じ事で、時時刻々敵の襲來、外道の逆襲を免がれないのである。其の敵、外道といふのは即ち身を守り家を守るに就ての生活難で、貧者にあつては金錢の缺乏、富者にあつては誘惑、病氣、災難、其外無形なものに至つては世間の所謂毀譽襃貶、人の噂、交際上の義理とか、體面

とかいふもの、皆是れ人が世に處するに當つて不問に附し難き處ろの敵、外道なり、是等の敵外道は一年三百六十五日、雨の日にも風の日にも、日曜にも大祭日にも朝にも晩にも、食事の際にも睡眠の際にも、旗鼓堂々千軍萬馬の矢叫びを以て我が一家に押し寄せて來るのであるなり。

若し此際に當つて一城の主たるものに武邊の心掛なからんか、忽地敵軍に蹂躙されて城廓は憐れ墓なくも破壊し去らるなり。今日の婦人が、煩悶に暮れ神經衰弱に陥るのは畢竟この邊の工風なきが故なり恰も武邊の心掛なき武將が敵の爲めに其



の本城を蹂躙さるゝのと同じ事なり。足利十三代以後の公方樣のいくぢなきと同樣なり婦人としての心膽の修練の淺き豈歎かはしからずや。

嗚呼悶煩も久しいものなり、婦人の氣鬱も久しいものなり、文明の弊害も久しいものなり、神經衰弱も久しいものなり、小心翼々、氣兼ね、氣苦勞も久しいものなり、彼等は何の因縁なればこそ斯くは屑々、拘々たるぞ、彼の鳥を見よ、彼等は自由に飛んで自由に囀づるにあらずや。

萬物の靈長たる人間、何を苦しんでこの小禽にだも若かざるや、嗟。

三千世界とは什麼、と問はゞ一心の所作にありと即答する位ならずば身は持てるものにあらず、黄金何物ぞ、富何物ぞ、畢竟是れ一の土塊にあらずや、美人何者ぞ、貴人何物ぞ、一皮剝げばこれ臭き骸に過ぎざるなり三代の榮耀も一炊の夢にあらずや、人の噂も七十五日、浮世は屁の如きものにあらずや、人間は皆蜉蝣のごときものなり、世渡りは小兒の戯れに過ぎず、こんな馬鹿々々しい浮世に生れて來て苦勞も糸瓜もあつたものにあらずと、浮世のどつそこを悟つて仕舞へば千百萬の敵軍押し寄せ來るも鼻息一つで吹き飛ばして仕舞ふこといと易きなり。女はよろしく心太かるべし何の浮世の蛆蟲め等がといふ位な見識を以て一切萬事に當るべし、此の心だにあらば、毀譽褒貶、譏り、はしりも何の河童の屁とも思はず。そこいらの有象無象が世迷言を並べたつて牛の角に蚊がたかつたとも思ふものが燕雀奈ぞ大鴻の志を知らんやだとツンと澄して居れば結局我が身の高き事、恰も月世界に居て遥かに下界に臨むがごとし、浮世を河童の屁と思ふのは婦人が今の世に處するの良方便なり美服を飾る奴はカツタイ坊の生れ變りと思ッて仕舞へ彼等は前世の頽れ身を隠さんとして此の世で體裁を裝ふて居るのである、素衣粗服に甘んずる此の方がよつぽど天眞爛熳だと思へば何でもなし、美食する奴は餓鬼の生れ變りと思つてしまへ、奴等は前世で食ふ事が出來ざりし故仕方なしにアンナ眞似をして氣を慰めて居るのだと思つて仕舞へば腹も立たざるなり無暗に威張る奴を見たら、巣鴨病院の患者と思つて仕舞へ若い夫婦を見たら情死の道伴と思つて仕舞へ、婚禮の華な行列を見たら避病院行きと思つて仕舞へ、お抱へ車で威勢よく飛び廻る人を見たらば、火の車に乘つた奴とおもへ、金の指環をひけらかす人を見たらば、蛇に喰ひつかれた奴とおもへ、琥珀の帶をひけらかす人を見たらば、腰繩にくゝられて居る奴とおもへ、奢る人を見たら懲役人と思へ、金持を見たら糞尿擔ぎと思へ、すべて羨ましいと思ふ人をば一切蛆蟲同様と見做して、我が胸中に一點の介する所ろなく、いつも光風霽月朗々、神の如く聖人の

如く、浮世の人は皆我が奴隷であつて、此の世は我が爲めに設けられたる處ろの一大遊園であると思つて仕舞へば、苦勞もなく、心配もなく、いさくさもなく、天地寥廓、日月爽朗、恰も五千年前の太古に立歸つて神の世に合體したる思ひあるべし是れ煩悶解決の最良方便にあらずや曠々漠々、洸焉として物に拘はる處ろを知るなり。

媒妁人へ開示せし　結婚の條件

鈴のや

今年の初雪、富士の高嶺に白妙を粧ひ、武藏野の秋今闌なりと報じ來り候、この夏大磯にて拜眉を得候以來、頓と御無沙汰いたし、其後とても御變りなく、益々御壯榮奉賀候。

其の節御話し致し置候件、其後熟考いたし候へ共、別段名案も出で申さず、さりとてあまり永びかせては先方の思惑もいかゞと存じ、遠慮なく愚見申上とくに尊兄並に奥樣の御配慮を煩はせし上思召のほど、徐ろに先方へ御傳へ被下て御交渉を御開き下され度候。

婚禮は子孫萬代の礎、人間出世の根底など鹿爪らしく申すまでもなく、成るべくは選びに選びて理想に叶ひ候ものを娶るこそ、肝要と存じ候が、實際の處ろ昨今の傾向は、結婚を一種の政略に利用し出世の土臺とせんとするものにて、黃金結婚にあらざれば、閥族結婚にて、實際雙方の理想に合ひし者を求むるは殆んど稀れなる有樣に候、此の傾向の可否は兎も角、黃金結婚なり、閥族結婚なり、内容を觀察して見候へば、其の裏面には必ず幾多の事情の伏在し居る事は、無經驗なる吾々等の推究するに難からずと存じ候、まづ金力結婚ならば、失敗しても、妻の實家は大金持、うまく持かければ纏つた資本を引出せやう、今の世の中は黃金萬能主義など〻、無暗に力を頼る心持に相成、獨立の精神は悉く消耗し、失敗しても困らぬと、失敗もせざる前より、早く逃げ道を考へ、安逸を貪らんとするも

の多き次第に候、成程長い浮世に短い命、これも一種の處世術としては宜しく候はんが、苟も男子世に立つ以上は、男一匹の意地あるべくどこまでも獨立の思想あり、不抜の精神あつてこそよけれ。しみつたらしい、妻の里から金の工面なんぞ、聞いたゞけにて其の人の理想も推し測られ候、唾棄すべき儀に候、一體男子世に立つ以上、人を頼ると云ふ事程、害になるものは御座なく候、どこまでも獨立獨行、實力によつてやらねばならぬ義に候、然るに人は難を厭ふて易に就き易き弱點より、稍もすれば結婚を利用して、貴族名門に寄りすがり、その勢力によつて事を成さんとする人多く候、成程その方便は至極妙工風に候はんも、それは將來其身の爲めによろしからず候、修養時代は何處までも、修養をする必要有之候、然らざれば一朝不幸に陷り候場合には、闇夜に燈火を失ひし樣にて、其の時の苦痛は先きに困難苦辛を續けたる時よりも、尙ほ一層かと思はれ候、況んや壯年活氣の時代ならばまだしもなれ、妻子を有し一家を維持する場合に於て、屢々岐路に迷ふ事は、自分も辛く又人の思惑も見づらきものに候。

斯かる悲運の場合に相成候へば、金によりて成立したる結婚は必らず變動可致候、殊に豪華の絹布團に生長して、箸の外重いものを知らず、米の直段は何程するか御存じなしと云ふ方ならば、此樣な貧乏な人に連れ添ふ事はいやだ、吾々の一生は苦勞しに生れて來たものでない、あゝ馬鹿らしいと云ふ考へから、貞女兩夫に見えずと、倫理の先生が學校で講釋したのは、支那の昔の古い事として廿世紀の今日には斯る馬鹿げた理屈はないと考へ、いざ歸らうと遂に破鏡の歎を見ること少なからずと思はれ候、若し初より貧苦の間に成長して、倶さに世の辛酸を嘗めたる女子に候へば、斯かる時こそ夫を助くべき時なり、少しも驚くに及ばず、榮枯盛衰は浮世の常、苦しみあれば樂しみありとの理を解へて居る故、却て夫を勵まして他日大なる成功を爲し遂げしめるの動機となるものに候、殊に人は、平和の時代に十言の甘言よりも、悲運の時代に一言の勵言

が、大に効果あるものにて、斯る際の一言は自己の精神に非常の感動を與へて、精勵する事と思ひ候、殊に妻たるものゝ夫を助くると云ふは此所にて、此の一事を措けば、料理や裁縫は、人を頼んでも出來る仕事に候、人の妻としては此の精神上の助力が一番肝要かと思はれ候、それ故私はあまり金持のお孃様より身分相應のものが宜しく候、殊に吾々の時代は七轉八起で前半世は、先づ轉ぶ方が多いとも存じられ候、去りとて轉ぶを喜ぶと云ふ譯には無之候へ共、見渡す世間は先づ轉ぶものゝ方が多數にて、起るものは極めて少い樣に見受けられ候。

貰ふ者から考へて見れば、誰れしもこれが殊に離緣と云ふ事を恐れるものにて候、折角丹精して作つた家產を打任せて、漸く慣れて自分の思想と調和せやうとした所にて、何か一時の瑕瑾の爲めに破鏡の歎を見ることに相成候へば、其時自分の鋭氣を挫くのみならず、一時の差支と社會に對する體裁も甚だよろしからず候へば、軍人社會などにては、多くは親もなし、兄弟もなし、只品行方正學術優等と云ふものを望むもの多く候、之れは必竟如何なる場合に處しても、他日離緣沙汰も少く間違を生ずる事も少い爲めから來た考へかとも思はれ候、容貌とて素より美なるは望ましき事に候へ共、完全は望み不申多少容貌は醜なりとも、心の美なるを望ましく候、突飛の時代は前後の考へもなく、無闇に美人〳〵と騷ぎ立て候へ共、偖て實際に家政を執らする點になると、却て當世風の美人よりも、小生は質素なる田舍者を選擇び候、廣い世間を推し均しても、美人で學問もよく出來、家政も取れると云ふ三拍子揃つた人は少きもにて、多少容貌は惡るくとも、學問の出來家政の取れると云ふものは澤山あるものに候寧ろ容貌の惡しきものゝ方に學術品行の秀拔なるもの澤山あると思はれ候。

次に小生の身に取つては今の處經濟が第一に候、顏よりも風采よりも經濟をうまくやつて貰ふ方でなくては、一日も立行き申さず、さなくば他日理想の家庭もスヰートホームも作れたものに御座なく候、自から拔

改て申すも可笑しく候へ共、愈々相談纏るとならば、一應此邊の事耳に入れて置かねばならず候、實際小生は昨年法科大學を出たばかりにて、まだ雛子に候、殊に閥族名門の手を借らず。どこまでも獨立獨行と云ふ心持故、從て誰れにたよらん傳手もなく候へ共、幸に同僚の諸君は無給で山家の裁判所などへ廻はされて、きうきうこき使はれて居る中に、五拾圓でも戴ける身となり候は、天の賜のと思ひ候へ、今日物價騰貴の世の中多少餘分の收入はあるとしても、中々樂な暮しは出來兼候、拾圓の家賃を拂つて、新炭米代を計算して、偶に西洋料理の一度も喰ふと思ふには、かつかつの經濟、とても洋服を毎年衣ると云ふ樣な餘祐はなく候、小生一人で暮してさえ此位に候、別に一人不生產物植るとしたら、今日の收入のみにて遣つて行く事は覺束なき次第に候、併し黄金の家庭に成長して、米の直段を知らぬと云ふ美人の御孃樣より、貧若に成長した、節操正しきものを、希望いたし候。

學問も深く技藝も上達したるを望むは海山の事に候へども、當今の女學校出位で十九や二十位のものにはなかなか斯かる堪能なるものは無かるべく、先づ普通日用文の往復と日記帳が書ける位の事で、活花や茶の湯も一通りは知つて居らるゝならんが、昨今の高等女學校出にては、衣服も完全に出來得べきかゞ疑問と思はるゝ位にて、小生の親戚の妹などは學校の成蹟は先づ以て上等の方に候へ共、卒業後裁縫の稽古を專門の師匠に就て學ぶと云ふ有樣に候。

嫁入早々主人の寐衣までも人手にかけると云ふ有樣では、少々閉口の次第にて、夫れも多分の財產でもあり經濟も何不足なき時代ならば、兎も角漸く朝暮の炊烟を擧ぐる位の生活では、そうそう奥樣に活花や茶の湯のみをさせて置く譯にも參らず、斯かる次第故、貧乏ながらも一家の主人となつて、愈々選擇に取りかゝると、長し短しで適當のもの無之候。

小生の友人などは隨分高望みをいたし、金もあり女も善かろうを希望し居り候へ共、夫れには夫れ丈けの準備と云ふものが必要にて、自分の手前もわきまへず

に無闇に高きを望んだ所が、到底遂し得べからざるものにて、所謂磯のあはびに片おもい、末は巖頭の感を書いて人生不可解に一世を終るものなきとも限らず、空想を抱いて、よしなき思をなさんよりは、先づ〳〵分限相應と云ふ事が一番大切と存じ候。

持參金付も宜しく候はんが、前に申ます通り其の裏面には何かの事實伏在する樣に相見え、殊に賴むべからざるは金力にて、智惠と金との優劣を比較したら、成程一時の効果は金の方が多く候はんが、智惠は之れ程之程と金の力の如く著しき効果はなけれど、常住不變其の人に付いて廻るものにて、考へだにあらば何時か成就する時あるべく、此の場合に相成候へば遙かに智惠の方がよろしき樣に存せられ候、婦人の無分別と來ては話しになつたものに御座なく、夫れでなくとも女子と小人は養ひがたし、主人たるものは少々閉口する事と存じ候、家貧にして良妻を想ふとは、多少此の邊の事情をも包括して申した事にて、實際には良妻が必要少々位は金を出しても怜悧なものを選擇したき心地いたし候、金は付きもの浮世の塵も同然、運よくて眞面目に働いたら、一世樂に喰ふ位の財産は作り得べきものにて、敢て心配に及ばぬ事と存じ候、去りながら妻が不始末であつたら、いくら主人が働いて取つても燒石に水、とても溜つたものに無之候

不德義の一例は、最初金持から貰ひて、洋航の費用までも出させて、立派に出精が出來て、もう獨立と云ふ時になると、氣に入らぬものなら離緣をして新しいのを迎えるのも一策ぢやないかと申すもかも有之候が之れは隨分不道德の話で、人間たるべきものゝ取るべき主義には無之と存じ候、昨今成功の域に進みつゝある名士の内には、隨分斯かる卑劣の手段によつて、出世したものも有之、洋航させてもらふた人も御座候が、後に熟ら〳〵考へ候へば、良心に耻ち入る事と思はれ候、如何に困つても小生は全然此の主義に反對せざるを得ず候、必竟社會を腐らすのは斯かる一時逃れの心に胚胎するものにて、風教上よろしからぬ事と存じ候。

近來の女學生は、舅姑のあるのを厭ふて、何んでも夫婦かけ向ひの所を希望すと云ふ事に候が、小生の如きは、別に論ずる必要も無之候へども、全體嫁入るもの丶本質として、舅姑は必ずあるべきものにて、嫁としては之れ等の舅姑に對する勤めを全ふして、初めて完全なる嫁の資格のあるべきものに候、苟も舅姑のあるのに恐れる樣の人ならば必竟其の人の內心は、難を避けて安を偸むの徒にして、先きに苦しみをして後に樂を望む人とは大の反對なれば、とても將來の大成功をする事は六ケ敷と存じ候、一體氣樂と云ふ事は誰れしも望ましき事に候へ共、其の氣樂が御互に丹精をした後の氣樂なればよろしく候へども、末の考へもなく、只徒らに安逸を貪ると云ふ事は、世に處するの上に於て最もよろしからざる事と思はれ候、壯年時代に辛苦を嘗めて而して後の氣樂を求めたいと小生は只管希望致し居り候。

我儘勝手、御心易きまヽ、くだらぬ事まで書きつらね候へ共、平に御ゆるし下され、聊か小生が意中の存する所を御洞察あつて、御同感の點も有之候へば、尊兄の御手心にて先方へ御交涉を願ひ度候、尙ほ幸にして此談まとまり候とも、結納や披露はほんの御印だけに止めて、他日出世の曉に讓るべく、とても名ある會席などへ數多の知人を相會して正式の宴を張るなど、とても貧的なる小生の及ぶ所に無之、去りとて一世一度の御目出度き事に候へば、先方にて多少の補助を與へてくるヽ樣の事に候へば、小生は千萬希望に御座候呵々。

長々勝手がましく申上候へ共、何卒奥樣とも篤と御相談の上、よろしき樣に呉れ〲も願上候、乍末筆時下郊外散策の好時節、來る廿七日には女子大學にて秋季運動會など有之由聞き及び、幸ひ宅の妹在學いたし居り、入場劵も用意いたさせ置き候間、妹御樣御遣はし下され候へば、愚妹と御伴いたさすべく候、先づは當用のみ、餘は拜晤萬縷可申述候頓首(十月十日燈下)

女裝昔物がたり

すゞ子

○婦人貞操の爲めに髪を截るいはれ

夫死して後妻髪を截るは古今の通義なるが如し、然れども髪をきる事の初めは夫の死して貞操を守るとより出でたるにあらず、古事談と云へる書に此の由來を記して曰ふ、昔し花山院の御時、惟成卿と云へる歌よみありて、月卿雲客其の門に往來せり、されど不幸にして家貧しければ惟成の妻はにした者の體をして、夫に仕へ内助の功を完たからしめたり、ある時惟成の主唱によつて、花見の宴會を開き、各一種づゝの持寄をなして遊ばんと云ふに、惟成には飯を宛てられたり、素より貧しくて用意はなけれど、出でゝ宴會に加はりたり、然るに妻は此の時種々工夫して飯の外に、雉子酒をも添へ、長櫃に入れ使に持たせて、花見の場所に持たせやりければ、一場の人々皆感じ合はざるはなかりき、其夜惟成妻と臥し、手を出して髪を探ぐるに、切りてなし、驚いて其由を問へば、今日は太政大臣とも申す人の御宴にてあるべければ、髪とかへて彼の長櫃を仕度して、になはしめたるなりと云ひて、妻敢て愁ふる色なく、常の如く笑ひて居たり、それより以來妻の貞操にして、夫によく仕ふるものは、折角の髪をきりたりとて、何も惜しかるべきかと云ふ事になり、遂に轉じて夫の死後貞操を守るが爲めに、髪をきる事になりたるものなりとぞ、果して然るにや。

○鏡のはじまり

凡そ女の紅、白粉を粧ふは敢て好色の爲めのみにあらず、之は禮儀の一として、女の一日も怠るべからざるものなり、而して其の化粧するに第一必要缺くべからざるは鏡なり、それ故に鏡は昔より女の守りとも魂とも云ひ傳へしなり、日本開闢の初めに當りても、此の鏡は尊重せられしものと見え、神代の卷を見れば、國常立尊の御子に、天鏡の尊と云ふ御名を付たまひし事あり、即ち物あればこそ其の名あるものにて、古き神代の昔より、其の重寶今にかはることなし。

○方　鏡

鏡は月に象る物ゆゑ圓きを本質とすべきものにて、萬葉集にも眞す鏡照るべき月をなどゝ、月によみかけたれば圓きと明かなり、然れども古く方鏡あるは用ひ方ありて造りし物ぞと思はる、去れば西京雜記にも漢に方鏡あり影倒に見ゆといひしは、即ち此の鏡の事にして、機鏡なるべし　延喜式の内匠寮式令より千年前の書にも御鏡一面方七寸とありて其の御鏡を鑄たる事をも委しく記したり、是は帝の御鏡なるべし。

○八ツ花形の鏡

鏡は菱の花を見て作りはじめし物と云ふ事も、支那の書に見る所なり、夫れ故鏡の異名を菱花と云ふ、古菱、紫斑、紫珍、鸞頭、百錬、壽光、散文、白崎、これみな鏡の異名なり、

○唐　鏡

一條院の御代の書物を見るに、からの鏡といふ言葉あまた散見せり、其一に清少納言が枕の草紙にも「からのかゞみのすこし(少)くらき(暗)みたる」とあり、此時代は唐國の便いと易かりしゆゑ、萬事の調度皆支那より來りしものを用ひしゆゑ、唐鏡と云ひ傳へしならん、今日にても神佛の什物にこれは某の持ちたまひしと云ふ鏡、大底唐物多し、されど千年以前の和鏡は唐物にまぎれやすく、本職にあらざれば確と鑑定なりがたし。

此の外増の鏡、鶴の鏡、松山鏡、懷中鏡などあれども、皆時勢の進むと共に後人の考へより製り出されしものなり。

○櫛のはじまり

人あれば必ず髮あり髮あれば櫛もあるべき理にして、今日でも洋服に束髮の人は別物なれども、それさえくしあり、我國の櫛は鏡よりは先にありし物の如し、神代に櫛の事見えしは、伊弉那岐の命(男神)伊弉那美の命(女神)と御合ひあつて、女神の御腹に御子三十五人產み玉ひて、遂に身まかりしかば、出雲國と伯耆國の境なる某の山に葬り奉りしに、男神の命御妻いざなみの命を慕ひて、黃泉に至り玉ひて、御妻の屍を見給ふに時恰も闇かりければ、左の髻に刺せ玉ひたる櫛の親柱を一箇取りかきて、火に燭して女神の屍を細に見、さて還り玉ふ時、冥土の鬼魅命を追ひかけゝれば、命黑御鬘を投げ玉ひしに、鬼魅葡萄かとおもひて、拾ひ食むの間に逃げ行きしに、又もや追ひ來りしかば、今度は右の方の櫛をなげ玉ゐて逃げ行きしこと、之れ神典に見えたる始めなり、此の延喜よりして、投櫛は頗る忌むべき事になり、人に送り物とするにも、櫛は必ず忌むべきものとせるなり。

○丸　髷

髮に結ぶりの名が出來し以來、凡そ百年をも經て伽羅の油といふ物出來て後は、髮のゆひぶりに樣々の名も形もありしかども、今日にまで傳はれるは、かたはづし、丸髷、島田の三樣なり、されどかたはづしと云へるは、御殿、奧方の間にのみ結はれて、下等社會や町人風情のものには用なし、島田は一般に娘の時代に結ふものにして、嫁入して齒を染むれば用なし、上下老若共に重寶に結へるは丸髷なり、この丸髷をかつ山の崩しなりとするものあれども、違へり。

○兒　髷

これは多く堂上の公達、元服以前の童の結ひたる者にして、女童のゆふべきにはあられども、未だ潮花開かざる内は男童に均しと云ふ所より、女にも結ふやうになりしなりと。

○おばこ結(櫛卷)

町家の人や下賤の人達が、蛇の蟠たる樣の形をなして髮を結をおばこむすびと云ふ、その名何れより來れるかは知れれど、寶曆年間淺草觀音の邊に、みなとやお六と云ひ、名高き美人ありて、髮も上手に自分で結ひしが、時々櫛をさかしまに卷こみて結けり、世人是を櫛卷とてまねしていふ事となりたるなり。

運命須知

西洋哲學者の見たる人相學

（人物觀相法）

潛龍洞主人

人間の顔は、取りも直さず心の狀の映る鏡で、心持の善惡美醜は悉く其の顔面に顯はれるものですから、顔の相格を見て、直ちに其の人物、性質の如何を鑑定する事も出來れば、又た其の人の現に思案しつゝある事の何であるかを判斷する事も出來ます、古本屋の店頭に轉がつてゐる三世相など云ふ本を見ると、「人相十二宮」だとか、「三停五岳揃ひしを貴しとす」とか云ふ樣な事が載せてあり、貧窮の相、下賤の相、貪欲の相、傲慢の相、淫亂の相など申すいろんな顔立が事明細に圖解してある、併し是はもと支那から輸入したもので、東洋の人相學と謂はゞ謂はるゝものゝ、其の說く所は甚だ淺薄で、學問といふよりは、單に一個の方術として傳へられたものに過ぎません、然るに西洋では古來立派な學者達に依つて研究されたお蔭で、既に人相學と云ふ獨立した學問にも成つてゐる位ですから、其の說明は理窟に合ひ、從つて趣味も深いのであります、今左に此等西洋の學者達が人相に就て說いた所を擧げて、人物鑑定の一助と致しませう。

△顔と心の關係

人相學者の泰斗瑞西のラヴエータア氏は、人間の顔附に就いて說いて曰く、凡そ此の世の中で、『顔付』と云ふものを離れて働いて居る人はない、誰だつて、馬鹿に美しい可愛げな人と、憎さ氣な人との間に、區別をしない筈はありません。又た初對面の人と一緒に成つた時に、其の顔色に從つて判斷したり、批評したり尊敬したり、輕蔑したりしない人はありますまい、何故かといふに、顔を離れては、ちよつと人の區別のしやうがないではないかと言つたのである、又博士ケロック氏が、顔の美と心の美との關係に就て言つた事が面白い其說に依ると一體人面の美といふものは、只外

部の皮丈に止つてるものではない、その眞實の土臺は何處にあるかといふと、心の底にあるので、汚穢い心の宿つてる顏は、決して美しい筈はない、それに又美しい心は如何に神樣が顏の道具を描く拵へたにした所が、左う醜い容貌に見える譯はない、顏は全く心の鏡で、心の邪正と美醜は、殘らず顏に映るのである。

又たウイルキンソンと云ふ人は、感情と顏色の關係を說いて、斯う曰はれた、戀といふ心は、面の皮を薔薇の樣に赤くする、是は正しい色である、戀の爲めに耻しいのは、パッと赧くなるけれども、それと反對に若し惡い事をした爲めに耻をかくと、同じ赤くても汚い色になる、又人を怨むと、いやに白くなるし、嫉妬は靑くなる、怒ると黑くなつて、失望すると死人の樣に鼠色に成るが、僞善とうそつきとは色が定つて居ない、そこで天來などと謂つて人間が善い事に一生懸命に成つた時には、滿身から後光がさすやうになる、釋迦や、基督の如き聖人が天來の感動によつた時には後光がさしたのである、どうも嘘はつけぬものである。

△鼻の相

鼻に就ては、千古の英傑奈波翁の言つた事が面白い、曰く、馬鹿な話の樣ではあるが乃公は何か大きな仕事を爲るために、人の入用な時には、何でも鼻の大きな奴を選むことにした、乃公の觀るところでは、鼻の大きな奴は頭腦も屹度大きいやうだ、何でも可いから鼻の大きな奴が澤山欲しいものだ。

ラヴエータアの說によると鼻の小さいものは必ず臆病で、それから開いた鼻は感じの尖い證據です。

それから、タグリアコッジと云ふ人は、鼻の形を相して次の如く言ふて居る、先の尖つてる鼻は怒りやすい證據で、肉の厚い、推つぶした樣な鼻は下等な氣象をあらはし、獅子の樣な大きな丸ッ鼻は、勇氣のあることを示してゐる、それから先の鈎のやうになつて居る鷲鼻は、忠孝信義の氣高き心を現はす、若し夫れ片方へ曲つた鼻と來ると、心の曲つたのが見え透てゐる。

△唇の相

人相學者ラヴエーターア氏は、唇に就ても餘程詳い事を言つてゐる、曰く、唇も心と大關係をもつてゐて、唇をシッカリ結んでる人は、心もシッカリしてゐるし、唇のだらしがないのは、心もだらしがない、それからキチンとした大きな釣合のよい唇は、少し陽氣の方ではあるが、惡人、小人、佞人の輩ではない、唇が無いかと許り思はるゝ程に薄いのは心の冷たい人ではあるが又決心の強い、きちんとした事が好きな人間ですそれから其の兩端が上の方へあがつてゐるのは、見エ坊で、御座也をいふ人間であつて、強慾な心を持つて居る人、又、肉の厚い唇の人は、慾が深い　又懶惰者である、唇の内へ縮つて居るのは苦勞性です、また、工合よく穩やかに縮つてゐるのは、確かに思慮の深い、腹のしつかりしてゐる印で上唇の柔和にたるんでゐるのは善人の標識、下唇の中央部が凹んでゐるのは感じ易い氣象で、餘り強くなく結んである唇は、勇氣のあることを示してゐます。



△齒の相、腮の相

ラヴエーターア、又た曰く齒の長いのは小膽な標識で白い奇麗な並びのよい齒で口を開くと直ぐ見える齒、と云つて平常は飛び出して居て殘らず見えるのでない──斯う云ふ齒は、善良正直の人である。

又た『腮の尖つて居るのは、鋭敏で手先の器用な事

も示し、稀には極くえらい人にも斯ういふのである。柔かい、太つた二重腮は一般に豪奢な事を示し、四角な腮は用心深い、行渡つた人間で、腮の扁たいのは、心の冷たい小膽な證據で、丸い顎のあるのは、慈悲深い記號である。

△目の相

リースク博士は眼の色に就て下の如く言へり、鼠色の目は、一體に鋭い勇氣のある人で、最初はツキが悪いが、眞劍の時には頼みにする人だ、其の證據には、慈悲深い人の眼を御覧なさい、乾度鼠色だ。

次にバツフオン氏は曰へり。目の黒い人は、健康で、しつかりした人間で、物に動じない、高潔い心を持つてます、近眼の人達は、怜悧で、小取廻しが巧く、工風をする事が上手で、小さく凹んだ目の人は、腹はしつかりして居ないが、人の反對に立つと、頑强で、惡い事には仲々敏捷い、それから目の大きい人は、貪慾で、吝嗇で、えらくなると殊に甚しい、絶えず動いてゐる眼は、目の性の惡いのを表はすと同時に、恐怖坊なることを示してゐる、餘り動かないで、光のある眼は、豪傑のしるしで、敵を威服させることが出來ます。

△眉の相

眉に就ては、クウインチリアンと云ふ修辭學者が斯う云ふことを言ふて居る、眉も或る程度までは、目の格好を拵へるものです、而して眉の格好で、額が大きくも小さくも見えます、其許でなく、眉は能く人の感情を現はすものです、即ち眉が寄ると怒つてる事がわかり、眉が下ると悲しい事がわかり、又た之が弛むと嬉しい事が分ります。

又たラヴエーターも面白い說を立てゝゐる、額の眞中に付いて居る、うつすりした眉の人には、大哲學者や、大豪傑はありません、それからハツキリせず要領の得ない眉は、短氣で身體の弱いことを示してゐます、また眉が目へ近ければ近い程、熱心なハツキリした氣象で、其が遠ければ遠いほど、活潑な惡氣がない人間です。

△頭の相、額の相

頭の形は何んなのが宜いかと云ふ事に就て、ユーアルは説明すらく、人の頭といふものは、額の方と後とが、心もち出ッ張ッて居て、両側が稍々壓つまつてゐるのが宜しいので、額が馬鹿に扁つたく、後の方でガタッと落ちてるのは餘ンまり怜悧とは言へない、而して小さい人間が大きな頭を持てゐて大きい人間が小さい頭を持つてるのは、至極好いしるしです。

額に關するラヴェータアの説は次の如し、額が廣ければ廣い程、聰明ではあるが、餘り活發ではない、壓迫けられた様に狹くて、つまつてるのは、心の牢固な人であるが、又物に動せぬ方である、生際の丸く角のないのは、柔和な記號、同じく眞直なのは嚴格な記號で、生際から眉の處まで、きちんと眞直なのは了解の悪いしるしで、生際だけ丸くて、額の切立てるのは、考へ深くて、心の冷靜なる事を示してゐる、出ッ張つてるのは弱く、不熱心で、馬鹿な事を示し、引込んでるのは、怜悧で、頓才のある事を示し、いやに四角張つて飛び出してるのは、腹のしつかりしてゐて、勇氣のある、ソレデ忍耐力のある事を見せて居ます、それから目の上の骨のいやに目立つて、丸るく成てゐるのは、えらい人にあり勝の相です。



△毛の色

千古の哲人アリストートルは、毛に就いて語るらく毛のやはらかい人は、弱いしるしで、硬いのは乾度強い、是は人間ばかりでない、動物でも其の通りで、鹿や兎や羊などは、皆んな柔い毛を持つて居るが、獅子や野猪と來ると他の動物とは比較物にならない程に硬い毛が生えてゐる。

又獨逸の或る哲學者は毛の色に就て斯う云ふ判斷を下して居る、白い柔かな、清洒な髪は、大抵氣の弱い、怒り易い臆病な性質を表してゐる、故に怒りッぽい人の毛に、短くて硬くて、縮れて黒いのゝあつた例はない、それから白い毛に不正直な人はないが、眉の色の薄い、髪の毛の黒い人には、腹の黒いのも少くない、それから毛の長い人には氣の弱い方が多いやうだ。併し此髪の毛判斷は日本人に少し當恰らないやうです。

▲十月の花暦

蟲　蘆（上旬）　道灌山　高田山吹里　目黒　本所成

菊（中旬より）（團子坂　淺草公園　染井　文　仙臺坂仙華園　其他各植木屋

鯊釣（十月一日より四月下旬迄）（青梅日野近傍　白子附近　多摩川沿岸　洲　崎沖　羽根田沖　中川筋　幕張沖

運命と骨相

龜卜子

人相骨相といふ事は古來洋の東西を問はず、人間交際の間に信じ用ゐられたるものにして廣くは男女の結婚に就て、朋友相交はるに就て、又將師が其の部下を採るに就て主人が雇人を用ふるに就て、すべて人と人とが相接觸するに就てはまづ其の對手の人品、骨柄を認め、彼れは善人の相なり、彼れは惡人の相なり、彼れは富貴の相なり、彼れは窮厄の相なりといふが如く、漠然たる品評の間に自から、其の特殊の點を發見して取捨したるものゝ如し、而かも這は唯、想像上、若しくは嗜好上より下したる概定に過ぎずして必らずしも學術上又實驗上に確定したる根據あるにはあらざりしなり、されば人々の想像や嗜好に迎合して考へられたる處ろの人相學、骨相學の如きものは元より牽强附會のものにして科學上確乎たる根據のあるべき筈はな

しと雖も古來これに依つて人間交際の上に多少の影響を及ぼしたるものありとすれば、人類進化の大則により、自然淘汰の作用上、幾分の價値なしとせず、假へば道德高き老僧の顏と、殺人、持凶器の强盜の顏とは何人の眼にも明らかに認識さるべき特種の面貌あることは爭ふべからざるが如し、故に俗說の人相學も又必らずしも痴人の翫弄物として一笑に附し難きものあるべし、依て今こゝに古來東洋に傳はれる人相と運命に於て聊か記述せん。

◎頭の部

▲婦人の頭圓きは貴き相にして細く尖れるは賤し。

▲頭骨の隆くして起き肉厚く豊かに節くれ立つは大吉立身の相也。



▲魁頭は福相、偏頭は貧相、尖頭又は後方斜殺は下賤の相也。

▲頭形　四角なるも又圓きも肉づきて骨を露はさゞるは貴人の相也。

▲頭骨の尖りて肉角を生ぜざるがごときものは僧侶、學者等にありては道德堅固なる相なり、但し常人には吉ならず。

▲頭の中間に陷みあるは辛苦多き相、又肉薄くして、高低あるは、寒苦の人也。

▲頭の間口狹くして奥行のあるは堅忍の相、間口のみ廣くして奥行なきは薄志の相なり。

▲頭小にして髪多きは流浪の相、又大にして髪薄きは困苦の相也。

◎顔の部

▲婦人の顔面長きは豐艶者と同じく富貴、短くして扁面なるは下賤の相なり。

▲婦人の顔長くして眼の圓大なるは夫を尅し、斑點あるは孤獨の相。

▲婦人の顔廣くして鼻小さく又低きは夫を替ゆるの相也。

▲顔色赤紅なるは性急の相、蒼白なるは輕薄、白きは温厚、黒きは剛愎なり。

▲喜怒哀樂に依りて顔色直ちに變るものは躁急にして短命なり。

▲顔の上部擴大せられ形稍卵の如きは才智鋭敏の人。

▲顔色白く身黒きは賤、顔黒くして身白きは流浪する相。

▲顔瘦せて身肥へたるは長生の相之に反するは短命又性急なり。

▲顔肉豐かに血色潤しきは巨福、之に反するものは困窮に陥るの相。

▲顔面圓くして威あるは富貴、角にして羸弱るものは寒苦なり。

▲顔面何となく賑かなるは富み榮ゆる相、之に反して何となく淋しきは發達せざる相。

◎髪の部

▲婦人の髪の生際のもげるものは多淫、又薄くして光澤あるは貧窮の相。

▲婦人の髪の色黒して細く長く艶あるは出世すべし。

▲婦人の髪毛赤くして太く且つ短きは下賤にして貧苦の相。

▲婦人の髪の毛の生際の左右に犬牙ありて毛先縮れたるは貧窮の相。

▲肥へたる婦人の髪少きは非運、又瘦せたる婦人の髪多きは夫に先立つ恐れあり。

▲男女共に老て斑白ならざるは宜しからず子に離れ又苦勞す。

▲髪の毛粘り氣なくさら〳〵する者は散財、艶ありて赤く縮れたるは色情に惱むべし。

▲髪細かにして柔かなるは、温良にして、荒らく硬きは倜儻き人。

▲色毛の者は破產の相、硬く蛸の如きは暴逆にして傍若無人なり。

▲髪毛粗雜なるは必ず外裝を好み、細密なるは内氣也。

▲髪密にして黒きは物事丹精するの心に富み、疎にして赤きは放縱にして疎雜に流る。

◎額の部

▲額廣くして厚く隆肉にして潤きは最も貴相也、其小にして狹く皮肉の薄きは賤相也。



▲額尖り又は狹く又は缺陷あり又は削れたるが如きは薄運にして貧苦なり。

▲額の肉落ち色枯れて艶なきは志望遂げ難き相、又額上赤色を顯はすも不吉の相なり。

▲額左右の突骨隆起せるは名を揚げ家を興し、左右の骨相を異にするものは親に早く別る。

▲又一說に左の骨高きは家を興し、右の骨高きは事を破る相也と。

▲額色は黄、紅、紫氣を吉とす黒、赤を不吉とす。

▲額に山字形の筋あるは立身且つ長壽、川の字形を爲すは破產且つ難に遭ふべし。

▲額に一字形を爲す筋あるは大吉にして商人なれば大

利を征すべく士人ならば萬人の長となるべし。

▲眉と眉との中間肉起き艶あるは貴人の薦によりて立身すべし。

▲婦人の額低く陥りたるは薄運にして縁は變るべし。

▲婦人の額廣くしてこんもりと高きは吉、狹くして凸凹あるは賤相なり。

▲額の靑味を帶べるは驚愕、黑氣味を帶べるは災害、赤味は爭論、白味は離愁、紅黃なるは吉事。

◎眉の部

▲婦人の眉は細く新月形を貴しとす、其眼よりの距離高くして長きは大に出世すべし。

▲婦人眉長くとも薄くして眉尻の下りたるは貪慾の相骨高くして眼と間なきは賤の相。

▲眉低くして薄く一文字をなすは婬婦、短くして外眥下り斜みあるは妬婦なりといふ。

▲眉の生並奇麗にして長く紺翠鮮明なるは貴なり、又白毛を生ずるは延齡の徵。

▲眉の光澤なくして濃きは賤し、赤く薄きは財を散するの相。

▲眉骨高きは剛毅なれども氣短くして終に孤獨となるな相。

▲眉毛の縮めるは思慮疎にして他人に謀らるゝの相、毛並亂れたるは苦勞すべし。

▲眉一文字を爲すは拙劣、八文字を爲すは愚鈍、鍬形を爲すは癇癖の相。

▲眉逆まに生へて薄きは夫妻の間を替ゆ、俄に逆立つ時は難事あり。

▲眉の位置高くして毛長く、又は兩眉の間廣く艶やかなるは高位に昇る。

▲眉毛長くして濃く三日月形なるは智あり、且壽長し。

▲眉薄くとも肉を現はさず清く長く引けるは多才。

▲眉毛の薄きは凶、中絶ゆるは浮沈多くして志業成らす。

◎眼の部

▲尻目遣ひするものは欲に耽る相、上目遣ひするものは權に徇ふの相。

▲眼尻の上るものは萬事巧者にして又妻を尅し、下るものは拙にして妻に甘し。

▲婦人の眼細長く鳥睛大にして光彩ありて睫濃きは美にして且つ貴とす。

▲婦人の眼屹としたるは夫を尅し、露を含みて弛みあるは色に溺るゝの相也。

▲婦人の眼圓大にして窪み且つ色の黄味青味を帯ぶるは貧賤なり。

▲婦人の眼の縁蛤貝の形したるは寧馨兒を設る相又眼の縁赤きは難產の相なり。

▲眼中に碧光あり、金光あるは賢人なり、異彩あり神彩あるは威相又は尊相なり。



▲眼を半眼に開きたるは佞、三角にせるは惡相。

▲眼血迸りて神定まらざるものは盜む、瞳赤くして裂出ること蛇の如きものは大惡なり。

◎鼻の部

▲鼻穩かに山根(額の中心)より自然に隆くうるはしく肉づき竈門の露はれざるは賢人の相なり。

▲鼻の肉薄く削立したる如き又瘦細りて尖りたるは薄情にして奸智に長ず。

▲鼻大にして低きは賤也。小にして低きは貧。

▲鼻の竈門仰きて横より露はるゝがごときは貧なれど幸福、又大にして肉薄きは破產の相。

▲鼻の赤きは貧、而かも富める人にありては短命。

▲鼻の長きものは寛濶にして壽也、短きものは偏狭にして夭。

▲小鼻の高きは貴、大なるは賤なれど福、無きが如きは薄命の相。

▲獅子鼻は氣强くして且つ勇あり、袋鼻は品高くして仁あり。

▲婦人の鼻筋むつくりと高く鼻梁尖らず穴小さく丸く小鼻怒らざるは富貴の相。

▲婦人鼻梁尖り、瘠せて骨見えたるは貧、穴長きもの、又根元低きものは貧賤也。

▲婦人の蓮切鼻、獅子鼻、團子鼻等は賤の徵、且つ節の見ゆるは夫を替へる相。

▲婦人鼻筋通るも横紋あるか又は凹みあるは共に苦勞す。

◎耳の部

▲耳朶太くして厚味あり且つ圓きは富豪、又廣く前に向ふは富貴の相。

▲耳端高くして引付くるが如きは才智、黒痣あるは聰明にして上達す。

▲耳は大を貴とし、小を賤しとす、軟かなるは孤獨薄命、硬きは志望成るの相。

▲耳の薄きもの、垂るゝものは孤獨の相、左右に大小上下缺陷あるは祖業を破るの相。

▲耳色白きは貴相なりと雖も枯れて白きは貧病の相。

▲耳外に反るもの、耳輪の尖りたるものは皆薄命の相なり。

▲婦人も耳大にして圓く、肉厚く軟かに薄紅をさしたる如きは貴富の相。

▲婦人の耳反るが如きは夫定らず。

◎唇の部

▲婦人唇小さくして紅くむつくりと光艶あるものは富貴。

▲上唇薄く尖り下唇厚く色惡しきものは悍婦の相なり。

▲口小にして上下の唇薄きもの、又は同上唇に薄皮張るものは多辯。

▲一文字に固く結で厚く容易に開き難き勢あるは至貴の相。
▲口平生目立たずと雖も言ふ時麗しく見えて赤く淸きは上達すべし。
▲口小なるは衣食に窮す、偏曲なるは晩年に難あり。
▲口小にして開き安きは愚、大にして締りなきは產を破る。
▲上下の唇厚く太く反へるものは奇難に逢はずんば短命。
▲唇の靑白なるは病相、其の黑きは破產、紅紫共に潤ふは吉。
▲上下の唇共に薄きは酷薄にして陰險、共に厚きは剛腹不遜。

◎癖の部

▲應接中面を横に背くる癖あるは心に巧あるもの也。
▲物を見るに匆卒たるは短慮にして失敗す。
▲物を見るにこせ〱とするは成功少し。
▲家に入る足音の高きは自信力あり、足音なきは之に反す。
▲物言ふ時笑を含むものは名を成す。
▲獨言を言ふ癖あるものは孤弱にして貧也。
▲寢入り早くして寢覺め早きものは立身せず。
▲物言ふ時ハツキリと言はず耳語るごときは大事を成さず。
▲言ふ時左右へ眼を配るものは疑問の徴。
▲屢々顏を撫擦るものは自信なく自尊心なくして不仕合に終る。
▲手癖の多きは心に毒はなけれど萬事成就せず。
▲ぢろ〱看ものは猜忌心に富み志業中途にして絶す
▲起座ともに物品など把玩ものは俊俏なれど大ならず
▲よく陪涙する者は其實淺才にして存外の薄情漢也。
▲頭を搔くもの鼻を摘むものは小器なり。
▲御世辭の多きものはきたなき心多し。
▲以上揭載せしもの丶外齒、舌、鬚、頤、首、喉、聲、血色、步、座、臥、觀骨、人中等によりて其の人の運勢を知ることあるべし。

西洋金言心解

鋒庵生

◎婦人を嫌ふ者は婦人に嫌はれたる者なり　シエークスピヤ

沙翁は流石に通人です、多くの場合に於て大詩人は通人であります、ゲーテでもバイロンでも――沙翁は千心を有する詩人と稱せられたゞけありまして、婦人の地位に立つて能く婦人を說明して居ります、實際婦人を嫌ふやうな者は婦人に嫌はれた者で、ショウペンハウエル、ニイチエなどの艷聞は餘り聞きませんでした、畢竟婦人を嫌ふと云ふのは、婦人に嫌はれた復讐に過ぎません、沙翁の此言婦人の爲めに氣焰を吐く事萬丈です、婦人論は總て斯うありたいものです。

◎女らしからんとせば柔順なれ　ザヰー、ノックス

柔順が女の德だと云ふ事は分り切つた事ですが、此頃の女學生諸君の中には少々お分りにならぬ方があると云ふ事です。之れは女になるには柔順でなくてはならぬと云ふ事で遂に言葉を用ひたばかりです、何でもない事ですが、言ひ廻はしの巧みな點が格言となつた所以です。

◎妻を撰ぶは嚢の中より鰻を引出すが如し、一疋の鰻に對して二十の蛇出づ　ウヲン、モーア

說き得て妙ですね、日本では嚢の中から鰻を出す事はありませんが、西洋ではあると見えます、孰れか是れかと撰べば撰ぶ程美いのが見付からないのが妻です、一人美いのを見付けやうとすると鰻に似た蛇が二十も出て來て驚かすと云ふ事です、之れは新聞に廣告して妻を求めると云ふ場合などには最も適當な格言でせう。

◎女は猶蘆の如し、微風には戰げども、暴風には折れず　ホエトレー

ユーゴーの「女は弱し、されど母は強し」と同工異曲です、小事には涙脆い女でも一旦事あれば大事業も成し得ると云ふ事で、シヤーロッテ、コルデー。ヂヤン、ダークなどは此金言中の婦人です、女を以て一概に弱いと云ふ論は、此金言で全く破壞されたと云はなくてはなりません、是れも先づ婦人諸君が溜飲を下げるに足る金言と云ふべきでせう。

◎女の心の理解は頭の理解よりも可なり　サムエル、ローヂャース

一言にして盡くせば女は情の人なりと云ふ意味です、實際女の間違ひは頭から來たものに多い、即ち情から來たものは涙もあれば同情もあり、美はしき極端です、故に一人の乞食があつて、此乞食に食物を與へて可いか惡いかと云ふ理窟を考へるのは男の事で、女は

唯もう可愛さの餘りに物を與へると云ふ所に美點があるのです、アヂソン——即ちスウヰフトと共に英國文壇の二大警句家と稱せられて居るアヂソンは「熟考する女は失敗す」と云つて居るのと同じ事です。

◎地球上にあつて最も高貴なるものは完全なる女なり

ロウエル

大詩人ロウエルの句です、警句ではなく眞の金言です、此世界で何が大切だと云つても完全な婦人ほど大切で貴いものはない、と云ふのは男は少しは缺點があつても差支へはない、缺點が却つて世の爲めになる事がある、ナポレオンでもビスマルクでも皆大缺點のあつた人です、皮肉屋のバイロンは斯う云ふ事を云つた、「余の最も嫌ひなものは完全なる性格の人物なり、完全なる性格の者ほど愛嬌なきものはなし、缺點なき性格は概して大ならざる性格なり、美ならざる性格なり」と、皮肉屋だけに斯う云つたのでもありませうが、男には通用しますが女には通用しません、女の進むべき路は完全と云ふ事より外にはありません、女の缺點は男の缺點よりも大きく目立つものです。

◎男は働かざるべからず、女は泣かざるべからず

キングスレー

キングスレーは英國の詩人中、最も中庸を得た詩人で、眞の英國風の詩人です、男の働くのと女の泣くのとは同意義で、働かない男は男らしくもない男で、泣かない女は女らしくもない女だと云ふ事です、之れを悪く解釋して泣くのは女の職業だと云つては餘り味がありません、殊にキングスレーの志ではないでせう、畢竟男は熱心に働く奮闘家であり、女は泣く程優しい女でなくてはならぬと云ふ事です、之れを反對にして男は泣かざるべからず、女は働かざるべからずと云つては大變です。

◎男に取て愛は其一部分なり、されど女に取ては全部なり

バイロン

皮肉屋の言ではありますが、愛の美を認めたバイロンでありますから、善意に解釋して女を賞賛した意味に取ります、一方から云へば愛は女の全部だから、愛を忘れてはならぬぞと云ふ教訓です、又他方から云へば女が薄情なる男に對する怨みの言葉とも受取れます、其後の意味に取ると眞に千鈞の重みがあります、堂々たる大男子漢が功名の爲めに女を捨てた場合などには持て來いの怨み言です、男女間に常に起る悲劇は此一言で盡きて居ます。

◎弱き者よ、汝の名は女なり

シエークスピーヤ

有名なる「ハムレット」中の名句です、先づ女に就ての金言中千古不磨の大文字と云ふべきでせう、併し此場合の「弱き」の文字は適當な譯字ではない、之れは英語の Frailty ですから、脆きものとか被

れ易きものとか或は一歩進んで薄志弱行とも云へるのです、先づ情に脆いものと云ふ意味に取れば間違ひはない、此語は頗る平凡で情に脆い者は女だと云ふ事ですが、何しろ言ひ廻はしの巧みな爲めに大金言となつた譯です、沙翁の沙翁たる所以です。

◎余は短く太き女を好ます　バイロン

バイロン一代の傑作「ドン、ジュアン」中の一句です、「ドン、ジユアン」を借りてバイロンが女に對するの嗜好を述べたのです、丈の短い横太りの女は嫌ひだと云ふ單純な意味に過ぎません、此樣な方には誠にお氣の毒です、が決して細長きに過ぎて燈心然たるのが好きだと云ふ譯でもありますまい、けれども正直な所を白狀すると世界を通じて、短太主義の女は美人として認められて居ません、大變六ケ敷くなりますが日本の女も坐る事を止めて丈を高くする事を力めなくてはならぬ、バイロンが日本に居たら定めて婦人體格改良論を唱へるだらうと思ふと餘程面白い。

◎酒と女とは同行す　バルトン

バルトンの「メランコリー」の一句です、が私は一寸讀むと面白いと思ふが、少し考へると感服しません、何となれば女は必ず酒徳利を持て居る者でもない、酒屋には必ず女が居る譯でもない、要するに之れは男が同行させるのであつて、罪がありとすればそれは男にあるのです、だから此警句に對して婦人方から「それは貴方々がお悪いのですわ」と云ふ苦情が出ればバルトン先生グーの音も出ますまい、兎角警句と云ふものは反駁を被ると滅茶々々になるが多いものです。

◎女の談話は後足にて歩く犬の如し、不恰好なれども倘之れをなす　ジョンソン博士

「ラセラス傳」の著者ジョンソンは英國切つての警句家です、之れはジョンソンが話した事として弟子のボスウエルの「ジョンソン傳」に載つて居ます、畢竟女は話が下手な癖にお喋べりだと云ふ意味でせうが犬が後足で歩くやうだと形容したので大に光彩を放つて來ました、不恰好な所が目に見えるやうです、それでもジョンソンは非常な交際家で、貴婦人連中の評判物でした、彼れの妻は非常に醜くかつたに拘はらず婦人に愛せられたのは實に其交際術が巧みであつたからです、交際術とは一面談話術ですから、談話に巧みなジョンソンから見たら或は後足で歩く犬のやうでしたらう。

◎第一に妾は女なり、第二に妾は技術家なり　パウリン、ウヰアルドー

ウヰアルドーは佛蘭西の有名な女優です、人が彼女の成功の秘訣を尋ねた時に斯う答へたのです、之れは實に可い言葉で當今の婦人方に座右の銘として採用して戴き度い、奥樣方は「第一妾は女なり、第二は妾は家庭の主權者なり」と思つて貰へば此處に威嚴犯すべからざる高貴なる女が出來る譯です、それで第一と第二との間に截然たる區劃があつて、巧みに一身の使ひ分けをしなければなりません。



平安朝のハイカラ

淺香かつみ

ハイカラといふ語は此節の通用語ですが、此語の內容は何も此數年前に突然と現はれたもので無く、從來同じ意義を他の語で表はしては居ましたが、只此樣な廣義な融通の利く語が無つた迄と思ひます。

今此ハイカラといふ新しい眼鏡をかけて、遼き古の世を覗いて見ますると、隨分種々なる現象が目に映ります、玆に其一二を擧げて見ませう。

○贈答の文書

何に限らずハイカラ的意匠をお廻らしになる此節の諸孃は、其日常の郵書なり葉書なりに、如何なるお手際を表はしておいでになるかは存じませんが、秋草を漉き込みた江戸川紙に菫インキでお書になる位が關の山ではありますまいか、昔て妾が繪葉書を描いて、五六枚一緒に幅狹のリボンで綴ぢて第一種郵便物で差出しましたら、意外の喝采を博した程ですから、此頃の信書の意匠は餘程幼稚なものと思はれます、尤も郵便規則の嚴重なる束縛があるからして、自然沒趣味な一定の形式に陷つてしまふのも無理のない事ではありませうが、その紙なり書き方なりに尙多くの意匠を用ゐて、形式の單調を償ふ事位は出來相なものと思はれます、職務上取引上の往復文などは格別ですが、お友達の間の贈答は相當の趣向意匠があつて、然る可きだと思ひます。

それに就て今平安朝時代の物語などに出てゐる材料によつて調べて見ますると、其頃一般に行つたのは、使者に持たせてやる手紙を、木の枝か花の枝かに結びつけてやつたことです。尤も今時薔薇の花なんかに手紙を結んでポストへ入れたら、夫こそ早速郵稅幾層倍の罰金でせうが、玆には先づ平安式のやり方を擧げて見ませう。先づ其、

▲用紙は　多く色のある紙でした。紫、紅、青などの薄葉か、左もなければ卯の花、胡桃などの裏表色變りの紙、或は眞白い檀紙などがあります。近年まで薄葉半切や色半切があつたのですが、此節更に流行ら

ないのは何故でせう、といつても紫の薄葉に斬断の〻たくつた様なのも澁入りますから、生半使用されないのが宜しいでせう。

夫から如上の紙に書いた手紙なり歌なりは、何様な物に結び付けられたかを調べて見ますと、木の枝ならば、其葉の色、花ならば其花の色が、紙の色と同じいのを選んだのが多かつたのです。次に、木。花。の例を少し擧げませう。先づ木の葉と紙と同じ色なのは、

大齋院より一條帝の皇后定子へ年賀狀（長保元年）青き紙を松の枝に付けましたもの、

一條帝より藤三位に賜はる歌（正暦三年）は胡桃色の紙を椎の木に付けたので共に表青く裏白いものでした。

次に花と紙と同じ色なのは、

源氏の君より齋院へ、紅梅の紙を紅梅の枝に結べるもの、

行成卿より清少納言へ白紙を白梅に結びたる同じ返事、紅薄葉を紅梅の枝に

藤侍從より清少納言へ、卯の花の薄葉を卯の花の枝につけたる、などの例があります。

又色彩に關せず、其姿の優しきを愛でゝ文を付けたらしいのは、

夕霧大將より雲井の雁へ紫の薄葉に認めたのを、吹き亂れたる刈萱に付けたるもの、

或る男の萩の露ながらあるに文をつけたるなどの例があります、更に甚しいのは、

竹取の石作皇子が、かぐや姫の註文により佛の御石の鉢を送る時、違花の枝につけたなど云ふ事もあります、更に艶なのは、蓮の花片に歌を書いて送つた事が、枕草子に見えて居ます。

此樣な例もありますが、併し兎角同じ色を好んだらしいと思はれますのは枕草子の（なまめかしきもの）といふ條に、

柳の萌えたるに、青き薄葉に書きたる文つけたる、紫の紙を包みてふんじて、房長き藤につけたる、と書いて居ます。

成程是は綺麗にも艶めかしくも有たかと思ひます、然し乍ら斯く同じ色を撰んだと云ふのは、後世から考へると少し工夫が足り無いやうに思はれます、是は是非適當の配色をなす可きではありますまいか、皆様は現代の發達した彩色法を御存じだと思ひます。から、何とか面白い考案がお浮びになる事と思ひます。

兎や角申し乍ら、一寸した手紙でも花に附けてやつたといふのは平安朝の趣味が如何に、優美であつたかを考ふべきでせう、碌でも無い印刷葉書にスタンプを爭ふ今日の狀態と比べたら如何でせう！

○家庭の教師

外國語の會話や音樂乃至は遊藝などを教へる家庭教師は、當時上流社會には大分用ひられてる樣ですが、此家庭教師は、近頃始まつた譯で無く武家時代にも、家臣の内から「傅」といつて、後見役らしいものがありました、唯今の樣に師弟の關係で無く、俠然として主從の關係ではありましたが、要するにこれは今の家庭教師であります、此師は平安朝にも

認められます。

源氏物語に源氏の君の處で、明石入道の娘御は後の明石上の評判をする所に、「田舎者だらうといふ批難に對し、都からお附上臈を聘してあるから田舎臭くは無いと辯護して居る事があります、是なども當時一般に女の立身を豫期して其「傳」を撰んだといふ事情を示すものだと思ひます。

此例は物語中の架空の事ですけれども、實社會の事實を其まゝ取つたもので誰でも氣が附くのは、清少納言と紫式部の身の上でせう。

清少納言は一條帝の皇后定子に仕へ、紫式部は同中宮彰子(上東門院)に仕へてゐたので、二人の關係は餘程面白いと思ひます正暦の初に道隆公關白となつて、其女定子を中宮に立て、非常な權勢を振つて居ました。其頃清少納言は、中宮よりも年齢は上だし、學問と云ひ、才智と云ひ人に秀でゝ居たから、道隆は定子のお伽役にしました、定子も餘程學才が有つたので、この二人は非常に相信じて居たものと思はれます。間もなく道隆公は薨ずるに至つて、榮枯忽ち所をかへ定子の兄弟は流されるし、全然權勢の光を失ひました。尋で道隆の弟道長代て關白となりますと、其女の彰子が未だ年齒も行かないのに中宮に立ちました、すると定子に清少納言があつたと同じ樣に彰子には紫式部を附けました、少し年代の前後はありますが、暗に相對立した樣に思はれます。

此樣な事情ですから、定子と彰子は其面が圓滑に行かぬは當然で、清女と紫女とも同時に宮中にあつたら、或は角突合する事が無かつたとも言へません　式部が宮仕したのは、少納言が宮中を辭した後だつたらうと思ひます、で無くても精々一二年間同時にあつた位なものと思ひます年齢は少納言の方が餘程姉であつた爲か、枕草子には紫式部の事は少しもありません、或は其才名を聞き乍ら若輩と輕んじたのか、或は筆にするも妬ましかつたのか、現に角皮肉屋の大將たる清少は紫式部に對して何の挨拶もして居ませぬが、溫順貞淑を以て聞こへたる紫式部は、其日記に散々罵倒して居ます、何と面白い對照ではありませんか。

二人が皇后陛下の家庭教師としての態度は判然しませぬけれども、枕草子と紫式部日記とを見ますると、其主人に對する關係態度は能く分ります。

清少納言と紫式部を比較するのは、餘程面白い事だらうと思ひます、凡ての事情が反對ですから。

例へば清少は年長、紫式は弱年、失意の主人と得意の主人、醜婦(?)と美人、狷介と溫和、天才的と博識的、終身の獨身と賢良な家婦、悲慘な末路と平和な生涯、擧げて見ると其對照は實に限りが無い程です。

少しくお話が横に外れましたが、此二人の比較研究は日本文學に志ある方々は、是非お試しあらん事を。

◎女子商業學校三週年紀念會

來る十七日 神嘗祭の佳節を以て 東京高等 商業學校 講堂内にて催す由當日の餘興には貴婦人贊助の音樂會を開催の筈

中秋二日の旅

鈴川漁史

秋の空晴れて陽は高し、今こそ旅行の好時節、稻穗黃ばみて野邊におのゝけり、いざ行ばやと、思ひ立ちしは九月の下旬日曜と秋季皇靈祭なづゝけて、二日の休日一泊の旅程、我等の身に取つては、無二の好機會、足伸びせんは此の時にありと、宵の程に旅行案内を枕許に取り揃へて、明日の一番、五時かつきり、飯田町を發るものは中央東線を經て信州長野に着くべし、幸ひ明後日は彼岸の中日、さぞや善光寺は賑ふべしなど樣々に想像して、一夜を夢に明かしぬ。起き出づれは、五時は早過ぎぬ、一番汽車の間に合はざりし、止むなく六時の八王寺行に搭じ、次の列車を途中で待たんと決心し出でぬ、此日はどんよりとして晴雨の程も定めがたかりし、市ケ谷、四谷、信濃町と縫ふが如く近き停車場も、軈て新宿より以西は、市街の雜沓を避くると共に、複線は短線と變り、乘客も又田舍染じみぬ、流石は廣き武藏野の原、國分寺を過ぎて、八王寺に至るまでの間は一望渺として西北遙かに秩父の連山を望む、茅の原茫々たる櫟の林、こんもりせる芋の畑ところどころの水田風情あり、人家其の間に點綴して、林にかくれ、森に潜み、得も言はれざる景色ぞかし、機に名高き八王寺の繁昌を見ばやと思ひしが次ぎの列車を待つ時間は僅に三十分なりしかば、急ぎ車を馳つて電光のやうに、市街の大道り瞥見せしのみ、思ひしよりは繁盛の場所とは見えざりし、之れを東海道に比ぶれば、僅かに松田、山北邊にも比すべきか、とても大磯、沼津の繁昌には及ぶまじと思ひぬ、九時二十分中央線のりかへて汽車八王寺を發する頃には、驟雨沛然車窓を敲つて、淺川、與瀬と小佛峰の山麓を過ぐる頃には、雨益々甚だしく、入れば隧道出づれば驟雨、折角の旅行も此の雨にてはと、やゝ失望の氣味にて思案の内に大小四十餘の隧道を過ぎて、やうやく汽車は猿橋に着きぬ、名にし負ふ猿橋のかけはしも、汽車の窓より眺めて電光一閃、停車場を過ぐる程に、桂川水力の發電所は、川の畔に今は煉瓦の工事中にて、線路に添ふる所には、電線を掛くべき柱さえ立てられ、首府を距る廿餘里、此所に發電所を置き其の電力を東京に供給するなりと、文明の利源は此の山間潜むかなと思ひぬ。

笹子の隧道は日本一の長程と聞きぬ、成程街道隨一の長さなり、笹子と初鹿野との兩驛は、只此の隧道の番所とも云ふべきのみ、此所を過ぐれば甲州の平原は俄然として開け萬傾の田疇一眸の内にあり、實に蜀の平野もかくやと思はれぬ、右手に山を以て圍める、鹽山、日下部、不動のあたり、稻穗よく稔り、秋桑續々なり、彼の有名なる勝沼葡萄は、此附近より出づるものにして、東京に甲州葡萄と稱へ又甲斐產葡萄酒と稱

するものは、殊に此地の產なりといふ、戸口の殷富なること、八王寺、郡内邊の及ばざる所なり。

甲府は國中第一の都會、縣廳の所在地にして、停車場の立派なるは新宿以來なり、その文明の普及、東京的の感化深しと見え、海老茶の袴、ひるし街の女學生も少なからず見受けぬ、これより汽車は西北さしてやゝ高原に向ひて進めぬ、龍王驛を過ぐれば、日本三急流の一たる富士川の上流釜無川の鐵橋を渡つて韮崎に着しぬ、それよりは一層急勾配汽車は高原より高原に進みて、甲府より遙かに望みし八ヶ嶽の山麓に向ひて走せるものゝ如くその裾野に達しぬ、富士見停車場こゝにありては甲信の境にして、彼の富士川の分水嶺は此邊にと思はれたり、汽車停車場に着せし頃には、時計正に三時を報じて、八王寺以來のべつに降りしきれる雨、全く晴れて、秋陽日麗かに、甲信の諸山皆一眸の内に集まりぬ汽車走ること、凡そ一時にして上諏訪に着す。

諏訪湖は名にし負ふ天龍川の水源、水清くして、湖面鏡の如く、煙波縹渺中に魚舟を浮べて鯇などすなどるものあり、四圍の山村湖水に臨み、殊に上下兩諏訪の市街は湖の右岸に連なりて一段の殷富をなしぬ、汽車は湖水と町街との間を走りて、岡谷驛に着しぬ、其邊一帶諏訪平と稱して、米穀を產するのみならず又蠶桑に宜しきを以て、諏訪製糸の名をして全國に冠たらしむ、岡谷より以北、松本に達する間は、やうやく昨年の開通なりしかば、土地の老若珍らしげに眺め居たり。

岡谷よりは遙かに天龍川の流れに溯ふて、更に東北に折れ、物淋しき停車場の四ツ五ツ過ぎ、鹽尻峠の麓にて、長き隧道の三つばかり通り過ぎて、出づれば松本平は一眸の内にあり、程なく鹽尻に着す、鹽尻は中央西線即ち木曾棧道を過ぎて、名古屋に出づる分岐點なれど、未だ全通せざる爲にや、しかく繁昌せる大停車場とも見えざりき、鹽尻より松本に至るには、只村井と云へる一停車場を過ぐるのみ。

松本は長野に次ぐの都會にして、犀川に枕み市街また繁華なり、此の日長野縣內の教育大會此の地に開かれて、附近の教育家多く集まりし由其の爲めにや停車場の雜沓なか〱なりき。

松本を過ぎてより日はとつぷり暮れて、松本平の風景を賞する能はざりき、月に名高き姨捨山の田毎の月、其の觀月堂のあたり、汽車かかりて停車場の前驛夫の呼こえに、それと知りぬる丈にて、其の勝景を見る能はざりしは、遺憾の極みなりき、姨捨より稻荷山を經て、篠の井驛に至る間は、善光寺平に降るべき勾配の急なれば、汽車の走すること、矢の如くなりし、されど途中の降雨豫定より少しく、遲れて、十時過ぐる頃長野に着きぬ、直ちに人車を馳せて對旭館に至れば、前日來彼岸の爲めに信徒多く集りて宿かるべくもあらず、今日東京より來りしもの長途の旅行今は勞れ果てたり、是非にと一泊を請へども、番頭頑としてきくべくあらず、强てならば支店へとの案内に、止むなく停車場前なる、對

旭館の支店に入りしかど、時は遲し風鈴もあまり紳士らしく見えざりしかば、案内の聲も澁りがちに見受けぬ、まづ〳〵旅裝を解き入浴を濟まして寢に就きしは夜中十二時、本日の行程一百八十餘哩なりしかど、つきせぬ甲信の勝景に、車中の退屈を忘れて、無事に着せしこそ、實に此の日の快とする所なりき。

明くれば九月の廿四日今日は秋季皇靈祭、久々の國旗日なり、六時、腕車をかつて善光寺に詣づ、石流に名高き名刹なり其の由來は昔はじ其の信徒の多き、往來絡繹として、恰も淺草の觀音の如し、賽錢をあぐる音さながら、豆をいるが如し、車夫のすゝむるがまゝに、階檀廻りを試みぬ、其の階檀と云へるは、善光寺の本堂なる如來尊のまします其の壇下の暗黑なる廊下を廻るものにて、長くして方形に屈曲せる通路を探り行くなり、第三屈曲點の中頃に至り、物の音せるは錠に觸れるものにして、此の錠は地獄極樂に至れる關門なり、廻りて此の錠に當れるもの死後極樂淨土に行けるなりと云ふ、何はさて置き余もまた三廻して三度ながら其の錠に觸れたり、極樂に行かるべきか何々。

斯くて階檀廻りをへ、本堂を一週して、大勸進と云へる、善光寺尊師の御座せる幽室の方へ行き、御守を頂き、出でゝ苅萱山、往生寺に詣づ、此の寺は善光寺開基につき、苅萱親子、石童丸が臨終の地なりと云ふ、土地高燥にして風光明媚、善光寺の平野を脚下に抑へ、犀川、千曲川を挾んで、遙かに川中島を望み、髮山、不識庵の兩雄が決勝を爭ひし昔の跡を偲ぶべし、近く高等女學校、宗敎學校、監獄署、善光寺の伽藍等は、一々指點し得らるべし、やゝ暫らく佇りて其の勝景を賞し且つは山僧の懇懃なる由來說法をきゝて、暑は物外に馳けるとぞ。

九時(長野發の二番列車)にて東京に急ぐ身なれば、續きつゝそこ〳〵にして罷り出で引き返へして、苅萱父子の休憩せしてふ一個堂を觀る、堂傍に物なりたる一基の碑あり滿面崩碎して其何れの年代のものたるかと知るによしなきも、古色蒼然そゞろに苅萱當時の跡を想起するに足るべし、寺僧に導かれて、古文書寶物等を見る、これも又苅萱父子の由緖の深きものたることは、たしかならん。

歸途一書店につき女學世界の賣行などきゝぬ、あゝ我が親しき長野の姉妹よ、予は今日一日の御身たちの友たるも、明日は他鄕の人となるべし、諸姉幸に自愛せよなどゝ、心竊かに長野の諸姉に分れを告げて、汽笛一聲停車場を發せしは、午前九時なりき。

つきせぬ分れを長野に殘して、もと來し篠の井の驛に引かへし、道を分ちて信越線の線により高崎をへて東京に歸るなり、篠の井より小諸に至るまで、千曲川の平野に添ふたれば、其の平衍なること砥の如く、長野より殆んど一直線をなして汽車は南に駛するなり、名に負ふ淺間の噴煙を眺めばやと、窓外に眼を張りしも生憎この日雲井にかくれて見えざりしは遺憾、鐵を過れる頃、吹きすさぶてふ淺間颪、今し秋の初めなるにいと冷かに身にしみける、小諸を過ぎて御代田より輕井澤に向ふ途中は、勾配急にして汽車の進行も遲々たり、落葉松の林、巣を離るれば

かり線路の兩側に絡まり、漸く過ぎて輕井澤に達す。

輕井澤は本邦一の高原、海面を拔くこと三千八百尺、東京の酷暑身はさながら甑中にあるが如き時さへも、此の地に至れば五體忽ち冷藏庫中に入りたる如く、又一種の別天地なり、外內紳士のこゝに避暑するもの年を逐ふて益々多く、別莊は年々增加するなりとぞ、女子大學の三泉寮とか云へるは、本年初めて此の地に設けられしもの、專ら避暑の爲めなりしと云ふ、予の輕井澤に着せし頃には、籬の初秋に引きかへ、秋のなかばも早や過たるほどの物さびしさありて秋雨は蕭々として四圍の草木將に錦を織らんとしてありき、あゝ地盤の高低著るしきものならずや。

余は輕井澤の冷氣、碓氷峠の隧道、嘗てきゝしかど未だ一回も過ぎし事なかりき、アプト式に名高き隧道の大小すべて二十八、出でゝはくゞる―「逕の前後は横川輕井澤、東海道箱根の嶮道は幾度過ぎしかど、碓氷峠のそれの如く、勾配も急ならず、又アプト式にもあらざるなり、横川よりは道も平坦なり、こゝ關東平原の北につくる所なり、この巖奇巖突兀たる妙義山の風景を見るに尤もよし、高崎に着せしは三時三十分なりき。高崎驛は乘替驛なり、こゝは關東の平原、信州街道の線路、東京へも程遠からねば、都の紳士、外國人など打ち交りて、旅客の雜沓も長野以來初めてのにぎはしさなり。

高崎上野間は滊車三時間にて達する所なり、日鐵社線の、內一番利益のある區域なりと云ふ、利根川一つ渡る外は、水田と桑畑にしてまゝ桑園を見るのみ、一條の鐵路平坦砥のごとし、危險も少なく道路の修繕も要せずして、乘客の最も多き地なれば、實に左もあるべき事なり、倉賀野、新町、神保原、本庄、深谷、熊谷、吹上、鴻の巢、桶川、上尾、の諸驛を過ぎて、大宮に着せしは薄暮き頃にして、四隣寂寞なりき、大宮よりは、東京歸りの乘客頓に增して、久しく寬やかなりし、余のベンチも所狹きまで詰められたり、我慢せばや上野までは間もあるまじ赤羽根につきし頃には、山の手線、品川方面行の客は乘りかへとなりて、王子、田端の聲をきく時は、飛び立つ程に、上野驛、間もなく無事下車せしは六時三十分、點燈明るき東京の市街、またしや電車の震鈴喧しきを聞き雜沓の光景を見るなりき。

▲喜劇七草　　巖谷小波氏著

小波氏獨特の輕妙なる筆を以て作られたる笑劇「やかす聟」以下七種を集めたるものなり、元より大仕掛の仕組を以て人情の根底より穿ち盡したるものにはあられど每篇の趣向よく人間笑的方面の事實を捉へて面白く描き出されたるものなり、大阪二輪加の卑俗を脫してよく一家の生面を開けり、宜なり文藝協會の餘興として來賓を抱腹せしめたる又是れ滑稽文學の一好產物と稱すべし、殊に挿畫の奇趣横逸なるは近來稀に見るの筆意、更に裝訂の美を以て文理の異彩を添す。定價八十錢金尾文淵堂。

節用字彙

人にして眞理の下に生活せしむるに至らば全く從來の苦痛を拭ひ去る事を得べし。眞理に敵なし百萬の貔貅と雖も決して眞理を壓伏する能はざるなり。

婦人四德

言辭は温藉なるべし
行狀は貞順なるべし
容貌は優婉なるべし
業務は巧妙なるべし
(禮記)

人生四計

一日の計は晨にあり
一年の計は春にあり
一生の計は勤にあり

庖厨

勝手元の憲法

粗豆子

庖厨を調ふる第一の心得は魚鳥野菜の出所、季節を知り新鮮か否やを吟味し、割烹の理を辨へそれ〴〵鹽梅をつくすにあり。

(食物の注意)食物は何にまれ注意して清淨にすべし、客に出す吸物などにたま〴〵髪の毛又は飯粒などの箸、杓子につきて入る事あり、さるは如何に結構なる料理にても客の氣を惡くし、饗應にならざるのみか主人の無禮となり、恥となるものなればよく注意すべきなり又少許にても器の縁の缺けたる、塗物の剝げたる箸の長短の揃はざる、木地の汚れたるなどは食物も不味のやうに覺て如何なる珍味も饗應ならずと心得べし。

(器物の扱ひ樣)器物を扱ふに就て注意すべき事(一)鍋は鐵の陶器引をよしとす、銅鍋のごとく毒氣あることなく食物の焦つく事もなく煮て置きて味の變ることもなく、されど不注意して再々焦つかす時は質を損じ用を爲さゞるに至るものなり(二)網杓子は銅線にて造りたるをよしとす、汁の實など掬ふによし汚れたらば洗ひて仕舞ひ置くべし(三)鐵架長さ一尺二寸の

一家の計は和にあり

齊家四教

勤勉にして生を治め
節儉にして用を足し
恭謙にして己を持し
寛恕にして人を待つ

蔬食三益

一には分に安んじて以て福を養ひ
二には胃を寛ふして以て氣を養ひ
三には費を省いて以て財を養ふ

（東坡）

品性八事

志は須らく大なるべく、心は常に小なるべし、學は須らく博かるべく、業は常に專らなるべし、識

事なり魚を燒くに用ふ(四)庖丁は出刄、薄刄、刺身庖丁あち切いろ〳〵あり、用ひ終れば直ぐに濡れ布巾にてぬぐひ次に乾きたる布巾にてふき置くべし、水氣をつけおけば忽ち錆を生ず(五)爼板は檜、ぼう、桂などにて作りたるを最上とす、寸法は長さ二尺横八寸、足の高さは三寸位(六)編捨籠これは魚のくづれぬ樣に煮る爲め、鍋の底に敷きて其上へ魚をのせ、煮へたるを見て四隅の先を持ちて出し魚をすべらして皿に移すなり(七)陶器の汚れたる時は釜の中へ入れ曹達水又は灰汁を入て煮るべし(八)硝子罎を洗ふには馬鈴薯を細かに刻みて入れ又は鹽を匙に一杯、水二匙ほど入てよく搖り動かし更に清水を入れて洗ふべし。

(鹽梅)煮方は季節によりて相違あり春と冬との料理は如何にもふつさりとして見ゆる樣に庖丁の心得あるべし夏と秋とは如何にも清涼として見ゆる樣にすべし。

鹽梅は甘きも鹹きも物によるべし、甘きにも鹹きにも輕きはよし、客十人ありて五人は鹹口を好み、五人は甘口を喜ぶあり、立用して十人の口に叶ふやうつくるを料理の加減と心得べし。

(取合)料理は美術の一ともいふべきものにて先づ眼に見て之を賞せしめ、食していよ〳〵其美を賞せしむるもの故品の取合せ、彩のとり合せ、形の取合せ等に注意し、丸き物に丸き物、黑き物に黑き物等すべて似寄た

は須らく高かるべく、氣は常に低かるべし、量は須らく宏かるべく操は常に潔かるべし。

攝生四訣

思を少ふして以て其神を養ふ
慾を少ふして以て其精を養ふ
勞を少ふして以て其力を養ふ
言を少ふして以て其氣を養ふ

四事不久

春にして寒なるは久しからず
秋にして熱なるは久しからず
老いて健なるは久しからず
君に寵を得るは久しからず

管子の三利

一年の利は穀を種ゆるに在り

るものを用ふべからず、又鹽辛き物には甘き物、脂濃きものには淡薄の物汁氣なき物には汁氣ある物、剛き物には柔かきもの、濃淡、剛柔、甘辛の取合せをよくして口に飽かざる樣に工風するを肝要とす。

（炙燒）魚類を燒くに當りては肉の方を先きに燒き、皮の方を後に燒くべし、鳥類を燒くには其の反對なり、然らざれば肉ちゞみ或ははせる事ありて體裁を損すればなり。

又蒸燒にしたる魚類を盛るにも丸のまゝの魚は頭を左にし腹を前にして盛るべし、切身の魚は皮を下にして盛るべし。

魚料理庖丁の作法

（脊切）鯛、鱸の類は頭を落し兩方の薄身を腹のなりに際より切つて、塵吐のふくらをも眞直になるやうに切去り首の方を右にし泳ぐやうにして鰭をつけ厚さ四五分程に木口切にす。

（平脊切）前の如くし尾を右にして腹を平にし庖丁をねせて尾の方より小口切にす。

（片脊切）片身卸して平脊切の如く一方に骨をつけ、尾の方より切る。

（すい切）三枚に卸し薄身を去り左の方より庖丁をねせて掬ひ切にす。

（脊越）腸を去り肉を洗ひ尾の方より庖丁をねせて木口切に作る。

（筒切）腸をぬかずして其儘尾の方より庖丁をあて厚さ四五分程に丸切

十年の利は樹を種ゆるに在り
百年の利は徳を種ゆるにあり

君子三徳

仁者は憂ひず
智者は惑はず
勇者は懼れず

四端

惻隠は仁の端なり
羞恥は義の端なり
辭讓は禮の端なり
是非は智の端なり

四窮民

老ひて妻なきを鰥と云ひ
老いて夫なきを寡と云ひ
幼にして父なきを孤と云ひ

にす。

（細作り）刺身なり、三枚に卸してうす身をすき取り尾の方より厚さ一分程にそぎそれを長さ五六寸に切り縦にして四角になるやう細くつくる。

（早作り）前の如くし長さ五寸に横に切て縦にし前の如く一分ほどの幅に切り木口よりへぐなり。

（投げ作り）庖丁を筋交にねせて平にうすく作る。

（ぬた鱠細作り）卸して薄身を去り、厚さ三分程にへぎ更に庖丁にて筋かへにうすく長さ二寸ほどに作るなり。

（切かけ）三枚に卸し身の方を四五分十文字に庖丁目を切りつくる。

（疊作り）卸して薄身を去り、皮を去り湯がきて水に冷し木口に薄く切りて重ね置くなり大だゝみ小だゝみあり。

秋の一品料理

▲鰡のたまり焼

まづ味噌をすり、味淋と醤油を半分〳〵に合せたものにてどろ〳〵にのばし、その中にぼらの切身をつけ、成るべくは急がずに八九時間の後取出して串をうちザッと水をかけて味噌を落として焼くなり、附合には松茸の

老いて子なきを獨と云ふ　（孟子）

婦五等

天子の妃を后と云ひ
諸侯の室を夫人と云ひ
大夫の室を孺人と云ひ
士の配を婦人と云ひ
庶人の配を妻と云ふ　（曲禮）

三十六歌仙

三十六歌選は四條大納言公任卿の撰にして其後覺盛法師其左右を分ちて十八番となす其人名左のごとし。

左＝一柿本人丸、三凡河内躬恒、五中納言家持、七在原業平、九素性法師、十一猿丸太夫、十三中納言兼輔、十五中納言敦忠、十七源公忠、十九斎宮女御、廿一藤原敏行、廿

あちやらなどよし、これは松茸を丸のまゝ沸湯でゆで小口より薄くはやし鹽酢につけて一時間の後絞り、砂糖をふりかけ、砂糖の十分とけし時に用ゆるなり、これは日の經ちしだけがよきなり。

▲鳥のさつま煮

まづ鶏肉を常のごとくこしらへ、骨ごと適宜の大さにブツ／＼切にし、水をたつぷり入て氣永く煮、水の大分部煮つまりたる時、裏漉にしたる味噌を入れ、味淋と砂糖少量に薄切の生姜を加へて又よく煮るなり、味美にして長く保つ重寶の食品なり。

▲里芋でんがく

里芋をよく洗ひ、ゆでゝ水に取り十分ぬめりを去り金串をさして焼き醤油をかけてまた一度焼き刷毛にて味噌をなすりつけまた一度火にかけて乾かすなり、さて味噌の製らへ方は甘味噌をよくすり、砂糖を加へて裏漉しだしにてどろ／＼にのばし鍋に入れて、かきまわしながら煮だしの詰りし時鍋をおろし玉子の黄味を少しませるなり。

▲厚焼玉子

松茸をよく洗ぎ石附を取り細かに刻み、だし、醤油、砂糖少にて下煮しよくかき立てたる玉子三杯にだし一杯半、醤油、砂糖で適宜に鹽梅したる中に入れかきまわして胡麻の油をひきたる玉子焼鍋に薄くながし込み、箸

三源宗行、廿五源清正、廿七藤原興風、廿九坂上是則、卅一小大君、卅三大中臣能宣、卅五平兼盛、

右——二紀貫之、四伊勢、六山邊赤人、八遍昭僧正、十紀友則、十二小野小町、十四中納言朝忠、十六藤原高光、十八壬生忠岑、二十祭主頼基、二十二源信明、廿六源重之、廿八清原元輔、三十藤原元眞、三十二藤原仲文、卅四壬生忠見、卅六中務

梨壺五歌仙

これは上東門院の侍女なり赤染衛門、和泉式部、紫式部、馬内侍、伊勢太輔

古今六歌仙

僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主

瀟湘八景

か薄へらにて焼鍋の端へくる〳〵と卷きやりまた流しこみて前の如く卷きすべて焼き上りたる時すだれに包みて輕くしめ加減にして暫くして小口より五分ほどに切り、醤油少しかけたる大根おろしをあしらひて皿に盛る。

▲蛤の吸物

まづだしを作り火にかけて沸きし時、だし一升に一合の酒及び鹽少しを加へ、また一寸沸たゝせ、それによく洗ひたる蛤をいれ、貝の開きし時直ぐにおろすなり。

▲はせの昆布卷

青昆布を一夜水につけ、うでゝ二枚にはがし、焼はせの骨をぬき、昆布にて卷き、だしたつぷりに砂糖を適宜に加へて煮軟かになりし時醤油をさして一寸煮立ておろすなり

▲大根の胡麻酢あへ

秋大根の太きを薄く輪切にし更に横に細く切る胡蘿蔔も右同樣に線にうち、水につけてよく洗ひ、酢につけ置き別に白瀧蒟蒻を小くきりて茹でだし醤油砂糖にて淡白と下煮し、椎茸も水につけてこんにやく同樣に刻んで煮、白胡麻を炒りてすり、砂糖と醤油をよきほどに加へ、右の大根及胡蘿蔔をしぼりあげ、蒟蒻も椎茸も煮汁より絞りて一緒にあへるなり。

▲松茸飯

○江天の暮雪　○瀟湘の夜雨
○山市の晴嵐　○遠浦の歸帆
○煙寺の晩鐘　○平沙の落雁
○漁村の夕照　○洞庭の秋月

近江八景

○比良の暮雪　○矢橋の歸帆
○石山の秋月　○勢多の夕照
○三井の晩鐘　○堅田の落雁
○粟津の晴嵐　○辛崎の夜雨

南都八景

○南圓堂の藤　○佐保川の螢
○猿澤池の月　○春日野の鹿
○三笠山の雪　○雲井坂の雨
○東大寺の鐘　○轟橋の行人

十三佛、

不動明王、釋迦如來、文珠菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩、彌勒菩薩、藥師如來、觀音薩陀、勢至菩薩、

粒のよき松茸を撰び暫く鹽水につけ、よく洗ひて石附を切り去り、上皮を剝いて小口より薄く刻み、次に油揚豆腐を縦に二つにきり、更に小口より繊にうち、沸騰湯にいれてザつとゆで水にて洗ひ、前の松茸を洗ひたる米にませ米一升に醬油五勺味淋五勺の割合に加へ常の通りに炊ぐなり。

▲鰯の鹽むし

骨を拔き皮をとりザット洗ひ擂鉢に入れ鹽をませてよくすり、煮かへし味淋少々、濃き煮汁少々を徐々に入れ裏漉しにかけ、竹の皮などに入れ圓にても四角にても適宜の形につくり蒸籠にて三十分ほどむし、切りて用ゆ

▲豚の角煮

豚の三枚身を大切のまゝ一時間ほどうで五分ほどの厚さに小口切にし、酒にて暫らく煮醬油と赤砂糖を加へて味をつけ、二時間ほど弱火で煮ればべつこう色になるなり、すべて豚肉は酒にて煮る時は豚の臭味を去るものなり。

▲鮭の酢入吸物

鹽ざけを賽の目に切り、水に浸けて置き別にだしを取り醬油で味をつけ柚子の絞り汁を加へ、煮立つた所に前の鮭を水より引あげて入れ一寸煮るなり、吸口には大根おろしなど妙なり。

▲小鯛卷珍蒸

阿彌陀如來、阿難菩薩、大日如來、虚空藏主、

十二月異名

睦月正　衣更着二　彌生三
卯月四　皐月五　水無月六
文月七　葉月八　長月九
神無月十　霜月十一　師走十二

源氏五十四帖

◎桐壺◎箒木◎空蟬◎夕顔◎若葉◎末摘花◎紅葉賀◎花宴◎葵◎榊◎花散里◎須磨◎明石◎澪標◎蓬生◎關屋◎繪合◎松風◎薄雲◎槿◎乙女◎玉鬘◎初音◎蝴蝶◎螢◎常夏◎篝火◎野分◎御幸◎藤袴◎槙柱◎梅枝◎藤裡葉◎若菜◎栢木◎横笛◎鈴蟲◎夕霧◎御法◎幻◎雲隱◎匂宮◎紅梅◎竹川◎總角◎早蕨◎宿木◎東屋◎浮舟◎蜻蛉◎手習◎夢浮橋

まづ小鯛の鱗をひき、ゑらをぬき背より庖丁を入れて骨を拔き腸を去りよく洗ひ、凡三時間位醤油につけ置き、別に豆腐をくづし、水少しを入れ、火にかけ、かきまわしながら、煎りはじめ、ほぐしたる玉子を加へ、更にかきまわし、粗々乾きたる頃、醤油を入れて煎りあげ、うで、細かになし、だしと醤油にて味をつけたる胡蘿蔔と椎茸をまぜ、玉子のしろ味を加へてまぜ、鯛につめて蒸籠に入れ、鯛の目のかはるまで蒸すなり。

季節嘗物製法

△鳥びしほ　　鶉にても雉にても其他何鳥にてもよし鹽を強くし二週間置きし後肉を細かにたゝき味淋醤油に麹を加へ漬け込む也。

△鴨味噌　　肉を細かに敲き味淋にて煮り附くほどにして味噌を裏ごしにかけたるを加へて錬り乍ら煮詰るなり。

△小鳥ほろ味噌　　鳩、雉、其他の小鳥の肉骨共に細かにたゝき味噌を摺りませ、酒を加へゆるめて文火にかけて煎りつかぬ樣に掻き廻しながら三時間ほど煮るなり、山椒の粉、胡麻の油など入てよし、さてねりあげてほろ〳〵となりたるを壺などに入れ貯ふ久しきを經るも食味變ずることなし。

△鐵火味噌　　胡麻油を煮立て、まづ豆を煎り次に午蒡と蓮根を細かに刻みて入れ刻み鯣を細かく切り、麻の實を炒り、蕃椒を細かにして共にまた

支那二十一史

△史記（三十巻 前漢司馬遷）
△前漢書（百巻 後漢班固）
△後漢書（百二十巻 宋の范曄）
△三國志（六十六巻 晉陳壽著）
△南史（八十巻 唐李延壽）
△宋書（百巻 梁沈約）
△南齊書（五十九巻 梁蕭子顯）
△梁書（五十六巻 唐姚思廉）
△陳書（三十六巻 同上）
△北史（百巻 李延壽）
△魏書（百二巻 北齊魏收）
△北齊書（五十八巻 唐李百藥）
△周書（五十巻 唐令孤德）
△隋書（八十五巻 唐魏徵）
△唐書（二百二十五巻 宋歐陽修）
△五代史（七十四巻 歐陽修）
△宋史（四百九十五巻 宋李燾）
△遼史（百十六巻 李燾儀）
△金史（百三十五巻 同上）

打込みよく煎りて味噌及び砂糖を打込み少し酒を加へ練り交せて煮上るなり。

△柚びしほ　味噌三百目に砂糖百目とを摺りませて味淋五合、醤油五合を加へこれに柚子三十ほど皮を取り刻みて煠でたるを入れ、溫火にて練り交せ、なほ黑豆を柔らかに煮て薄醤油にて味をつけ、前の味噌に交せるなり。

△時雨味噌　蛤のむき身を空いりにして水氣を去り味淋と醤油をさして汁氣のなき樣に煮つめ、赤味噌を加へ、遠火にかけて徐かに煮つめ、割山椒をふり掛くるなり。

△金山寺　大豆一升を引割にして皮を去り、大麥一升水に浸し右大豆と交せて蒸し、味噌麹を加へて二晝夜ほどねかし、麹となしこれに茄子、生姜、白瓜、紫蘇、唐からしなど細かにして鹽につけ其鹽水にて右麹をとき茄子其他のものを入れ日に二三回づゝ杓子にてかき交せ大約三十日にして熟すべし。

△常盤味噌　よき赤味噌を擂盆にて摺り篩嚢にて漉し、柚子の色づきて實の入よきを肉を去り、皮を日に乾かしたるに椎茸など水に浸し細く刻み味淋を加へて煮、胡桃を炒りて皮を去りたるなど入るゝなり。

△元　史　（二百十巻　明宋濂撰）

◎七書――孫子、呉子、司馬法、三略、六韜、太宗問對

本朝六國史

△日本紀　三十巻　舍人親王大安麿
神武天皇より持統天皇十一年まで凡九百六十二年

△續日本紀　四十巻　菅野眞道
文武帝元年より起りて桓武帝延暦十年まで九十五年

△日本後記　四十巻　藤原緒嗣等
桓武天皇延暦十年より凡四十年

△續日本後記　二十巻　太政大臣良房等
仁明帝三十八年の實錄也

△文德實錄　十巻　右大臣基經等
文德帝九年間の實錄也

△三代實錄　五十巻　左大臣時平
淸和、陽成、光孝三代の實錄也

二十四孝

大舜　象耕の奇蹟ありし大聖人

珍膳小鳥料理

すゝめ、ひよどり、つぐみ、鳩、何れも燒鳥、いり鳥に宜し

△むし燒　小鳥何にても羽を打ち、腸を去り竈の灰に埋めて蒸燒にするなり、大抵二三十分間にて燒るもの故引出して毛を引き醬油に卸し生姜をそへて供す。

△小鳥なんばん　何にても羽毛を拔き腸を去り、魚肉を擂りたるを其中につめ、糸にて結び、胡麻油にて揚げるなり。

△鳥びしほ　何にても小鳥を拵らへ、二週間鹽を強くして置き、肉を細かに叩き、味淋醬油に麹を加へ漬込むべし。

△小鳥麹漬　羽を拔き腸を去り、麹三合鹽二合を煎ませ小鳥と麹と幾重にも合せて漬込み輕き押をかくべし。

△小鳥飯　雲雀、すゞめ、つぐみ何にても羽を拔き細かくたゝき飯は一升に酒と醬油各五勺つゝ入れ常の如く焚き半熟せし時たゝきたる肉を入れ蒸し上ぐへし香味は葱の微塵胡椒の粉。

◎煎り酒の製法

煎り酒は、酒を元としたる一種の煮汁にて重に刺身に用ふ、世間の人ややもすれば料理店の肴うまくして家の料理とは比較にならずといふは、そ

漢文帝	母に至孝の王
老萊子	七十父母に仕へて幼兒のごとくす
黄香	九歳の時父の寢を煖む
閔子騫	父を諫めて母を歸す
姜詩	鯉鱠の奇驗ありし人
呉猛	身を以て蚊軍の餌となる
董永	父に至孝の農夫
唐夫人	姑に乳を含ます人
揚香	父に代つて虎の餌となる
孟宗	雪中筍の奇瑞ありし人
郭巨	黄金の釜を掘出せし人
朱壽昌	五十年母を探れし人
曾參	母に至孝の人
王祥	氷上に寢て鯉魚躍るの奇瑞を得し人
蔡順	盜賊より殺肉を惠まる
庾黔婁	病父の糞を嘗し人
山谷	病母に仕へし人
王褒	雷鳴を恐れし母の墓に伽をせし人
丁蘭	母の形體を木像に造りし人
陸績	幼少の時母に至孝なりし人
剡子	母の為鹿の皮を被て乳を取らんとせし人

れぞれ鹽梅に呼吸のあるが故なり、煎り酒のごとき又料理店の工風に出でたるものなれば家々に於てもその心得ありたきものなり。

製法は古酒三升、醬油五合、鰹節かきて一升ほどを水にてザツト洗ひ、共に炭火にて二升ばかりに煎じつめ、酒の香の去るを度とし燒鹽を入れ、加減し、嗜好によりては酢又は梅干を心次第に加へ冷えぬ内に絹漉して使ふべし。

又味淋四合を煮立て附木に火を移し酒氣を拔去りて醬油四合、酢二合をまぜ沸立て冷まし使ふもよし。

拌え物四季節用

あへものにはさま〴〵の仕様ありて味噌類の仕方にても十餘通りあり、まづ○芥子○唐がらし○胡椒○生姜○山椒○胡麻の類は通例の仕様なれど變りたるものには○芹味噌○三葉味噌○梅みそ○橙みそ○花柚みそ○海苔みそ○魚みそ○胡桃味噌○小鳥みそ○鮑わた味噌○海膽みそ等數ぞへ難し或は酢を加へ或は其まゝにて好みに應じてもろ〳〵の和物に用ゆ。

△獨活の胡桃あへ（春）

獨活の皮をむき一寸五分ほどに切り、太さは割りゆでて笊にあげ、水氣を去り胡桃の皮を去り、擂盆にて擂り燒鹽、砂糖を加へて拌へるなり。

張孝　至孝盜賊を感ぜしめし人
田眞兄弟　紫荊樹の奇瑞ありし人

卅三年前の陸軍々人
(明治七年調)

大將正三位 西郷隆盛
中將正四位(陸軍卿)山縣有朋
中將從四位(大輔)西郷從道
中將從四位(參議)黒田清隆
少將二品 東伏見嘉彰
少將正四位 四條隆謌
少將正五位 山田顯義
少將正五位 鳥尾小彌太
少將正五位 桐野利秋
少將正五位 三浦梧樓
少將正五位 谷干城
少將正五位 野津鎭雄
少將正五位 篠原國幹
少將正五位 曾我祐準
少將從五位 三好重臣
大佐從五位 黒川通軌

△蓮根の白拌へ(冬)
蓮を剝かずに湯煮し後皮を剝ぎ亂切にし薄醤油にて味をつけ、白あへにす、白あへの仕樣は豆腐四分白味噌三分白胡麻二分の割合にて砂糖を少し入れて摺り交せるなり但し豆腐は漉袋に入れて水を取るべし。

△萵苣の芥子あへ(春)
葉を煠でゝよく水を切り味噌を漉して酢と味淋とを加へ芥子をまぜてあへるなり

△芋莖枝豆の胡麻あへ(秋)
ずいきの皮を剝きて一寸五分ほどに切り煠でゝ絞り白胡麻を炒り、よく摺りて酢、砂糖、味淋を入れて又摺り枝豆の實の入りたるを煠で、彈き出し、芋莖と一處にしてあへる、但しずいきを煠るに鍋の葢を取らざるやうすべし。

△蛤の黒酢あへ(春)
はまぐりの剝身を醤油にてザット味をつけよく水氣を取り鍋に胡麻の油炒りつけて其中へ入れてよく攪き交せ、さまし置き黒胡麻、梅の肉、白味噌をよく摺り酒少し醤油少し加へよきほどに延ばしてあへるなり。

△鯒の鐵砲あへ(秋冬)
こちの首を去り三枚に卸し皮を引き薄く作りて鹽を少しまぶし置き、木

大佐	從五位	小澤武雄
同	同	野津道貫
同	同	高島鞆之介
同	同	大築尚志
中佐	正六位	野崎貞澄
同	同	山路元治
同	同	長谷川好道
少佐	從六位	佐久間左馬太
同	同	山川浩
外國官　二十四名		
少佐	三品	北白川能久
同	從五位	大河內正質
同	從六位	樺山資紀
同	同	滋野清彦
同	同	岡澤精
同	同	乃木希典
同	同	三好成行
同	同	黒木爲楨
同	同	坂井重季
同	同	山口素臣
同	同	平岡芋作

くらげ又は削り大根などと共に唐がらし味噌にてあへる、味噌には味りん砂糖を少々入れて擂り、大根は午蒡の様に削り鹽もみにして洗ひ水氣を取るなり。

△赤貝のうにあへ（春、冬）

赤がひの腸をとりて薄くよきほどに切り生のまゝ海膽にあへる、うに固ければ酒少し入てよし。

△鮑の腸あへ（夏）

あはびの腸をよく洗ひて煠で擂盆にてよく擂り燒味噌へ生姜を卸して入れ味淋にて攪き、よく擂りませ、別に鮑を煠でゝ細かに切り酢に浸し酢をしぼり右の中へ入れて拌へるなり。

重詰物取合いろ〳〵

すべて重詰物は九種、七種、五種、三種共に皆味のつけ様も、切形も同じ様にならぬがよし、されぱとて様々の形に切らるゝものにあらず、たゞ大小、長短のよろしきに協ひ丸蓮など同じ様にならぬ心得ありたし又重の方法を見て詰め方の都合よき様に最初より工風して切らざればつめ上たる時所々に不揃の出來るものなり、詰方の割を工夫して切方宜しくすべし。

◎時節見舞の重詰

同　同　大島義昌
同　同　西寛二郎
同　同　川上操六
同　同　村田經芳
同　同　大沼渉
同　同　桂太郎
同　同　奥保鞏
同　同　井上教道
同　同　黒田久孝
同　同　別役成義
外同官　七十七名
大尉　正七位　井上光
同　同　大島久直
同　同　仲木之植
同　同　伊瀬知好成
同　同　寺内正毅
同　同　大寺安純
同　同　兒玉源太郎
同　同　前田隆禮
同　同　沖原光孚
同　同　比志島義輝

△初重七種――たいらぎ、いろつけ焼青ぐし。蒲鉾、玉川。あわせざより角に切る。いりこ、甘煮。梅かゝかけ、車海老、鹽むし。赤海老、さんしよじようゆ。南天かいしき。春は焼白魚、夏は鮎、酒につける、秋は鮭をらんだ焼、冬は鴫の焼鳥。

△二重五種――大長芋、丸くきり、鹽むし火どりて、結びさがらめ、氷梅、観世豆腐。春は早蕨、夏は筍、秋は焼初茸、冬は柚煮。

△三重鮮詰――あま鯛味噌漬、粕づけ、あわび紫蘇千枚づけ、又糀づけ茄子、らつきやう、三杯づけ。

△四重蒸物――羊羹、おぼろ饅頭、ういらふ餅。

◎旅迎の重詰

△初重七種――おし鯛、海老しんじよ、海鰻かばやき、青ぐし。鱚さんぺい、あわびてり煮、かさ松だけ。ひごずいきすづけ。

△二重刺身――かうかひざめ、霜ふりにして、同うづまき。ちさの葉こまく。所天ぐさ。青みしまのり、赤みそ。

△三重引肴――中鯛おろして濱焼かけしほ。せんせうがうらさん。長せんまいふし煮。

△四重――やき飯、胡麻むすび。

旅むかへの重は魚物を多くつかひわけて酒、醬油を吟味して旅中の勞をつくなふことを專一

大尉　正七位　眞鍋斌
同　同　川村景明
同　同　友安治延
同　同　大迫尚敏
同　同　岡本柳之介
同　同　勝田四方造
同　同　藤井包總
同　同　竹橋尚文
外に同官　三百八十二人
中尉　丸井政亞
同　土屋光春
同　淺田信興
同　山内長人
同　隱岐重節
同　西島助義
同　原口兼濟
同　竹中安太郎
同　佐治爲善
同　塚本勝嘉
同　矢吹秀一
同　古川宣譽

とすべし

◎七夜見舞並に病氣見舞

△初重産科——切餅、寒晒の餅米の粉にてよくつきぬき、のしてよき程に切る、入子にして、大根三年味噌漬。
△二重五種——あわせ鱠。鮑てり煮、蒲鉾、宇治橋玉子。あかえい煮つけ
△三重七種——長芋照り煮、まきさからめ、しいたけ。雁喰豆、ざせい豆腐、かんせきぐるみ、かち栗うま煮。
△四重肴——みそ漬のぼらやきて。鹽いわし。但し産婦の食すべき物故小さき鰮をよくあらひて淡鹽にする。
△黄こわ飯

◎舟遊の重詰

△初重七種——琥珀玉子、阿蘭陀てんぷら、鱚しほ燒、骨拔尾かしら落して白鹽。うちくらげ。小茄子、蜜煮、燒根芋、巻づけ貝割菜。
△二重生詰——小鯛。あいなめ。この葉がれい。もづく、花柚。
△三重刺身——あらひ鱸、しらすかんてん黄いろほそく引。岩たけ、わさび、はりにして澤山。大ちよくに煎り酒入て。
△四重後段——かたくり麺ゆで、上あん、白砂糖

◎同　中の部

△初重五種――あかえひ、こゞり煮、赤貝、かうぢづけの鮭、笹の葉につゝみて、つけうらび。さがらめ、ほそくきざみ。

△二重冷物――素麪豆腐、いとさゝげ、

△二重早鮨――あぢ。小鯛。あわび。さす。のりまき。新せうがはたで。めうがだけ。

△四重菓子――葛まんぢう、水羊羹、浮麩金玉糖、こほり餅。



中尉　渡邊章
同　山田保永
外同官　五百二十人
少尉　今橋知勝
同　松永正敏
同　宇佐川一正
同　内田安民
同　今村信敬
同　松村務本
同　馬場命英
同　岡見正美
同　鎌田宜正
外同官　五百七十人

陸軍將校現在數

(卅九年九月廿九日現在總數)一萬四千二百九十七名其内譯

▲將官及同相當官　百卅五名(内休職十四名)

大將　十八名　中將　卅三名
少將　七十三名　軍醫總監　一名
主計總監　一名　軍醫監　七名
主計監　二名

◎船中にて料理の趣向

船の料理とて常の會席と別に異りたる事なし、只手狹とあつくるしき煑たきする事を厭ふのみなれば、船へ仕出し持こむまでに皆よく下ごしらへして行くべし、それに準じて献立もあさ〳〵數仕くむ事肝要なり、又内川なぞに船をつなぎて遊ぶ時、川ぎしなどに得てあしき匂ひのする事あり、又さなくとも狹き所にては人のいき、汗の香などある物なれば、吸物の口取、さかなのあしらひ等にもかをりたかく、凉やかなるものを用ふべし、すべて淸し、鹽仕立の物を多く使ふ味噌吸ひ物は味噌をすらずに煑立てゝ漉てつかふべし、味はあさくしてよろし、何に寄らずこて〳〵としたる品はいとふべし、されど油こき大魚、あぶら揚など暑を凌ぐ物二三種ありてよし、前の重詰の部に阿蘭陀天麩羅、又片栗麪の上餡の汁粉の種を仕組たるは一種の趣向なり、これにて餘は考へ知るべし。又偶としたる思付の品にて人の氣を取る事案ずべし、其作意の事一つ二つ左に記し置かん、それに習ひて臨機應變の計らひをすべし、されど是は船遊に限りたる事にあらず常の酒席に用ゐてよし。

○西瓜を二つに割りて肉をよくすき取り、其皮を鉢の代りに用て西瓜を盛りて出すなど面白し。

○大鉢に水を湛へて蚫を亂ぎりに切りて水貝にして其水に川端にあそび居

▲佐官及同相當官　千七百廿一名
（内休職六十五名、停職十一名）

▲大佐　百六十五名
歩兵　六十九名　騎兵　十五名
砲兵　四十九名　工兵　二十三名
輜重兵　七名　憲兵　二名

▲中佐　三百十三名
歩兵　百七十五名　騎兵　十九名
砲兵　七十八名　工兵　二十三名
輜重兵　十三名　憲兵　五名

▲少佐　八百四十八名
歩兵　四百八十七名　騎兵　五十六名
砲兵　百九十三名　工兵　六十九名
輜重兵　三十四名　憲兵　九名
相當官　三百九十五名

▲尉官（大中少尉）及同相當官
一萬二千四百四十六名
（内休職二百八十七名、停職二十六名）
歩兵　二千五百八十九名
騎兵　六百十五名
砲兵　千七百二十九名
工兵　四百八十一名
輜重兵　百五十一名
憲兵　九十一名
相當官　六千七百八十九名

るぎらといふ小魚をすくひて放して出すもよし但しこれ等も客の身分により又席上の都合によりては妙趣向も却て禮を破るの恐あらば時のよろしきに隨ふべし。

日本化したる 支那料理

海燕漁史

俗にこれを卓袱料理と唱へ昔し長崎邊より流行し來りたるものなり、蓋し古くより唐人に交はりて其飲食 饗燕 の有樣を見、之を眞似て本邦人の口に叶ふ樣に料理したるものなれば支那料理の日本化したるものなり、其の卓袱と名づくるは、本邦の如く膳を用ふるにあらずして卓の面四尺四方高さ三尺に作り帛にて、刺繍ある卓被を被け之れに器皿を並べて用ふるより名づけたるものなり。

食物は大菜、小菜と分ち大菜は通常五種、又は七種とし、小菜は通常七種、又は八種とす、大菜、又大碗と稱し、引替〱に出だす、小菜は小皿に盛りて備ふ、客は銘々酒盃を備へ盤中の菜肉を共にせり、其の作法として我箸を碗中に置く事勿れ菜肉は碟子に受けて食し、匙にて汁を吸ふべし匙は左の手に持つべし骨ある時は碟子に出し、骨皿に入るべしと。

熟字和訓

△恥辱――我が心に恥づるを恥といひ、人に辱かしめらるゝを辱といふ、恥は内より生じ、辱は外より至る。

△規模――規はぶんまわし也、圓きものを作るに用ゆ、模は鑄型なり金を鑄るに用ふ物の規矩模範となるべき事をいふなり。

△追從――媚、へつらひの義なり、追ひ從ふとよめり、人の心を迎へて目の前從ふことなり。

△由緒――緒は絲のはしなり、其の由る處にありて絕へざること、絲の端を抽くがごとくなりとあり。

△贔負――文選張平子が西京の賦に贔屓の字あり、贔屓は力を作すの貌なりとあり、俗に所謂贔負も力を作して荷するの義なし、左傳に其父薪を拆負く、其子負荷する能はずとあり荷擔は負荷の義なり。肩に荷擔するをいふ。

而して其器物の名稱は大菜の皿を大碗又は盤と稱し小皿を碟子又は皿子と稱し、汁碗を葢碗、杯を酒鐘、散蓮花を湯匙、箸を牙筋と稱す、

(燕窩湯) 燕巣を淡醬油にて煮、湯煮して裂いたる鶏肉を上に置いて出す

(東坡肉) 豚の脂肉を六寸位に切りよく煮たゝらして醬油にて味を調へ木耳、乾筍、海麵を上に置き茴香の末をふりて出す、

(白扁豆湯) 白隱元の砂糖煮なり、

(全家鴨) 鶩を五時間ほど水煮して後薄醬油にて調味し、蓮根、長芋、を細に切りて上に置き芥子酢、煎り酒を添へて出す、

(桂圓湯) 龍眼肉の砂糖煮なり大棗を加へて出す、

(鶏湯) 鶏の肉を一寸四方に切り油にて焦り、ひともじ、木くらげ、椎茸等を刻みて入れ、薄葛を按排して出す胡椒粉、又は山椒粉をかけて出す、

(饅頭) 豚肉を細かに刻み湯煮して後蜜にて煮これを餡にして造りたる肉饅頭なり、饅頭の皮を製する時山梔子又は紅を交せて彩をつけたものなり

(鶏卵糕) 卵子百目、砂糖百匁、麥粉百匁、合せてよく掻きませ、四角なる箱の底を紙にて貼りたるものに入れて蒸すなり、冷めてから切りて出す

(紅花糕) 米粉に葛粉、砂糖を合せ燕脂を入れ蒸して切りて出す、

(火腿) 豚のラカンを薄切にして落雁の粉をつけて出す、くひ汁にをろし大根、鹽を合せたるを添ふ、

△偏頗――俗に依怙の甚だしきを偏頗といふ、偏頗は不正なり、片々にかたよりて邪まなるをいふ、頗の字はすこぶると訓めり、差多きを頗る多しといひ、頁久しきを頗る久しといふがごとし。

△慇懃――委曲の貌なり、又ねんごろなる事をいふ。今男女の情交に慇懃を通ずといふ、慇懃は困と鄭重なることをいふなり

△邂逅――期せずして會する事をいふ。

△稽古――古へを稽ふと訓む、上代の書籍を考究して學問の道を開くを稽古といふ。

△數奇――物二つありて對するを耦と云ひ、一つあるを奇といふ、數は命數なり、漢李廣が傳に命數奇にして耦合せずとあり、時に遇はざるをいふ、又俗に偏愛する事を數奇といふもこの義を取れるならん。天性の偏癖をいふなり。

△餘慶――物の過分に有り餘るを稱して餘慶といふ、これは易に積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家に必らず餘殃あり、とい

(瓜子糕)西瓜の實に葛粉と米粉を合せ砂糖蜜にて練り角にして蒸したるものなり、

(甲魚炒)泥龜を豚の脂にて炒り焼酎少し加へ薄葛按排にて出すなり生姜を入れてよし、

(蟹炒)蟹を湯煮してむしり落花生、葱、木耳を刻み、卵をつぶして入れ饂飩粉少し入れかきまぜ薄醤油鹽梅にて出す、

輕便支那料理

杭州逸客

〔炒蝦球〕

これは伊勢海老の煠油なり、ゑびの殼を去り肉ばかりをたゝき葛粉を交せて丸め、豚油にて揚げ、清湯に入れて食卓に供す、

〔蟹羹〕

海蟹を蒸して甲を去り鶏肉の煮斗に葛粉を加へ又葱、生姜を細く刻み入れ酒、醤油にて煮る、

〔粉炒麵〕

海蟹の子あるものを鬻煠にして殼をはなし肉と子とをひとつにして食鹽

ふより出でしもの歟。

△滑稽――史記に滑稽列傳を立て淳于髡、優孟、優旃等を載たり、滑は亂るゝの義、稽は考ふるの義、即ち無稽といふがごとし、物事是非の差別なく無秩序に爲すをいふ又辨舌輕妙にして善惡是非を反對にして説き廻しおもしろきを滑稽といへり。

△活計――俗に產業恒ありて樂むことを活計といふ、白樂天の詩に厭ふこと勿れ、家貧にして活計の微なるをとあり活計は猶生活の計といふがごとし。

△儉約――奢を去つて約に從ふを儉といふ、論語に約を以て之を失する者は鮮しとあり、又奢る時は則ち不遜なり儉なる時は則ち固しとあり。

△木石――白氏文集に人木石にあらず、皆情あり、如かず傾城の色に遇はんにはあとあり、頑固にして無感覺なるを木石といふ

△安堵――堵は墻の事なり、堵を安んずるといふは諸人其所に落着きて移り動かざ

をふりかけ、葱を刻み加へラードにて揚げ饂飩を製して一つに盛り合す。

〔野　雞　片〕

雉の肉を薄くきり油にて煎り、韮、芹など五分に刻みひとつにして醤油を入れ煮汁のなきやうに煎りつくるなり、

又「炒鷄」といふは鷄肉を骨共に一寸位に切り鍋に油を敷き火にのせ半煮へしたる時栗、薯、葱を加へ酒醤油をさして煮込むなり、

〔熘　黄　菜〕

豚鷄の肉と筍、椎茸等を細かに切り交せて豚油にて煎り、卵の黄味をまぜ合せ鹽を加へて鹽梅す。

〔掛　爐　全　鴨〕

これは家鴨の丸燒なり、あひるを羽をぬき丸のまゝ尾の方より腸を拔きよく洗ひて水分を去り葱に實山椒を交へ腹につめこみ其口を糸にて縫合せ太き鐵串に貫し竈の中に入れて蒸燒にするなり。

〔東　坡　肉〕

豚の腿肉を五寸ほどに切り煠て酒七分醤油三分を加へ、茴香少しと砂糖を入れ十分に煮込み皮附の肉色赤くなる時、木茸、葱等を刻み入るなり。

〔海　參　湯〕

海參を竪に切り湯煮をして、豚の煮汁に酒醤油を加へ椎茸、葱等を入れて煮るなり。

るをいふなり。

△車軸——大雨の注ぐを車軸を流す如しといふ、佛書切韻篇に大洪雨を注ぐ其滴は甚だあらし、或は車軸の如く復た枠のごとしとあり。

△風俗——君上の教化の下に及ぶを風と云ひ、民下の習ふて成るところを俗といふ詩經の注疏に見えたり、又漢書の地理志に水土の風氣にひかれて、民に剛柔緩急あるを風とし。君上の情欲に從つて下の好惡取捨動靜するを俗とすとなり。人並に世を渡りて大なる志なく、勉勵奮發せざる庸人を俗人といふなり。

△普請——家造る事を普請といふ、佛語なり、普ねく諸人を招請し其多力を得て事を爲す義なり。

△丈夫——男子の健勇なるを丈夫といふ周の制八寸を以て尺とす十尺を丈とす、人の長八尺、故に男子を丈夫といふとあり、又馬の强健なるを岩乘(今巖疊に作る)といふは道の惡所岩石をも乘るに堪へたるも義なり

洋食一品料理

婦美女

◎キャベヂ巻

牛肉をたゝき玉子一つを割り入れ、牛乳少しとメリケン粉少しを加へてすり交せ、鹽と胡椒にて味をつけ、キャベツの葉をへがし、この肉を適宜の分量づゝ中に入れ一つ〳〵竪に巻き、一時間ほどスープにて煮、別に鍋にバタを沸しメリケン粉を入れスープにてどろ〳〵にのばし肉を煮てある鍋に入れ鹽と胡椒にて味をつけるなり。

◎ハムエッグ

まづハムを水に入れ、一時間ばかり茹で、熱き中に庖丁にて皮をすきとり、小口より薄く切り、フライ鍋にバタを溶かし置きハムの兩面を焼き皿にとりまたその鍋に鷄卵をおとし、少量の胡椒をふり半熟に焼けたる時、ハムの上にのせて出すなり。

◎牡蠣フライ

牡蠣をざつと洗ひ拭布の上に置きならべ、鹽と胡椒をふり、又其上を拭布にて掩ひ一時間ほど輕押をかけ置き、メリケン粉をつけ、ほぐしたる玉子汁にいれ、パン粉にてころがし兩手で押へ、二三十分間乾かしてケン子

俗にこれを借り用ひて物の鍵なるをカンナヨウといふ。

△家督――總領の子をカトクといふ督は帥なり、率ふるなり、一家の事をたゞし、ひきふるものなり。

△斟酌――シンシヤクとは善事を取ッて行ふ義なり、班固が典引に道徳の淵源を斟酌すとあり。

△澆季――世の中輕薄に移り變りたる事をゲウキといふ、澆は薄き事なり、季は末の世なり澆薄なる末世といふがごとし。

△智慧――物を知りて悟りあきらむるを智慧といふと老子道德經の註に見ゆ。

△中興――王室中ごろ衰微して復た興るを中興といふと藝苑に見ゆ。

△傍若無人――漢の王猛の故事なり、猛は豪傑にして無頓着の男なり、垢つきたる衣を着て貴人に對し、虱を捫りて當世の務めを談ず傍らに人なきがごとし故にいふ。

△要害――戰爭などに地理の節所を要害といふ、言は吾れ之に居らば極めて要なるも

油にてあげるなり。

◎牡蠣スチウ

フライ鍋にバタを沸たて、その中に牡蠣をいため、メリケン粉をいれ、スープにてどろ／＼にし玉葱を小口より薄くきり、油でいため、又大賽の目に切りたる蕪をうでてまぜ、弱火にてごと／＼煮、せり酒、を加へ鹽胡椒をふりかけ、牛乳少し加へて一寸煮ておろすなり。

◎牛肉カツレツ

まづ乳半杯に鷄卵とメリケン粉（パン粉にてもよし）をよくかきませ滑かな捏粉をつくり、牛肉を薄切にして熱した油にて煎り、これを右の捏粉につけて再び煎る、次に其鍋に少しの湯をつぎ、鹽、胡椒粉を加へメリケン粉を溶きまぜ肉汁をつくり、煮たてゝ肉の上にそゝぐなり。

◎ハヤシビーフ

牛肉を長さ五分厚さ二分位の角に切り小口から薄く切りたる玉葱をバタにていため、右の牛肉を入て、色をかわるまでいためたる上、メリケン粉をふりかけ、粉の狐色になりし時スープを入れてグツ／＼と五六分間煮、鹽と胡椒にて味をつけておろすなり。

◎肉入オムレツ

一人前鷄卵二個づゝの割にて鉢に入れ、食鹽、胡椒少しを加へ泡立つは

人之に居れば害たり、要害は地の險隘なる所をいふなり、又居家處世の上に、物質の貯へを成して自營をする事を要害といふ、人に攻められてもよく保つ義に用ふ。

△會釋＝＝人中にありて目禮認識するを會釋といふ、心に會得して、解釋する故なり。

△時宜＝＝禮を時宜といふは時の宜しきに從ふべきものなりといふの義なり、又うやまひ敬する事を色代といふは人を禮して顔色を變易するは敬逓の大なるものなればなり。

△了簡＝＝了は曉るなり、解するなり、簡は選ぶなり道理を曉りえらぶことを了簡といふなり。

△烏亂＝＝物の曖昧にしてわからぬをうろんといふ、烏の散亂するが如し、これは瀟湘八景、平沙の落雁に取りたるなりといふ。落雁は亂雜にして取とめぬ故なり。

△若干＝＝物の數は一に始まりて十に終る一十を重れて干の字となるとは稍牽強附

ど攪廻しおき、オムレツ鍋若しくは玉子燒を火にかけ、バタを中匙に一杯落し、其上に前の玉子を注ぎ込み、上面はどろ〳〵にて底のみ黄金色に燒けたる頃牛肉、鷄肉、ハムなど好みの肉の煮付置きたるを少し片寄せて中程に入れ、平たき箆にて肉のなき片方より起し、柏餅の如くに合せて後皿に取る、附合せには洋芹などよし。

オムレツを作るには第一鷄卵を吟味する事肝要なるが、猶火加減にも注意すべし、七輪の如きはあまり強すぎて底の焦つく恐あれば、風口を塞ぎて火氣をあまり強からぬ樣にすべし、又鷄卵の分量は六個に牛乳大匙三杯、鹽胡椒は好みによりて加減すべし又オムレツは燒上ると直ぐに食せざれば美味を失ふものなり。

◎鷄肉サラダ

鷄を軟かくなるまで煮て冷しおき、小片に切り。鷄肉の二倍の洋芹を小切にし、四個の煮た雞卵の薄切とを混合せ、鍋に小コップ一杯の酢と、雞卵の大さほどのバタを溫め、二個の鷄卵を泡立つまで攪き廻して、大匙二杯の芥子粉と大匙二杯の胡椒粉、大匙二杯の砂糖、小匙一杯の食鹽とを混せ合して鍋に入れ、火にのせ、之を熱した頃取下して冷へたる時サラダの上へ注けるなり。

◎海老サラダ

會の詞なれど、若干は總め數を設くるなりとあり、未定の辭なり、或は一の如く或は十の如く數の定まらざる者すべて若干といふ若はごとし也。

△褻晴――衣服の不斷に着る物を褻といひ、禮服を晴といふ、褻はなれたるなり、又破れたる汚れたるの義なり、晴は法禮なり、又改りたる、折目正しき義なり。

△勿體――勿體は正體なき義なりとあり又勿體は即物體なり、人物のすべのよきを物體のある人といひ、君父を殊別し、神明を侮るを勿體なしといふは人たるものゝ正體にあらざる故に斯くは言ふなりと。

△調度――調はとゝのへ也、度ははかる也、物をとゝのへはかる義にして家の諸道具を調度するより、後世借りて之を道具一切の總稱となりしなり。

△器量――能く容るゝを量といふ、人を器にたとへたる事は論語に見えたり、何にでも用ある材を器といふ、人も用ふべき材を器用といふ也。

まづ車海老の大なのを二十分間ほど鹽を加へた熱湯に茹で、取り出して皮を剝ぎ、頭を去り、身を縦に二つに切り、別に萵苣を調理して摘み切り、皿の上に並べ、其上に右の海老をのせ、皿の周圍に海老の殼を飾りとして並べる、サラダソースを肉の上よりかけて食す。

◎魚サラダ

まづ萵苣を細かに切りたるものと、馬鈴薯を湯でて薄く切りたるものを用意し、次に鯛、比目魚、又は鱸何でもよし好みの魚類を蒸して、其蒸魚の骨の交らざるやう注意してむしり、右の薯と一所にして食鹽で味をつけ、萵苣を下にしきて上より汁をかけるなり。

サラダは生菜に酢を懸けたものゝ總稱であるが、大概は萵苣を臺にして、西洋水菜、洋芹其他の野菜を用ひ、酢、鹽、バタなどにて混せ合したものである、すべてサラダは肉類の食後に供するもので大に消化を助けるものであるが、製へて直ぐに食用に供せねばならぬものである。

◎サラダの製法

サラダソースの製法はまづ雞卵の黄味だけをよく掻き廻してこれに乳一合、砂糖大匙三杯、胡椒少量、鹽小匙二杯、バタ大匙三杯を、入れてよく混せ合せ、次に雞卵三個の白味を泡立てそれを攪き廻しながら前の混合物の中に入れこれを別の土鍋に酢五勺、を沸騰させた中に入れ、後に

△邪見＝＝佛書に父母に孝行せず佛を敬せざるを邪見といふ、俗間酷薄にして親切の氣なきを邪見といふ。

△相好＝＝容貌の事をいふ、佛像の三十二相、八十種好の說あり依て顏面を相好といふ。

△互角＝＝物の力の相等ふして優劣なきを互角といふ、互角は牛角なり牛の頭の兩角の如く相等しきをいふなり。

△如在＝＝俗間人に疎略することを如在するといふ、疎略にせざるを如在なしといふ其意義は神に接するには、音聲形色の見聞すべきなし、これを祭り亡在がごとくするは誠の道なり然るに、人に交はるに及びては其人現實に在り、故に如の字を付くべからず。今現實に在るを如在にするは疎略なり是れ有形と無形の違ひ神と人と道同じならざるをいふ也。

△火急＝＝急は迫るなり火のついて迫るやうに忙はしきを火急といふ。

△莫大＝＝何々より大なるは莫しといふ

又此の土鍋を火にかけ、焦付かぬ樣にかきまわしながらばた〳〵する位の度合で火から下し、鍋のまゝ水に浸けて冷す、又別に馬鈴薯の湯でたものを薄く切り、之に生の萵苣、胡桃、林檎、赤大根などの薄切二三種添へ前の汁を注けて出す。

昨今の野菜

東京に於ける八百市場は本所一ッ目、同四ッ目、同中の郷、駒込淺嘉町、神田多町、日本橋濱町、京橋大根河岸の七ヶ所なるが之を通じて平均せる野菜の價格を聞くに左の如し、但し各家庭にて買入るゝ參考ともなるやう或は貫目のものを個數にしたるもあり成るべく少數にて見積りたればこれに多少の利益を加ふるは當所に於ける相場となるなり。

▲大根　ことしはなか〳〵高價にて却つて澤庵漬の方廉し、五本一把にて小五錢より大二十錢まで▲蓮根　これは大中小の區別著しく一把八錢より五十錢まで▲午蒡　可なり揃ひし所にて十本一把にて十錢位▲胡蘿蔔　之も區別多く小三錢より上物廿五錢に至る▲松茸　百目にて並十錢ゟ上等十八錢迄▲さと芋　一貫目並十一錢より上十二錢五厘位▲山芋　上等一枚十錢並にて十枚卅錢▲生姜　谷中把にて下十錢上廿錢▲茗荷　並一錢に廿上等十▲初茸　一舟並物一錢二厘上二錢三厘▲小蕪　一把上二錢中一錢二厘並五厘▲つけ菜　川崎品川方面の南物にて一把一錢五厘並物即ち葛西方面より來りて味もよきは二錢五厘▲小松菜　一把二錢▲馬鈴薯　一貫目下八錢ゟ上十八錢まで▲玉葱　一貫目並十二錢中二十錢上廿五錢位▲茄子　一錢に平均三個▲葱　下線物一錢に七本葛西物三本位▲芋莖　一把平均三錢五厘▲百合根　一個にて並一錢中三錢上四錢止り▲紫蘇の實　一升六錢▲親芋　今の頃相場なしされど惣菜には一番格安果物は▲梨　一籠下線物にて七十入二圓、八十入一圓六十錢、九十入一圓三十錢、百入一圓百二三「入八九十錢、南物一個小五厘より上二錢▲栗　五百目一升並十錢より丹波栗大三十五錢迄。

がごとし最大なるをいふ。

△消息＝＝禮記に陽の生ずるを息となし陰の死するを消と爲す、陰陽生死往來するを消息といふ、今これを音信贈答の往來するに用ふ。

△鹽梅＝＝古昔は酢醤油なし、故に羹汁を和するには必らず鹽と梅とを用ひて、味を調へたるなり、これを鹽梅といふ、これ尚書の說命に出でたり、其意は鹽梅適中して羹を調ふごとく、臣下の君に事ふるには剛柔可否相濟ふて其德を成すに喩へたるものなり。

△機嫌＝＝元と佛語の譏嫌といふより出でしものなり、人のそしり、きらふ事をいひしものなるが、後世御機嫌など稱して専ら心氣の快否に用ひたり。

△野心＝＝字は左傳に見えたり、野獸の心の如く制御し難きを言ひたるものなり、又豺狼の人に馴れざるが如く人臣の君に叛いて弑奪の心あるを指して野心を包藏すなどいへり。

諸國名產　山海料理

附り魚類の季節とその眞味

松の門

◎鰹（かつを）

鰹は東海、南海の產なり、紀伊、土佐、常陸、磐城等にて多く產す、常に黒潮を追ふて遊行するが故に冬期といへども此海流中には棲息するなり、五六月頃のものを初松魚と稱して東京の俗大にこれを稱す料理は

〔あんかけ〕鰹の肉を薄切にして蒸し、葛餡をかけるなり、おろし山葵を香味とす。

〔味噌煮〕小口より薄く切り、赤味噌を濃くすり、味醂にてゆるめ、水嚢にて漉し胡椒の粉を入れて煮るなり、丼物によし。

〔沖なます〕鰹を卸し強く鹽をふり少時して冷水にてよく洗ひ、厚切にして酢を掛けるなり、魚は殊に新らしきを撰ぶべし。

〔傳法燒〕葱の白根を繊にうち土器に敷き、鰹の身を作りて其上にならべ、燒きて掛鹽にすべし。

〔松葉燒〕細き竹三本を火鉢の上に並べ鰹の一節づゝに取りたるをまづ皮

文語錦嚢（秋の部）

文章を作るに必要なるは、材料の豐富なる事なり、美文は更なり達意の文を書かんにも見や言はん角や述べんとする事を、思ふがまヽに筆に寫し得ざるは、所謂痒き處ろに手の屆かぬ感あるべし、此時其思想を云ひあらはさんには、必らず其の用ゆべき詞の十二分に腦裡に蓄へ居らざるべからざるなり、故に文を作るには先づ其光景情況を云ひ顯すべき所に用ゆる言語を多く覺えて、後にこれを使用せば、文は立所になるべし。

秋はやう／＼萩の葉風の秋涼しうなる頃より、蟲の音、雁の聲に物を思ひ、野邊の千種の花のいろ／＼に置く露をあはれみ、菊紅葉のかげに興を催し、さては稲刈り、衣擣つ賤が伏屋の心づくしを思ひやるなどさま／＼あるべし。

〇立秋

秋立ち歸る空の氣色

秋と告げ渡る目にはさかに見えれど

の方を松葉にて燒き肉の色白くなりたるを見て卸し水につけ、二三度かへて後取出して大切になし芥子酢を掛くるなり。

◎鯛（たい）

魚類中第一等の美味として賞翫し古來盛饌に供へられたり、四季共に味に優劣なけれど尤も三四月の候を好季とす料理法は四季に亘りて廣く且つ夥し。

〔潮煮〕鯛の肉を卸し、厚く切り身にして鹽をふり掛け、少時してサつと煮立て肉をあげ其汁をこぼし更に鰹節のだしに入れて魚羹に製るべし吸口には木の芽よし。

〔濱燒〕鱗も鰓も取らず竹串にさし鹽をふりて尾鰭を濡紙に包み、よき火に入れて燒きあげるなり輪切柚子新生姜など添ゆべし。

〔沖煮〕鱗及腮、腸も取らず其儘鍋に入れ水を多くし、よき酒三分の一ほど加へて煮るなり、煮上りて水をさし溫かみある内に鯛を箸にてこそぐれば鱗はよく取れるなり、是れは漁人中の料理にまがひしものなりといふ。

〔南京煮〕中位の鯛を鱗腸共に取りて水に浸け、少時にして引あげ、水氣を去り、酒を塗り、遠火にてあぶりさて鍋に昆布を敷き鯛を其上に置き醬油と味淋と水を等分にしてゆるやかに煮あげ薯蕷を摺りて鯛の見えぬ程煮

物思ふ秋のはじめ
　秋風のそよと立つ
萩の葉分けの風
　萩のうら葉、萩の下風
秋待ち得たる蟲の音
　草葉の上に露見えそめて
夕月の光ほのかなる月の眉
　秋はとく立にけり
袖の上より置きそむる露

○秋草花

秋草の花のいろ／＼
　錦織り出だす野邊草の秋
とり／＼に咲き匂ふ
　野べ面白き頃
萩が花妻、女郎花
　露の玉萩、秋萩の錦
口無しの色こそ懐しけれ
　一時の榮、榮花の夢
しのゝめの空色に匂ふ
　風のまに／＼打ち靡きて
ますほの薄、初尾花

るなり、香味には卸し大根、やき蕃椒などよし。

〔粕漬〕大なる鯛を卸し、小なるは鱗腸を去り其まゝ鹽をふりてつけ置き凡そ一晝夜を過ぎ水氣をとり酒粕、鹽入れ桶、瓶の類に漬け込み、押をかくべし但し押蓋隙間あらば卷藁など押し入れて外氣の透らぬ樣にすべし。

〔けんちん蒸〕中位の鯛をひらき骨をすき取り醬油と味淋と合せたるに浸し、別に鷄卵を入れ、味をつけたる炒り豆腐に木茸銀杏、其外芹、三葉などの野菜をこれも同じく味をつけませて鯛の腹につめ、蒸籠にかけて蒸すなり。

〔鹽釜燒〕大鍋に鹽を多く入れ鯛をよく蒸し上ぐるなり、これは濱方にて網にかゝりたる鯛を藁苞につゝみ鹽を製する釜に入れて煮るものに擬はせしなり、これを鯛料理第一等の好味なりとす故に鯛を鱗をこきしのみにて腹を開かず腸は腮より拔取るべし摺生姜を添へて食卓に上すべし。

〔鳴戸煮〕鍋に鹽をふり、卸せし鯛の肉を入れ古酒をひた／＼になる樣にかけ煮付くるときは屢々水をさして酒氣のなくなるまで煮るなり、香味には陳皮の粉などよし。

〔泡盛鯛〕小鯛を三枚に卸し薄鹽にして雞卵の白身を茶筅にて泡立肉にかけて蒸すなり、硯蓋物に用ふ。

〔酢漬〕小鯛の鱗ひき腸を去り酢にて漬け置くこと二三日間にして更に

千種の色に咲く
手折りてや行かまし
秋もしめたる野守が庵
○露
露吹き結ぶ風
露の玉ゆらぬき留めて
萩が露に置く露の
朝日にきらめく
分け入るまゝに露けき
秋の深さも覺えて
一むら雨の後
秋は殊更に露深う
○蟲
鈴蟲ふり出でゝ鳴く
ふりならす聲いと涼しくて
廣前の鈴の音覺えて
降りしきる雨にもまぎれず
千代の秋を契る
蟲のねしげき
さゝがにの巣がく軒
籠の中に引き籠められたる

水に浸してよく洗ひ水氣を拭ひ去り酢、砂糖少許を加へて漬込むべし。

〔鯛味噌〕鯛の肉をよく洗ひ蒸して細かに碎き味淋に燒酎を加へ炭火にかけ、其汁の盡るまで煮つめ鯛肉五百匁なれば、上等の味噌五百匁、味淋一升、砂糖一斤半を煑つむるなり、又一法は白味噌、白砂糖を加へ鯛でんぶを入れて炭火にかけ凡そ半日ほど煑つむるなり。

〔鯛どうふ〕鯛の肉をよく擂りて鷄卵と葛粉をまぜ繫ぎとなし、鰹節の煑汁にてゆるめ鉢に入れ蒸籠にて蒸し上げ適宜に切りて葛餡かけなどにしてよし香味は芥子又は山葵を入るべし。

◎甘鯛（あまだい）

一名興津鯛といふ、其色紅白なれど白は少しく淡紅色を帶びて之を白あま鯛といふ料理法は味噌漬、鹽燒、蠟燒、吸物等あり季節は春を眞味とす。

〔葛たゝき〕あま鯛を切身にして葛粉をふり敲きてよきほどに取り、胡麻油にて揚ぐるなり、煑物羹汁によろし嫁菜、ほうれん草など取合せてよし。

〔菊葉蒸〕甘鯛の首を鋤き鹽を少し振りて菊の葉を敷き其上に置きて蒸籠にて蒸し菊の葉を取代へて皿に盛るなり。

◎干鯛（ひだい）

鹽にして干したる鯛なり料理法は泔水に四五日つけ置き日々水をかへ、よくふやけたる程を見て引あげよく水氣を取り半日ほど日に當てそれより

曳る駒の跡追ふ轡蟲
　手綱とゞめてきく
分しき民の家居
　野邊の錦をや織り出だすらん

○秋　雨

森の下陰、蓬が庭
　月の夜、草の葉がくれ
木葉色づく頃
　かゝらぬ袖もしめる
やう〳〵寒く成り行く
　はら〳〵と降りかゝる
秋の錦の色そふ
　打ちしめる宵の雨
秋たけし山里、鹿の聲
　雨毎に涼しく成り増る
又も降り出でぬべき空
　まがきの花の露そふ

○秋　夕

身にしみ渡る夕風
　墨染のゆふべの雲
雲のはた手に殘る夕日

いろ〳〵に使ふなり。

〔赤みそ本汁〕右の如くして置きたる鯛、皮をつけて八分四方ほどに切り両面をよくこがし焼きて靑干の菜をよく下煮して置き赤味噌の本汁へもりて右の鯛を岡入にして出す。

〔鉢肴〕右同じ鯛をほどよく切り、味淋と焼鹽ばかりにて煮る、尤もしる水の如くなる時器に盛り、梅が枝でんぶを澤山にかけて出す。

〔鯛かゝ〕右の鯛を皮を去り、身ばかりをじよたんにかけてよく乾かし擂盆にて細かに碎き酒と醤油にてうま味をつけるなり。

◎鰯

鰯は北陸並に東海に多く產す、形鯵に似て圓く、細き鱗あるも落易し大なるは八九寸に至る、歐洲にてはこれを罐詰となして諸國に輸出すれど我國にては多く干して肥料となす其の料理法はいろ〳〵あり季節は秋冬也。

〔あらひ〕皮を去り三片に作り笊に盛り冷水に入れ、水を數回換へ肉のはせるを度とし卸し、大根又は山葵、蕃椒味噌を添へて下物となすべし。

〔ぬたあへ〕肉を裂き、大根をうちて入れたゝき味噌に焼とうがらしを入れてあへる又味噌に酢を加へ拌へるもよし。

〔赤味噌こくしよう〕骨を去り三河赤味噌にて汁を拵らへ、唐の芋類を取合せて出すなり。

入相の鐘のひゞき
今日も暮れぬるなり
　千種の花の色見えずなる
袖の上にこぼるゝ露
　夕ばえ雲のたゝずまい
　○秋のながめ
はる〴〵と打ち見渡す
　清う澄み渡れる水
月清く風白し
　秋にうつりたる氣色
秋の色果し無き
　限りも知らぬ秋の花野
波よる野邊の尾花
　薄の原に打ちなびく菅の小笠
と渡る雁、目路の限り
　遠き島根も見ゆ
秋田刈るにやあらん
　眺望いとめでたし
　○野　分
野分たつゆふべ
　荒ましき野分

〔薄燒〕拔きて骨を去り竹串にさして味淋を煮つめ山椒醤油を和して燒くべし。
〔すりみ〕骨も皮も去り擂盆にてよく擂り葛粉を入れて丸めて煠るなり、皮牛蒡大根など入れ煮物としてよし。
〔酢漬〕新らしきを撰み、膓と頭を去り清潔にし、大なるは適宜に切り、小なるは其儘にて共に土鍋に入れ、酢を上より魚に浸るまで注ぎこみ是に鹽少し入れ火に上せ、煮沸して其煮へ熟するを待ちて之を硝子瓶、又は陶物瓶に裝塡し、煮汁を注込み、松脂にて其蓋を密封するを法とす。
〔糟漬〕鹽鰯のものを取り上等の酒粕に重ね漬するに先づ粕を入れそれより毎層紙を布き魚と粕とを接つかざる樣にし段々に重ねて強き壓を加へ貯ふべし其也猶鹽製、乾腊等種々あれど家庭用としては手數煩はしければ省きぬ。

◎鮁(いなだ)

いなだは一名はまちといふ鰤の少きものなり、多く日本海に產し冬春を季節とす、料理法は筒形にして濃汁によろし又醬油漬にして燒肴にもすべし、又開きて骨を去り鹽を強くして皮のまゝ細作にして蓼酢をかくるもよし又切身にして火どりたるを蒸し葛餡かけにもす、香味におろし山葵、刺身などには紙鹽とも稱へ美濃紙か半紙を肉の上に敷き其上に食鹽少しを振

大木の根をさかしまにして
千種の錦見る影も無く成して
紅葉餘波無く吹き散らして
散り積りたる落葉
袖垣のひまもあらはに成る
小柴垣吹きしきりて
折れふしたる庭の小薄
あら獅の吠ゆるに似たり

○雁

雁がれ、雲井の雁
雲井はるかにと渡る
秋霧の立ちなびきたる空
門田に落つる
稲むらのかげに落つる
稲葉色づく田面
打ち羽ぶく羽音
うら寒らしき雁がれ

○霧

立ち渡る霧 暁方の空
霧の底に沈む
尾花の波よりつゞく

かけ姑くして取り除き作るをよしとす。

◎鮟鱇(あんかう)

季節は冬月を真味とす、口と腹のみ大くして形醜く長き髯ありて常に海底に蟄し巨口を開き他の魚の来るを待ちてこれを飲むなり、此魚、皮肉共に佳なりといへども殊に膽の黄味を以て最美味とす料理には、

〔きもあへ〕あんかうの膽を取り煠で、肉を細かに刻つたるに味淋と鹽とを加へ摺りて肉をあへるなり、

〔あんかう汁〕皮を剝ぎ、肉と共に切つて熱湯に入れ肉の縮みたるを取あげて冷水に浸し、更に酒をかけ置き少時して味噌汁に入るべし吸口は粉山椒よし、あんかう鍋も同じ仕方なり、何れも冬の珍羞なり。

〔ほし皮〕鮟皮は種々の料理に用ゆ赤味噌吸物、丼物等なり、丼物は鮟皮をよきほどに切り蒟蒻或は短冊大根など入れて芥子味噌ぬた拌、又唐がらし味噌にする。

◎鯔(ぼら)

この魚始めは堀又は溝などに生れ、長ずるに及び川より海へ出で、生活す、即ち「いな」の大きくなりたるものなり、季節は冬春尤も多し、料理法は筒切にして濃汁、あらひ、にしてもよし、ひらきて山椒醤油の附焼細かに切り鹽をふり、芥子に酒粕をすり交せ酢に味噌を加へてあへるなり。

松風の音も波にまがひて
田中の森、海の面
紅葉する山邊
鹿の音かすかに聞えて
やう／＼絶間見えそめて

○鹿

妻戀ふる男鹿
紅葉踏み分けて鳴く
秋の雨しめやかなるゆふべ
小男鹿の聲、鹿の音
涙もよほす心地す
風に散る紅葉のもとに
秋の雨に濡れ／＼て
紅葉の下かげさらず

○小鷹狩

小鷹手に据えて行く
まだ在明の月殘れる野邊
野邊の小萩原
八千種の花野分け入る
日も西山に落つるまで
萩さかりなる秋の野

◎白魚(しらうを)

冬より春の半頃河口に産す白色にて一二寸、味淡白なり、

［きぬ白魚］鶏卵の黄身にメリケン粉を練り合せ白魚をくるみ胡麻油にて揚ぐるなり。

［吸物］菜のつまみあしらひですまし羮汁につくる、又白魚に卵の白身を撹きませ箱に入れ蒸して適宜に切りすまし汁にするなり。

◎鮭(さけ)

季節は九月十月の頃を最も美味とす、多く北海道に産して大なる者は二尺五六寸に至る、秋分河口に來りて砂礫の間に産卵す、其遡るを待ち網獲す料理法は、味淋醤油の附燒を第一とす。

［ボイルド］鮭の鱗を去りよく洗ひ、鍋に水十分入れ魚の浸れる位にして煮上げ皮を去り鹽を加へ再び文火にて徐かに煮るなり、盛合には胡瓜のせん。

◎鮒(ふな)

丸鮒、平鮒の二種あり、ひら鮒は大にして七八寸に至る又丸鮒は體小にして共に湖池に棲息し常住産卵は鯉に同じされど多く暖地に産して寒地に産せず、近江の源五郎鮒は其著名なるものなり、又霜月漁するものを紅葉鮒と稱す、料理は甘露煮、雀燒等あり、

〇擣衣

唐衣打ち急ぐ
長安の秋、宿守る妻
夜寒覺ゆる頃
夜寒の風もいとはず

〇菊

千歳の秋の根ざし
菊の香おくる風
千代をふる根の菊
世に隠れたる住家
九重の御垣、千秋を契る
雲井の庭に根ざす
暮れ行く秋のなごり
紅葉散る庭に咲く

〇紅葉

色よく染めたる梢
林間に酒を暖めけん
立田姫の織り出したる錦
誰が故郷にかざす錦にかと
秋毎の錦、蔦の紅葉
錦を敷ける庭

〔甘露煮〕文火にかけ湯煮をして水飴を加へ、煮汁の詰まる毎に水をさし大約十時間も經て薄醤油を入るなり。
〔定家煮〕丸の儘燒酎をかけ、文火にて靜かに煮るなり、燒鹽を加減して味を附くべし。
〔雀燒〕小鮒を脊ひらきにして串をうち山椒醤油にて附燒にするなり、
〔鮒酢〕子持鮒の鱗を去り腸を拔き鹽に浸すこと二月ほどにして鹽を洗ひ水分を去り米飯の冷めたるを鮒の口より腸の中へ詰めこみ尚ほ米飯にて漬け押をかくるなり凡一週年を經て始めて成熟すべし。

◎牡蠣(かき)

多く沿岸の岩礁中に附着するものなり、滋養の質に富み、消化によろしく需用多し、西洋にては佛國を以て第一とす、巴里の料理店にては一個五フランに價するものありといふ、料理いろ〳〵あり。
〔煎かき〕蠣のむき身を洗ひ爼にのせ庖丁にて叩き鍋に少し鹽をふりて掻き廻しながら炒りつけ、胡椒、陳皮等を振りかくべし。
〔揚かき〕メリケン粉を水に溶かしこれを衣にして蠣の水をきりたるを布にて拭ひ一粒づゝくるみ製油にて揚ぐるなり。

◎蟹(かに)

かには其種類少からずして我國古來食用に供すれども製法して上饌に用

蕙芳朽葉いろ〳〵に染めて
　塩原のさと

○暮　秋

暮れ行く秋の氣色
　冬にうつりもて行くけはい
時みぢかに成りて
　木の葉の散り亂るゝさま
徒らに暮れぬる秋
　涙も露もとゞまらず
枯れ〳〵になる蟲の音
　物悲しさを集めたる秋
在明の空物あはれに
　壁の中のきり〴〵すも聲弱りて

應急藥函

◉眩暈手當

これは過激の勞働、房事過度、子宮病、心臓病、胃病、等より起る事あり凡て是等の眩暈を起したる

ふるとなし、淸國にては蟹を珍重して貴重の料理に供し又之を嗜好すると極めて盛にして鮮を賣り、醬を鬻ぎ、或は乾して腊となし、其他粕漬、鹽漬、酢、醬油にて醃藏したるもの多し、蟹類の新鮮なるものは其味極めて佳味にして特に滋養の効あり、越中地方にては往々蟹肉を煮乾して人に贈ることあれど未だ廣くこれを鬻ぐに至らず、近頃罐詰となりて市中に現はるゝものあり、其料理法は種々あり。

〔蟹羹〕これは支那の料理法なり海蟹を煮て殻を去り鶏肉の煮汁に葛粉を加へ、又葱生姜を細く刻み入れ酒醬油にて煮るなり。

〔粉炒麵〕海蟹の子あるものを鹽煠にして殻を去り肉と子と一つにして鹽を撒りかけ、葱を細く刻みて加へ、豚油にて揚げ温飩を製して一つに盛り合すなり。

季節取合いろ〳〵

汁のいろ〳〵

○茄子の大賽に、菜人參こま〳〵○新里芋に十六さゝげ、
○百合の根に新牛蒡のさゝがし○零餘子にしらが牛蒡、
○藷の角切りに莢いんげんの繊○松蕈に冬瓜の大賽、口柚子

者には成可く頭部を上方に起し足踵も下げざる樣に保持し、腹部は凹形に保たしめ、有合せの香水を鼻に當て氷或は冷水を以て頭部を冷し、胸部を押しては放ち〳〵再三斯の如くして患者少しく正氣に復するに至れば直ちに氷片又は冷水少許を飮ましめ、一室に入れ枕を高くして靜に安臥せしむべし。

◉火傷手當

火傷をした時はオレーフ油グリスリン、亞麻仁油、胡麻油等あり合せのものを塗りて空氣の當らぬやうに布巾にて結びて置くか或は重炭酸曹達を撒布して濕つた布片で包んで置くべし、若し水泡にならば針の尖を赤くなるまで燒きて消毒したる上水泡の側部にさし入れ

○初茸につまみ菜放し、口柚子

汁をうまく仕立るには初茸をこまかにして清水に浸しおき、よく洗ひて擂盆にて擂り鰹節の煮汁にてとろゝ位にすり延べ、うら漉して汁に交ぜるをよしとす。

○鯊の片身おろしに銀杏大根○燒鮎に根芋に口靑山椒、

○芝えびに茄子の銀杏に粒松露○はらゝごに、ぬか子に、豆腐の滓

○鮑の薄切りに靑昆布のたんざく○蜆身に萵苣のこま〳〵

吸物のさま〳〵

○むすび干瓢になた豆のせん○よせ慈姑に、しらが午蒡

寄せぐわゐは皮むきて山葵卸にておろし胡椒ふり掛けし葛粉とともに砂糖少し加へて擂盆にて擂りいか樣にも形ちどり甑にて蒸すなり。

○鯒を斜切りにして、十六さゝげとゝもに使ふ、

○ゑその骨切りに松茸に、へぎ柚子○黑鯛の切り身に、粒初茸に、ぼう風

○蛸ひら〳〵に切り、小茄子を銀杏に切り、又は、しゐたけを用ひてよし

○鰕のたゝきに、冬瓜のそぼろに、生姜のこま〳〵（鰕のたゝきは首と尾を去りて皮ともによく庖丁にて敲き葛少し入れてたゝき合せ、如何樣にでもとりて酒にて煮るなり。）

○むき蛤に、靑昆布のひら切り○鶉のたゝきに、つまみ菜に、口柚子

膾と刺身

○鯔の薄作りに、茗荷の纖、からし酢味噌

て水を出し前の油類か又は硼酸軟膏を塗つて繃帯して置けば宜し。

●切傷

誤つて刃物などにて手足に傷をつけたる時は四十倍の石炭酸水で洗ひ、指頭にて傷口を強く押し、血の止まりし處にて殺菌ガーゼをあてゝ、其上を油紙（薬店にあり）にて包み繃帯して置くなり、二三日にして傷口が附着したならば繃帯をやめて絆瘡膏を貼り成るべく水に入れざるやうに注意すべし。

●又一法

創傷は其の大小によりて療法を異にすといへども、大創傷に至りては速かに醫師の手に懸けざるべからず、其刃物と、竹木と、硝子又は石抔にて受けたる傷に論なくす

○鯉細作り子を酢にて解き、おろし山葵○鯖の薄作り、海月の纖、二はい酢

○針魚の細作りに、貝のはしら、生姜酢

○葛引鯛平作り、蓮いもそろへ、おろしわさび、煎酒

鯛を三まいにおろし、刺身を作るやうに木どり、葛粉にくろみ、ざつと湯くゞらせ、水に浸して後ちひら作りにするなり

○沙魚細作りに、紫蘇の穂そろへ、わさび醤油、

○いなだの皮のまゝ作りて、蓼酢、その作り方は皮骨を去り鹽をふり置きて細くつくるなり○鰯ひき裂きて、大根のたんざくに、生姜酢、

○きわだまぐろに、もみ大根、土佐醤油、（もみ大根は短冊に切りて鹽にて揉み辛みを絞り捨るなり、）

和へ物

○人参のほろあへ、（これは葉をしごきて根を短冊に刻み、葉も根も分けて湯煮し、葉をこまかに敲き絞り白胡麻を擂り、白味噌入れてよく擂りてあへる、）

○里芋四つ半に切り、松茸の笠薄切り、柚子味噌あへ

○よまき扁豆、生姜味噌あへ○赤貝へぎて茗荷を纖に打ち、山葵味噌あへ

○栄螺細く切り、新蓮根らんぎり胡麻味噌あへ、

べて傷口を改め、其細片の傷口に止まり、或は有機物のある時は腐敗を來して難事に及ぶものなれば充分之れを取除くべし、さて、四十倍の石炭酸にて洗ひ、(燒酎にてもよし)硼散を附け置くべし。

●急癇手當

本病は小兒に發する危險の病にして俗に「引つけ」と稱す常に豫防するには急劇なる精神の衝動を避けしむること肝要なり、又小兒の生母及び乳母にして若し神經症の病氣ある時は其乳汁を與ふべからず小兒該病にかゝりたる時は氷を以て頭部を冷し、且つ溫湯に入浴せしめ、裸體となし、安靜に柔かなる床上に極めて靜かに臥さしめ便通をよくする事に注意し若し秘

○蜆見に葉人蔘の五分切、山椒味噌あへ、

○壁り分鮹の黑胡麻あへ、蜆身の青あへ、松蕈の白あへ、

○えびみそあへ、伊勢ゑび茹でゝ肉を割き、腦醬を取り、味りんに鹽を少し加へ、酢にて解きゑびの肉をあへるなり、

煮物

○てり煮柚子、柚子の皮をよく煠でゝ味醂鹽砂糖にて煮上るなり付合物によし○ひしぎ慈姑、(茹でゝ皮をむき味をつけ布に包み俎板に上せ手にて押ひしぐ、)

○銀杏のひしぎ寄せ、新銀杏を割て炒り、澁皮を去り肉を敲きひしぎて、饂飩粉に寒晒しの粉を合せ、味醂、醬油少し入れて延し、銀杏を五つ程づゝ閉ぢて胡麻の油にて揚げ、蓮芋又は松蕈等取り合せ、葛餡かけて出す、

○鹽煮松茸莖を去り、笠に鹽をふりかけ、空鍋にて炒り付け、青海苔をかけて出す、

○如何樣にも切りてざつと湯煮し、おろし柚子、葛掛にて出す、

○いなだの酢煮に、干ずいきの煮しめ○燒餅の煮浸しに、新蓮根の鹽煮、

○鰯の餡かけ、首をとり三枚にへぎ、器に入れて蒸し水氣をしたみ、おろし山葵あんかけにて出す、又丸の儘腸を取りて蒸し。生姜酢にて出すもよし、

結する時は速に通しをつくべし。

◉瘧（おこり）の手當

おこりは熱病の一種にして多くは一日おきに起るもの醫家にてはこれを間歇熱といふ、此病の治療中はなるべく寒冷ならしめざる樣注意すべし、寒戰を發する時は毛布のごとき輕くして暖かなるものを掛け腹部には懷爐、溫石、或は溫巴布を貼用するなど益々體溫を發せしめ、又發熱して苦悶する時は氷を以て冷却し「レモナーデ」を飲用せしむるか、或は頭部に氷を乘せて冷すをよしとす、熱の爲嘔吐を發する時は鹽酸「レモナーデ」を與ふるを可とす。

◉霜燒手當

追々寒氣に向つて霜燒の起る時候

○蛸の柔か煮に、じねん薯のうま煮○蛤の時雨煮に、しその實のうま煮、
○榮螺を薄切りにし、腸を解きて共煮、胡椒ふりかけ、

◎炙　物

○慈姑を串にさして胡麻醬油の付燒、（胡麻醬油に酒を加へつよき火にて燒付にするなり、
○松蕈の笠を亂切にして柚子醬油付燒、
○子持鮎の色付燒に、山の芋の蕃椒みそ付燒、
○鰤の一夜鹽に午蒡の太煮、（太煮午蒡は太き午蒡を五六分程に筒切にしよく〳〵煠でゝ、味醂四分 醬油三分 水三分の割合にて上にのる程に入れ半分程煮詰りたる時、葛をとき入れ交せかへし、煮上げて青海苔をふりて出す。）
○鱧を骨切りにして、胡麻の油にて付燒、葱味噌かけ
○鱮魚を拔き、白燒きにして卸し、生姜、生醬油、
○きはだ鮪の傳法燒、

葱の白根を鮪にうち炮烙に敷き火にかけて少し燒けたる時、鮪を刺身のやうに作り上へ並べ、燒きて色の變りたるとき器物にとり煮返し、醬油をかけて出す。

○鱮の土藏燒き、背より割きて中骨除き、味噌を籠め紙にて胴を卷きて燒なり○鯰の利久燒、生醬油に粉山椒を交せて付燒にするなり

となれば運動によりて血のめぐりをよくし暖き布片にて前年凍傷の出たるところを掩ひ時々そこを摩擦して置けば豫防する事が出來るものなり、若し又しもやけになりたらば、やはり時々摩擦して、カンフル丁幾かヨヂユム丁幾かイヒチオール又はラノリン一〇、〇とカンフル油一、〇とを混せたもの等を塗りて置けば効能あり。

●ひゞの手當

これも又ワゼリン或は硼酸ワゼリンを塗れば治す、或はアルコールとリスリンを混合たものを塗りてもよろし。

●打傷の手當

雨戸を開け閉てする時、誤つて指先をひどく挾みうちすることなど

〇鶉を燒きて大根おろし、煮返し醤油〇小鰭の尾頭を取りて蕃椒みそ魚田

揚物いろ〳〵

〇茄子の皮をむき横に皮を切りて精進あげ〇百合の根を剝し三つ程づゝ寄せて精進あげ〇紫蘇の實の穂の莖を殘し一本づゝ精進あげ

〇生姜の根を四つ割りにし莖を一寸程付け精進あげ〇鱧を骨切りにし細く切りて天ぷら、

〇鮹を三枚におろして天ぷら〇鯒を細くきりて天ぷら

〇鰶の骨をとり身を敲き寄せて天ぷら〇伊勢鰕の皮を剝き首を取り尾を付けて天ぷら〇餅を蒲鉾に仕立衣なし天ぷら

浸物いろ〳〵

〇藤豆をゆでゝ黒ごま醤油〇長芋を繊に切りざつと湯煮して生醤油〇茄子をさきてくるみ醤油〇水菜を湯煮してからし醤油

〇黄菊の花を散しざつと湯を通してからし酢、

〇萵苣を亂切りにし生姜細く切り交せて酢醤油

〇蓮芋を小口切にして酢醤油振胡麻

香の物

〇達磨漬〇茄子の芥子漬〇紫蘇の實の鹽漬〇冬瓜の味噌漬〇午蒡の味噌漬

〇生姜の味噌漬〇山葵の粕漬〇柿の粕漬〇醐醍漬等なり、

あるものなり、斯る時には氷か冷水にて充分冷すか微温湯にて温めるかゞ一番なり。

活花水揚法

●萩　根を割り酒に浸すか、或は葉に酒を吹きかくべし。

●桔梗　根を毆き、塩をもみ付け紙にて包み挿すべし、又根を砕き塩をつけて焼き、塩水にて生くるもよし。

●薄　川芎を煎じ冷むるまで根をつけ置き、葉先を少し摘むべし。

●芙蓉　白水を煎じ冷えざる中に根をつけ、暫くして水に移すべし。

●青竹　石膏にて竹は自由になれども、白水にはこべの煎汁をませ

飯の種類

○刀豆めし、豆を水に浸し皮を去りて米に塩少し入れて焚き込むなり、

○初茸めし、茎を去り味醂と醤油にて味をつけ、亂切りにてし間ませにす

○栗飯、ざつと焼きて澁皮を取り三つ四つに割り飯の上に並べ醤油少し入れて炊く

○芋飯　皮をむき大賽にきり飯の半熟したる時打み込むなり塩加減が第一

○五目めし、常の飯を強はめに炊き、鯛の身を細くきり、松蕈を薄く切りさがら麩を長めに切り、各々味醂醤油にて煮玉子を煎り、慈姑と蓮根を煠でゝ薄く切り、塩と味醂とにて煮、おそまき隠元を煠でゝ細かく切り、同じ様に煮、赤漬の生姜を細かく切り何れも飯に交せて出す、

○鱧めし、骨を去り薄く小口切にしよく湯がき飯の火を引くとき上に並べ、醤油少し入れて炊く、

○鰡めし皮をすきて身を薄く作り常のすましに梅一つ入れて煮えたて粉山椒たうからし香料を添へ飯の上へ鰡の身を並べて出す、

○あられ粥、はも又は鯛などの肉を摺り身にして、少し軟かに仕立、粗きかなごしにて水の中へ摺り落し、霰の如くし、白粥を少し柔かに炊き、火を引くとき入れてよく蒸らし盛りて香料を添へて出す、

たるものに暫くつけおきて水に移すべし。

●芭蕉　酢を煎じて、これにつけ水に移すべし。

●山茶花　湯につけ水揚りて後挿すべし。

●蒲　湯につけ水に移すべし。

●蓮　酒一合に水一升を温め、水鐵砲にて根より莖の中へ一日に二度水を上ぐべし、水揚りて後暫く逆水してつりあげ置きて後に挿すべし。

●薬鶏頭　根を一寸程十文字に切り、熱湯に入れ、水に移すべし。

●水引草　露の中に切り、湯に漬けたる上水に移すべし。

●椿　挿さんと思ふ枝を取つて、暫く湯につけ置き、水揚りて後挿

薩摩芋百珍

肉糕子

●薩摩芋の種類

一、川越芋は皮色鮮紅にして形うるはし、肉は肥えて味の美なることは甘藷中第一位にあり、武藏の國川越は其の產地にして東京の市場に出づ。

二、琉球芋は皮色淡黃白を呈し、形不正なり、肉は柔軟にして甘味あれども佳良ならず。

三、四十日芋は色淡黃色にして形ちは川越に類す、極めて早生なれども收穫少なし、肉は充實せず水分に富み品質は佳良ならず。

四、八里半芋は皮色形狀川越に類すれども肉は充實せず、柔軟にして品質も川越芋に及ばず。

芋を栽培するは農家の事なれど其の一斑を述ぶれば、三月下旬に南に面したる暖き土地に、廐肥を堆みて薩摩芋の床を作り、之れに種芋を挿すと、芋より芽を出して四五月頃になれば、其の芽は次第に伸びて三四尺の蔓となり、之を二節若くは三節つゝ切つて、畑に移し種ゆる時は、再び蔓を生じ、根には大なる薩摩芋の球根が付くものなり、之を收穫するには先づ蔓を刈りて、後ちに芋を掘り採るものにして、食用法は一般に蒸し又は燒き

すべし。

●紫陽花　根に穴を開け山椒を入れて焼き、直に水に移すべし、簡略なる方法は根を一寸程數時間湯に漬けおくべし。

●藤花　酒と水とを等分にして挿すべし。

●菊　挿さうと思ふ菊の根を暫く焼くべし。

●澤瀉　鹽湯にて挿すべし尤も若葉をよしとす。

●鳥甲　根を焼きてよく碎き、水に移すべし。

●葭　朝暗き内に切り取り根を碎かば其にてよろし。

●薊、芥子、牡丹　根を割りてよく焼き、其儘酒に浸し花葉共に酒を吹きかけ、冷水に一時間程おくべ

て食す（東京にては丸やきと云ふ）れども、之れに技術を加へて用ふれば、百珍の仕方もあるなり、今其の料理法を列擧すれば凡に左の如し。

一、肉糕いも　薩摩芋を生にて卸ろし、汁氣をしぼり麪粉少しいれ蒲鉾のやうに板につけて蒸すなり、むしあげて罌粟か青海苔の粉をつけて、小口より切つて食す、亦五色の中にて好み次第の色をつけるも奇麗にて面白し。

二、竹輪いも　同上の仕方にて簾にて巻き、蒸しあげて酒を塗り、火にかけてやき目をつけ小口切にす。

三、紫菜巻いも　まるにて蒸し皮を去り、かな篩にて漉し、紫菜苔を展べてその上へ厚さ一分位にむらなく延し、小口より巻きて切る。

四、昆布巻いも　生にて卸し麪粉少しばかり合せ、棒の如くとりて上を極上の青昆布にてまき、其上を竹の皮にて包み糸にて括り蒸すなり。

五、御手洗いも　前の如くにし金柑の大さに取て蒸し上げ、青竹の串に五つ宛さし、砂糖醤油のつけやきにする。

六、苞苴いも　前の如くむしあげて棒の如く取り、竹の簀にて巻き、暫時おきて取り入れて、調味は好にしたがひて用ふ。

七、友巻いも　大きなるいもを生にて剝ぎざつと湯煮し、別に蒸薯をかな篩にて漉し、剝き薯に展じて巻き小口切にす、又漉し芋を色付にするは奇麗にて見付もよし。

八、きり酢いも　生にて方にきり、夫れを立に中分程の厚さにへぎ、ざつと湯煮し、酢桶に竹の皮をしき、右のいもをならべ、常の鮓の如く飯に加へたものを好み次第交ぜあはせ、之をいもの上へ三四分位にならべ置き、またいもを一通置き、又飯、いもと幾重もしきて竹の皮にて押へ、壓をかけ鮓のやうにきりて大鉢に盛るなり。

し、但し切口を燒き水中に蜜を入れば花久しく保つもの也。

●時雨の薄　川芎を煎じつめ、冷えざる内に挿んとする水際より下を漬けおくなり尤も葉先を摘むべし。

●芍藥　暫く陰干にして、根をやき桶に入れ濡れたる俵にて包みおく可し。

●水葵　細き竹を莖に貫し、其穴に水を十分つめ、撚紙をさして水に漬くべし。

●藥柳　此水揚法三つあり一は川芎を煎じ吹きかくべし二は燒酎を吹きかくべし三は根をよくひしぎ酒につけて三四遍火にあぶり直に水に十分漬おき偖て挿す時に至りては石灰を水にかきませ、暫して

八、腐衣卷いも　むしいもを篩にて漉し、平湯葉を水に浸し置き、板にのばしいもを一分程の厚さに付け卷きて小口切にこしらえて出すなり。

一〇、罌粟ふりいも　生にておろし蒸して圓く取り、けしにてまぶす、紅染のけしを用ひてよし。

一一、射込いも　よく熟したる柚子を小口少し切り、中の瓤を去り、いもを生にておろし蒸して練粉少し入れ、この柚子の中へつめ蒸して小口切にし、いり酒にて遣ふ、柚子の代りに饅頭の餡を去りて用ふるもよし。

一二、鹽いも　生にておろし、色を適宜に付け、蒸籠の内へ二分程にむらなくしき、其上へ其儘のおろしいもを一すばかり入れ蒸しあげ、切りて胡麻油にてあげる。

一三、辛板糕いも　蒸いもを篩にてこしたるを百目、粳米の粉五十目砂糖二十匁胡椒粉二分これ合せ、箱に入れ蒸しあげ、二日程置き一分程に切りて乾かし燒鍋にて燒き用ふ。

一四、最中の月いも　前の蒸粉に鷄卵を割りいもの如くこれてうち延し、二寸位の丸にきり乾し上げ、焙爐にかけるなり。

一五、味噌漬いも　生にて薄くきり味噌一ぺん、紙一ぺん、いも一ぺんとだんだんに漬るなり。

一六、水玉いも　生にて薄に剝き、剝きどめを其儘置き蓄の如くしかと卷き小口より半分ほどつゝに切り、胡麻油にてあげる。

一七、小鳥もど　生にておろし榧實の皮實と共にたゝきまぜて胡麻二三粒入れ油にてあげる調味は好次第。

一八、衣かけいも　生にて切りうどん粉を水にて解きまぜ篩にまぶし油にて上げる。

一九、蕷衣　銀杏、栗、くわい、午蒡、醬油にて味をつけ、芋を生にておろし麵包粉少し入れたるを衣にかけ油にてあげる。

二〇、饅頭いも　葛澱粉にうどん粉をまぜ、これてあまざけにて展し、漉芋に砂糖入れたるを

上澄をとり氷おろしを十分に葉に打つべし。

●唐葵　根を敲潰し明礬をもみつけ紙にて包み、冷水に深くつけおくべし。

●橐吾　葉のもとより小刀にてたち切り水を揚ぐべし、但し垂蕗は斷ち切りたる所へ、丁子の粉をすりつけ水に移し莖を通し口へ硫黄を包みてさし入れ、火をつけ　氣を通す可し。

●河骨　胡椒を敲潰上茶にて煎し、水鐵砲にて根より莖へ水を上ぐべし尤も若葉をよろしとす。

●梅、山吹、海棠、湯につけて水揚りて後に挿すべし。

餡にして饅頭の麺にこしらへ、ほいろにかけよく乾きたるを蒸すなり。

二一、いも餅　糯米むしてよく搗きて、其中へむし芋の皮を去り搗き交ぜ少さく取りて用ゆ。

二二、鍋やき　生にておろし麥粉少しまぜこれて小豆の餡を入れ、饅頭の如くに取り蒸しあげて炒りたる米の粉をまぶし、やき目を二ついるゝなり。

二三、松露いも　生にて骰にきりざつと湯煮して味噌こしに入れて振り廻し、角を取り調理に好にしたがひ用ふべし煮すぎては砕けてあし。

二四、蕈いも　生にて取り笠の如くひら目にとり燒鍋に油をぬり炭火をかけ燒目を附け蕈のしんを細く紙に包みて蒸し切口にて切るなり。

二五、まるめいも　おろし蒟蒻の細ぎりをうす醬油にて味をつけ粒胡椒の二つ割り、鮮の實二粒ひとつに丸め油にてあげる。

二六、蛤いも　生にて蒸して蛤の肉のかたちに造りはまぐりからの中へ入れ、醬油少しさして具と共に燒きて出す。

薩摩諸を貯藏するには、よく成熟したのを取り傷のつかざるものを撰り、深さ三四尺の穴を掘り、底に粟がら麥藁、籾ぬかを敷き、それに諸を入れ、亦籾ぬかを入れ、層々斯くの如くし、漸次穴に埋めて蓋をなし、雨水の滲透せざる樣にして置けば決して腐らずに保つものなり、少量のものを貯ふるには屋内の乾燥したる土間にて籾糠をかけて、あまり寒氣の這入らざる樣にして置けばよし。

世界奇聞

世界の金穴街を以て目せらるゝは紐育フィフス街の第五十一街より第九十一街に至る二哩間にして大厦高樓軒を並べ誠に稀に見る壯觀なるが近頃此處に建築せられんとする一家屋は此間に立ちて嶄然異彩を放ち殆ど他を壓するの概ありといふ、是れぞ音に名高き米國上院議員クラーク氏の邸宅にして着手以來既に年を閲すること五箇年、然かも尚ほ竣功を見るに至らず今後更に少くとも二箇年の日子を要す可し建物は七階にして階其上に雲を摩するの高樓あり應接室、音樂室、喫煙室、玉突室、圖書室、繪畫室、美術品陳列室等皆

食養生心得草

菊廼屋

◎胃病

これは消化の不良、不規則なるを稱したもので胃の粘壁の薄弱、胃液分泌の缺乏から生じたものである、故にこの患者にはすべて刺激を與ふ樣な食物を與へてはならぬ、乾いた燒麵包は尤もよい食物である、肉類としては極消化のし易い魚類、半熟鷄卵、鳥のさゝ身(白い肉)又少量のビフテキなどもよろしい、牛乳を呑むには一時に大量を呑ます、少しづゝよく味はつて飮むがよい、一時に大飮をすると胃の中に這入ッて大きな固い乳皮の球となッて消化しないのである。すべて胃病には咀嚼が肝腎である。

菓子類其他甘い物餡類は一切嚴禁せねばならぬ、以上は專ら胃弱者の食餌であるが又胃加答兒になッては固形物を少くして流動物を多く與へなければならぬ。

◎下痢

これは腸の病で原因は暴飮暴食精神刺戟其他いろ〳〵あるが、此病の徴候があッた時はまづカスタル油又はエプソム鹽の樣な下劑を一服與へて腸中に存する刺戟物を下して仕舞ふのである、また此病を防止するには大麥

通の設備に於て缺くる所なきは勿論、初め一箇の演伎塲すら建築せられしが後計畫を變じて之を美術室となし大オルガンを一隅に建築し高塔の下には彫刻品陳列室あり冬は蒸汽を以て空氣を温むべく夏はリフリジレーターを以て之を冷却す可し家中に浴室凡て十六若し尙ほトルコ風呂を試みんとすれば昇降器に乘りて階下に降りんのみトルコ風呂の側にはガラスを以て作られたる池あり、以て水泳をなすべし、此家決して紐育中の最大建築物なりとはいふべからず、何となればヴアンダーウイルド及び其他一二氏の邸宅として之よりも更に大なるものあり、然れども價格の點よりしていはゞ敢て此の

の稀湯、葛、粥、或は麥粉團子の粥などを與ふべし、併し下痢病はなるべく斷食療法を執るのがよい、斷食療法を取つて腸を乾せば治療が早いのみならず、腸の病は身體を安靜に置く事が極めて必要で、決してバタ〱身を動かしてはならぬ、そして此病の一時の救濟法は腸部をフラネル又は毛糸で編んだものを以て卷き、或は溫石の代りに蒟蒻を温めて腹部に當てるがよい、痢病は輕卒にすると段々重くなッて重患に陷るか又は漫性になッて仕末にいけぬものであるから初期を大切にしてよく保養せねばならぬ、又快復後暫らくの間は意を用ひて給養し、能く煮た牛乳の粥、又鷄卵を入れた牛乳の如き柔軟な食物カスタード、肉羹汁、燒パンの如きものを與へて段々と通常食に馴らさねばならぬ。

◎便秘

これは腸內の水分の不足から生ずるものであるから飮料を增し、野菜類を食すれば自然に回復するものである、されば、起床の時と就床の時とに一杯づゝの水と午飯の半時間前に湯を一杯位飮むがよい、同時にオートミール、野菜、新鮮な果實、バタなどを多く用ふると腸の作用が自然活潑になッて來るものである、畢竟便秘は肉類の如き動物質を多量に食する爲めに起るものであるから、肉食は成可く控へ目にするがよい、諸種の糖果、無花實のチャムなどよろしい。

右に出づるものなし、竣工迄に要する總費用都合五百萬弗を超ゆ可しといふ、クラーク氏今は上院議員なりしと雖も其昔はモンタナの鑛山に勞働したる工夫にして今年六十八歳の高齢、其斯の如き大建築を起したるは全く氏の夫人が尚ほうら若き婦人にして社交的野心を有せるに依るなりといふ。

▲居家十則

(一)衞生を重んじ身體の健康を計るべし
(二)常に愉快の色を爲し憂の色を見すべからず
(三)容貌風姿に意を用ひ美しく優しく見ゆる事に心掛よ
(四)快活にして伶悧なれ
(五)心弱きは責すべからずされど柔順なるは稱すべし
(六)常に夫を助けよ
(七)夫の意見に和して尊敬すべし
(八)常に夫を喜ばす工風すべし
(九)滿身の愛情を夫に捧ぐべし
(十)決して夫を教育せんと思ふ勿れ

◎貧血

これは血液の中に必要な養分が不足するから起る病氣ですから、これを補ふには專ら動物質の食物を採らねばなりませぬ、就中鷄卵の黄味は鐵分を含んで居るものですから黄味を多く食べるのはよろしい、又牛肉やバタなどは脂肪を供給するものですからなるべく食ふのがよい、猶病人があまり嫌でない限りは生煮の牛肉を用ひてよし、併しいくら好な物だといつて不消化物は一切禁じなければならぬ、一體貧血な人は消化を助くる處の血液も矢張不足してゐるのであるから不消化物を食べる事は大禁物である。

◎レウマチス

此の病氣は血液の中に存在する酸の分子が過多るから起つたものであるそれ故食物の吟味も專ら此の方針を取らねばならぬ、まづペキンパオダを加へた牛乳を用ふるのは至極よろしい、牛乳の代りに大麥の稀粥、米の稀粥、オートミールのゼレー、又は漉した粥などを用ふるもよい、この病氣の快復の初期にはパン粉又はよく料理したクレアスープを與へ、段々と快くなれば鷄肉、魚、又は柔軟な牛肉の細かに碎いたものを少量づゝ與へてよし、食パンと牛乳とはまづ適度に與へてよきも、多量の肉食はよろしからず、回復期には野菜類もよし、殊に葱、チサ、オランダミツバなど尤もよし、そして是等も野菜を穀物に添へて用ふれば一段効あり、又此病氣は發汗すること多ければ水を多量に取るべし、菓物では蜜柑類よし。

史傳參考

日本英傑年齡調べ

上古名流

修飾衛生

容姿修整　姿見かゝみ

湘君

婦人には容姿の好いと云ふ事が何より大事でありますが、然し一から十まで完全に容姿の美を備へた者と申したら、澤山は有りますまい、即ち美人の資格たる、顔の道具が揃つて、中肉中丈で、姿のシャンとした者を求める日になると、誠に少く、人間の悲しさには百人が九十九人迄は、必ず那處かに缺點があります、例へば顔の輪廓は理想に副つても、鼻が少々低過ぎるとか、目鼻立は好いが口元が惡いとか、首筋が短いとか、生際が良くないとか、其の他いろ〳〵の惡い癖があるものです、だが其を稟性だから仕方がないと言つて、放任つて置いては愈々其の缺點が目に立つ許で、外の善い處も其が爲めに破壞されて了ひますから、婦人方は能く自己の長所と短所とを辨へて、長所の美を發揮せしむると共に、醜い處は可成く繕つて、容姿を良く見せる樣に致す工夫が肝要であります、是は實に婦人が自己に對する最も大切なタシナミであり、又た婦人としては當然致すべき

義務であらうと思ひます故、茲には容姿の缺點を繕ふ上に最も適當と信ずる修理法、言換へれば即ち、自己の標致を上げる仕樣に就てのお話を、詳しく申上やうと思ふのであります。

(一)鼻の低きを高く見するには如何にすべきか

鼻は顔の中でも中央部を占めて一番先きに人の目に付く處ですから、高からず低からず、鼻筋の通つたのを見好いとしてあります、併し何方かと云ふと、高過ぎる鼻よりも、低過ぎる鼻の方が見つともない、眼と口との間が坦々たる事平野の如しで、ノペッに異平なのは實に見苦しいものですソコデ此の低い鼻を形よく見せるには何うしたら可いかと申すに、其は化粧の仕樣に依つて善い工合に修理することが出來ます、其の法は眉毛の中程より、鼻の柱へ通じて白粉を他處より少し濃く塗り、鼻の兩旁へムラのない樣に刷きかけて置くのです、而して顔の化粧は少し薄目に致し、紅も淡く付けた方が宜しい、斯う致すと鼻筋が通つて見えますから、自然低い鼻も高く見える譯です、但し餘り際立て濃く鼻の上を塗りますと、鼻の分水嶺に雪の帯を引いたやうに成て、甚だ不體裁ですから、是は鏡と能く相談して程合を考へなければなりません。

(二)眦の下りたる顔は如何に修理すべきか

眦の垂れ下つた顔は、何となく嫌味たらしくつて不可ません、デ下がつ

大江匡房	七十一
新羅三郎	七十二
平忠盛	五十八
源爲義	六十一
左大臣頼長	三十六
源義朝	三十八
△鎮西八郎	三十三
平重盛	四十三
源三位頼政	七十五
源義平	二十一
△平清盛	六十四
齋藤實盛	七十二
平知盛	三十四
△木曾義仲	三十一
巴御前	九十一
袈裟御前	十九歳
平宗盛	三十九
△源義經	三十一
靜御前	二十三
曾我祐成	二十二
曾我時致	二十歳

た眦を上げて見せますには先づ普通に白粉を塗つて後、少し濕つた手拭で瞼を避けて、眦を上の方へソッと拭ひまして、其の跡へ紅を至つて淡く、肉色と同じ位にホンノリと、眦の處から上の方へかけて塗けるのです、ソレカラ瞼の下の方は瞼へかけて白粉を塗るのであります、但し眉は少し細く作り、眉尻は少し上へ上げ目に作つた方が宜しい、斯樣に致すと大層引立つて見えるものです。

又た之と反對に、眦の上つた面を眞直に見せる仕樣は、化粧して後、眦より目頭の方へ眞直に濡手拭で拭ひ、極めて淡い紅をホンノリ其上へ刷きかけて置くのです、それから又た上瞼へかけても白粉を塗りこめて置きます、眉は太く作つた方が格好が良いさうです。

（三）眼の大なるを小さく見するには如何にすべきか

眼は顔の光とも云ふ位のもので人物の賢愚、容貌の美醜に大關係を有てるものです、扨て甚麼眼が面の格好を引立てるかと申すに、リンと強く張があつて、涼やかなのが好ましい、けれども大き過ぎると、顔の相が威勝く成て見苦しいものです、と云つて大きな眼の人は產れ付で、小さく成れッこは有りませんけれど、平常の心懸一つで見好くもなるのです。眼の大きい人の嗜を申すと、常に眼を剝き出して瞪るといふ樣な事を愼んで、起居共に目八分と申して吾が前八分を見下す心得で御在でなさい、（目八分とは

俊成卿	九十三
佐藤忠信	二十六
文覺上人	八十歲
◎源頼朝	五十三
畠山重忠	四十二
源頼家	三十三
▲北條時政	七十八
源公曉	十九歲
源實朝	二十八
北條義時	六十二
▲尼將軍政子	六十九
大江廣元	八十三
明慧上人	六十歲
定家卿	八十一
家隆卿	八十歲
▲建禮門院	六十八
◎北條泰時	六十歲
▲北條時頼	三十七
▲北條時宗	三十三
北條高時	三十一
日蓮上人	六十一

立つた時は吾が足許より向ふ凡そ一間ばかりを見、坐つた時は吾が膝より向ふ半間餘の處を見る心得あるを申します）斯樣に致しますと、自ら瞼が下つて眼が細く見えるやうになるものです。

又た化粧の仕方は、瞼の上は白粉を濃く塗り、眼の中へも少し白粉を塗り入れるやうに致すのであります、けれど又た眼の格好に依つては、瞼の化粧を濃くすると、却て眼の張が目立ちますから、矢張通常に化粧した後濕手拭で瞼毗を輕く拭ひ、其の跡へ紅を至つて淡くさすのであります。

（四）眼の小さきを通常の眼に見するには如何にすべきか

又た生來で眼が非常に細く、始終眼を塞いで居る樣なのがあります、併し之を隱さうとて無理に眼を瞠りますと、瞼が上つて、眼玉が吊し上つて空を睨んでる樣になり、從つて腹を立てゝ居る樣な恐ろしい目付になりますから、爲めに大層人相を害します、其故小さな眼を通常に見せやうとならば先づ常の如くに化粧してから、上瞼の睫の邊を濕つた手拭で輕く拭ひそこへ極く薄く紅をさすのです、斯うすると、少しは難をかくすことが出來ます、それで眼の置所は向ふを遙かに見る心持でハッキリと開いて居るのです、けれど餘りに瞠り過ぎると、以前申した樣に怖しい眼差になりますから、善い加減に致しませんと不可ません。

（五）眉毛と眼の間の狹き顏は如何にすべきか

●楠正成……四十二
△北畠顕家……二十一
△新田義貞……三十七
楠正行……二十三
●足利尊氏……五十四
●親鸞上人……九十歳
兼好法師……六十八
足利直義……四十六
一遍上人……八十六
夢窓國師……七十七
細川頼之……六十四
足利義満……五十一
細川勝元……四十四
足利義政……五十六
宗祇法師……八十二
△一休和尚……八十八
太田道灌……四十二
△北條早雲……八十八
僧絶海……七十歳
大内義隆……四十七
北條氏康……五十六

眉毛と眼とは、近しい關係を有て居りまして、眉毛の格好によつては、眼も引立てば、顏の形もよくなりますし、又た眉毛と眼との間隔の廣い狹いによつては、眼を大きくも小さくも見せるものです此の間の狹い顏は非常に下品に見えるものですが、之を常の如く見せるには、眉毛の下の方を少許剃り上げ、そして眉毛の作り様は眉毛の少し上の方より作り始め、眉毛の中に少し黛を刷きかけて置くのです、ソレデ眼の付け所は、以前申した如く、目八分に致すので、斯う致しますと、瞼が下つて眉毛との間隔が廣くなります故、通常の顏に見えるのであります。

（六）大きな口を尋常に見するには如何にすべきか

口許と申すものは、眼に就いて大切な箇所であります、美人の資格に適つた口許と申したら、所謂尋常で、小ジンマリとして居なければなりません、大きな口は殊に目に立つもので、之に紅を付けますと、尚更大きく見えて、俗に申す人を喰つた口の様に成つて、大層見苦しいものです、所で大きな口を隠す仕様は、化粧をする時、唇の內へ白粉を三分目程かけて塗り、それから紅は唇の內三分目程よけて、七分目程の處から少し濃く付けるのです（尤も此の割合は口の大小と格好に因つて多少の相違ありと知るべし）尚は紅の付け様を、詳しく申すと、下唇は左の吻より細く付け始め、眞中に至つて太く、又右の方の吻に至つて細くするのです、但し兩

隱元和尚……八十二
△毛利元就……七十五
△武田信玄……五十三
△上杉謙信……四十九
武田勝頼……三十七
三好長慶……四十二
◉織田信長……四十九
織田信忠……二十八
△明智光秀……五十六
蒲生氏郷……四十歲
柴田勝家……五十四
關白秀次……二十八
長曾我部元親……六十一
竹中半兵衛……三十六
◉豐臣秀吉……六十三
松永久秀……六十八
前田利家……六十一
石田三成……四十二
大谷義隆……四十二
井伊直政……四十二
△黒田如水……五十九

方の吻の處にては、紅を少し殘し、左右共に太細なき樣に塗るのであります、上唇も白粉三分、紅七分の割合にすると、下唇と同じです、それから紅の加減は、上唇はうすく、下唇は濃く付けるのが法であります。

（七）唇の厚きを薄く見するには如何にすべきか

唇の厚いのは、俗に夜具の襟の樣だと申す位で、誠に見つともない頂上です、處で之を繕ふには、お化粧をする時、白粉を口びろへ塗りまして、紅の付やうなども總て大きな口を小さく見せる仕樣と同じに致すのであります、吻は餘り紅を一杯に付けては不可ません、口びろも亦た其通りで、七分目位の割合で付けるのが宜しい、但し紅は少し濃くした方がハッキリとして體裁も宜しいのです。

（八）丸き顏を長く見するには如何にすべきか

丸い顏を長く見せる仕方は、先づ額を目立たぬ程に剃り上げ、（小鬢より生下りの方は少しも剃刀を入れず、鬢の生際は毛筋立で少し前へ反らす位が可し）次に白粉の仕樣は、額の小鬢より前髮の生下りの內へ白粉を少し刷き込み、さて斯うして置いて、其から白粉を生際より仕始め、（小鬢より生下りの方は少し前の方を殘して化粧す）次に耳の邊は白粉を薄く塗り、それから耳の後ろより耳朶の下に致して塗り、そこから頰骨へかけて、咽首筋へと向け白粉を濃く塗るのです、但し首筋の處は顏よりも稍々濃く付

細川幽齋	七十七
島津義久	七十九
△加藤清正	五十歳
島津義弘	八十五
淺野長政	六十五
淺野幸長	三十八
前田利長	五十三
豊臣秀頼	二十二
△眞田幸村	四十六
◉徳川家康	七十五
木村重成	二十一
黒田長政	五十六
上杉景勝	六十九
細川忠興	八十二
△伊達政宗	七十三
△加藤嘉明	六十九
△福島正則	六十九
徳川秀忠	五十四
林道春	七十五
徳川家光	四十八
石川丈山	九十歳

けた方が引立ちます、又た眉は少し短か目に作るが宜しいので、何故かと申しますと、額を剃り上げた顔に、眉を長く作りますと、額の處が三角に見えて何んなに可笑しいか知れません。

(九)額の抜上りたるを短かく見するには如何にすべきか

額の生え際の抜け上つた顔は、出額に見える許でなく、額髪と眉との間が長くつて格好の惡いものです、之を修理するには毛生藥を用ゐるに限りますが、化粧の仕樣でも此の缺點を繕ふ事が出來ます、其の法は先づ化粧をする前に、白粉を至つて淡く解き、額の生際より少し內へかけて白粉を塗り入れ、其より額一杯に塗り、次に絹の帛で生際から五六分許り下へ白粉を殘し、其の餘の白粉を能く拭き取つて後、常の如く白粉を施すのであります、斯う致しますと、初め薄く塗つた白粉は肌膚の如く見えて、髪際が奇麗に見えます、但し眉は少し長く作つた方が。顔が平たく見えて宜しい、又た髪は前髪を可成く前へ出した方が、額が自づと下つて見えて、格好が良いのです。

(十)黒き顔は如何に化粧すべきか

天性色の黒い人が、眞白に化粧をしますと、白粉を塗つた處丈が白く成つて、髪の生際邊は地體の黒さが其儘顯はれて、却つて見つともないものです、そこで之を隱して天性色の白い人が白粉をしたと同じ樣に、クック

りと白く見せますには、何うしたから可いかと申しますに、其の仕様は先づお化粧を致す前に當つて、前髪の生際、首筋の生際、耳の後の生際等へ粉白粉を、よく乾いた刷毛で篤と塵り付けて置き、次に眞のない筆の先を切つて、此の筆で生際に付けた粉白粉を髪の生際の内へ靜かに刷き入れるのです、生際には油氣がある故、斯うして刷入れた白粉は能く落付くものです、さて斑なく刷込んで後、白粉が若し生際の髪に付いたなら、指で輕く掻上げて置くのです、それから這度は額にある粉白粉をば、指の先に絹帛をかけて能く拭き取り其の後で通常に化粧を致すのであります、斯うしますと、初め刷き込んだ白粉は、地肌の白い樣に見えて、少しも黒い地體を見せませんから、生れながら色の白い人と毫も異る處がありません。

（十一）脊の低さを高く見するには如何にすべきか

脊の低い婦人は一體に見榮えのしないものです、其も自分一人で居る時分には、左程目にも立ちませんが、高い人と肩を並べて歩行く時分になると、其の低いのが目立つのであります、脊の低いのは元と天性ですから、幾ら高く見せたいと思つた所で、人力で今更伸ばす譯にはゆきません、けれど身の科によつては幾らか高く格好よく見せる事が出來ないでもありません、其の仕樣は、首筋を眞直に立てゝ、兩肩を正しく揃へ、首を押立てる樣に伸ばし、而して胸を前に少し反る心持で腰を展せば、スラリと格好

杉田玄白……八十五
前野良澤……八十一
△大槻盤溪……七十八
藤森天山……六十四
佐藤一齋……八十八
山崎闇齋……六十五

國學歌人の部

本居宣長……七十二
△加茂眞淵……七十三
僧契沖……六十二
▲平田篤胤……六十八

澤庵禪師……七十三
鴨長明……七十三
△一休禪師……八十八
一條兼良……八十歳
千利休……七十一

幕府時代

春日局……六十歳

よく高く見えるものであります、それから下駄、草履の履物類も通例よりは少し高目のを用ゐるやうに致し、髪も髷を高く結ふのです、而して衣類の身巾は少し狹い位に仕立て、縞物なら立縞の物を撰ぶやうにし、帶も少し細目に仕立て、其の結び樣はカケを餘り長く出さずに、上の方で高く結びますと、大抵は樣子よく人並の高サに見えるものです、よく脊の低いのを隱さうと思つて、故らに衣類を長く仕立て、裾を引摺つて歩く人がありますけれど、斯うすると、却て他から見て脊の低いのが目に付いて餘計に見苦しいのですから、矢張着物はシャンと着き方が宜いのです。

(十二)脊の高きを人並に見するには如何にすべきか

身長の高いのは立派で宜しいが、さりとてノッポに高く、俗に梵鐘泥棒と云ふ樣なのでは、是又た目立つて不可いものです、扨て脊の高い人が人並に見せやうと思つたら、身體のそなへはシャンと致して、髪を低く結ひ踵で歩行く心持が必要であります、着物も模樣なら横に多く付いたもの、縞物なら横の勝つた柄を選び、帶は平たく結んで、カケを長くするのが宜しいのであります。

(十三)首筋の短かきを長く見するには如何にすべきか

首筋の短い人は、襟付惡く、後姿のよくないものです、所で斯う云ふ首筋を長く見せますには、肩を窄めて押下げるやうにし、顏は少し俯向く心

作者

持で居り、襟は少し退襟に致して下へさげ、髮は髷を高く結ふのです、而して首筋は髮の毛際を少し剃り上げて三本足に致し、そこへ白粉を刷き込み、其の上へ白粉を高く致しますと、短い首筋も長く見えるものです。

(十四)首筋の太きを細く見するには如何にすべきか

首筋の太いのを細く見せやうとならば、矢張肩を窄め、首を少し俯向く心持で伸ばすのです、そこで白粉は普通よりは濃く施すのです、白粉の濃いのは、咽の太いのを細く見せる効があります。

(十五)肩の怒りたるを撫肩にするには如何にすべきか

男子と違ひ、女で肩の怒つたのは、見苦しいものです、肩の怒つたのを撫肩に見せるには、兩肩を押し下げ、兩臂を窄めて脇腹につけ、首を上へ押のばし、顏を少し俯向く心持で步行けば、怒つた肩も自ら撫肩に見えて優しくなります。

(十六)出尻を蔽すには如何にすべきか

女で出尻は隨分見つともないものですが、之を蔽す仕樣は、脊を眞直に延ばして耳と肩と揃はし、餘り目立たぬ程に身を反らし、鼻の先と臍とを眞直に揃へて、爪先で步くやうに致せば、身體がシャンと延びて、出尻が隱れます、而して帶はダラリと結び下げて、尻のあたりを隱せば、身體がチャンと成つて少しも出尻とは見えません、なほ又た腰バサミを拵つてお

畫　人

尻の上の凹んだ處へ卷き、其上へ着物を着、帶をお尻へかけて締めれば、腰とお尻の出張つた處とが平に成つて、體裁よくなります。

（十七）猫脊を直すには如何にすべきか

傴僂と云ふ程でなくとも、脊が丸く前に屈み加減なのを、俗に猫脊と申しまして、極く醜いものとしてあります、所で之を直しますには、身をシャンと伸ばし、吾が鼻と臍とを一直線上に置く心持で反らせ、其の間の低い處へは布の綿で拵へた袋を挾み、帶をグッと高く締めれば、身體が高低なく眞直に成て形よくなります、又た此のタシナミが習慣となれば、自然と此の癖が直つて通常人の脊の樣になるものです。

（十八）鳩胸を直すには如何にすべきか

猫脊とは反對に、胸の突出たのは、俗に鳩胸と云つて、是又た風俗を害する惡い形であります、之を直しますには、先づ襟付で隱すので、衣服を着るに固く襟を搔合さず、上着、下着の襟を揃へて胸の間を開け、襦袢の襟を寛くシ、其を前へ引出して胸の高さを蔽すのであります、斯樣に繕ひますと、風俗が大層好くなります。

池玉瀾……七十八

維新名家

●西郷隆盛……五十二
△三條實美……五十三
△岩倉具視……五十九
△木戸孝允……四十四
△大久保利道……四十七
島津久光……七十一
△島津齋彬……五十歳
雲井龍雄……二十七
△坂本龍馬……三十三
△吉田松陰……二十九
△高杉晋作……二十九
△大村益次郎……三十六
久阪玄瑞……二十六
高山彦九郎……四十二
高野長英……四十七
僧月照……四十六
△佐久間象山……五十四

妊娠中の心得八ケ條

凡そ婦人受胎の始めより分娩期に至るまで、充分身體の健康に注意して保護せざるべからず、妊娠は生理的作用にして病體とは全然異なるものなれどもこれを取扱ふに於ては亦一種の病症と見做して取扱ふこそ肝要なり、今左にその重要なる事項を擧げて心得の一斑を述べん。

△衣服

妊娠中着用すべき衣服は成可く緩やかにして身體に疲勞を與へざるものを用ふるをよしとす、窮屈なる物、身を縛ばる樣なるものは惡し。又妊婦は時候の變更に犯され易き故に其季節に伴ふて衣服の増減油斷なく注意すべし、分娩期に近づくに從つて衣服を交換せざるべからず、此際に當ッて「フランネル」の衣服は尤も適當なり殊に冬季は「モンパ」などの類にて股引を製し着るを必要とす彼の衞生襯衣と稱する「メリヤス」樣の股引などもよし、要するに腰部の冷ゆるを防ぐ方法なり。

△食物

妊婦の食物は一層注意せざるべからず即ち滋養飲食物を與ふべし、然れども多食すべからず少量なるをよしとす、又脂肪多きもの、野菜類、鹽辛きもの糖分多きもの等を過すはよろしからず新鮮なる魚類、鳥牛肉の軟な

明治の人

るもの又飲料には牛乳、肉羹汁珈琲白葡萄酒、精良のビール等は最良飲料とす、若し疾病に罹る時は醫師の考案を聞かずして妄りに種々の薬用をなすべからず。

△沐浴

沐浴は敢て害なきも大に注意すべき事柄なり、第一少しにても熱度の高き湯には浴すべからず、殊に脚湯半身浴、海水浴等は最も慎むべし、之れ等が原因となりて往々流産する事あれはなり故に妊婦の清浄法は毎日微温湯にて手巾を濕はし固く絞りて全身を洗拭するをよしとす。

△空氣

妊婦は風塵の烈しき日戸外を彷徨すべからず外出は成可く温暖なる好天氣をよしとす、快霽の日海邊、河畔等を逍遙散歩するは効あり、或は山林、平野を徘徊徐歩するも身體を建康にして其の胎兒を健固ならしむるの媒介と爲るべし、勿論室内は成可く空氣の流通をよくし居室を乾燥ならしむるに注意すべし。

△運動

妊婦の運動は日本古來の習慣にして産日前まで平日の通り起居動作を爲すものあり勿論、適宜の運動は大に益あれども動もすれば過激に流れ、妊婦身體の疲勞を來す等の事あるは大に害あり、殊に尤も注意すべきは、粗

支那名家年齢調

健なる乘合馬車、坂道を行く人力車等は大に害あり、遠路の歩行或は奔走、重荷の負擔、運送等は大に愼むべき事なり、身體に適したる仕事は平日の如く之を執り、敢て怠慢に流れざるを要とす、不快の談話、嫌忌すべき事柄は見聞せざるに如かず、若し耳目に觸るゝ時は精神を平易に落着けて氣分を他事に導き直すべし。

△睡眠

姙婦の睡眠時間は健全者よりも永く眠らざるべからず、是れ其の神經を休息せしめ姙婦に益あるのみならず又大に胎兒の成長に益あり、夜具は輕暖にして軟かなるを旨とし、時々注意して濕氣を乾燥せしむべし。

又疊の上に直接に座するは害あり、之れ子宮病などの原因となればなり、必らず座布團を用ふるをよしとす。

△精神

姙婦中の精神は必らず平安正良にして極めて沈靜ならざるべからず決して喧噪すべからず、難産の事其他すべて姙娠中忌むべき事の談話は之を避けざるべからず、又極めて悲むべき事、怒るべき事、恨むべき事、心痛すべき事等一切感動的の事は避けざるべからず、すべて姙婦の精神に甚だしき衝動を及ぼすものは必らず取除きて接せしむべからず、又例へば香薫の高きもの即ち麝香の如き、或は香水の如き、又不快を感ずる色及び形狀の

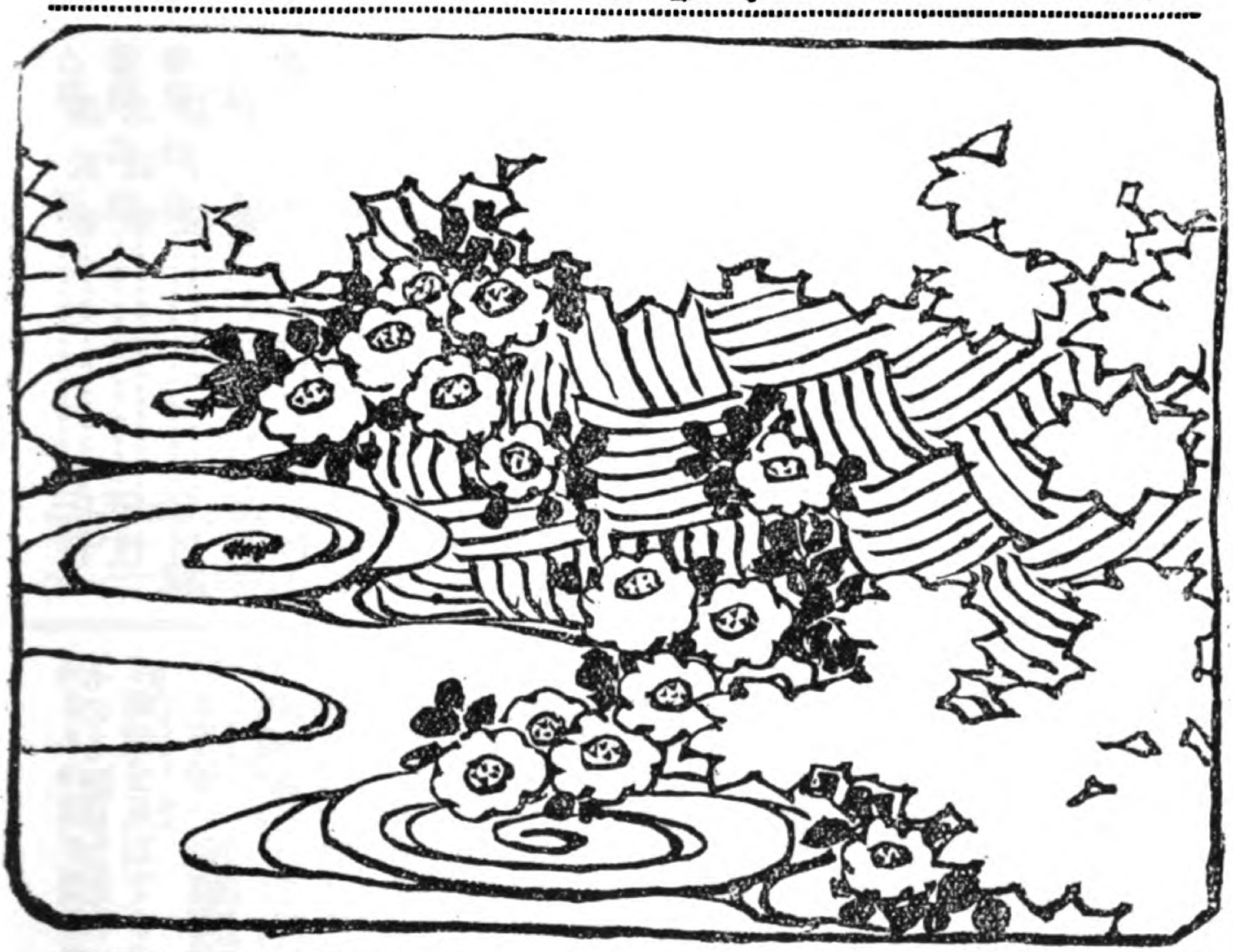
漢武帝……七十一
光武帝……六十二
嚴子陵……八十歲
玄　德……六十三
◉孔　明……五十四
曹　操……六十六
孫　權……七十一
△陶淵明……六十三
唐太宗……五十三
唐玄宗……七十八
楊貴妃……三十八◉杜　甫……
五十九◉李　白……六十四　柳宗
元……四十七△韓退之……五十七
△白樂天……七十五　陸宣公……
五十二　歐陽修……六十六　程明
道……五十四　司馬溫公……六十
八△東　坡……六十六　岳　飛……
三十九　朱　子……七十一　陸
象山……五十四△文天祥……四十
七　明太祖……七十一　王陽明……
……七十一◉釋　迦……七十九

ものも避けざるべからず、これ姙婦及び胎兒を害するに至ることあればなり。

△流產の豫防及手當

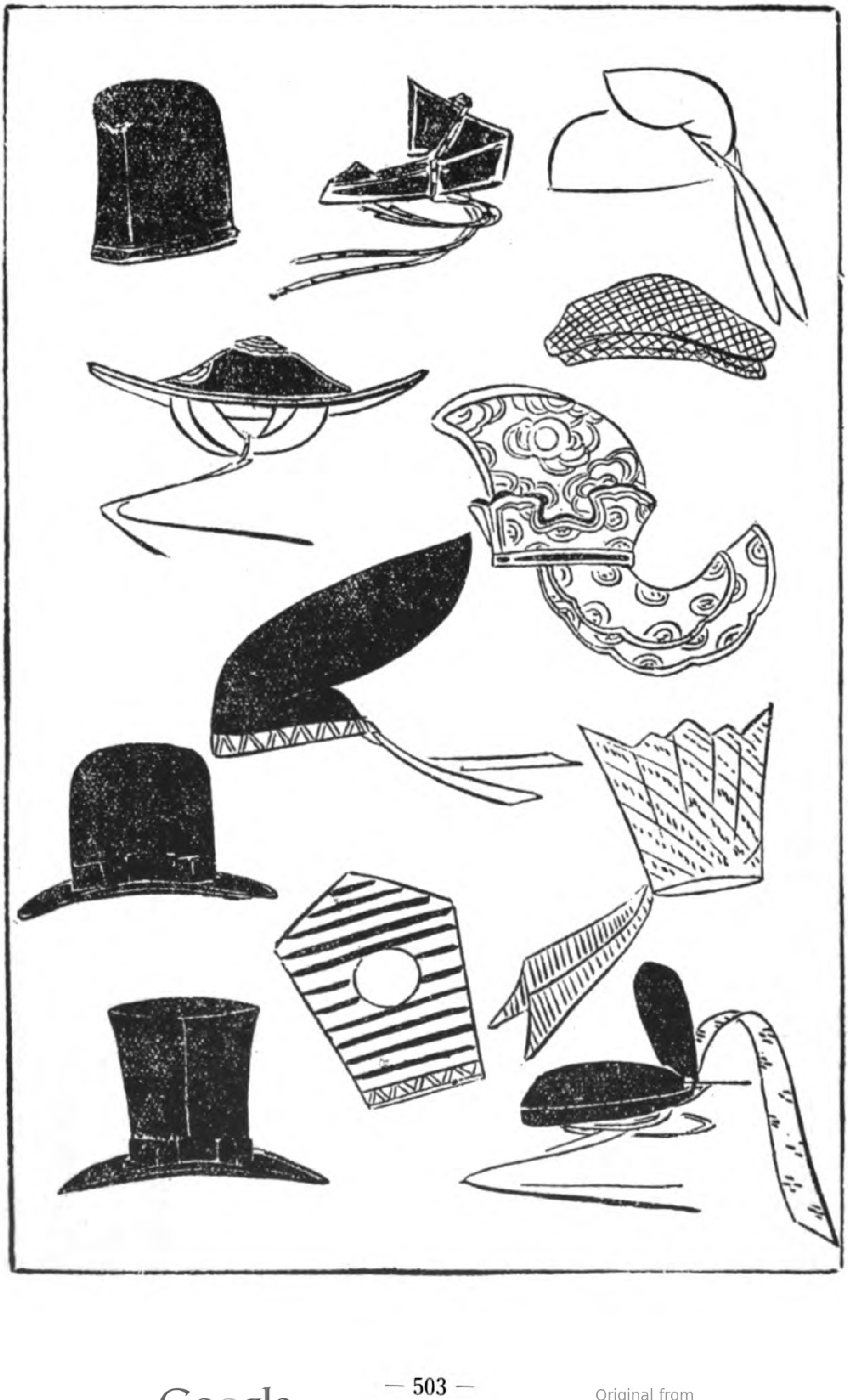
流產爲したる時は柔かなる床を設け靜に臥し、滋養料を取るべし、硬き食物は全く不可なり。出血あるものには淸潔なる脫脂綿を五十倍の石炭酸水に浸し、膣腔內に狹塞し、三時間ほどを經てこれを拔出し、充分に膣內を洗滌すべし、其後沃度ホルム又昇汞水にて防腐するを適當の療法とす若し出血甚だしき時は下腹部に氷囊を當てゝ子宮を冷し、出血の應急手當をなし直ちに醫師を迎ふべし、烈しき子宮出血は三十分間放任し置かば殆んど全身の血液を流下せしむるほど恐るべきものなれば尤も大切に注意せざるべからず、且つ常に膣部を淸潔にする事を忘るべからず產褥熱は多くの不潔より來るものなり、其他の攝生はすべて普通產後の手當に變る事なし。

又姙婦の流產豫防として第一愼むべきは、躓き倒れざる樣常に戒心すべし、若し姙婦に梅毒性の疾病ある時は充分治療すべし、其他諸熱病、及び感冒・精神感動、不消化物の過食、下痢、房事等皆流產の原因を爲すものなれば、大に戒愼すると同時に斯る徵候を來す時は直ちに醫師の手當を待ちてそれ〴〵豫防の道を講ずべし。





人の頭の戴くもの



漫　言

食道樂の崇り

深窓美人

今度こそは餘り小判の刺身をお食べの報ひだよ、幾ら美味い物を食べても、咽喉下三寸通り拔けて仕舞つて御覽、些つとも變りは無からうではないかね、肉の玉子のバタのスープのやれ茄子は怎う切れば消化がいいの、里芋は怎う煮れば味が一番いゝのつて、一々其麼事を六つケしく云つてたら、麥飯食べて骨仕事するお百姓は什麼しますえ、辨慶さんはオムレツ食べなかつたけれど、彼樣に強つかつたし、太閤さんはミルクを飲まなかつたらうけれど、草履取から天下を取る迄に彼樣偉い出世をなすつたじや無いかね、お釋迦樣は一日に胡麻を三ツ粒宛しか召し上がり遊ばさなかつたと云ふけれど、終々彼樣崇高い正覺を御開きになつたと云ふじや無いかね、煎り豆嚙りながら勉強した人もあればお雜炊ばかり啜つて學者になつた人もあるつてじや無いかね、隨分世の中には食物は什麼の水は斯うのと騷ぎ立てながら、胃癌なんて氣の利かない病氣する間拔けもあれば、衣服の色合が怎うの地質が斯うの體温が何のと八ケ間しく並べ立てながら、却つて存外風邪なんか引きたがる氣紛れの變人もあるじや無いかね、だから餘つ程確乎して下さい。

篦棒な生意氣じや御座いませんか、僕もぐつと癪に障つたから、少しは無理だとは思つたけれど、然う云つてやりました、

今日衛生々々と衛生を重んずる世の中に、萬物の靈長たる人間ともあらう者が、一年に費用が幾千圓もかかると云ふ何やら樣の飼犬にも劣る眞似をして居ちや甚だお恥しい次第じや無いか、支那人の御託じや無いが、東海の緇條、西山の鳳髓、とそんじよ其處等の料理の本にも無い圖な贅澤を云ふじやなし、當節學者先生方の仰しやる通り、衛生上身體の爲めを思つて仕方なしに演つてる事をぐづ〳〵云ふには當らないわな。

何處からに往昔偉い食道樂の人があつたとさ、副食物が一飯の食事に七品以上なければ、決して箸は執らなかつたつて、甘きに飽けば酸いもの、酸いのが厭やになれば辛い物と云ふ風に、何でも世の中の美味物と云ふ美味物の有り丈を、喰ひ散らし食べ荒したら、さあもう口が慣れてつ仕舞つて、何を食べても甘くない、一層自分でも自爆糞になつて、終には御飯に生味噌をつけて食べたつて、處が其れが一番氣に入つて、天下之れに肩を並ぶる好味なしとかいつて大變に興に入られたつて云ふじやありませんか。第一美味いの美味くないのつて云ふ事から始め、還腰意味ではあるまいかね、私は然う思ひます、



＊　＊　＊

濱屋と云へば先代迄は大した老舗、彼の人が若い頃には隨分亂費つた狀だけれど、其れでもびくともし無かつた程の確乎した身代が、まあ怎うでせう、茶屋酒で漬かつてる舌には、玉子燒きで無けれや飯が食へぬの、韮も乙で無い事のつて其りやもう贅澤のし放題、疊の表代へも今度の妻さんで

彼れで三度とは驚くじやありませんか、何しろ甘い物を食べて寢て遊んで働かないと云ふ流儀なんだから、足まらない、淀みに溜まる水と同じ事で、幾ら美しい澄んだ水が流れ込んでも、腐るのは當然だわね、其れでもつて悉皆身體も痛めつちまふし、身代は猶の事、今じや心まで變な樣な具合ひさね。

　何時でしたか、先の妻さんを追ひ出した時、其れちや足まらんから一齋發して見なさいつてんで、誰れやらが、或る處の番頭さんに周旋してやりましたらね、三日と經たぬ中に、もう大根汁が鼻につくのなんのつて飛び出しちまつたんですつて、仕樣が無いね、彼麼人は、

と後ろ姿見送つてのとりどりの噂、

＊　＊　＊　＊　＊

　私は之れを悉く眞實として信じる程の勇氣も御座いませんが、去りとて、單に口不祥き棟割共の噂として退ける程の度量もないので、實際今日、此等の弊害は慥かに或る一部の社會に潜んで居やうと思ふからで御座います。

　由來人世の目的は、云ふ迄もなく幸福にある事は大多數の人の一致する處で御座いますが、唯本能的慾望を充たす事のみが、決して幸福の意味では無いと云ふ事を忘れてはならない事だらうと思ひます、云はゞ、私共は本末を顚倒して、目的と手段とを誤つて、動物性の劣情を滿足させる事にのみ汲々として居るのではありますまいか、朝三暮四、利に苦しみ名を悲しみ、大切な人間五十年の精力と根氣とを、本能の御奉公位に使ふとは、餘りに勿體なく情けなく口惜しくは御座いますまいか。

　朝には夫人の庖丁に日本料理の粹を利かせ、夕には令孃の鹽梅に西洋料理の通を誇る少數の富豪者がよしあるにしても、衞生の爲め品位を保つ爲めに、況して子女の敎育上國家社會に如何程の利益を與へ、如何程の効果を自分でも受けたでせうか。

　懲露の功勳を完うして、陛下の宸襟を安んじ奉つた五千萬の同胞の多數は、決して美食家の貴族の子弟で

も無ければ、食道樂の衛生家でも無かつた、況して料理法を説く通人でも無ければ、料理の品評に巧みな學者でも無かつた、即ち一將をして功を恣にさしてやつた幾萬の枯骨は、將に所謂

極樂は何處のほどゝ思ひしに
杉葉の立てる又六が宿

であつた、半升の濁酒に一日の勞をやる鼻唄の聲の主なる又六であつたのである、明朝の炊ぎにとて谷川の清い流れに麥を洗ふ又六が妻であつたのである、即ち、朴實殆ど仁に近い、平和にして壯健にして而して粗食に舌鼓を打つ可憐な人等であつたので御座います。

併しながら元より私は食道樂決して惡いとは云ひませぬ、美食決しつ惡いとは云ひませぬ、決して衛生決して惡いとは申しませぬが、自分の日常の生活狀態をも深く參酌して、他の種々の場合との釣り合ひの程度をも考へて、其れが爲めに却つて不愉快を殘すとか失敗を招くとかの無い樣にと皆樣にお勸めする譯で御座います。

美人と醜婦と結婚の遲速

好逑生

今の婦人境遇順適ならず、容貌に於て少しく劣る處の者、多少の悶煩と多少の鬱悒とを持たざるものなし其の鬱悒、其の煩悶は抑も何ぞ、煎じつむれば畢竟するに婚嫁の後れたるを悲觀するものに過ぎざるなり、妾は一生嫁には行くまじ、夫は持つまじ、自から樂しんで天然を終らん、と其の述懷や健氣なり、されど其反面には早く嫁きたしとの希望熱するの心あるが故ならずや。

實に左もあるべし女心の狹き了見にては、年頃になりて嫁せざるものほど實に心苦しき事はなからん、人間の苦痛蓋しそれより甚だしきものはあるまじ、そこで煩悶に煩悶を重ね、婚を急ぐの心矢の如く、苟くも縁談さへあらば地位も身分も論ずる所にあらずとて、前後の考へもなく、今日は見合、明日は結納、來る何日は愈々結婚の式を擧ぐべしと、其の造作なき事猶兒

を與れるよりも、容易なる結婚が、屢々世間に行はるるは吾人の目撃する所なり。

去りながら如何に不器量にせよ、老嬢にせよ、如何に男を戀ふるの熱つきにせよ、斯のごとき早急の結婚は甚だしき弊害ありと言はねばならぬ、碌々調査の暇もなく、無暗に嫁して髪さえなほせば、それで女の一人前、これで明朝死ぬるにしても、婿がないとは誰れ云ふまじ、先づ之れで親も安心したものとなし、一時は雙方大喜びをしませうけれど、偖て急ぐものは堅牢ならずとのたとへの通り、初めの程は密の如くでも一年居、二年居、三年居る間に、自然と雙方の缺點が知れ、此家の姑は、酷い人、親戚の誰れは斯ふ云つた、御付合が此の通りだ、良人の浮氣も益々募る、これはしたり飛んだ目違ひをした、こんな所に嫁るのでなかつたと、遂には不幸破鏡の歎を見るのは、廣い世間に少なからぬ例しなり、俗にこれを据風呂嫁と云ふ、即ち出たり這入たりするからのと、又別に五合徳利嫁ともいふ、それは一升(即ち一升)は這入らぬからだと云ふ事なり、斯くの如き結婚は御同様に不利益なるのみならず、女は一世を誤る基となるもの故、例令一年や二年は遲く嫁くとも、愼重に考へ合せて、之れで愈々間違ひなしと思ふた所で、宜しく決行すべきなり。

斯く申しても結婚に憧がるゝ人の耳には少しも這入らざるべし、之れは虚言だ貰ひ手があつたら何んでも構はず一日も早く嫁入するに如かずと、自らの分別きめて斷行する方もあるか知れぬが、廣い世間を冷やかな眼で見れば、人間社會はそんなに心配したものに非らす、非常の望みさえ抱かなかつたら何れの方面にでも相應の所はあつて、必ず良緣を得らるべきものなり、人を羨むにも當らねば又自分を怨むにも及ばぬ事なりまづそれまでは規帳面に一日の事を働いてお母親の言付をきいて、おとなしく家政の事を見倣つて居つたら他日必ず良緣はあるものなり、決して煩悶などするには及ぶまじ、それを無闇に早く嫁きたし、男を見たら心易くしやうなと、思つて、白粉べたくたつけてあたり近所をはねまわるなどは自信の缺けたる女といふべ

し、如何に煩悶しても時節が來ずばだめだと申す證據には、如何に容色が三平二滿の樣でも、昔しから一生一人で暮らした女のあつた例しはなし、誰でも末には夫婦の緣を結んで比翼連理の樂しみをなすこと、今も昔も西も東も變つた事なし、世間は廣し幾百萬の都會あれども、不緣の女あるをきかねば曠夫のあるのを聞かざるなり。物の例しは炊婢の身の上に考へても見たくいづれも似合の處ろへ行かぬはなし、況んや身分相當に生れ、相當の教育もある方々が嫁入る所なしと煩悶なさるはきつい解らぬ沙汰ではなきか、年が過ぐれば多少物淋しき感なきにしもあらねど、そこを本統に我慢されれば、必ず相當の良緣來ること疑ひなしと、我は保證せん如何に煩悶を重ねても、心の中で泣いて泣き明しても、緣は時節なり良緣を得るには時をまつに若くものなし、中にはこんな、心配などするよりもいつそ獨立と覺悟をきめる方もあらんが、世の中は決してそんなものにはあらで、時節來つて昨非を悔ゆるの芽出度き境遇に入るものなり。



成程、二十の坂を越えて、器量思はしからずとありてはいさゝか苦勞の種ともなれど、世間は心配したものにあらず、天は誠に公平なり、世上を見渡すに美人にして幸福なる家庭を持てる人多きか、將た醜婦にして圓滿なる家庭を持てるもの多きかを比較すれば必らずしも後者は前者に讓らざるなり、容色の美なるは一時の美にして、心の美なるは永久の美なり、一時の美を希ふものは、例へば山吹の花の如く、咲いた當座は黄金の色をちりばめて、誠や美しき裝ひなれども時至つて落花の運にあへば見る影もなき有様なり無感の草花にして既に然り、況んや有情の人間に於てをやされば多少容色は劣つても、心の美なる方が、久しく保ち幸福を得るに近し。

―(客ゐしらひ)―

禮儀の要は無理に容體を作りて只儀式の人眞似をするよりは心に敬みを持ち柔順と高雅なる心を保ちて人に應接すれば、自ら其の態度は規則に恰合するものにして思はざる處ろ知らざる處ろ、不用意なる處ろに至るまで、皆其方則に適ふものなり然るに愼みの心なくして無理に外面斗を形造るときは甚だ見苦しき態度表はれて禮儀の法に背くものなり。

△客の來るときは判然とした言語を以て挨拶をなし其用便だけのことは臆せず語るべし決して人の噂や一家の事情などを猥りに語る勿れ。

△自分の上なる客の來りし時は自分は下座に行きて丁寧に禮をなし、つゝましく挨拶すべし。

△障子襖の開閉は開かんとする右の方により跪きて引手を取り少々開きて又右の手を戸の開きたる處につけ程能く開くべし。

△煙草盆は火壺を左に唾壺を右に置き、兩手に持ち、座ばりて進むべし。

△足の三本ある火鉢は一本を上座の方に向け置き、耳のある火鉢ならば耳を左右にすべし。又茶は茶臺に載せ出すべし、客人の前に兩手にて置くを法とす。

△菓子の進め方は紙を斜めに二ツに折り、其上に載せて出すべし、凡て菓物類を出すには客の食し易き程にして出すべし。

△書物を客人の前に出すには表題を客人の前に向けて出すべし。又硯箱を出すときは蓋を取り器を揃りて客人の方に向けて出すべし。



宮廷秘事

美人の復讐

張飛燕

侵略主義を以て一世を驚駭せしめたる彼のペートル大帝の皇后エリザベートが、王城改革を遂げて、露國の王位を奪ひ、純然たる專政君主として空想的なる將た野蠻極まる生涯を始めたりし其當時の事なりき。由來露國に於ては戰慄すべき陰謀、慘憺たる悲劇の宮廷内に行はるゝは人の知る處ろ、こゝには女官等が自己の戀愛を爭はんとして施されたる復讐手段を記したるもの奇趣横溢の物語なり。

女皇翼下の雙璧

その頃女皇エリザベートは歐洲切ッての美人、明眸皓齒儔罕れなる品なりしが、女皇はそれを誇りとして更らに其美を飾らんとするの心あり、實にや天上の月色は下界の水を得て更らに妍麗の色を添ふ。女皇も又其の周圍に美女を獲て一段の容色を加へんものをと普ねく國中の貴族に令して夭々の美を需めぬ、是れさながら名家の筆になれる一幅の傑作が、金光燦たる額縁に納まりて更らに額面の光彩を放てるがごとく、この美はしき婦人を我身の框となして花顔を輝かさんとの巧思なりける。

女皇の詔令は日を期せずして國内城下の貴族の家庭に落ちぬ、こゝにペルソー縣の一貴族、ガ、リン家の令姫にして其名をカーリンと呼ぶ美婦あり、募りに聰

じて宮殿に參しけるが、いしくも女皇の御旨に叶ひて、即座に御召抱とはなりぬ。尋いでカサン縣の一貴族ナデシヤ家の姫君ナデシヤといふ妙齡の一美人又募りに應じて參內しけるに是れ又女皇の思召に叶ひけん、優渥なる御言葉あらせ給ひてカーリン姫と共に左右の雙翼となりぬ。

つら〳〵今この二美人の容色を察るに、いづれも國中撰りすぐッての艶色なれば、孰れに劣り優りはあらねども、まづカーリン姫は其姿白薔薇のすが〳〵しきにも譬へつべく、容顏は秋月をも欺くべく、冴え〳〵しくして然かも澄み渡りたる風情ありその黃金色なせる美髮はふさ〳〵として鬢邊ゆるやかに波うつ樣得も言はれざる趣あり。又ナデシヤ姫は花ならば支那の牡丹にも假へつべく、脊は少しく低き方にて小肥りなる姿豐艶にして、唐宮の艶色楊太眞の再來かと思はるゝばかり、紅の兩頰、愛くるしく、燃ゆるがごとき丹花の脣、明星のごとき明眸はこの美人をして一層の美を添へしめたり。殊にカーリン姫になくしてこの姫の專有なるは笑みてこぼるゝばかりの愛嬌にぞありける。實にや白賓樹上の雙鸞、女皇宮裏の兩絕として寵愛はいづれにも厚かりきさりながら女は罪深きものなり、婦人の專有物たる嫉妬はいづくの島にも其の芽を培ふものにぞある。この兩美人の間にはいつしか寵榮の爭を兆し心中の暗鬪は日に〳〵募りて、朝暮の振舞にも顯はるゝほどとなりぬ。折しもあれ宮中一の美丈夫と聞へたる騎士ストローゴノフといへる伯爵あり、端なくもカーリン姫を慕ひて、それとなく言ひ寄りしが、姫も又兼てやさしき男子と見しものか、誘ふ水あらばのたとへ、終に二人は戀に落ちて悶へくるしむ身となりしを、聰慧なる女皇陛下は早くも兩人の交情を察たまひて、約婚のゆるしを與へ玉ひければ二人は飛立つばかりに打喜びて、日ならず宮中に於て其の披露をなさんとまでに運びける。

斯くと聞きたるナデシヤ姫は、嫉妬の烟炎々と耐へ難たかりしも、遉がに其日は白レースの飾つきたる赤色繻珍の式服をまとひ、無念の淚を押へつゝ强いて何

氣なき様に裝ひながら、席に列し、まづカーツン姫の今日を晴れと打飾りたる傍に歩み寄りつゝ、

「ナデシヤ様、妾の化粧は似合ひましたか」

と言へばカーツン姫は意地惡くもそれに答へて、

「お化粧は大層よく出來ました、けれど御召物の調和がチト貴女には不似合のやうですな、」

「おや何故でございます、まアその譯を承はりませう」



と流石にナデシヤ姫は思ひ掛なき嘲笑に、堪へやらず、さなきだに胸のほむらの炎々たる折柄とて躍起となりて詰め寄れば、

「何故と申して第一紅の色は華美なものですそんな上衣を召しては失禮ながら貴女の御顔の色と調和しないぢやありませぬかのみならず女皇陛下のやうな御標致ならよしや御召物の裁方や、色合はどんなであらうと、美しく見えますが、妾し共のやう

な唯可愛らしいといふ位の者では全くこの調和と申すものが一番肝腎ではありませんか、」

時と言ひ場合といひ、言ひ様もあらうに人の顔の棚卸し今更ながら服装の配合のといふわかり切ッた説法をカーリン姫より聞かされ數多の人々に晒されんとは心外至極。

「では妾なんぞは日に焼けた人參のやうだと仰やるのですか」

とナデシャ姫は朱唇を震はせながら詰め寄ればカーリン姫は少し言ひ過ぎたりと見て取り、

「ですがナデシャ様、妾しの申した事を貴女はどう御推量遊ばしたかは存じませぬが妾は決してそんな悪い意味で申上げたのではございませぬ、御氣に障りましたらどうぞ御免遊ばせ、」

「どう致しまして、いろ〳〵御親切様有難う」

とばかり、輕侮の一瞥を與へしまゝナデシャ姫はくるりと脊を向けぬ。

二人が胸中の暗闘はこれにて粗し察せられたり。

軈て儀式は始まりぬカーリン姫は得意の色を面に漲らしつ、陛下に御挨拶を申上げぬ、女皇も亦懇ろに芽出度婚を祝したまひぬ。益々恥辱の思ひをなせるナデシャ姫は闕下を退り下ると共におのれの室に轉びつゝ胸のもしやくしや晴らすに由なく足踏み鳴らし、口惜涙に泣きくづをれぬ。

罪の芽は女の狹き胸の中に萌かるゝものなりとは去る哲人の言葉なり、ナデシャ姫は公會の席にて其の同僚に嘲けられしその屈辱の種となりし紅き衣服を寸断寸断に引裂きつ、僅かに燃ゆる炎を鎮め、我れと我が手に胸を押へ暫時のほどは默然としてありしが、何思ひけん、突と立ち起りて冷やかに笑ひぬ。开もこの姫は如何なる事をか思ひ立ちけん、訝かしき限りにこそ。

巧める女の復讐

翌日となりぬ、ナデシャ姫は昨日に變るいと冴え冴えしき面色にて女皇陛下に拜謁しぬ、折柄ストローゴノフ伯爵は昨日の御禮として陛下の御前に伺候しける

をナデシャ姫は早くもそれと見て、近づき、サッと兩頰に紅を潮しつ、伯の秀麗なる眉目のあたりに一種の魔力ある秋波を注ぎぬ、これに對する伯の態度や如何逍がに露國士官に特有せる多情の氣質は爭ひ難し脆くも姫の媚態に引つけられて恍惚たることや、暫時、思はず手袋を取り落せしが、去り氣なき樣に裝ひつゝ闕下を辭すると其の好奇心は抑へ難く、カーリン姫のある事をも打忘れて其まゝナデシャ姫の室を訪ひける。



戀の遺恨や、恥辱の怨み、深くも巧めるナデシャ姫は、偖こそ思ふ壺なれと胸の躁ぎを無理に抑へて、出で迎へ、面一杯に羞容を含みつゝ椅子をすゝめぬ。

姫は伯爵に向ひて言ふ樣おのれの知れる二人の淑女或る士官を慕ひありしが戀は端なくも其一人の淑女に落ちて、今や他の一人は絶望の淵に沈まんとしつゝあり、あはれこの士官に一片の情あらば如何にかしてこの淑女を死の手より救ふべきものならめやとて、他事に託け、それ

となく思ひの程を打明かし艶美と嬌羞のあらん限りを凝らして打ちかこちたれば、元より多情の數には免かれざる伯爵の事とて、心はいつしかナデシャ姫の上に運びカーリン姫との約婚をも打忘れたるにはあらねど今宮中に儔卒れなる美人と稱へられたるこの絶世の艶婦に思ひ慕はれしを無上の誇りと思ひ、遂にナデシャ姫の擒となりけるこそ、誠に男は移り氣の世の中とや言ふべけれ。

斯かるべしとは露知らざりしカーリン姫は心いそいそ豫ねて期したる華燭の典を父の家にて執り行ひ、儀式を村の古寺院にて擧ぐる事に定め、女皇陛下の御言葉を辱ふし、それ〴〵宮中の重立たる官人より祝言を贈られおのれの領地へ退り下り、夫となるべき伯爵の來らん事を待ち合せけり。

偖いよ〳〵當日とはなりぬ、姫は一世一代の晴れの衣裳を打飾り、鏡の前に立ちながら、花も羞らふ裝を前、後より打見やり、さしも我が嬋娟さに恍然としてありしが、豫定の時も間近となりしかば、乳母に促されて、式場の傍なる一室に入り待つ間のつれ〴〵に幼き折の事など打語りて愛度氣なくほゝ笑みけり。

軈て時刻といふほどに門前馬の蹄の音立てゝ來り訪ふ一個の騎士あり、これぞストロー伯の來着を報せしものならんと、急ぎ小僮を走らせて容子窺ひけるに、さても怪しき事にぞある、待受けたる伯は來らで、唯其の使者なる騎士なりき、一封の書を懐ろにして委細は書中に詳しとばかりさし出して返辭待たんともせず再び馬に跨りはつしと、一と鞭揚げて砂を蹴立てゝ急ぎ歸りぬ。怪しき事とカーリン姫は封押切りて開き見れば、こは什麼何たる物の怪の仕業ぞと物をも言はず乳母の腕に打たふれぬ。

二週間を經て我が戀人なる伯爵は人もあらうにナデシャ姫と結婚なせし事の報知を、戀の仇たる姫より送り來りぬ。其の書信中には末の一句に「女の復讐」とありける。

昨日の仇敵、今日の親友

憎しといへる文字を千枚の紙にかきならべて烈火の中に投じても胸の苦しみは去りやらぬなり、カーリン姫は其の悔しき且つ哀れなる紀念の日より宮中の仕へも慵くして勤は爲し難し、難有き女皇の覺召をも只管に辭退してペルソーなる父祖の城内に閉ぢこもり、世を味氣なく、僅かに好める讀書を日夕の友として烏兎匆々寂寥の間に早くも五年の星霜を過ごしたりけり。



或日の事突然昔床かしきストローコノフ伯爵死去せりとの報知に接したりしが、姫は何か心に期する處ろやありけん俄かに旅裝をとゝのへて急ぎ都に登り宮中に參内して久々の無沙汰のお詫びを申しあげむかしの御恩を謝し奉りければ、女皇陛下もさすがに故舊に遭ひ給ひたる御心地遊ばされいとも懇ろに歡待遊ばされける。

姫は今陛下の御面影を拜しまいらせてより、忽ちむかしの快活なりし處女に立ちかへり、不慮に死去りし伯爵の弔みなど申しあげしが、姫の今までの幽鬱、怨恨のあり丈は其のむかし戀せし男の墳墓に葬り去りしものゝ如く、愛嬌よく立振舞ひしかば陛下の御ぼし召も一層なりき。

こゝに又ストローゴノフ伯の未亡人にしてカーリン姫の戀の仇たるナデシャは喪の期を獨逸、佛蘭西、伊太利等の旅の中にて暮らし居りしが、恰も其頃再び宮中に立ち歸り同じく女皇陛下の禁闈のほとり近く仕へ奉りたり、宮中の人々は今やこの二人の仇同士の再會に就て少なからず興味を以て迎へ眺め、兩人の間には必らずや注目すべき一大事件の起るべきかを豫想せり、さりながら其の豫想は全く反對にして却て兩人相憐れむの情によつて互に美はしく結びつけられたるこそ不思議に似て不思議にあらず是れ人情の機微とや言はん。

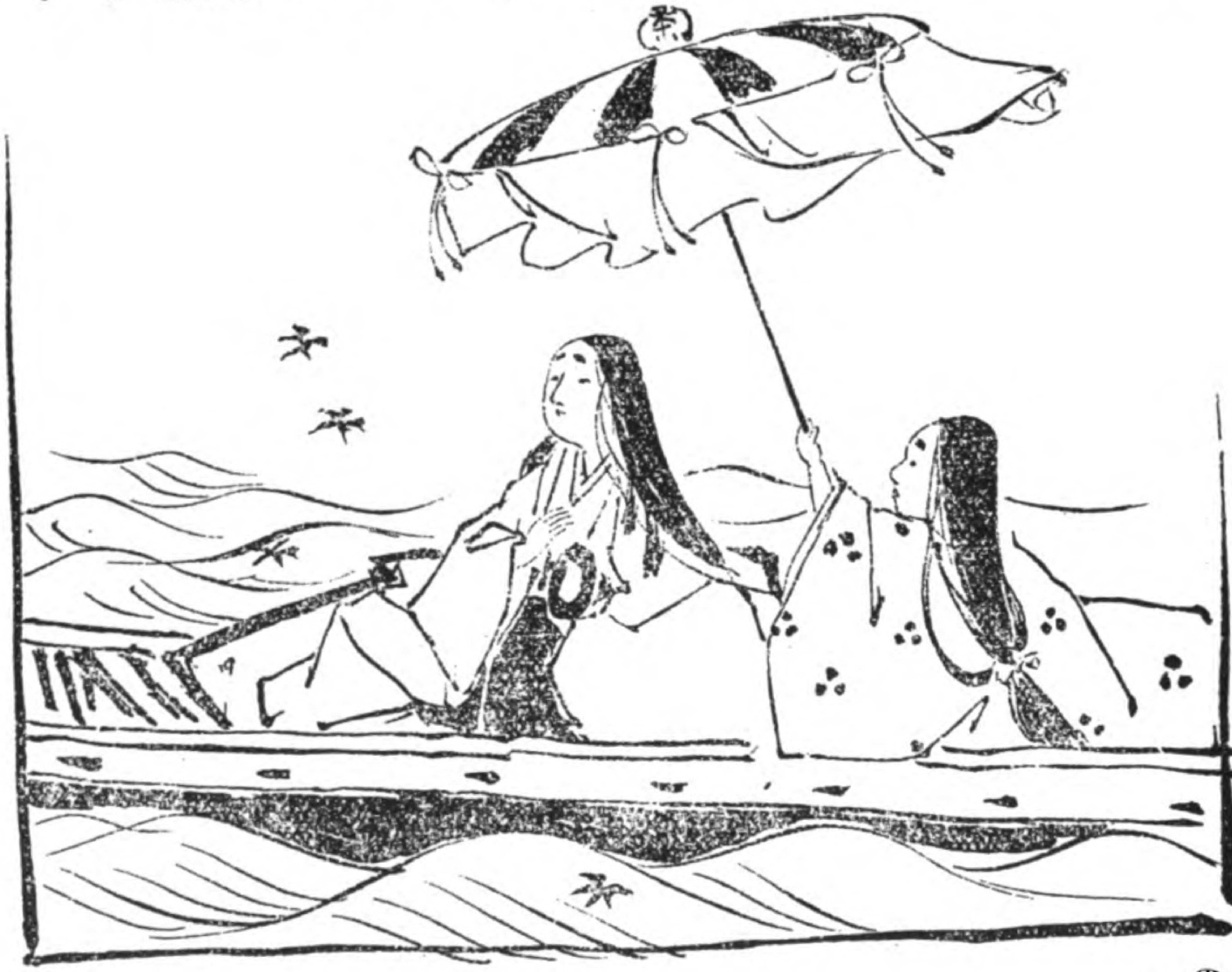
カーリン姫は曾て其仇より受けし心の創痍を今は全く忘れ果てたらんものゝ如く、此の度の再會には、まづ未亡人の手を把り、優しく抱きて接吻なしぬ。ナデシャは戀の仇より受けたるこの意外の待遇に少しく氣味惡しく、胸中いさゝか驚きたるが、稍ありて痛く慚入りたる態にて丁寧に別後の挨拶をなし、これも又むかし仕へし當時處女の心になりける。

この如く兩人は全く以前の恨を水に流し、今や新らしき生涯に入りたらんごとく、互ひに同情を分ち合ふて日に增し懇親の間柄とはなりしなり。

折しも盛夏の頃なりき、露西亞の宮中にては中々に凌ぎ難きこの夏を如何にせばやと兩人避暑の相談をなせしが、カーリン姫の故郷ペルジー村は幽邃閑雅の城地にて夏日の煩を避くるには倔強の場所なりとて軈て、二人は旅裝をとゝのへ、田舍行の馬車を驅りて滿目の光景寂々たる林野を急がせけり。ペルリの別莊は鬱々たる林丘の間にあり、城地幽寂まことに人寰を離れたるの靜境なり、夕日の雲を彩どる頃二人は城門に達し此所の別業の古風なる館に入り、晩餐を共にし、

軈がて寢所に引退きしは十日の月の傾く頃なりけり。

深夜カーリン姫は偶々眼を覺まし、何事か深く思ふ所ありしもの丶如く、寢室の鈴を鳴らせば、容儀清秀なる一個の青年は恭々しく扉を排して入り來れり、姫はこの青年を傍近く招き寄せて一段聲を密めて何事をか命令するもの丶如し、青年は幾度か辭退する樣なりしを姫は威嚴と嬌舌を以て無理に青年を說き伏せたるもの丶如く稍うにして得心せしめたる樣なりし、密談了りて青年の辭し去らんとせる時姫は尙ほ念を押すもの丶如く、



「セルギウスよ、今汝に依頼せし事は必らず果し吳れよ、これ妾の命令にして且つ妾の依頼なり、若し妾の命に背く事あらば汝の生命は無きものと心得よ、汝の敎育、汝の名聲、汝の幸福、皆この妾の庇蔭にあらずやゆめ〱忘る丶勿、是非に賴むぞや」

と最後の一言青年は只管恐れ入りてぞ退きける

翌朝主客は心地よく食事を濟まし、何呉となく睦まじく語り合ひしが、

程なく青年セルギウスは恐る〳〵罷り出でしを主人の姫はナヂシャに紹介していふ樣、これは妾の遠き縁者にて名をセルギウス、イワノヰチと申すものなりとて引き合せぬ。

ナデシャは一見して覺えず胸の躍りを禁じ得ざりしは其若者の風采が如何にも清秀端麗にして、當時の貴婦人社會に於て一般に理想とされたる男子の摸型に悉く箝りしのみならず、其の容貌の一點に何處やら故のストローゴーフ伯に酷似せる處ありしより、輕く握手を施したる其時より、這は床しき懐かしき青年なりと感じたるなり。

別莊の避暑とては朝夕の讀書、相互の訪問、談話の外に氣の欝したる時、庭園の散歩、地邊の釣魚などの外には別に異りたる生活の樣もなかりしが、ナデシャの心は青年の上に怪しく亂れ、さまよひ、セルキウスの面影寸時も忘れ難く、彼れが多情の心より遂に又此の男を手に入れんものをとあらゆる手段を盡し、果ては戀書をさへ贈りて其の歡心を得んとまでに及びけるこそ淺墓なれ。

主人のカーリン姫はナデシャの心を知るや知らずや午前は讀書に耽り、午後は近隣の訪問に一日の大部分を費やしてナデシャと親しく語る時は甚だ稀なりき。ナデシャは又主人の多忙を結局我が身の幸福と思ひ、身邊に人なきを機として着々セルギースとの戀を成就せしめんとて心を碎きぬ。

戀人の紛失

或日の事例の如く主人の外出に乘じてナデシャは青年セルギウスを相手に庭園を散歩し、古人の詩などを吟唱しつ、さながら妙齡の處女のごとく、其の服裝すらも驚ろくばかり華美に裝ひ、十二分の嬌羞を含みつつ對手を魅せ了さんと謀りつゝ、我が思ひの切なるを語りて結婚談を持ち掛けたり。

此時セルギースは聊か打萎れたる樣にて

「御志の程は勿體なきばかりに嬉しけれど我れ如き卑賤の身の什麼御身のやうなる貴き人の良人と成り得

べき、資格のなきは第一不緣の基に候はずやそれよりも寧ろ永久渝らざる親友として御交際を頂たし」

青年のしほらしく辭退するを未亡人は慌てゝ押止め、

「セルギースよ妾は爵位、財產の如き人造の榮耀を目的とするものでなし斯る浮薄の心より御身を愛するに非す、眞實御身の潔き氣象を慕ひての事ぞ我が理想の良人には名譽も位置も要るものならず、唯潔き心其儘なるセルギースこそ望ましけれ」



セルギースは猶も殆う氣に、

「それはよく解りました、併しそれにしても御主人なるカーリン姫が多分御同意ありますまい」

「そんな事は決してあるまい、彼方は妾の親友ではないか」

「否、私は主人姫の潔き氣質をよく存じて居ります、此結婚には決して御贊成あるまいと存じます」

「然らば致し方なし、相談をせねばかりなり」
「それは德義上出來兼ます」
ナデシヤは此所に至りて嚇然として怒れる眼を示したり。
「何事ぞ、御身は斯くまで姫の命令に服從せねばならぬ義務ありや」
青年は打萎れて
「然です、カーリン姫は私の恩人です」、
ナデジヤも今は返す言葉もなかりき。
其夜ナデシヤは主人の室を訪づれぬ、セルギースとの戀の徑路の梗概を話し、是非結婚したき由を訴へて其賛成を求めけるが、結果はセルギースの言ひし如く
「それは可ません」と姫は一言にして頭を振りぬ。
「それは又何故です」と言はせも敢へず「妾は親實なるに友として其結婚には決して御同意申す事は出來ませぬ」
ナデシヤ今は取着く島もなく默然として室を退りぬ此の事ありてより間もなくセルギースは一片の辭もなくて館を去りぬ、何故に彼れは出でしやと主人に質せば、最早若者のことはお忘れなさいと忠告さるゝばかりなり。ナデシヤは煩悶措じて聲荒らかに、姫の仕打をいと薄情なりと恨みかこてり。
「貴女は彼の男が賤しいからそう仰やるですか」、
「勿論そうです、第一妾の親友なる貴女とは階級が違ひます、イヤモウそんな話は御免蒙りませう」、
「ハヽアそうですかそれでは別に御願ひも致しますまい併し彼の男は何處へ參りましたか」、
「ハイそれは申上られませぬ、第一彼の男をお忘れなさる樣にとて妾が遠くへ旅立せました」、
「アレマア、そんな意地惡をなさつても妾は決して彼男を忘れる樣な事はありません」。

奇怪の謎

掌中の珠と愛でたるものを横合より突然奪はれしものゝ如くナデシヤの失望は譬ふるに物なかりき、乍去、呆氣の一心岩をも透す、ナデシヤは遂に一策を案じ多

年身に飾りたるダイヤモンドの腕環と紅寶石の胸飾とを賞として一人の侍女に啗はしめ、漸くにして其行衛を搜り出しぬ。

ナデシヤは急用出來たりとて主人に暇を告げて館を出でぬ。

戀に浮身を窶したるナデシヤは、仕度を調へてセルギースの隠れ家なる或る村に尋ね行きしが、途中にて端なく思ふ男に遭ひしかば、其喜びは譬へ形なく、四



邊を憚らず、抱き止め、カーリン姫の意地惡るく頑固なる仕打を散々に罵り、其所より直ちに己れの馬車に乘らしめ我が居城へと伴ひ歸り、青年の躊躇するにも拘らず、無理に結婚の約を結ばせ、翌日直ちに寺院にて大禮の式を行ふ事に決せり。

斯くして美しき一雙の男女は禮拜堂へ登りぬ、僧は嚴かに永久渝らざる愛を誓はしめ式終りて二人が聖壇を辭し去らんとせる時、列

席したる人々の中には密かに冷嘲の眼もてナデシャの振舞に注意したり。新夫婦はさすがに世の批難を憚かりしも數十日の蜜月旅行の爲めにこれも噂の七十五日に掻き消されぬ。

こゝに又女皇陛下は彼等が親しく御裁可をも得ずして婚を結びし事を深く憤らせ玉ひ、又親戚知音の者はこの結婚の當を得ざりし事を評して甚だしく輕侮の意を示しぬ。

女皇陛下も賛成者

數十日の蜜月を風色異なる外國に暮らして程なく新夫婦は歸り來りぬ、一朝の輕擧に親戚知己の同情を失ひ、又女皇陛下の御信任も乏しくなりしかば、流石戀に眼の晦みしナデシャも身の立ち場を失はん事を恐れて女皇陛下に身の過ちを歎願せしが、容易に御許容なかりしかば、詮方なくカーリン姫の斡旋を頼まんものと姫の許に使を馳せて哀を訴へければ、心に一物あるカーリン姫は早速承知して其の斡旋を引受けたり。

時しも秋の始めなりしが、連日の好天氣は園遊會を開くに絶好の日和なりしかば、カーリン姫は久々にて親友知己を集めて一日の清遊をなさばやと女皇陛下の光臨を辱ふして盛んなる催しを企てたり、これナデシャが一身の輕擧を女皇陛下に御詫び申すに屈強の機會を與ふべきものと考へたるが其趣をナデシャに報じければ今に始めぬカーリン姫の好意よと喜び勇んで其日を待ちぬ。

定刻に及んで陛下は多くの貴族にかしづかれ給ひ、廣き座敷の食卓に着席あらせられ、御機嫌麗はしく近侍の者と打寛ろぎて御談話ありしが、カーリン姫は機を見て徐かにナデシャの手を曳きつゝ御前近く伺候せるを、女皇早くも見そなはせて。

「ナデシャよ御身の罪は許して遣はす乍去御身の新夫は何處に居るぞ、朕も一目見まほしく思ふなり」

カーリン姫は心得て、ナデシャを己れの食卓に着かしめ、侍女に命じてセルギースを呼び來らしめぬ。セルギースは姫の婢と共に恐る〱入り來りしが其有樣

を見て列座の面々皆諸共に驚き呆れて肝を潰しぬ、こは彼の男の服装が恰も囚徒の如く髪を短く刈りし上に露西亜にて最下等の奴隷の被るべき農夫の服装なりしかば、のみならず、彼れは其手に葡萄酒の罎を捧げつつ女皇の御前に近づきぬ。

ナデシャは是れを見てあまりの事に仰天せしが、これも我々の罪を陛下に謝する爲めにカーリン姫が殊更に謀りて斯く微服せしめたるものならんと思ひ、稍々にして胸を撫で下しぬ。知るや知らずや、彼の女は今カーリン姫の爲めに恐るべ



き復讐の罠にかゝりつゝあるならんとは。

復讐の復讐

其時カーリン姫は徐ろに起上り鋭く響き渡るほどの聲にてセルギースを指し、

「これは久しく妾の家に飼つて置いた犬の様な男で今度新たにストロゴノフ伯爵未亡人の良人となつたセルギースパロツフと申す恩知らずの疎忽者です」。

と四週聞こへよがしに叫びしかば、一座の面々互に顔見合せて愕きたりしが、遉がに慧敏に渡らせ給ふ女

皇陛下は五年以前カーリン姫の蒙りし痛手を察し給ひて、さては其の復讐をしたるなりと一時は呆れ給ひしが其場は何氣なき體に濟されたり。

ナデシャはさながら腦天より冷水を注ぎ懸けられし如く、慄として脈も止まるほどなりしが、是れも逸早く姫の所爲を察し素早く起ち立り、彷徨せるセルギースを伴ひ去らんとせるを、カーリン姫は急に遮りとゞめ、

「セル、お前から更めて御挨拶を申上げよ」

言はれてセルギースは姫の面前は臆したる如く伏目になりて、

「ハイ、唯今私の御主人樣の仰せられた通り私はカーリン姫君樣の飼犬でございました」

こゝに於てナデシャは全く彼等一味の計略に陷りし事を悟り、今更に深くも悔ひしが、乾度セルギースを睨みつけ、何事か言はんとせしをカーリン姫は更に眼もて指圖せしかば、セルギースは恐る〳〵女皇の御前に進み出で、御酒を酌がんとせし時手元戰きて燦爛たる陛下の御召物の上にしたゝかに浴せかけぬ。

「無禮物奴が」と女皇の一喝、續いてカーリン姫の美しき拳は飛んで二度までセルギースの頬の邊りに見舞ひたり。

驚きて色を失へるセルギースよりも、此の爲體を傍に見て居るナデシャの心や如何に、終世の恥辱、人間又この上の屈辱やあるべきと狂氣の如くになり、

「まあカーリン樣、どうした事です、貴女は私の良人と定まるものを、何たる御振舞です」、

「イヤこれは妾の奴隷です、無禮者奴、この儘にしては置けませぬ」。

睨みつけ叱り飛ばしつ更に言葉を改めて、

「イヤ美しい伯爵未亡人よ、一體貴女は勿論御承知でせうが、女の復讐は殘忍なものでありませう」、

ナデシャは今更に返す言葉もなく全く我が身の不敏なりしを悔ひて默然たりしを、カーリン姫は冷やかに嘲りつゝ、

「アゝこれで漸く溜飲が下りました」。

ナヂシヤは全く絶望して早起ち上る氣力もなきまゝ其所に其儘悶絶しぬ。女皇は侍醫に命じて彼女を運ばせたる後、カーリン姫を近く招き寄せ復讐の芝居の旨く行はれし事を稱贊し給ひ、一同の來客に始終の顛末を告げて更らに盛燕を開かれたりとは氣味惡しくも又凄き話、纖々たる婦人の手によりて斯る意地わるき復讐の演せられしは流石に陰雲朦々策士雲の如くに出沒する露國の宮廷にてありけるなり。

大英雄の末路

藤葉女史

一度劍を取ては向ふ處嵐に木の葉散る如く、全歐洲を打靡かしゝ佛蘭西の皇帝ナポレオンは今や果なく列國捕虜の名の下に僅にベルトラン伯爵夫妻と其三子、モントロン伯夫妻と其一子、ラーカス伯父子、男爵クールゴー、侍醫オメーラ、侍從長マルシャン、大膳職を勤むるレプリアンを主なるものとして、ノーサムローランド號に乘りセントヘレナ島に向つて七十日の永き旅にと登りぬ。時しも之れ西暦一千八百十五年の八月十五日午後なりき。

翼痛めて空しく小鳥の嘲弄に甘ずる荒鷲か、傷手を負へる荒獅子の砂漠の月に其不遇を恨むか、千軍萬馬を叱咤して、其冠の向ふ處一として意の如くならぬもののなかりし皇帝は今や希望峯司令長官サー、チョーヂ、コックバンに監督せられて、携ふ處のものは僅に日頃使ひ慣れたる食器、行李、葡萄酒と、ヘレナ島の住居に用ふべき八萬フランの財とのみ。

彼が昔を忍ぶ唯一のかたみなる腰間の劍すら取り上げられんとしたりしを、帝が無言の一睨に漸くにして夫れのみは許さるゝ事となれり。

帝は一日に二回の食事をなすのみ十時より十一時の間に不規則に葡萄酒と、肉との朝飯を食して、午後三時頃迄は讀書にふけるを常としき。

十月十五日の朝まだき、嵯峨たるセントヘレナの島山高く船の行手に横はりぬ、斯くと知りたる帝は常に

もなく急ぎ衣服を着代へて甲板に登り望遠鏡を以て少時之れを眺めぬ、あはれ其胸の中の感慨や如何なりけむ。

午後七時帝の一行は市民の群り來らん事を厭ふて微びやかに上陸せり。

あはれ南の果の一孤島、スエズの運河の開かるゝ前迄は洋の東西に行く者も、歸る者も皆此岬を廻りて賑はしき一都會なりしを今は見る影もなく荒れはてゝ只周圍二十八哩の一小島たるのみ、帝が初めて宿りしはシームスタウンと云ふ一村落の最富めるボルチフスと云ふ紳士の家なりき、配所と定められたる處は狹くして且つ不便なりければ其普請の出來上る間を此處、彼處と移り歩けり。

斯る間に英國の水兵三百人は日々此處よりロングウッドの高陵に建築材を運びてひたすらに工事を急ぎし程に早くも其年の十二月初めにはロングウッドの邸全く出來上りて夫れと共に帝の一行は此處に移り行けり

土地は海面を拔く二千尺の上にある高原にして貿易風は絶へず東南より吹き來り、晴朗の日は殆と無くして雨降らざれば濃厚なる霧とざして幽鬱に、地は概粘土なるを以て降雨と共に道路は脛を沒する程となり濕潤甚だしき處なり。

飲料水は容易に得難く、程遠きハッツゲートより馬に負して運び來るもの、實に其價は葡萄酒の一瓶よりも貴しと土人は云ひぬ

帝が男らしき心は、嘗て遠流の身となるを歎きて、まだ歐洲を發せぬ前、佛國の一少士官が帝に逃れ去らむ事を切に勸めしも聞かで止みぬ、又其兄なるジョセフ、ボナパルトは其容貌のいたく似たるを以て、人々は米國に逃れしめんとしたるをも、夫は自己の品位を落すものなりとて從はず。

今斯る身となりても帝は猶其心失せずして英國より供給する衣類をすら用ふるを快とせず、日頃好みし綠色の上着の年を經るまゝに古びて行くも猶之れを捨てず、破れては之れを裏返して身にまとひき。

斯れば身はたとへ配所に送らるゝともなどて心迄支

配せらるべき、何處迄も昔の皇帝なり、其威嚴を失はざらん事に勤めて、出づるには美々しく裝へる從者を伴ひ、六頭びきの馬車を以てせり、臣下が自己に對するの敬禮は非常に嚴格ならしめ、一歩も許さず、帝の命なくして帝と共に散步する事を得ず、帝の言葉なき内に室内に入る事を得ず、用事あるものはまづ、謁見を乞はざる可らず、親しき臣下にてすら長時間帝の前を立たせらるゝ事すらも數々なりき、侍臣の一人がある時帝の前にて欠伸せりとていたく叱責せられたるが其人は帝の前に立つ事已に三時間餘に及びたれば終に知らず識らずの間に禮を失せりとて其無禮を詫びる一事を以ても知るべきなり。

帝は日頃戰場を走り暮したる習慣を其まゝに常に乘馬を好みしも其出づる毎に英國士官のつき從ひて一擧一動監視するを以ていたく不快に感せられ終に何時とはなしに全く廢せり、室内にはピアノ一臺あり、玉突臺も其翌年設けられて時々侍臣と樂しみぬ、かるた、將棊も日々の慰みに弄ばれたりしも帝は下手にして侍臣は如何にして帝を勝たしめんかと常に苦しめり。

又地上をさまよへる種々の動物を射つ事を樂しみとしたりしが其射的は極めて不確實にして、或時は犢を射ち、又ある時は侍臣の妻が愛育せる犬を斃して深き悲しみを與へたるなど概ね失敗のみなりき。

帝が晩年に及びても戸外の運動の少なくなるにつけて、從醫の勸めに從ひ、自ら式部官のブアーレーを園丁の長として其下に勞働し、赤き上靴をはき、短き服を着、つば廣き麥藁帽子を被り、地を掘り庭を造り、或は野菜を植ゑるなどして樂しみしが、終には侍臣をして皆園丁たらしめ、猶飽足らずして其夫人達をも之れに引入れんとし、種々の口實を設けて逃れんとするを見て獨り笑ひ興せり。

千八百十六年四月十五日島司コックバンに代りてサー、ハドソン、ローと云ふ人新任せられぬ。

帝が前の知事と今來りし人とを比較して評せるが如く、コックバンは軍人特有の粗野にして且つ嚴格なりしも、卑賤なる振舞なく、鷹揚にて有りしを、ローは

只帝の逃れ去らむ事をのみ夢の間も思ひ殆ど小村の巡査の如かりき。

實にローは帝に取つて最も厭はしきものなり、或時は邸の周圍に一丈に餘る深さの濠を造りて而も夫れは家畜の逃れ去らむ用心の爲なりと暗に帝をして家畜扱ひをなし、又或時は昔皇后たりしメリールイズが遙遙歐洲より其愛の筐なる小ナポレオンの半身像を大理石もて造りて送り越しゝを、ローは帝の許に屆けざらむとしあまつさへ、其を打毀さんとしけり、今や漸くにして帝の應接間に置かれ、朝夕の憂を慰むるよき相手となりしが、ローの不法を後に聞き知りたる帝は悲憤措く能はず、あゝ何事ぞ此小兒が無心の顏は如何なる獰惡の獸類の心をも和らぐるに足るべきを、何事ぞ打毀さんとは、彼は鳥類にも劣りたるものなりと罵しれり。

ローの無情は日に進みて、初め帝の爲に年金一萬二千ポンド有りしを幾何もなくして八千ポンドに減せり一人の僕が解雇せられし時には彼の僕が每日の肉料なりしとて二ポンドを引き去りぬ、而も彼は日に一ポンドの料より受け居らざりし。

斯る有樣なりしかば帝が食物も日々に粗末になり行きて膳に登るべき肉も、魚も、野菜も實に淺間しきものなりき、さなきだに濕氣甚だしき土地の冬に至れば更に堪へ難きを、ローは帝が用ふる煖爐の數多しとて之れをしも減せんとしたれど、暖國に人となれる佛國人と、ローとは同樣になり難しとて故意にも寢床板、垣の杭、或は葡萄酒の箱などを毀ちては燃したり。

總勢凡て五十一人の從者は日々單調なる生活の徒然に堪へがたく、帝の寵愛を得んとして互に相爭ひヘレナ島六年の生活中は殆ど此爭ひの歷史を以て覆はれたり、帝の憂鬱は之れに依りていよ〳〵其不快の度を增しぬ。

一度去つて又見る可らざる高貴の相貌、何事をも直覺すべき炯々たる眼光も今は見るかげもなく、果斷なりし活動も漸く靜になりて、歩みも最早やものうげにかてゝ加へて不順なる、濕氣充ちたる土地は頭痛とリ

ウマチスとを呼び起して、次第に衰弱の度を増し行くのみ。
食事も今は僅に日々一回を取るのみ千八百十八年の春に及びては其健康は益々不良に向ひて終に立つ能はず、あゝ、只靜に休息する事の如何に我身に適せるよ我は此世界の凡ての王位を授けらるゝとも、此休息に代ふる事能はじと、知らず其昔三軍を叱咤して三日三夜一睡をもせで職務に盡瘁したるの勇今何處。
只其快き折には侍臣の子供など打集めて昔語に餘念なかりき、帝が盛なりし折の命拾ひの話とて何時も語り出でらるゝ一節を左に記さむ。
彼がまだ學びの窓にありける十七歳の年、二三の友とセイヌ川に泳ぎ居たりしに俄に痙攣起り水の底に沒しければ友は皆巳に死せりと思ひて打悲しみ歎きつゝありしに程經て遙河下なる砂の上に絶息して打上げられ居たるを發見して漸くに危き命を取り止めたりと。



危かりしは只之れのみならず、一生を通じて殆んど腥き風の吹きすさぶ戰の巷にのみ有りければ大小の戰に逢ふ事數十度、帝が乘馬の打殺されたる事二十度に及び、身も亦負傷せし事さへ有りき有名なるマレンゴーの戰にては大砲の彈片其足にあたりて淺からぬ痛手を負ひしも僅に鹽水にて洗ひたるのみ。
アルコラの役には敵の彈丸其馬にあたりて馬は其苦惱に堪へず、帝を乘せたるまゝ敵地深く馳せ行き、終

にとある沼に陷りて息絶へぬ、帝は奔馬の勢止めがたくて己れも亦乘りたるまゝ沼に陷り、僅に首を表はすのみ、泥深き沼の內に手足の運動も自由ならずして全く敵の捕虜とならんとして漸く墺太利の兵士に見付けられて助け出されし事さへ有りき。

或時はコサックの騎兵に取まかれて、彼の持てる槍は巳に帝の體に觸れしも侍臣に助けられて漸くに九死に一生を得ぬる事は其時の助け人なるグールゴーの今も共に此處に有りて常に人に誇る處なりき。

天運強き彼ナポレオン皇帝は喬木風にそねまるゝの譬に洩れず、オペラに行かんとしては爆發藥をなげつけられ禮拜堂に入らんとしては匕首を懷にせる人の尾行するに逢ひし事など再三ならざりしも、何時も其難を逃れて、幸運の下に全歐洲を征服したりしに、今や南の果の一孤島に狐の如きローに支配せられて、何事も其命に服せざる可らず。

千八百二十一年廿二日に帝は最後の乘馬を試みんとて、ロングウッドの周圍を乘り廻りたりしが、それよりは病勢いよ〳〵惡しく、此地の流行病たる肝臟病に犯され、之れに加へて胃腸も害し、多年惱まされたりし頭痛さへも其勢を增して室內すら一人にては步行する能はざるに至りぬ、胃は食物を受け入れずして、直に吐出し、內臟の痛み烈しくなりて日々其苦痛を訴へき、されば、帝が末日に近づきては、肉も、パンも、野菜も食する事を得ずして僅にスープとシロップとを以て命をつなげり、

侍醫は切に醫藥を進めけれ共、何事も皆之れ天運なり運命は起るべき事を起らしめ、死すべきものを死なしむ人の壽命には定あり、如何に醫藥を用ふるとも何の甲斐かあらんと、靜に天運にまかして死の浪の寄するにまかせたるこそ果なけれ。

四月十四日、今日は病少しく快とて、侍醫に助けられて終日遺言書を認めぬ、斯くて四月も漸く終らむとする頃帝はいよ〳〵危險に陷りて渾沌として眠れるが如く、或は戰場に在るが如くに我軍の勝利を喜び、士氣を鼓舞せむとするが如き事を口走り、或はフラン

スの軍隊の事、去りしジヨセフヰンの事など順序もなく口走りては深き眠りに陷りぬ。

折しも暴風襲來して、帝が自ら植ゑし樹木を打倒し、日頃好みて其根に憩ひし柳の木は、根より堀り倒され天は慘憺として暗く雨と、風と、此孤島を今や倒巻く波に洗ひ流さむばかりなる五月二日の夕、六時帝は六年間孤島に其生活を共にしたる五十有餘人の侍臣に守られて、終に眠るが如く息絶へぬ。



あゝ嵐も波も聲あげて悲み吊へよ、過ぎ越方を眺むれば今更に、なれにし都は程遠き雲のあなたに、はなれ小島の嵐の夕に、悲みも、喜びも、恨みも、希望も消えゆく命と共に葬り去りて、今は元の空に歸したる自然の運命を。

帝が遺言なりしと又毒殺に有らざる事を確むる爲に六日の夕を以て其遺骸を解剖に附しぬ、故英傑が健全なる精神と、身體とは長き間充分の食物を取らざりしにも係らず、內臟の諸機關は殆ど完全にして、胃に一の癌腫を存し、肝臟の少しく膨れたるのみ、胃と心臟とはアルコール漬として二ッの銀器に入れ、メリールイズに送るべき遺言なりしも、見合せて棺の中に共に入るゝ事となしぬ帝が日頃愛用せし綠色の軍服を纏はしむ、長靴をはかせて、白き繻子もて張りつめたる棺の

中に、今は永久に眠る身となれり。

あゝ其思ふ處一として行はれざる事なかりし、英傑も終に運命の手に支配せられて、其晩年は殊に悲惨に、南の果の一孤島に不自由をかこちつゝ、終に其靈は夕の嵐と共に天に歸り去りぬ、來り弔するもの全島を擧げて三千餘人、ロングウッドを去る三哩のハッツゲートのかたほとりに帝が生前其飲料としたる泉の下に二本の柳の木の間に埋められぬ、英國軍艦は十二發の吊砲を發して之れを吊ひ、生前を知るも、知らぬも只涙を以て此千古の亡傑を送りぬ。

帝逝きて再び歸らず、そが護衛たりし英國の軍隊、軍艦も亦引上げ去つて後は南端の一孤島の寂しさは前よりもまさり行けり、帝が六年間其英姿を潛めたるロングウッドの邸は今や昔の面影全く失せて見るも淺間しき農家と變り果て、窓の硝子は打碎かれて跡もなく見るもいぶせき雜具の爲めに大方は物置とせられ、帝が玉突場たりし一室に古君の昔を訪問する者の姓名を記すべき手帳の開かれたるまゝ、インクもて所々汚れし机の上に乘れるを見るのみ。

巴里の榮華夢と消えて今茲に配所の跡を音づればハッツゲートの水潺々として徒に人世の無情を語るのみ

千八百四十年、ルイフキリップ佛國の王となるに及びて時の内閣總理大臣は古帝の遺骸を巴里に遷さん事を英國の政府に乞ひぬ、矢叫びの音漸く治まりて平和の回復せられんとする折からなりければ、英國は其に反對するもの有りしをも退けて兩國が和を破らざらん爲めに終に其求めに應ずる事となれり。

十月十五日は古帝がヘレナ島に初めて着したる紀念日なるを以て此日をトして其墓をあばき翌日十時十五分英佛の主だちたる人は身體を淸め、禮服を着して柩を地上に上げて祈禱し、四重の棺を靜に開き見れば、古帝は近衞騎兵大佐の軍服を纏ひたるまゝに元の如くに横はれり、胸に帶びたる勳章は皆錆び付けるも、只小鼻の少しく腐れ居たるのみ、並み居る人々の禮終へて棺は再び閉され、四頭曳の馬車に乘せて運ばれぬ、兵士は銃を逆にして、禮を表し、大砲を地にそろして

之れを護衛しつゝ、人家は皆敬意を表して各其業を休み、佛國の軍艦に移されて十八日の午後終に此地を出帆せり。

十二月八日弔砲の轟くセーヌ河に運ばれし時の帝王を始め、多くの大官に擁せられて帝が日頃熱望したる望みは死して終にかなへられセイヌ河の傍に安らかに永久に眠る事を得るに至りぬ。

乙女のひとり旅

松琴女史

一念の誠は巖をも貫ぬくといふなる、心に誠あれば、神は其身を護るものなり、火を踏んん燒けず、水に入つて溺るゝことなし、こゝに說き出す一條の物語は、十八歳の少女が父母の冤罪を救はんとの一念より、廣漠無限の西比利亞二千里の曠野を獨り旅して、恙なく都へつきて、千秋の志を達せしといふ、世にも奇特なる物語なり。

少女は名をプラスコウビヤといふ、父はロプウロフとて露國の陸軍少佐、母は古き貴族の娘なりき、父なる陸軍少佐は、過ぎし年土耳其との戰に屢々戰功を顯はして、朝廷の覺えもいと目出度かりしが、或る年虛無黨の陰謀露見して、數多の嫌疑者、陸續として累紲の憂き目を見るに至り、其時プラスコウビヤの父も又其の嫌疑者の一人として捕はれ、皇帝ポール一世の嚴命によりて妻子と共に西比利亞の曠野に謫さるゝ事とはなりぬ。時にプラスコーピヤは生れて僅かに三歳の女兒なりき。

さてもロプウローフ一家の謫されしは、西比利亞、トボルスク縣の南境、イスキムといふ村なりし、此所は西比利亞の伊太利ともいふべき暖和の地なりしかど、猶秋の九月より翌年の五月までは地上一面の銀世界となりて、寒風凄まじく、枯木を倒し、雪を吹き、家はさながら大海中にある小舟の如く、荒涼、寂寞、心細きこと言はん方もなし、されば西比利亞に流さる

るものは單に懷かしき古郷の空を辭し、戀しき親族の中を隔つのみならず、文明社會の光明を全く失りて、未開の暗黑に陷り、春冬九ヶ月の間はさながら太陽を見ざるの地獄に行くものと覺悟せざるべからず。

少佐ロプウロフ夫妻は終身流刑に處せられ、イスキム村の一寒村に住みて、一日十コペックの惠み金を受けつゝ辛くも命をつなぎける、流石に妻は堅忍の志ありて、以前下僕下婢など使ひし身の贅澤に引かへ、今は農業をも働らきて家計の補ひをなし、又娘の成長するに及びては、我家の作事を手傳はせ、裸麥の收納時には村人を助けて、其の賃を得るなど專ら賤の手業にいそしみたりき。

プラスコーピヤ十五歳に達するまでは父母の如何なる身分なりしやをも知らざりければ、斯る荒寥たる家庭にありて、雪に埋もれ、風に櫛らるゝも、別に我身を不幸の者とも思はず、宛ながら亞弗利加、印度の土蠻の少女が、倫敦、巴里の繁華を物憐しとおもひ却て獅子や、鱷魚の住む、荒ら屋を我樂しき故郷として天にも地になき幸福の宿るところと定めたるに等しかりき。

然るに其の頃父なるロプウロフは、縣の一官吏の手を經てシベリヤの總督に向ひ身の赦免を嘆願したる事度々に及びけるが、或日其の使者來りて願の赴き聞屆け難しとの命を致しぬ。ロプウロフ夫妻の失望は面に顯はれていと氣色惡しかりしかば、プラスコーピヤは心元なくて何事にやと慰め問ひければ、今は父母も包むに由なく、一家流刑に處せられし抑もの因緣を殘りなく打ち明け、且ついふ樣、父母は汝をかゝる邊土にやりて生涯を無敎育なる農婦に終らしめんこと心苦しき限りなり、如何にかして今一度身の冤罪を訴へ、故郷に歸り人並に育てゝ父母の務めを果さんものと思ひしなるに、今は其の詮もなしと打歎きてありたれば、十五歳の乙女は、初めて聞きし一家の不運、父母の悲歎、これまで知らされざりしは我が小供心に苦痛をかけさせまじとの父母の慈愛なりしか、さては吾こそその儘にてあるべからず。如何にもして父の冤罪を訴へ、

再び天日を見せしむべきものなりと、父母の一夜の物語は、あどけなき少女を一時に健氣なる勇婦となさしめたるぞ、實に爭ひ難き、人は氏より育つと謂ふなる諺も思ひ合されて、ゆかしけれ。

　されば、プラスコビヤは一念の誠を神にさゝげ、朝夕祈禱を怠ることなく、如何にもして父の寃罪を明らかにし、放免されて多年の宿望を遂せしめんものと巖をも徹す一念を全智全能の神にぞ訴へける。



　或日の事彼女はいつもの如く祈りに餘念なかりしか、偶然、ペートルスボルグに行きて皇帝に直訴すべしとのこゝろ閃めき起りぬ、嗚呼これぞ誠の神の默示なるべし、實に然なりと、志は小さき胸の中に定まりぬ。されど是れ元より、夢のごとき企てなり、容易ならぬ大業なり、一少女の身にして荒漠たる二千里の無人境を如何にして行くべきか、こは吾ながらおぞましき企圖なりと思へば、輕々しく人に語る事ならず、獨り密かに胸のみ焦しけり。

或日彼女はこの企を父に語らんものと心を定めて勇ましく父の前に進みたりしが、流石に言ひ出づる事叶はずして止み、其後も幾度となく胸とゞろかしぬ。

年も漸く移り行くほどに、斯くて何時までも空しくあるべしやはと、此度は全身の勇氣を鼓して、恐るゝ處なく父に告げんものをと、日を定めけるが、程なく其の日も來りければ、朝まだきより例の森に至り、神に祈りて、一念の志を遂せしめ賜へと伏し拜みつゝ、思ふ處を、殘りなく語りけり。娘の企てを聞きたる父は只默然として一語なく、やがて其妻を呼びていふ樣、嗚呼吾れ今ぞ善き救ひの女神を得たり、娘は吾等の爲めに皇帝陛下に直訴し奉らんといふなる、如何にやと、妻はこの事聞くより早く胸まづとゞろき、何を言はれしか、一時は夢のやうなりしが、やがて吾に歸るとひとしく、いと冷かなる口調もて辭みぬ。

汝今は大人とおもひしに、猶かゝる痴言をいふや、これ汝の本心ならず、恐らくは狐狸の言はする語なるべし。痴言は置けかし、早く言ひつけし仕事をするこそ汝のつとめなれ

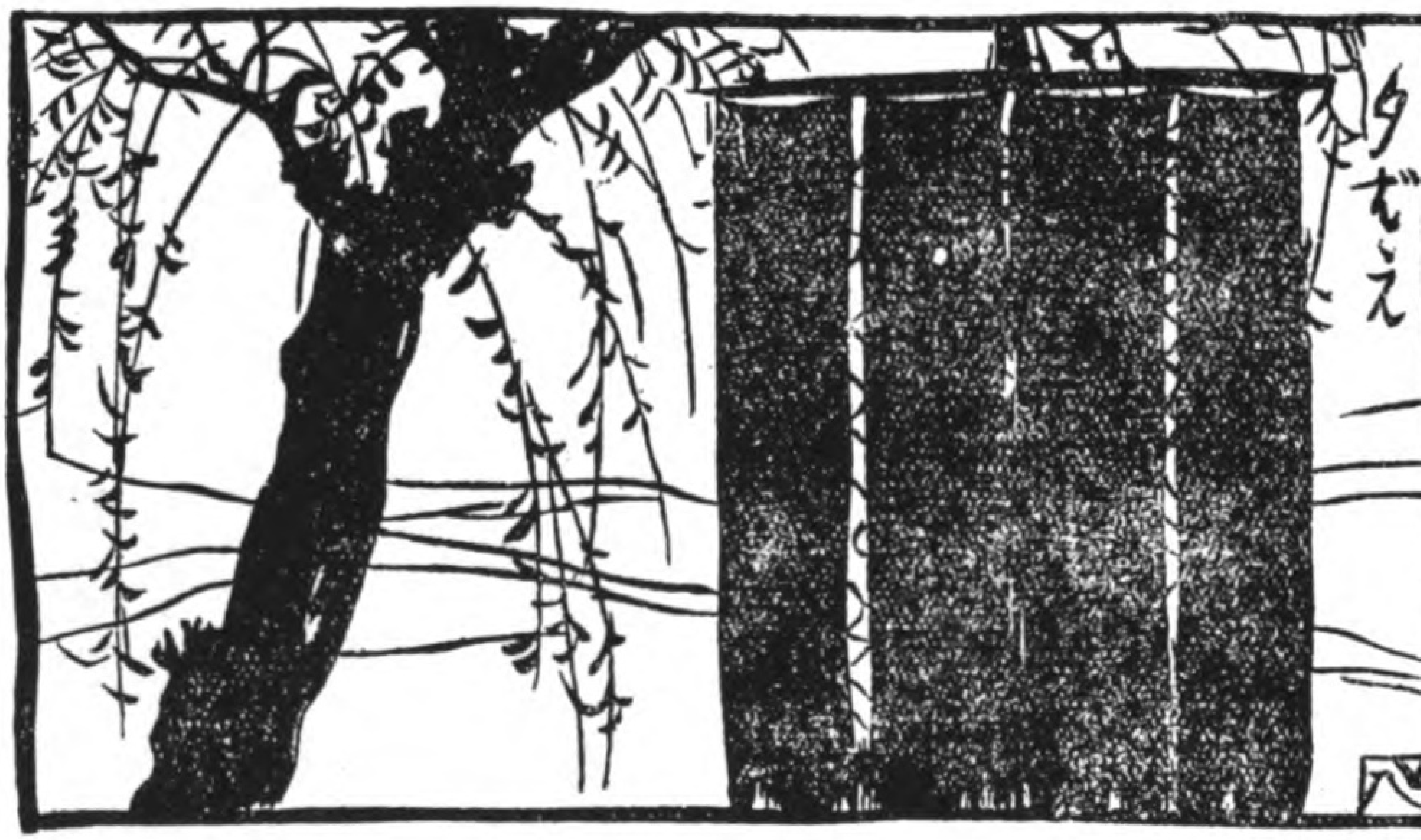
と答へぬ。怒りといふよりも寧ろ失望を以て充されたるプラスコーピヤは前後も打忘れて泣き入りぬ。されど母は、

是非にとならば汝勝手にピートルスボルリへ出立すべし、やがて晝飯なればまづ膳の掃除をなし置くべし。

と言ひつゝ手巾を無造作に渡せしのみ、斯る有樣にて母の不機嫌は殆んど其の絶頂に達して再び言はゞ撲ちもさるべき氣色なり。されど一念定めしプラスコピヤは元より母の不承知とて止むべきにあらねば、それよりは日毎に父に向ひて只管に歎願し、若し其の許しは得られずとても此の大企圖に就て一考するだけの事にてもよしとて熱心に請ひければ、父も又あまりの事とて腹立ち、以來は決して斯る事申さぬものなりと曉しぬ。

プラスコピヤは己れの企圖を言ひ出してより三年の間、祈りの度毎に此の事を神につげ、如何にもして父

母の許を得させ玉へと只管に心願を籠めたりけり。程なく母は病の床に就き一家はいとど寂しく安き思もなかりしが、プラスコピヤは朝夕の看護怠なく、家の事一切を取捌くほどに大人びたれば、父母も娘が斯くまでに心を決して吾等の身の上を思ふ上からは今は一概に其の望みを拒みもならず、涕ながらに諭していふ樣、凡そ旅行を成すには必らず旅行券なかるべからず、今我等が如き流刑の身の上にありていかで、其を得らるべき、官は必らず、取運ぶまじ、されば父母の許ありとても、その村の外には一歩も出づる事叶ふまじ、是第一の障碍にあらずやと、されど巌をも徹す金鐵の志ある娘には、何條これしきの事に屈托せん、早速父の許を得てトポルスクの知事の許に請願書を出しけるが、如何にも第一回の時には聞届なかりき、百方手を盡したれども無益なりき、然るに第二回の時、善く辯護する人ありて、「父こそ罪人なれ、其娘には少も罪はなし、」との助言の蔭によりて首尾よく旅行券を得る事となり、彼女は天にも登る心地なりき。



事既に斯くなりしからは、父母も今更拒まん樣なく、只あまりに其企圖の大膽にして前途の困難、十中八九までは目的を達する事叶ふまじとの旨をつげ、且つ、よしや目的通り都に達する事ありとも禁廷の門前嚴重にして、必らず番兵の誰何に捕はれ、入獄の憂き目

を見るに畢らん事萬々なるべし、殊に一少女の身を以て威嚴ある皇帝の面前に於て、いかで言を發し得らるべきものぞとて樣々に異言を用たれども、鐵石心膓のブラスコビヤの只前途に一つの光明をみとむるのみにて、父母の言葉は風ほどにも聞かざりけり。

ブラスコビヤは其年十八歳の九月上旬かいぐ〴〵しく旅裝をとゝのへ、前程遙かなる旅路に上りぬ。彼女は父母に强いられて辛ふじてルーブルの貨幣を受け、同じく流刑に處せられて此村に住へる人々の中にて殊に彼女の孝心に感せしもの吾も〳〵と貧しき中より五コペック、十コペックとて餞せんといふを彼女は堅く辭し、よしや千コペックありとても、都まで達すべくもあらず、所詮道中は人に依らざれば叶ふまじければ、嚢中の空しきこそ結局心安けれといふを、强いて取らせければ、好意忝なし、吾れ若し父を救ふを得たらんには此人々をも如何で救はずば置くまじと心の中に誓ひける。

かくて朝日隈なく室内に射し入りける頃には、露西亞の風俗として旅人の爲めに祈あり、暫時くは熱涙のあふるゝ如き會話ありて終に訣別の時は來りぬ。

ブラスコビヤは跪づきて兩親の祝ひの詞をいたゞき遠き旅路に向ひぬ。嗚呼、花はづかしき十八歳の少女僅かに一ルーブルを懷ろにして遠くピータースボルクの都をさして急ぐなりけり。

村人等に見送られて勇ましく道を進みそめしが次なる村まで來りし時は、最早日も西に入りはてし頃なりけり、此夜は其の村に宿りしが、二日目には昨夜の疲勞甚だしきに拘はらず、勇を鼓して苦しき山路を辿りける、されど元より曠漠たる原野の事なれば時には道に迷ひて夕日さす時には朝まだき出立せし村に歸るなどの事も度々なりき、又或時は淋しき山中に迷ひ入りて恐る〳〵樵夫に道を問ひて空しく笑はれたる事もありけり、又或日の如き三つ辻のある處に來かゝりければいづれに行くべきやと思案に呉れて居たりしが、折柄人の來かゝりしかば、キエフへ行くはいづれの道より進むべきやと問ひけるに、其人微笑して三つの道「キ

エフ」「パリス」「ローマ」何れなりと取らるべしとて要領不得の答をなしければ、彼女も殆んど當惑せしが、遂に意を決して、中間の道を取りしに幸にして其途は正しかりき。

又或日の事なりき、山風烈しく吹きすさみ、行かんとすれば大木は道に横りて、一歩も進むことならず、餘義なく木蔭に身を寄せしが其中に日は暮れ、寒さ強くなり、身體冷へ凍へ、剩さへ食すべきものなかりしかば、一時は殆ど死なんばかりの心地なりしが、折しも一人の農夫車を牽ひて通りかゝり、彼女の行惱むを見て憐に思ひ、次の村まで送り吳れしが、見れば、衣服は暴雨の爲めに泥まみれとなり、疲勞と、饑餓と、困難とにて宛から生たる面影はなかりき。



斯る有樣なりしかば村人の家に哀れを請ひけれども誰ありて彼女を世話するものはなかりき、されば仁慈を主とする教會堂こそによれと思ひ、立ち寄らんとすれば、戶は鎖されたり、彼女は暫時猛犬に吠ばれ、惡童原に罵られつゝ暫時の間うづくまり居たりしが、程なく一婦人群集の間より顯はれ出で、いと親切に勞はり吳れしが、旅行の目的をあらまし聞いて其婦人は己が家に伴ひ歸らんとて其身を起しやれば、靴の片足を失ひて足の指は氷に包まれ居たりける、村人も今は其不親切なりしを悔ひ、彼の婦人を助けて、ブラスコビヤを其家に連れ行けり。

婦人の親切によりて其家に止まる事數日、身體の疲勞も全く失せければ、再び旅路に出で立つことゝなり

しかば、村の人々より深靴一足を送り與れぬ。されど彼女は濫りに人の憐みを乞はず、又其身の憐れなる境遇を好んで人に語るなどの事はなかりき、若し人の憐みて金錢など與ふる時は必らずそれに報ふるに、洗濯、掃除などして其の恩人の爲めに勞らくなりき。以て如何に彼の女の精神の高尙にして意志堅固なりしかを知るべし、或る時彼の女盗人の家に誤り宿し銅貨を容れたる財布を探られし事あり又或時は野宿して狐狸の爲めに苦しめられし事あり、或は早朝出立して猛犬に怪まれて殆んどその牙にかゝらんとせし事あり樣々の難行苦行を重ねて、幾月日を旅にあかし暮して、やう〳〵にエカテリンボルグの町に着きけるが、幸い此所の旅宿の主婦は最と親切に彼女を待遇し町にて慈善家の聞へ高きミルン夫人といふに紹介したりければ、夫人は彼女の孝心深きにいとゞしく感じたりけん、我家に引取りて雪中數週の間の休憩をなさしめ、其の間彼の女に裁縫と手藝の一端を教へたりとは流石に田舍育ちの無藝なるをいと惜みての慈善心ならめや。

さて一陽來復して雪も解け、河舟の便りも出來しかばミルン夫人は少女の爲めに行く先々の知人へ紹介狀を認めニジニノヴゴロットよりモスコー方面へと志して出立せしめたりしが、又々途中にて圖らざる危難に遭ひて、孱弱き身を傷ひ、數週の間病魔の苦しむる所となりしが、神の助けと人の同情によりて辛くも凌ぎ我が家を出でしより以來十八ヶ月を經稍くにしてセントピータースボルグ府へとは着きにける。

首府に到着したる彼の女は如何なる方法を執りて其初心を貫徹せしめんとはなせしぞ、十八歲の田舍少女如何にして獨裁專權の恐るべき皇帝に向つて父の枉屈を伸べんとはするぞ。されど陽氣到る處金石も又透る人の一心より恐ろしきものはあらじ、少女はまづ旅宿の主人の忠告にもとづき一封の書を認め裁判所へ出頭し、願の主意を裁判官に訴へたり、されど裁判所の規程になき書面を受理すべき筈なかりしかば直ちに却下したりされど少女は屈する色なく翌日も又出頭して掛りの者に申し出でゝ以來は毎日裁判所の門前に往き

は出入の裁判官に向ひて之をさし出して哀願の旨をきこへんとしたれどさて一人として受理し呉るゝものなかりしが其の中端なくこの少女の身の上の事世の評判になりて終に一人の内親王の御耳に入りそれより皇太后の上聞に達したりければ捨置くべきならずとて、遂に格外の御例を開かれて少女はこゝに恐れ多くも太后陛下の御前に拜謁を仰せ付らるゝ事となりたり。

さていよ／＼拜謁の日となりければ、少女は常の服裝のまゝにてやがて御前にひさまづき、願の次第を涙ながらに奏啓し奉りければ太后はいたくも不愍と思召され、我が西比利亞の邊土にかくも奇特なる少女を出せしは朕が國の譽なりとのたまはせ御手許金三百ルーブルを下し賜はりしは一少女の身に取りて忝さに涙こぼるゝ次第なりける。



超へて三日更らに少女は宮中へ召出され種々有難き御言葉を頂戴したる上、彼女が積年の宿望たる父の冤罪を御赦免あるべき勅狀を其地の知事へ宛て降させ給ふべき詔ありしかば、彼女は天にも登る心地して皇恩の至大なるに感泣したりとなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

西比利亞を出でしより野に伏し山に寢ね、雪に艱み風に虐げられ幾度生命を失はんとして助りつゝ千辛萬苦の後漸くにして都へつき、裁判所の門前にては乞食の如く追ひ拂はれし身が今斯く不思議の助けを得て天顏に咫尺し奉り其の所願を遂するを得たるは是れ誠に神の冥助に由るものなりと、心に萬死を期したる彼の兩親は夢かとばかり喜びて旅の用意もそこ〳〵に都をさして出立しノウゴロット府の尼寺にて親子の再會をなしたりしは芽出度極みにこそ。

日本三景嚴島

七日朝、舟より出で、中里ばかり、松山を上下して宮島の町にいでたり、家數千軒ばかり有りて賑なる所なり、宮の後は、岩山圍みめぐりて、前の一方開け、海口に鳥居あり、潮干の時は、陸となり、汐滿來れば、本社の椽の下まで水滿り、百八間の回廊宮殿みな海中より湧出でたるごとく、實に無雙の壯觀なり、鳥居は楠にて造れり、高さ丈餘、表の額は、隷書にて嚴島大明神と書きたり平相國の筆なり、裏の額は、伊都岐島大明神と草書なり、小野道風なりと雖も、筆意古雅ならず、信じがたし。

當社は、市杵島姬の命にて、推古天皇の時奉祀せられて、元は市杵島といひしを、其の後、佛家繁昌し、辨天の名を稱し、明神の御名は、しる人もなし、本社は西向、回廊につらなりて、客人社あり、神體は、竹生島辨天なりと云ふ、是は湍津姬の命なるべし、夜に入れば、廊中百八の燈籠、海中に映じて夥し、北の方、岩山の上に五重の塔千疊敷の殿あり、四方に欄干ありて眺望よし洞庭の岳陽樓とも云ふべし、其の外、百二十社、五十二人の社職、四十ヶ寺、廿一坊の社僧あり、祭禮、年に七十二度、就中、六月十七日大祭あり、御旅所は、地の御前とて、海を隔てゝ地の方にあり、夫より長濱大元まで、引つらなりて舟橋かゝり、船に管絃あり、參詣の男女、隣國より群聚すといふ。

彌山は、奥の院より、頂まで十八丁、石山にて、赤松樛樹生茂り、奇島怪巖の間に、神社、佛殿、四十八宇あり、絕頂にいたれば、東西の諸島、廣島の城下まで、眺望せられて、吉勝景なり、殺生禁斷の地なる故、鹿猿多くあり、鹿は町家にも群集し、舟までも來りて食を求む、女子どもに馴れて遊ぶがゆゑに、ふれなば危しとて、角を鋸にて切りたるにや、町家に徘徊する鹿は皆角なし。（長久保玄珠）

貞女の手枕

飛鳥井女史

△女は品勝れたるが故に必らずしも貴としとせず、心正しきを以つて貴としとす。

△女は容麗はしきが故に貴からず智あるを以つて貴としとす。

△富は是外の寶内の寶は子に若くものなし。

△智惠は是萬代の寶命終るとも子孫に傳はるべし。

△心を愼まざれば義なし義なきは禽獸に等し。

△勤學ばざれば才なし才なきは草木に等し。

△眉目容姿は衰ふれども貞操の名は朽る時なし。

△幾許の財を積むといへども心の直なるには若かず。

△同胞常に爭そはず嫂姑を姉妹のごとくすべし。

△形を彩どるとを後にして志を立つるを先にすべし

△姿は日々に衰ふるも智は年々に榮ゆ。

△幼時學ばざれば年闌て悔とも甲斐なし。

△學問に飽ことなかれ仕事に怠ること勿れ。

△夫に隨ふと雖も勤疎なれば身をたつる事あたはず

△姑は嫁を愛し嫁は舅姑を敬するものと思へ。

△富める家に嫁ぐといふ共奢りたかぶること勿れ。

△貧しき人の妻となるとも夫を恨み罵るべからず。

△父母は天地の如し舅姑は猶日月のごとし。

△夫婦爭ひ嗔ることなかれ理をまげても夫に隨ふ事あるべし。

△嫂には敬を致し弟嫁には愛を厚くせよ。

△女として愛嬌あらざれば岩木の情なきに等し。

△三從を守り愼まずんばなんぞ五障を免れん。

△我身を飾り奢らんよりまづ心の塵を拂へよ。

△他の妻の邪なる見て自ら愼み嗜むべし。

△他の夫の正しきを見てはひそかに夫を諫むべし。

△善事を見ては速に進み惡事を聞ては吾身を省みよ。

△妬ふかき人は禍を招く身に影の離れざるが如し。

△富めりとも貧を忘れず賤しき人を侮る勿れ。

△禮する時は手をつきしとやかに向ひそゞろに外を見るべからず。

△問はざれば答へざれ言はるゝ事はつゝしみて聞け。

△宮寺に詣づるときは穢らはしきを愼しむべし。

△内外の書を扱ふにおろそかにはいたすべからず。

△客人はよくあひしらひ人を見て交るべし。

△他家に往て冗言をいはず用調ひたらば歸るべし。

△何事に觸れても友に違はず恨みて中惡くすべからず

△言葉多き女は品少し遊女の諂ひ淫るゝがごとし。

△仇しき女は危き事あり潔き貞女の道を守るべし。

△鈍き女は家を治めがたし遂に勤營むべし。

△詞は梱より出すべからず密にしても譏ること勿れ。

△身は住べき處にありて家業を勤め暫も怠る事勿れ。

△物いふときは靜に言て唇をひらき顯すべからず。

△悦ばしき事もいたく笑はず腹立つ時にも怒り罵るべからず。

△一度ことばを過しては世の譏り舌をかへさず。

△禍と福には門なしたゞ人の招くにあり。

△天の災は免るゝ事有るも自らの災は遁れがたし。

△善を行ふ家には慶しきこと餘あり。

△夫は外をつとめ女はうちを營とすべし。

△信ある人のかどには災の雲おこらず。

△慈悲深き人の家には幸の月ほがらかなり。

△人心の等しからざるは各々其の面の如し水の器に從ふが如し。

△他の男を褒ること勿れ他の女をそしらざれ。

△姑のこゝろばせを見てよめの戒とせよ。

△善心つもりて幸を成し惡念極つて災となる。

△善人は死して譽を殘し惡人は死して譏を殘す。

△貴人の妻となるも孀を侮ること勿れ。

△よき人をあらはに譽むる勿れ、良からぬ人より妬を受くべし。

△家に入つては作法を問へよ夫にあふては心ばせを問ふべし。

△親類知己に行きては子供を問へ愛敬あらんが爲なり

△遠き慮りなくんば必ず近き愁ひあるべし。

△人は生れながらにして知る者にあらじ習ひ勤めて始めて人となる也。

△常情ある女はおとなしやかなり常識なき女はおごる心甚し。

△富める人も貪る心多きは貧人に劣るべし。

△善に從ひて心直ならば麻の中の蓬の如し。

△惡に親みて心曲れるは藪の中の荊棘の如し。

△生れつき愚なりといふとも習はゞ自ら手利とならん

△一日に一針も年につもれば三百六十針。

△ひと針の縫は綻をおぎなひ一端を仕立れば膚を隱す

△所帶を疎末にするは酒に醉伏して本心を失ふが如し

△義理をかき禮に背くは動物に等し。

△心に勵まされば眠を生じ身安ければおごりを生ず。

△命はかげろふの如し朝に生れて夕べに死す。

△身は槿の花のごとし日の出るを待て萎み易し。

△綾錦のよそほひは志想の糧にあらず。

△金銀の飾りは身の光にあらず。

△驕を究め身を飾はさらに人道の助にあらず。

△鴛の衾をかさぬるも僅かに若く艶しき間なり。

△夫婦は天地に等しく節義の違はざるをいふ。

△敬愼は懈ることなく深く愼む心をいふ。

△專心といふは心を一筋にして良人に事ふるをいふ。

△曲從といふは己が理を曲て夫にしたがふを云ふ。

△身を愼しみ義を守りて慈悲の心深かるべし。

△心に憐みて施しをなせば功德大なる海のごとし。

△一身の爲を圖りて數多喜捨する人は報を得ること芥子の如し。

△人を見て誹ること勿れ人に聞いて笑ふこと勿れ。

△眠を除きて讀書を學べ飢を忍びても針縫をなせ

△乏しき家に生れて施すべき力なければ他人の施しを見て隨喜の涙を生ずべし

△古は綿を曳苧を績める女にも忠孝の志は深かりき

△藝の敎への師にも疎かにするなかれ、況んや萬事の敎の師に於てをや

△神が惡人を罰し玉ふは決してこれを苦むるにあらず只懲すが爲なり

△婦人禮を正ふすれば舅姑にも義あり

△情ふかき人は禍を祟るこゝろに木精の答ふるが如し

紹　介

▲女　性　學　（菊池秋史著）

著者菊池氏は衆議院の議員なり、今の代議士といへば普通の學問は扨置き手紙さい碌に書けざるもの多く、日頃利權問題に汲々として趣味の方面には全く差別なく其の頭腦の粗雜なる憐れむに堪へたりといふ其の代議士にしてこの著述あるは近來の一快事といふべし、まづ其の表題「女性學」といふを以て婦人研究の書たるを明らかにしたるが、項目に揭げられたる戀愛の眞僞、婦人の負惜み男子の我儘、夫婦の危機、美人となる法など大分危險的文字の羅列せらるゝを以て、これはチツキリ例のハイカラ式女性攻擊の不健全書と速了したるは大なる誤りにて、其の內容は存外眞摯にして且つ存外穩當、適確の說多く男女の關係を知らんと欲するもの一讀を促す、著者は流石に福翁門下の出身夙に操觚に入りて新報記者たること久しく筆意洗練輕快、文意綿密に入りて尤も讀むに堪へたり、說の大半は女性研究を以て現今歐洲の讀書界を傾倒せるマツクスオーレルに依る處ろ少からざるも又著者獨特の見地より來る處ろ多し、兎に角近頃の一快書なり、定價六十五錢。

▲名著文庫第廿六卷 源氏物語忍草

源氏物語は日本文學の粹金撰玉なり。苟しくも國文を學ぶもの之を知らざるは恥なり。されど五十四帖の浩瀚なる物語を熟讀する事は專門の和學者にても聊か難事とする處ろとす、況んや今日の事に忙はしき一般の學生に於てをや、こゝに於てかこの大作の梗概を最も忠實なる方法によりて書きあらはすべき必要あり、この書は湖月抄を著はしたる北村季吟の息湖春が物語の大意を通俗の詞もてうつし出したる源氏の梗概にして古へより初學者の間に珍重されたるものなり、校訂は關根正直氏、定價二十錢富山房出版。

▲故事熟語字典

故事熟語を知るの要は只に讀書作文の上に止まらず修辭の上にも必要なる事にして今の世文章をよく書く者はあれども、よく作るもの〻稀れなるは、必竟文句を解して、適當なる熟語を用ひざるが爲めなり本書は此の缺點を補はんとして三島博士監修の下に纂輯したるものにして語の排列を五十音の順にし每項意義と出處とを揭げ其の說述したき所には圖畫を挿入し讀者をして會得し易らしめ內外の故事熟語を網羅してあます所なし、讀書作文の良師として机上缺くべからざるの良書なり

（定價壹圓半日本橋區本石町寶文館）

▲繪　畫　講　話　（稻元春郊譯）

原書は米國丹青界の巨擘ヴアンダイクの著にして專ら繪畫研究者の爲めに講說したる者なり內容は分ちて繪畫と寫實、繪畫と想像、繪畫と個性、繪畫と詩歌幷に裝飾畫題論等數項に區分して尤も穩健適實なる解

説を試みたり、譯文は生硬の嫌いなくよく圓熟して泰西名家の新意見を紹介するに於て十二分の力ありといふべし。定價六十五錢日本葉書會版

▲地文鑛物講話　（横山又次郎著 石川成章）

之れも通俗講話の第三編なり、来氏の講話に比較して興味は少けれども其代り説明上秩序の正しき點に於て大に勝れり、鑛物といひ、地文といひ專門以外の人にありては、やゝもすれば乾燥無味とけなさるゝものなるに此の講話を讀めば如何なる人も地文の學科に趣味を感ぜずといふ事なかるべし。定價六十錢。

▲母の爲の教育學　（羽田、小澤兩氏合著）

著者は地方の師範學校、高等女學校に久しく教鞭を取りて教育上に實驗的意見を蓄へたる人ならんと信ず、本書の目的は父母に兒女教育の指導を與ふるにあれど間接には小學教員の參考書ともなるべし、內容は別段奇抜なる新説を見ずと雖も、兒童教育一般の事柄は秩序よく解説されて明瞭に理解され得べく、决して普通教育書の如く難文字を以て讀者を苦しむるがごとき事なく子を持てる母の爲めにはよき指南車といふべし。定價五十錢　目黒書店發行。

▲食道樂續篇　（夏の卷）

謂ふ勿れ食道樂は亡國の兆なりと、日本の臺所はまだ／＼弦齋先生の新智識を注入して大に庖丁趣味を開拓するの必要あり、此篇女道樂の脚本を冒頭に置きて以下珍料理數十品、いよ／＼出でゝいよ／＼珍なり附錄の果物料理是れ又珍の珍なるもの、一讀して弦齋式料理の食味の無盡藏なるを賞翫したまへ、定價八十錢新橋堂。

▲女子の衛生　（下田歌子著）

表題は極めて平凡なるも、平凡を以て此書を輕々に看る勿れ、生理上衛生上、教育上の三つの立場より見て婦人の日常生活を極めて有益に極めて趣味深く説述したるものなり、殊に婦人の大厄たる生前生後の心得に至つては紛々たる衛生書に見る能はざる精神上の心得を説きて婦人の攝生に參考する處ろ多し、定價四十錢富山房。

▲新作小説　女學生　（小栗風葉著）

「青春」を著はして現代青年男女の間に渇仰せられたる著者は今回こゝに其副產物として本書を出だせり觀察精透人情の微を穿ちて、寸毫のぬかりもなきところ流石に當世流行兒たるを失はざるべし、作者はこれを以て明治風俗史の資料となし、又一面に於ては世の父兄が參考の料たらしめんとの趣意なりといふ、それにとては今少しく嚴肅なる意味を作物の上に含ませて欲しかりしなり、縱製本の上に於ても然り口繪の活人畫はよしとしてもカシミヤ表紙に至つては、聊か讀者を弄ぶの氣味なきにあらずや、作者が俗世間に迎合せずといふ本志とは大に異る樣見はるるは如何にや（定價八拾錢春陽堂出版）。

◎實業婦人會

同會は實業婦女新聞社主松永敏太郎氏の發起にして、婦人の實業的智識と品性とを養ひ、兼て諸般の時事問題を研究し、實業的の活動を期するにありて差當り事業の進行は、低度の實業女學校を設立し授産物を蒐て羣見院を設け商業部を置き逐次大に活動せんとしつゝあり尚ほ同會は去る十一日本鄕座に於て盛大なる發會式を擧行し大隈伯、和田博士林田翰長等の演說もありしと云ふ

同會の假本部は麻布市兵衛町一丁目六番地同會內

◎本居大人遺蹟保存會

本居宣長翁の國學の泰斗なるは何人も知らざるなし今回有志相謀り保存會を起さんと企て岩倉侯爵、德大寺侯爵、風羽子爵、東久世、佐々木、千家、其他の江湖知名の贊助を得て恰れく有志の寄附金蒐集に着手したり募集金額は凡そ三萬圓にて遺蹟の保存、紀念文庫の維持金等に宛て申込は本月卅日より開始して同十二月卅一日迄を以て〆切となし尚寄附者に對しては、山室辨社の遺版覽等の節便宜を謀り優待するよし希くは江湖の諸彥斎の苦學精勵尊王愛國の志を欽して御贊同あらんことを

申込所は（三重縣飯南郡役所內甘粕春吉）

▲文學概論　（文學士　太田善男著）

文學を研究せんとする者の爲めに、汎く內外の書を涉獵して平易明晰に文學の槪要を說明したるものにて、其の分り易く入り易きは此書の特色なり、江湖文學の研究に志さんとするもの一讀を要すべし（博文館）

毎月五日發行

定價表	
一冊（紙數二百八頁）……金二十錢	
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢	
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	
內（定刊數……十二冊 / 增刊四回……一、四、七、十月價格同一）	
郵稅	一冊 二錢

廣告料	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年十月十五日發行　第六卷第拾四號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

女子必

學習院女學部長　下田歌子女史著

家政學

全二冊洋裝大判
正價一冊參拾錢
郵稅一冊六錢

家事內政を整理するは婦女生涯の本分にして衣食住の事より始めて金錢の出納公私の交際賓客の應接子女の教養婢僕の雇使に至るまで皆其責務にあらざるはなし 近來女子教育の風潮激變の餘一たび蹉跌せし後は遂に女子の修學を逡巡する者あるに至れり 此書は下田歌子女史が常世に鑑みる處あり其學識東西古今に通貫するの考案に訴へ女子教養に對する綱要を網羅し 其志勗めて周密の志行を養成するにありて疎放の習慣を矯正し實際的良母賢妻を得るの捷徑を示さる 實に是れ齊家の滔略たり

博文館編輯局長坪谷水哉君著

增訂 日本女禮式大全

全一冊洋裝大判總クロース
美本紙數六百餘頁

▲洋布上製正價九拾錢　小包送拾五錢
▲蒔繪函入正價壹圓廿錢　小包送拾五錢

本書が世の良妻賢母の友として、女學生の良師友として歡迎せられたるは發刊後既に十六版を重ねたるにても知らるる可し、其內容は日本固有の女禮の美性と泰西普通の禮式の外に女子の知るべき技術作文、作歌其他一切の事を網羅し、記事の豐富と文章の

學習院女學部長下田歌子女史著

女子諸藝要訣

和裝大判
正價卅五錢
郵稅八錢

蠶桑裁縫刺繡押繪編物等凡て我邦の女子に缺くべからざる手藝は一々圖解して詳密たる說明を施し之を讀めば師に就かずして各種の工藝自ら悟了するを得べし

吉田調子君著

裁縫と編物

洋裝大判
正價廿五錢
郵稅六錢

家族の衣服類は一として女子の手に繫からざるなく裁縫及び編物は實に女子として尊卑に論なく最も必要の手藝なり 本書に於て懇切叮嚀に其順序方法を解明し一讀其術に精通すべからしむ

山田興松君著

實用 造花術指南

洋裝大判
正價廿五錢
郵稅六錢

天然の工を奪ふの巧を以て、各爛熳の櫻を見、馥郁の梅を詠むる、之を造花の技に待たざるべからず、此種の美術の年々に發達して交際場裡に一段の裝飾資料を增す、本書斯の技を精叙し盡せり篤志の婦女諸君一讀あれ。

東京 博文

（後付の二）

學習院女學部長　下田歌子女史著

內國少女鑑

和裝大判　正價卅五錢　郵稅六錢

下田歌子女史が家庭教育に熱心なる又斯文に堪能なることと今新に喋々を要せず本書は我日本に於ける古代より近世の少女が傳記に就て大方の少女の模範となるべき行爲を細かに取り集めたる者其文の秀麗なる摛綸亦精妙なれば家庭の讀物として無上の資册なるべし

中島義弌君著

新撰女子作法書

正價貳拾五錢　郵稅六錢

下田歌子女史編

家庭の心得

正價參拾五錢　郵稅六錢

學習院女學部長　下田歌子女史著

外國少女鑑

和裝大判　正價卅五錢　郵稅六錢

本編は我國の外、東西洋諸國に聞えたる少女が勝れたる事蹟を尋ね求めて綴りたるものなり、されば內國少女鑑と合はせ讀みたらんには同じいみじき行ひも彼と我と風俗習慣の異なるが爲めに又は昔と今と世の遠く相隔たりたるが故に多少其趣のかわれることどもを見て深く考慮する所あらんには其實踐に裨益する所少からざるべし

木村小舟君作歌　田村虎藏君作曲

家庭唱歌

全十二冊洋裝小判　一冊四十頁

正價一冊貳錢五厘　郵稅三冊迄貳錢

第一編●桃太郎
第二編●舌切雀
第三編●松山鏡
第四編●花咲爺
第五編●浦島太郎
第六編●文福茶釜
第七編●勝々山
第八編●羅生門
第九編●一寸法師
第十編●猿蟹合戰
第十一編●俵藤太
第十二編●瘤取り

學習院女學部長　下田歌子女史著

家事要訣

和裝大判　正價卅五錢　郵稅八錢

本書は衣服の取扱方、裁縫、洗濯、染物等の簡易法及び住居の撰定構造に就ての注意其他室內裝飾淸潔法、及び金錢出納家事經濟の概略を詳述せり

下田歌子女史著

庭訓お伽噺

正價參拾五錢　郵稅六錢

下田歌子女史著

お伽噺教草

正價參拾五錢　郵稅六錢

下田歌子女史著

女子遊戲の栞

和裝大判　正價卅五錢　郵稅八錢

本書は下田先生が專ら女子がものする幾多の遊嬉中其體育に將た敎育に益多くして害なかるべきものを選びそが心身の發達を助成せんが爲め著はされたるものなり又巻頭には我國太古よりの遊嬉の沿革を記したり

東京　博文館　本町

治庖會第四教場主幹 龜井まき子女史著

實用家庭料理法 (三版)

全一冊菊判美本
紙數二百三十頁
正價金參拾五錢
郵稅八錢

目次概要

◎口繪極彩色貴婦人料理實習の圖 島崎柳塢君筆

(一)料理の準備(二)臺所の經濟(三)調理場の構造(四)器具取扱法(五)魚鳥野菜の切方(六)飲食物の撰擇法(七)材料購入に際する鑑別法(八)主婦の注意(九)鹽梅加減の說明(十)料理の配合(十一)煮出汁の製法(十二)汁物の調理法(十三)煮物類の調理法(十四)燒物の調理法(十五)浸し物の調理法(十六)和へ物の調理法(十七)酢の物調理法(十八)刺身の作方(十九)蒸し物の調理法(廿)油揚物の調理法(廿一)寄せ物の調理法(廿二)きんとん類の調理法

女子師範學校教授 佐方鎭子女史序文

近藤正一君著

女子職業案内

口繪=女子職業圖(寫眞銅版畫四枚挿入)織田東禹君筆

全一冊

洋裝三六判美本
紙數四百七十頁
正價四十五錢
郵稅六錢

目次

▲女子の生活 ▲女子の獨立 ▲女子の職業 ▲小學教員 ▲中學教員

▲家庭教師 ▲保姆 ▲女醫 ▲女記者 ▲文學家

▲音樂家 ▲書家 ▲寫眞師 ▲割烹教師 ▲挿花師範

▲茶道教師 ▲看護婦 ▲產婆 ▲通信事務員 ▲銀行事務員

▲電務課員 ▲商店員 ▲速記業 ▲謠曲師範 ▲編物教師

▲裁縫師 ▲繡工 ▲女工諸業 ▲電話交換手 以上

東京 博文館 本町

女(後付の六)

東京美術學校教授 白井雨山君閲
森田洪君 鈴木古拙君 牧野等君著

應用家庭美術

口繪
▲鮮魚之圖（西洋畫）
▲磁器花瓶圖（石版四度刷）
▲石膏塑像（寫眞銅版）

本書は日本畫西洋畫の研究の順序として沿革、種類、彩色、描法、寫生の法、用器、用紙等を說き尚彫刻、象牙彫刻彫金、大理石彫刻、塑像、鑄金、蒔繪、陶磁器、造花等各製法より用具、應用、使用法、製法等を順序により詳述せるを以て各專門家の參考書として座右に缺くべからざる良書なり

全一冊
洋裝四六判美本
紙數三百四十頁
正價金四拾錢
郵稅八錢

大隈伯爵序文
横井農學博士校閲
農學士 富益良一君
報知新聞園藝記者 田中花浪君
合著

家庭園藝術

口繪
◎橋本邦助君畫
◎田代古涯君畫
◎大隈伯邸園及溫室の光景（寫眞銅版）

全一冊
洋裝中判美本
紙數五百八十頁
正價八拾錢
郵稅拾錢

本書は彼の艶美なる花卉は勿論、芊々たる蔬菜、累々たる果樹の培養に至る迄、微を捨てず細を揭げ一々丁寧に洩れなく嶄新なる學說と多年の經驗を平易に說明せる外に其調理法と文學趣味をも附加してある。で婦人小兒の讀本且學生の參考書として適應してゐるし一讀直に實行し得べき實際のものであると斷定して置く。想ふに一家に白米が必要である如く、家庭には是非とも本書を備へ置かねばならぬ。

東京 博文館

女學世界衞生顧問　糸左近君編

四季應用 通俗治療法

附 養生秘訣

醫者は病人に取つて命の親なり、救ひの神なり。其の病魔を退治して起死回生の効を奏し、垂死の病人を回復して三千世界に一つしかなき玉の緒を取り止むるものあり、世に神醫仁術の稱ある所以なるべし、さりながら、世間に神醫と稱するものは雨夜の星よりも尠くして難病危病に惱む人は恒河の砂よりも多し、この限りなき病人患者をして限りある神醫の方劑を仰がしめんこと無理の注文といふべし、況んや山間僻地に到つては一度の診察を請ひ、一服の藥を飲むすら容易の事にあらず、病人は手を空ふして病魔の横行するに任すのみ、是に於てか世に醫道の智識を必要とする所以なり著者糸左近氏は仁術に造詣深く、諸病の蘊奥を究めて洩らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して備さに治療の方針を說く、蓋し車輿を要せずして千里の遠きに趣き謝儀を求めずして萬病の適藥を授く其功德の大なる昔への耆婆扁鵲にも讓らずといふべし。

全壹册

洋裝四六判　紙數四百餘頁　正價金貳拾八錢　郵稅六錢

發兌元　東京本町　博文館

米國醫學博士アイ、ビー、デーヴィス氏原著
海軍大軍醫隱岐敬次郎君譯述

女子衞生學

附 結婚論

女子衞生學は其說く所世の年少婦人特に妙齡の女學生の爲に懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衞生の原則、人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは主張の頗る孔孟主義(實に女大學)に近邇し又た文明の粹華を訓ふるに拘はらず反つて東洋の教義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘蘊なしと謂ふべし尙附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーディー氏が世の青年男女の爲めに書かれたる趣味豐多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむ。

全壹册洋裝袖珍上製
總クロース金文字入
約三百頁頗美本
正價卅錢郵稅六錢

讀書家研究者—書籍販賣業者

必備書

東京書籍商組合

圖書總目錄

非常廉價●

本書は東京書籍組合同業者の出版したる圖書の本年九月に至るまでの間の刊行したるものは新舊を問はず細大漏さず其書名、著者、定價、發行所等を左の方法に依り分類し幾十萬の發行圖書も掌を反す間に己の欲するものを索出し得る樣編纂したるものなれば書籍販賣を業とせらるゝ諸君は勿論苟も讀書研學に從ふ士は必ず一本を備ふるの要あり

一書名いろは分●一發行所別●一圖書種類分●

發兌元

日本橋區本町三丁目

博文館

●機不可逸

●脊皮クロース製菊判美裝

●紙數約壹千九百餘頁

正價金參圓五拾錢小包料三拾錢

豫約

十月三十一日迄前金拂込者に限り

特價金貳圓五拾錢外に送料を要す

製本十月下旬

女學世界定期增刊 女智惠袋
(毎月一回五日發行)
(明治卅九年十月十五日發行) 第六卷第拾四號 (明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)



(定價金貳拾錢)
Vol. VI. (博文館印刷所印行) No. 14.

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊼
明治39年10月（第6巻第13号、第6巻第14号）

2008年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3386-4　C3321